鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書　(21)

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

―――　XII　―――

木　場　A　遺　跡（姶良郡栗野町）

木場A－２遺跡（姶良郡栗野町）

木　場　B　遺　跡（姶良郡栗野町）

堀　ノ　内　遺　跡（姶良郡吉松町）

1982．3

鹿児島県教育委員会

序　　　文

九州縦貫自動車道（えびの～鹿児島）建設に伴う姶良郡栗野町木場A，木場A－2，木場B遺跡及び姶良郡吉松町堀ノ内遺跡の発掘調査は，昭和53年12月11日から昭和55年２月21日までの間実施し貴重な発見をしました。

その後，昭和56年度に整理を行い，ここに「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅻ」として発刊することになりました。

県教育委員会では，この報告書が文化財保護及び文化財愛護思想普及のため広く活用されることを願っています。

発刊に当たり，日本道路公団はじめ栗野町・吉松町教育委員会及び調査に協力していただいた地元の方々に対し，心から感謝の意を表します。

昭和57年３月

鹿児島県教育委員会
教育長　井之口　恒　雄

調 査 の 状 況

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査の経緯は，これまで刊行した「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ－」で述べたとおりで昭和46年，姶良郡姶良町小瀬戸遺跡の調査に始まり昭和55年２月21日、木場Ａ遺跡を最後にすべてを終了した。

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

（昭和46年～昭和56年３月）

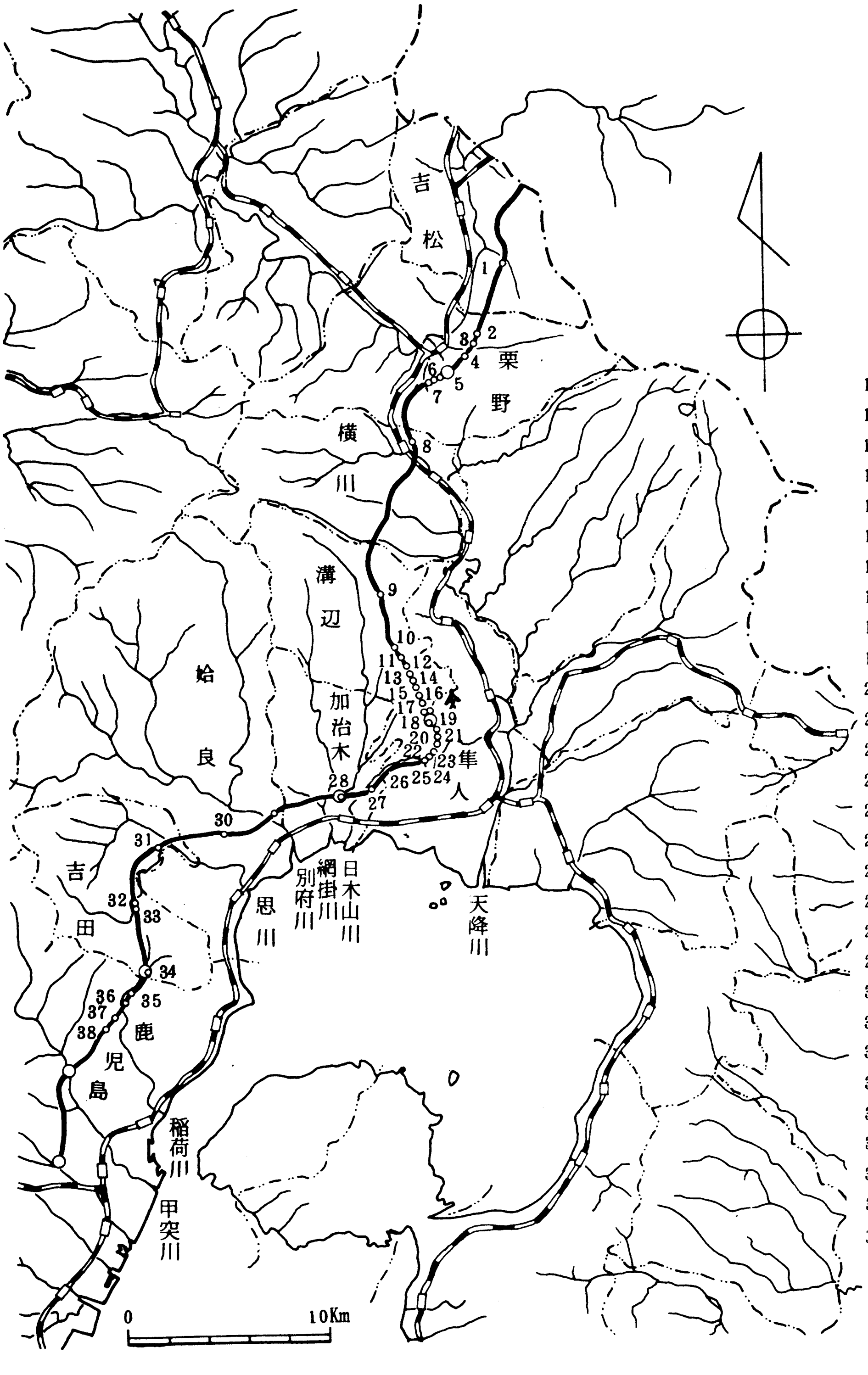
番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積(㎡)	調査員	概要
1	堀之内Ｂ	吉松町川添	54．9．10 ≀ 54．9．27	500	立神 青崎	○土師式土器の散布
2	木場Ａ	栗野町木場	一次 53．12．11 ≀ 54．3．31 二次 54．8．28 ≀ 55．2．22	14,000	牛ノ浜 新東 宮田 池畑 長野 中島	①旧石器時代（ナイフ形石器，細石器，剥片）集石遺構 ②縄文時代（早期～後期）土器，石器，集石遺構 ③土師式土器散布
3	木場Ｂ	〃	54．8．28 ≀ 54．11．24	4,500	新東 出口 弥栄 中島	○土師式土器の散布 ○中世溝状遺構
4	木場Ｃ	〃	53．11．27 ≀ 54．1．13	2,700	長野 出口 中村	①縄文時代（集石遺構・土器・石器） ②古墳時代（土器） ③中世（土器・土錘・砥石）
5	山崎Ａ	栗野町木場	52．12．13 ≀ 53．3．26	6,000	吉永 牛ノ浜	①縄文時代土器片 ②古墳時代土器片・集石遺構 ③奈良～平安時代，土師器，須恵器，建物跡
6	山崎Ｂ	栗野町米永	53．4．10 ≀ 54．10．12	21,800	牛ノ浜 西田 中島 出口	①旧石器時代（細石刃核・細石刃） ②縄文時代（早～後期）土器，石器，集石遺構，土壙 ③中世（掘，建物跡・土器，土錘，砥石）

7	山崎C	栗野町米永	52. 12. 13 〜 53. 3. 26	3,000	中村 西田	●土師器，須恵器，青磁片の散布
8	中尾田	横川町中野	53. 5. 15 〜 54. 10. 6	9,800	新東 中島 井ノ上	●①縄文時代，早・前・中期土器，石器，集石遺構 ②中世山城，建物遺構，陶磁器
9	木佐貫原	溝辺町木佐貫	51. 2. 6 〜 52. 11. 31	17,000	吉永 牛ノ浜	●①縄文時代（前期・後期）土器片 ②土師器片
10	石峰	溝辺町麓	一次 50. 10. 2 〜 50. 12. 19 二次 51. 11. 24 〜 53. 5. 15	20,000	河口 出口 西田 戸崎 青崎 池畑	●①縄文式土器 （草創期〜晩期）石器，住居址I，集石遺構 ②弥生式土器 ③土師器，溝状遺構 ④陶磁器
11	柳ケ迫	〃	51. 3. 22 〜 51. 5. 17	700	長野 西田	●①旧石器時代（細石器） ②縄文時代（後期）土器片
12	長ケ原	〃	50. 10. 1 〜 50. 11. 28	1,140	新東 中村	●①旧石器時代（細石器） ②縄文時代（前期）土器片 ③弥生時代（後期）土器片
13	松木原	〃	50. 9. 18 〜 50. 9. 26	420	新東 池田 中村	●弥生時代（後期）土器片，黒曜石
14	葛根原	〃	50. 9. 8 〜 50. 9. 26	790	新東 池畑 中村	①弥生時代（後期）土器片，石鏃（黒曜石）
15	七ツ次	〃	50. 8. 5 〜 50. 9. 18	2,700	弥栄 池畑 中村	●①縄文時代（後期）土器片 ②弥生時代（後期）土器片
16	松ケ迫	〃	50. 7. 14 〜 50. 8. 11	600	弥栄 立神	●①弥生時代（後期）土器片
17	木屋原	〃	50. 4. 7 〜 51. 3. 31	4,520	弥栄 立神	●①縄文時代（後期）土器片 ②弥生時代（後期）土器片
18	山神	〃	49. 6. 13 〜 50. 4. 28	6,950	平田 牛ノ浜 吉永 立神	●①縄文時代（前・後期）土器片 ②弥生時代（後期）土器片 ③平安時代・建物遺構，溝状遺構，須恵器，土師器，墨書土器 （甕，廣〜坏2，破片15）

19	曲　迫	溝辺町麓	50. 1. 27 ∫ 50. 3. 31	4,000	諏　訪 弥　栄	●①縄文時代（後期）土器片 ②弥生時代（後期）土器片 ③土師器片
20	枦　場	〃	49. 6. 5 ∫ 50. 3. 27	2,500	平　田 牛ノ浜 吉　永	●①縄文時代（前・後期）土器片
21	西　免	隼人町西光寺	49. 5. 25 ∫ 50. 2. 8	1,500	平　田 吉　永	●①弥生時代（後期）土器片 ②玉髄，黒曜石 ③土師器片
22	中　尾	〃	49. 9. 25 ∫ 50. 2. 10	2,500	出　口 吉　永	●①縄文時代（後期）土器片 ②弥生時代（終末期）土器片，磨製石鏃 ③土師器片
23	入　道	〃	49. 8. 5 ∫ 50. 3. 31	1,720	出　口 吉　永	●古墳時代（終末期）土器片，石鏃，土師器，溝状遺構，古道跡？
24	南十三塚	溝辺町崎森	49. 7. 16 ∫ 49. 9. 20	600	出　口 中　村	●弥生時代（終末期）土器片
25	東　原	〃	49. 9. 17 ∫ 50. 1. 24	8,700	諏　訪 弥　栄 中　村	●①縄文時代（早期）土器片 ②弥生時代（後期）土器片，住居跡１基 ③土師器片
26	桑ノ丸	〃	49. 8. 1 ∫ 50. 4. 25	8,750	新　東 牛ノ浜 中　村	●①縄文時代（早・前・後期）土器片，石斧，石鏃
27	三代寺	加治木町日木山	49. 3. 15 ∫ 49. 7. 31	2,300	河　口 新　東 弥　栄 牛ノ浜	●①縄文時代（早・前期）土器片，石斧，石鏃，集石遺構 ②弥生時代（終末期）土器片 ③土師器，土坑，ピット群
28	建馬場	加治木町反土	46. 12. 8 ∫ 46. 12. 12	180	盛　園 立　神	①弥生時代（後期）土器片
29	松木田	姶良町鍋倉	46. 12. 12 ∫ 46. 12. 15	42	盛　園 立　神	①柱穴 —— 22個
30	小瀬戸	姶良町西餅田	46. 8. 20 ∫ 46. 11. 2	3,050	河　口 戸　崎 立　神 尾ノ上 中　間 有　元	①縄文時代（前期）土器片（塞ノ神） ②弥生時代（中期）土器片 ③墨書土師器（伴，大伴，原仲家），青磁，白磁，緑釉陶器，須恵器，防錘車，土錘，井戸枠，木製品，柱穴群，溝状遺構，井戸

31	小山	吉田町東佐多浦	46. 11. 6 〜 47. 2. 10	1.050	河口 戸崎 立神 尾ノ上 中間 有元	①縄文時代（早・前期）土器片，(吉田，塞ノ神）集石 ②弥生時代，土器片 ③土師器，須恵器，青磁，白磁，緑釉陶器，滑石製石鍋
32	谷口	吉田町本城	46. 11. 10 〜 46. 11. 18	124	盛園 立神	①縄文時代（後期）土器片，黒曜石石剥片 ②弥生時代，土器片 ③土師器，白磁，滑石製石鍋
33	上城城址	〃	47. 1. 14 〜 47. 1. 18	20,000 現地踏査	盛園、 田野辺	①中世〜山城，青磁，白磁，瓦器
34	宮後	吉田町宮ノ浦	46. 11. 10 〜 46. 11. 18	44	盛園 田野辺	①縄文時代（晩期）土器片，石鏃（黒曜石） ②土師器
35	木の迫	鹿児島市川上町	50. 12. 9 〜 50. 12. 11	300	立神 牛ノ浜 吉永	● ①弥生時代（後期）土器片
36	加治屋園	〃	50. 11. 26 〜 51. 7. 31	1,200	弥栄 新東 長野 中村	● ①細石器〜（細石刃，細石刃核）同時期土器片（有文） ②縄文時代前期土器片（塞ノ神式）集石遺構 ③縄文時代，中期〜後期
37	加栗山	〃	50. 12. 15 〜 51. 10. 16	30,600	戸崎 青崎 立神 吉永 牛ノ浜 中村	● ①細石器〜（細石刃，細石刃核）石鏃13，局部磨製石斧，大型加工台形様石１ ②縄文時代（早・前期）土器片，住居跡17，土坑72，集石遺構14，石鏃，陰陽石（軽石製） ③中世〜山城，柵列跡，空堀柱穴，青磁，瓦器
38	神の木山	〃	50. 5. 12 〜 50. 5. 15	20	戸崎 青崎	● ①耕作土の下部はシラス層で遺物なし

（●は，調査報告書発行終了）



遺跡名

1. 堀之内B
2. 木場A
3. 木場B
4. 木場C
5. 山崎A
6. 山崎B
7. 山崎C
8. 中尾田
9. 木佐貫原
10. 石峰
11. 柳ケ迫
12. 長ケ原
13. 松木原
14. 蔦根塚
15. 七ツ次
16. 松ケ迫
17. 木屋原
18. 山神
19. 曲迫
20. 枦場
21. 西免
22. 中尾
23. 入道
24. 南十三塚
25. 東原
26. 桑ノ丸
27. 三代寺
28. 建馬場
29. 松木田
30. 小瀬戸
31. 小山
32. 谷ノ口
33. 上城址
34. 宮後
35. 木の迫
36. 加治屋園
37. 加栗山
38. 神の木山

縦貫道全遺跡地図

木 場 A 遺 跡

例　　　言

1．この報告書は，九州縦貫自動車道（鹿児島線）建設に伴って昭和53年～昭和54年度に発掘した木場A遺跡の調査報告書である。

2．発掘調査は，日本道路公団からの受託事業として，鹿児島県教育委員会が実施した。

3．本書の執筆は，つぎのとおりである。

第1章，第2章，第3章，第4章第1節，第5章 ……………………… 牛ノ浜

第4章第2節，第3節，第5章 ……………………………………………… 出　口

第4章第4節，第5章 ……………………………………………………… 池　畑

なお，現場写真，実測図等は調査担当者が主として行ったが，縄文時代石器実測図・トレースは，文化課職員，中村耕治，繁昌正幸，峯崎幸清の協力を得た。

4．出土品は，文化課収蔵庫に保管している。整理，復元作業は，収蔵庫の整理作業員が行なった。

5．本書で用いたレベル数値は，すべて海抜高である。

6．発掘調査，報告書作成にあたり，鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏に指導，助言を得た。旧石器時代の遺物は岡山大学稲田孝司氏に指導を得た。

目　　次

序　　文……1
調査の現況……2
例　　言……7

第１章……12
第１節　調査に至るまでの経過……12
第２節　調査の組織……12
第３節　調査の経過（日誌抄）……13

第２章　遺跡の位置及び環境……17

第３章　調査の概要……20
第１節　区割の設定……20
第２節　層　　序……23

第４章　遺構・遺物……30
第１節　旧石器時代……30
(1) 遺　　構……30
(2) 遺　　物……30
(3) 小　　括……31
第２節　縄文時代……39
(1) 遺　　構……39
(2) 遺　　物……45
(3) 小　　括……86
第３節　弥生時代……89
第４節　古墳時代……90
第５節　中　　世……92
(1) 遺　　構……92
(2) 遺　　物……97
(3) 小　　括……102
第６節　近　　世……103

第５章　まとめにかえて……104

挿 図 目 次

第１図　木場Ａ遺跡の位置及び周辺遺跡…16
第２図　木場Ａ遺跡地形図及びグリッド…21
第３図　地層図（１）…………………………24
第４図　地層図（２）…………………………25
第５図　地層図（３）…………………………26
第６図　地層図（４）…………………………27
第７図　地層図（５）…………………………28
第８図　第Ⅵ層下部遺物分布図………………29
第９図　集石９…………………………………32
第10図　集石11…………………………………33
第11図　旧石器時代遺物（１）………………34
第12図　旧石器時代遺物（２）………………35
第13図　集石分布図……………………………38
第14図　縄文時代集石１………………………39
第15図　縄文時代集石２………………………39
第16図　縄文時代集石３………………………40
第17図　縄文時代集石５………………………40
第18図　縄文時代集石６………………………41
第19図　縄文時代集石７………………………41
第20図　縄文時代集石８………………………42
第21図　縄文式土器類別分布図………………43
第22図　１，２類土器…………………………46
第23図　３，４類土器…………………………47
第24図　４類土器………………………………48
第25図　５類土器………………………………49
第26図　５類土器………………………………50
第27図　６類土器………………………………51
第28図　７類土器………………………………52
第29図　８類土器………………………………53
第30図　９～13類土器…………………………54
第31図　石鏃層位別分布図……………………57
第32図　石鏃（１）……………………………61
第33図　石鏃（２）……………………………62
第34図　石鏃（３）……………………………63
第35図　石鏃（４）……………………………64
第36図　石鏃（５）……………………………65
第37図　磨製石斧………………………………72
第38図　縄文時代石器分布図…………………73
第39図　石匙……………………………………75
第40図　石錐・石槍・石核……………………76
第41図　加工痕のある剥片……………………77
第42図　使用痕のある剥片……………………78
第43図　使用痕のある剥片・つまみ形石器・抉り入り石器……79
第44図　蜂ノ巣石………………………………80
第45図　磨石・凹石……………………………81
第46図　弥生式土器（１）……………………89
第47図　弥生式土器（２）……………………90
第48図　古墳時代の土器………………………91
第49図　道路跡…………………………………92
第50図　土坑１とその出土遺物………………93
第51図　土坑２…………………………………94
第52図　土坑３…………………………………94
第53図　１号溝とその出土遺物………………95
第54図　２号溝…………………………………96
第55図　土師器・須恵器………………………98
第56図　磁器・陶器……………………………100
第57図　瓦質土器………………………………101
第58図　土製品・石製品………………………102
第59図　古銭……………………………………103
第60図　近世の陶磁器…………………………103

図版目次

図版1　層　序 …… 105
図版2　1．旧石器時代集石　2．集石と炭化物 …… 106
図版3　1．集石と断面　2．ナイフ形石器出土状態（頁岩） …… 107
図版4　1．ナイフ形石器出土状態（黒曜石）　2．剥片石器出土状態 …… 108
図版5　1．細石刃・調整剥片・ナイフ形石器・スクレイパー　2．剥片（1） …… 109
図版6　1．剥片（2）　2．剥片（3） …… 110
図版7　1．剥片（4）　2．剥片（5） …… 111
図版8　1．発掘状況　2．縄文時代集石1．2．3 …… 112
図版9　1．集石1．2．6類土器出土状態 …… 113
図版10　1．有柄石鏃出土状態　2．蜂ノ巣石出土状態 …… 114
図版11　1．1類土器　2．1類土器 …… 115
図版12　1．1類土器　2．2類土器 …… 116
図版13　3類土器・4類土器 …… 117
図版14　4類土器 …… 118
図版15　1．5類土器　2．5類土器 …… 119
図版16　1．5類土器　2．5類土器 …… 120
図版17　6類土器 …… 121
図版18　1．7類土器　2．7類土器 …… 122
図版19　1．7類土器　2．8類土器 …… 123
図版20　1．8類土器　2．8類土器 …… 124
図版21　1．10～13類土器　2．9類土器 …… 125
図版22　石鏃（1） …… 126
図版23　石鏃（2） …… 127
図版24　石鏃（3） …… 128
図版25　石鏃（4） …… 129
図版26　石鏃（5） …… 130
図版27　1．磨製石斧　2．石匙 …… 131
図版28　1．石錐・石槍・石核　2．加工痕のある剥片 …… 132
図版29　1．使用痕のある剥片　2．剥片・つまみ形石器・抉り入れ石器 …… 133
図版30　1．蜂ノ巣石　2．磨石・凹石 …… 134
図版31　1．弥生式土器口縁部　2．弥生式土器底部 …… 135
図版32　1．道路跡　2．土坑 …… 136
図版33　1．溝状遺構　2．土師器皿出土状態 …… 137

図版34　1．古墳時代の土器　2．古墳時代の土器 …… 138
図版35　1．土師器皿　2．土師器皿　3．青磁　4．陶器 …… 139
図版36　1．青磁　2．青磁 …… 140
図版37　1．陶器　2．瓦質土器　3．近世の陶磁器 …… 141

表目次

表1　旧石器時代石器一覧表 …… 36
表2　石鏃一覧表 …… 66
表3　縄文時代石器分類表 …… 83
表4　古墳時代の土器一覧表 …… 90
表5　土師器一覧表 …… 97
表6　磁器一覧表 …… 99
表7　陶器一覧表 …… 101

第1章　序　　説

第1節　調査に至るまでの経過

日本道路公団は，昭和47年２月23日「日本道路公団の建設事業等，工事施行に伴う埋蔵文化財包含地の取り扱いに関する覚書」に基づき，鹿児島線（吉松～加治木線）の埋蔵文化財についての協議を求めた。これに対し，鹿児島県教育委員会は，昭和47年８月２日～10日，同月18日～26日までの２回にわたり，延長38km，幅２kmにわたって分布調査を行った。この結果に基づいて，文化室は路線の決定については，埋蔵文化財の保護の上から十分配慮されることを要望した。

さらに昭和49年１月～２月，河口貞徳氏の指導を得て，再確認のための分布調査を実施し，これらの結果に基づいて遺跡の保存区分を決め，日本道路公団と協議した。そして保存する遺跡１カ所（吉松町堂迫地下式横穴），記録保存する遺跡10ケ所（当遺跡等）が決定した。

発掘調査は，第１次調査を昭和53年12月11日から昭和54年４月10日まで，第２次調査を昭和54年８月28日から昭和55年２月21日まで行った。

第2節　調査の組織

調査責任者	文化課長	谷崎哲夫	（昭和53年度）
	文化課長	山下典夫	（昭和54～55年度）
	文化課長	猿渡侯昭	（昭和56年度）
	課長補佐	荒田孝助	（昭和53年度）
	課長補佐	新　時弘	（昭和54年～56年度）
	課長補佐	本田武郎	（昭和56年度）
調査企画	専門員	本蔵久三	（昭和53～55年度）
	主任文化財研究員	諏訪昭千代	（昭和56年度）
調査担当者	文化財研究員	出口　浩	（昭和54年度）
	主事	新東晃一	（昭和54年度）
	主事	池畑耕一	（昭和53年度）
	主事	弥栄久志	（昭和54年度）
	主事	牛ノ浜　修	（昭和54年度）
	主事	長野真一	（昭和53年度）
	文化財調査員	中島哲郎	（昭和54年度）
	文化財調査員	宮田栄二	（昭和54年度）
事務担当	係長	中条　享	（昭和53～54年度）
	主幹兼係長	川畑栄造	（昭和55～56年度）

事務担当	主事	伊地知千晴	(昭和53年度)
	主査	安藤幸次	(昭和54～56年度)
	主事	天辰京子	(昭和53～55年度)
	主事	山下玲子	(昭和56年度)

第3節　調査の経過（日誌抄）

発掘調査は1次調査を昭和53年12月から昭和54年4月12日まで行い，第2次調査は昭和54年8月28日から昭和55年2月21日まで行った。第2次調査の経過を日誌抄によりまとめて以下略述する。

昭和54年8月28日(火)～9月1日(土)

木場A遺跡発掘調査再開する。第1次調査の結果にもとづき，グリッドを設定する。器材の運搬・テントの設置・草払いを行う。

9月3日(月)～9月8日(土)

グリッドに沿って10m間隔で抗打ち。C・E－26・27の表層掘り下げ。遺跡内の地形測量(1/100)C－28区確認トレンチ設定後掘り下げ。

9月10日(月)～9月14日(金)

C・D－26～28区Ⅲa層掘り下げ。E－28区Ⅱ層掘り下げ。D－27区Ⅲa層で砂岩製磨製石斧出土。

9月17日(月)～9月22日(土)

C・D・E－26～28区Ⅲa層掘り下げ。E・F－25・26区表層の下部Ⅳb層掘り下げ。E・F－27・28区Ⅲa層掘り下げ。遺物実測。河口貞徳先生指導。

9月25日(火)～9月29日(土)

C・D－26～28区Ⅲa～Ⅲb層掘り下げ。E・F－25・26区Ⅳb層掘り下げ。E・F－27・28区Ⅲa層上面地形測量図作成。E・F－27・28区溝状遺構確認掘り下げ。

10月1日(月)～10月6日(土)

C・D－26～28区Ⅲb層掘り下げ。溝状遺構掘り下げ終了。E・F－29区Ⅱ層掘り下げ。E－27・28区Ⅲb層掘り下げ。Ⅳ層上面にて平栫式土器出土。溝状遺構実測。

10月8日(月)～10月13日(土)

C・D－29～32区，G－28区表層剝除。E－27・28区Ⅲa層掘り下げ。E・F－27～29区地層断面実測。山崎B遺跡終了，作業員合流し調査員は牛ノ浜主事と宮田調査員に交代する。

10月15日(月)～10月19日(金)

C・D－29～32区表層剝除。E－31～33区確認トレンチ設定後掘り下げ。D－32区確認トレンチ設定後掘り下げ。Ⅲb～Ⅳ層上面にかけて塞ノ神式土器出土。山崎B遺跡よりプレハブ移転する。

10月22日(月)～10月26日(金)

E－31～33区トンレチ掘り下げ。他のグリッドはⅢa～Ⅳ層掘り下げ。平栫式土器等出土する
D－31区古道面検出。E－32区土坑検出

10月29日(月)～11月2日(金)

C・D－29区Ⅳ～Ⅵ層掘り下げ。他のグリッドはⅢa～Ⅳ層掘り下げ。D－30・31区古道検出

11月5日(月)～11月10日(土)

E区Ⅲb～Ⅳ層掘り下げ。D－31・区Ⅲa～Ⅳ層掘り下げ，平栫式土器出土。E－29区古道検出。D－30区土坑（Ⅱ層落ち込み）検出。断面実測図。

11月12日(月)～11月17日(土)

E－29・30区古道検出。Ⅳ層～Ⅵ層掘り下げ。

11月19日(月)～11月23日(金)

Ⅲa～Ⅳ層掘り下げ。Ⅳ層に遺物集中する。D－32区Ⅳ層面に集石3基検出する。22日木場B遺跡終了し，調査員，作業員共に合流する。

11月26日(月)～12月1日(土)

Ⅲb～Ⅳ層掘り下げ。E－20区溝状遺構検出，掘り下げる。遺物の集中は24区より西側にみられる。東側はトレンチにて確認調査にはいる。断面図作成。木場B遺跡よりプレハブ移転する。

12月3日(月)～12月8日(土)

Ⅳ～Ⅴ層掘り下げ。E－19・20区確認トレンチによりⅥ層下部に黒曜石・石英の剥片検出，シラスの直上につき旧石器時代の可能性あり，遺物の範囲確認を急ぐ。D－30区集石4検出。31～33区調査終了。

12月10日(月)～12月14日(金)

Ⅳ～Ⅴ層上面掘り下げ。D・E－30区集石5検出。29・30区終了。

12月17日(月)～12月22日(土)

Ⅳ～Ⅴ層掘り下げ。石鏃多し，またつまみ形石器，抉り入り石器など石器に特殊なものがみられる。

12月24日(土)～12月26日(水)

Ⅳ～Ⅴ層上面掘り下げ。今年の調査終了。

昭和55年1月7日(月)～1月12日(土)

旧石器時代の遺物の範囲確認のため，トレンチを設定し，Ⅳ層以下の地層・遺物の確認をいそぐ。E・F－22区Ⅲ層掘り下げ。E－22区Ⅱ層落ち込みピット内に土師器埦3ケ出土する。

1月14日(月)～1月19日(土)

トレンチ調査。E－22区より玉髄製剥片出土。E－22区Ⅱ層落ち込み溝状遺構検出。C～F－21～25区Ⅲ～Ⅳ層掘り下げ。出口文化財研究員に代り池畑主事調査に参加。

1月21日(月)～1月26日(土)

Ⅲ～Ⅳ層掘り下げ。D－22区溝状遺構検出。集石6・7検出，実測図作成（1/10）。集石6は大

きな礫を利用し，他の集石と若干違う。

1月28日(月)～2月2日(土)

C～F－21～24区Ⅳ層掘り下げ。C・D－19・20区表層掘り下げ。2月にはいり雪が降り寒さも一段と厳しくなる。

2月4日(月)～2月9日(土)

C－29区集石8検出実測（1/10)。E・F区縄文時代包含層（Ⅲ～Ⅴ層上面）調査終了し，機械力にてⅤ層とⅥ層上面まで剥除する。E－23・24区玉髄剥片出土。E・F－19・20区Ⅵ層下部遺物出土。F－23・24区Ⅵ層下部石英砕片，剥片出土。D－19・20区溝状遺構検出（中世）

2月12日(火)～2月16日(土)

C・D区Ⅳ層掘り下げ。E・F区Ⅵ層下部掘り下げ。E・F－20区Ⅵ層下部に集石を検出する（集石9)。周辺に炭化物もみられる。集石10・11・12検出。集石検出面（Ⅵ層下部）にて地形測量図。

2月18日(月)～2月21日(木)

Ⅵ層下部～Ⅶ層上面掘り下げ，終了。集石9～12実測図作成（1/10)。プレハブ移転。道具収蔵庫へ。木場A遺跡終了。

第１図　木場Ａ遺跡の位置Ｂ及び周辺遺跡

第２章　遺跡の位置及び環境

木場Ａ遺跡は，鹿児島県姶良郡栗野町木場外堀に所在し，川内川南東部，栗野岳の裾野にあたる台地上にある。標高約260mの台地で川内川よりの比高は約80mである。

遺跡の所在する栗野町は，鹿児島市街地より北東約44kmの鹿児島県の北部に位置する。東では，霧島火山群の一分峯栗野岳が宮崎県えびの市と境を接している。北は熊峯を隔てて吉松町，西は伊佐郡菱刈町，西南隅に国見岳がある。南は牧園，横川両町と境を接しているが，火山灰土で地形が複雑である。

熊本県白髪岳に源を発した川内川は，吉松町境の峡谷をうがって栗野町の中央部に沖積地の盆地をつくり，米作地帯を形成している。以前は川内川の氾濫のたびに中央低地は泥海化するのが例年であったが，護岸工事の進歩によって近年ようやく被害を僅少に止めるようになった。

栗野岳の裾野は栗野町に拡がり，一帯は火山灰土に覆われ，火山岩・火山灰・砂土が多くみられ，雨水の浸食がひどく地形は複雑であるが，町の畑耕作地の過半を占めている。又，幸田・恒次・米永方面は，栗野岳の裾野と国見岳等の裾野で，小高原の形となってはいるが，雨水の浸食を受けて複雑な地形をなしている。

遺跡のある外堀という地名は，島津義弘が朝鮮の役に出陣したという松尾城①に関連する地名である。

木場Ａ遺跡は，松尾城より約500m南東部に位置し，栗野岳の裾野にあたる台地上にある。台地面積は約50*ha*で道路は台地を割って東一西方向に計画されている。表面で採集された遺物には，古代～中世の土師器や縄文式土器があった。

木場Ａ－２遺跡は，栗野町木場本城に所在し，木場Ａ遺跡の東約700mにある。やはり地名は松尾城に関連し，松尾城より約１km南東部に位置する。

遺跡は川内川南側の舌状台地縁辺部にあり，川内川からの比高は約80mである。南側に遠目ケ丘と呼ばれる楠原の岡が綾織の谷におりる標高258mの傾斜地を削平した桑畑にある。遺跡面積は約350㎡である。須恵器・土師器が散布している。

木場Ｂ遺跡は，木場Ａ遺跡の西方約200mのところにある。標高250m余りのほぼ平坦な台地で，畑地は桑畑として利用されている。南方は平面弧状を呈し端部は急崖となって，長谷（ながたに）部落の集落につながる。弧状東側の末端部は，深い谷となり中世の「空堀」の跡という伝承もある。また西方は絶壁状の急崖となり，深部を栗野ーえびの間の県道が南北に走っている。道路との比高差は約44mである。また谷を狭んで約300mのところに対峙する台地末端部は木場Ｃ②遺跡で縄文式土器や土師器を出土している。北方は次第に低く傾斜し，樹枝状に谷が入り込んでいる。台地面積約３*ha*で，道路は台地を割って東ー西方向に計画されている。地表面には古墳時代の成川式土器片や，古代～中世にかけての土師器が散布している。

遺跡の周辺には，多くの遺跡が研究者等により確認されている。旧石器時代では，細石刃，細石刃核等が採集されている麦生田遺跡。縄文時代では，栗野工業高校建設に伴う花ノ木遺跡。④九州縦貫自動車道建設に伴って発掘調査された山崎B遺跡がある。⑤古墳時代では北方遺跡の地下式横穴が⑥歴史時代では山崎A⑦・B⑧遺跡が調査されている。また，山城として松尾城があり，本丸・二ノ丸が現存し，田尾原・稲葉崎⑨には県指定史跡の供養塔群がある。

（１）『栗野町郷士史』栗野町
（２）鹿児島県教育委員会「木場c遺跡」　1981
（３）林昭男・米満重満「栗野町の遺跡について」鹿児島考古８号　1973
（４）鹿児島県教育委員会「花ノ木遺跡」　1975
（５）鹿児島県教育委員会「山崎B遺跡」　1982
（６）河口貞徳「北方地下式横穴」鹿児島考古５号　1971
（７）鹿児島県教育委員会「山崎A遺跡」　1981
（８）（５）と同じ
（９）五味克夫「栗野町稲葉崎・田尾原供養塔群」鹿児島県文化財調査報告書第13集

No.	遺跡名	所在地	備考	
1	山ノ口B	姶良郡栗野町北方山ノ口	弥生式土器	
2	山ノ口A	〃 〃 〃	縄文・弥生式土器，土師器	
3	麦生田	〃 〃 麦生田	旧石器時代（細石刃，細石刃核）	(1)
4	九日田	〃 〃 九日田	縄文式土器（出水），土師等	(2)
5	宇　都	〃 〃 宇　都	縄文式土器，土師器	
6	堂ノ上	〃 〃 堂ノ上	地下式横穴，地下式板石積石室	
7	新中馬場	〃 〃 新中馬場	積石塚，地下式横穴	
8	柿ノ木	〃 〃 中郡	縄文式土器，弥生式土器	
9	宮　下	〃 〃 宮下	縄文式土器，弥生式土器	
10	池ノ川	〃 〃 池ノ川	地下式横穴	(3)
11	迫　山	〃 米永迫山	弥生式土器	
12	下坂元	〃 〃 下坂元	弥生式土器	
13	山崎B	〃 木場牛瀬戸	縄文式土器(前平・塞ノ神)，建物跡，堀，土師器	(6)
14	山崎A	〃 〃 〃	建物跡，古道，土師器	(4)
15	山崎C	〃 〃 〃	青磁，土師器	(4)
16	坂元城	〃 米永坂元	城跡	
17	王ノ山	〃 〃 王ノ山	弥生式土器	
18	石の本	〃 〃 石の本	縄文式土器	
19	後ケ迫	〃 〃 水窪	弥生式土器	
20	西　原	〃 木場西原	縄文式土器（押型文・曽畑・轟）	(1)
21	上佐牟田	〃 〃 上佐牟田	縄文式土器（押型文・曽畑・吉田）	(1)
22	花ノ木	〃 〃 花ノ木	縄文式土器(押型文・塞ノ神・深浦)，集石，土坑	(5)
23	諏訪岡	〃 〃 諏訪岡	縄文式土器（阿高，出水，市来）	(1)
24	木場C	〃 〃 〃	縄文式土器（岩崎），土師器	(4)
25	木場B	〃 〃 内堀〃	土師器	本報告書
26	木場A	〃 〃 外堀	旧石器時代(ナイフ形石器・剝片)，縄文式土器(前平，塞ノ神)	本報告書
27	木場A-2	〃 〃 本城	旧石器時代（三稜尖頭器・細石刃核）	本報告書

表1　山崎B遺跡周辺の遺跡一覧表

(1) 林昭男・米満重満「栗野町の遺跡について」鹿児島考古8号 1973

(2) 鹿児島県教育委員会発掘　現在整理中

(3) 河口貞徳「北方地下式横穴」鹿児島考古5号 1971

(4) 鹿児島県教育委員会　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅷ 1981

(5) 鹿児島県教育委員会「花ノ木遺跡」 1975

(6) 鹿児島県教育委員会　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅹ 1982

第3章　調　査　の　概　要

第1節　区割の設定

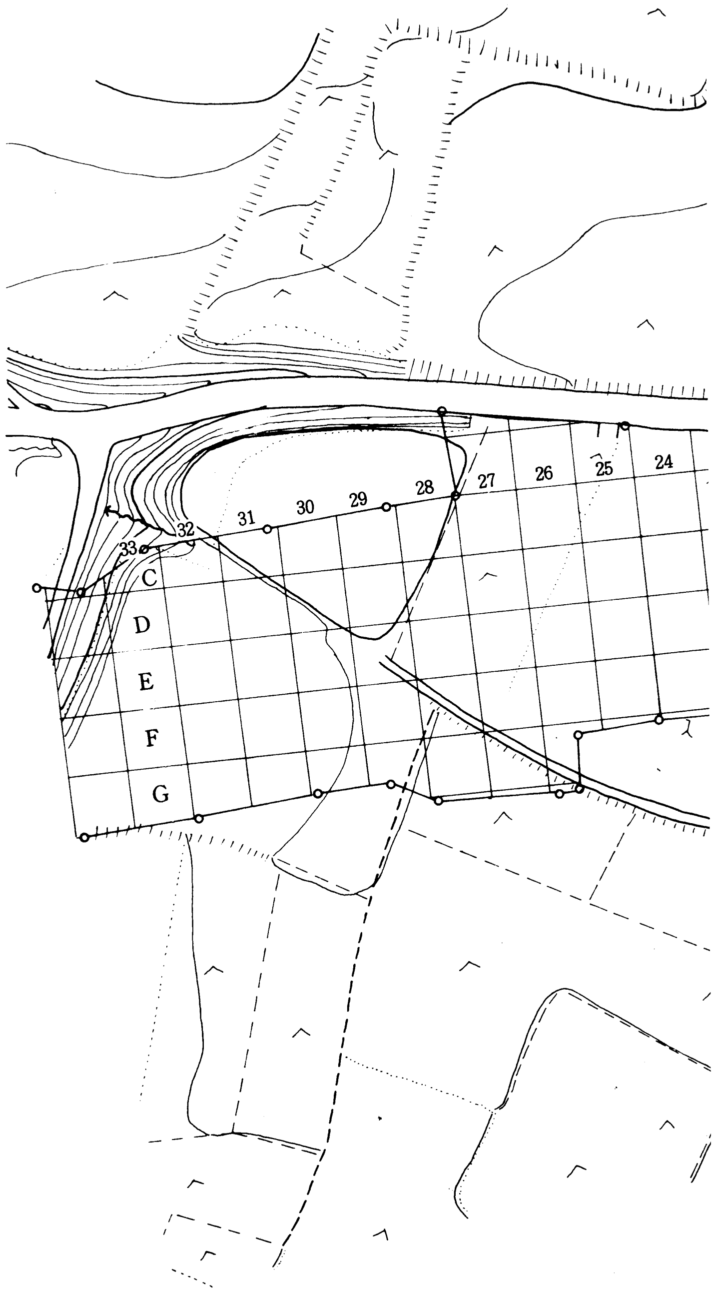
木場A遺跡は，南北約300m，東西約500mの川内川南側の舌状台地にあり，川内川からの比高は約80mである。北東部に中世～近世の山城である松尾城，東部に遠目ケ丘と呼ばれる楠原の岡にはさまれた標高260mの平坦な台地に位置している。

当地は畑であったが桑畑が多いため，その根の剥除作業から始めた。調査実施にあたって，10m四方を単位に区画を設けることとし，縦貫道路のセンターライン，ＳＴＡとＳＴＡ杭を結び横線を基準とした。この線と平行に10m間隔の横線を各方設け，東西に１～33，それと直角に10m間隔の縦線を設け，Ａ－１，Ａ－２……Ｃ－15と区を設定して区域名を表わすことにした。段取りとして10m毎の10m×２mのトレンチ調査を実施し，遺跡の範囲や遺物包含層の把握に努めた。当初，分布調査に基づき中世の遺跡としての調査のはこびとなったが，トレンチ調査の結果，中世の遺物・縄文時代の遺構（集石）・遺物・旧石器時代の遺物が確認され，旧石器時代のⅦ層上面まで調査を考えるに至った。

中世の遺構として古道・溝状遺構・土坑の検出をみた。古道は幅1.6m前後で表面は，茶褐色の土で非常に固くなっている。調査した範囲では表層の下に埋没していたが，東側は現在でも幅１m程の農道として利用されている。溝状遺構は２本検出され，１号溝からは土師器の皿が出土している。土坑は３基検出され，全て埋土はⅡ層の黒色火山灰土である。土坑１からは，３枚の土師器皿が重なるようにして出土した。遺物としては，土師器・須恵器・陶磁器・古銭石製品・土製品の出土があった。

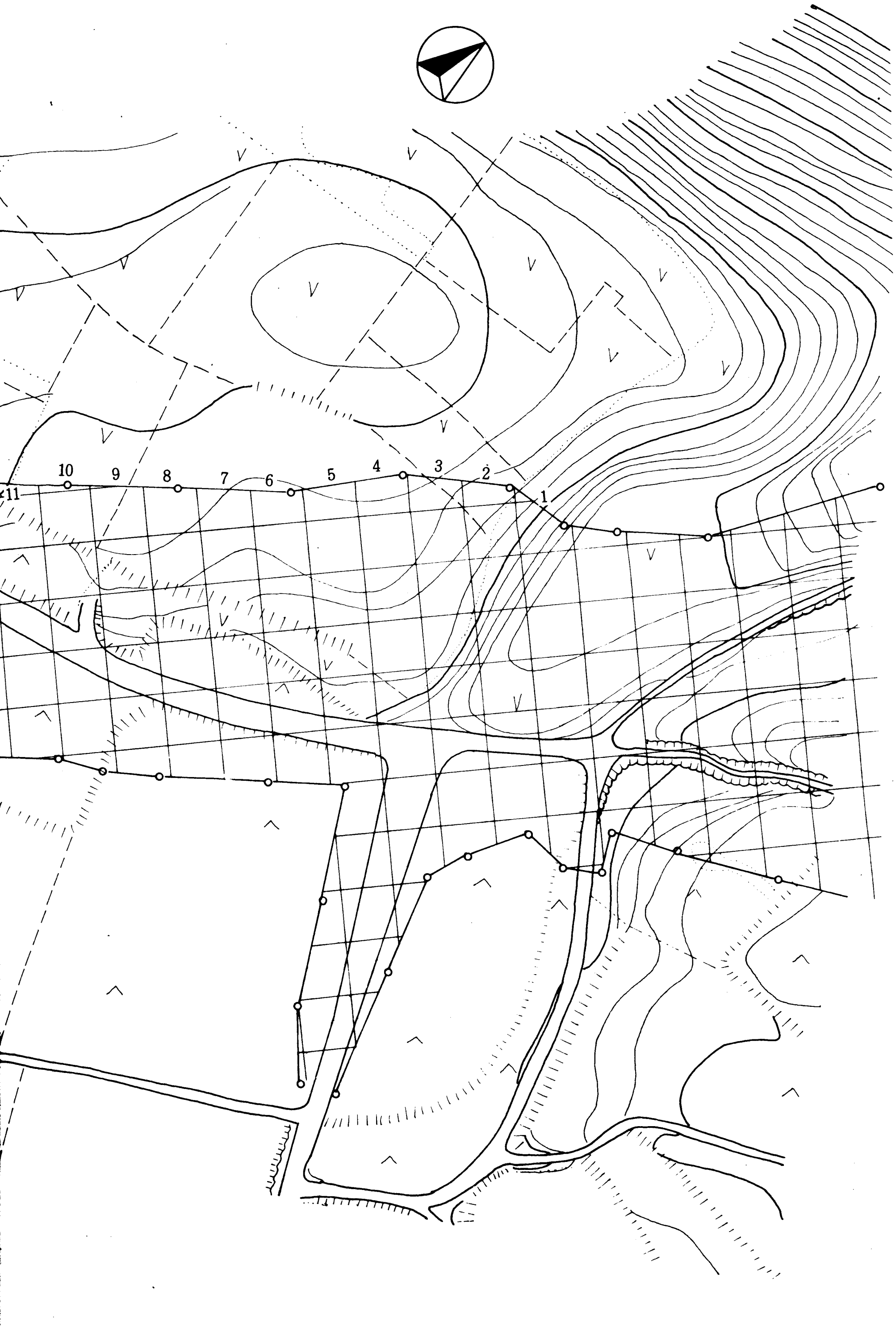
縄文時代の遺構として，Ⅳ層に集中しているものや，散乱しているもの等形態はまちまちであるが集石が８基検出された。土器は，早期から後期までみられ，石坂式・吉田式・前平式・平栫式・塞ノ神式等が出土した。石器は，石鏃・石斧・石匙・スクレイパー・剥片・磨石・凹石・蜂ノ巣石等が出土している。

旧石器時代の遺構として，Ⅵ層下部に集石が４基検出された。そのなかには炭化物が周辺に確認されるものや，炭化物の集中がみられるものがある。遺物としては，Ⅳ層下部で細石刃・調整剥片が出土し，Ⅵ層下部からは，ナイフ形石器・スクレイパー・剥片・石核等が出土し，石材の豊富さが特徴である。



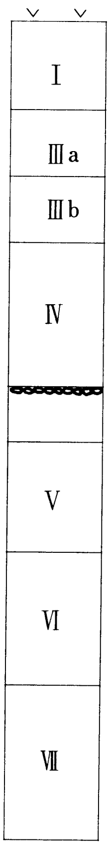
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
C
D
E
F
G

第２図　木場Ａ遺跡地形図及びグリッ



ド

第2節　層　　序



第Ⅰ層　表土であり，現在の耕作土である。

第Ⅱ層　黒色火山灰土層

通称黒ニガと呼ばれているもので，E・F区には若干の堆積がみられるが，C・D区は，削平によってほとんどみられない。土師器の小片の散布がみられる。（木佐貫原遺跡，山崎A・C遺跡ではこの層から土師器が出土している。）

第Ⅲa層　黄褐色土層

通称赤ホヤ層と呼ばれているもので，前期から後期の遺物がみられるが，量的には少ない。

第Ⅲb層　黄褐色パミス層

幸屋火砕硫に対比できるものであり無遺物層である。

第Ⅳ層　黒褐色硬質土層

上部に，平栫式・塞ノ神式土器・石鏃・石匙等が包含されている。21区から33区にかけて分布がみられる。上部から中部は，吉田式，前平式土器がみられ，26区から33区に分布していた。

第Ⅴ層　黄褐色粘質土層

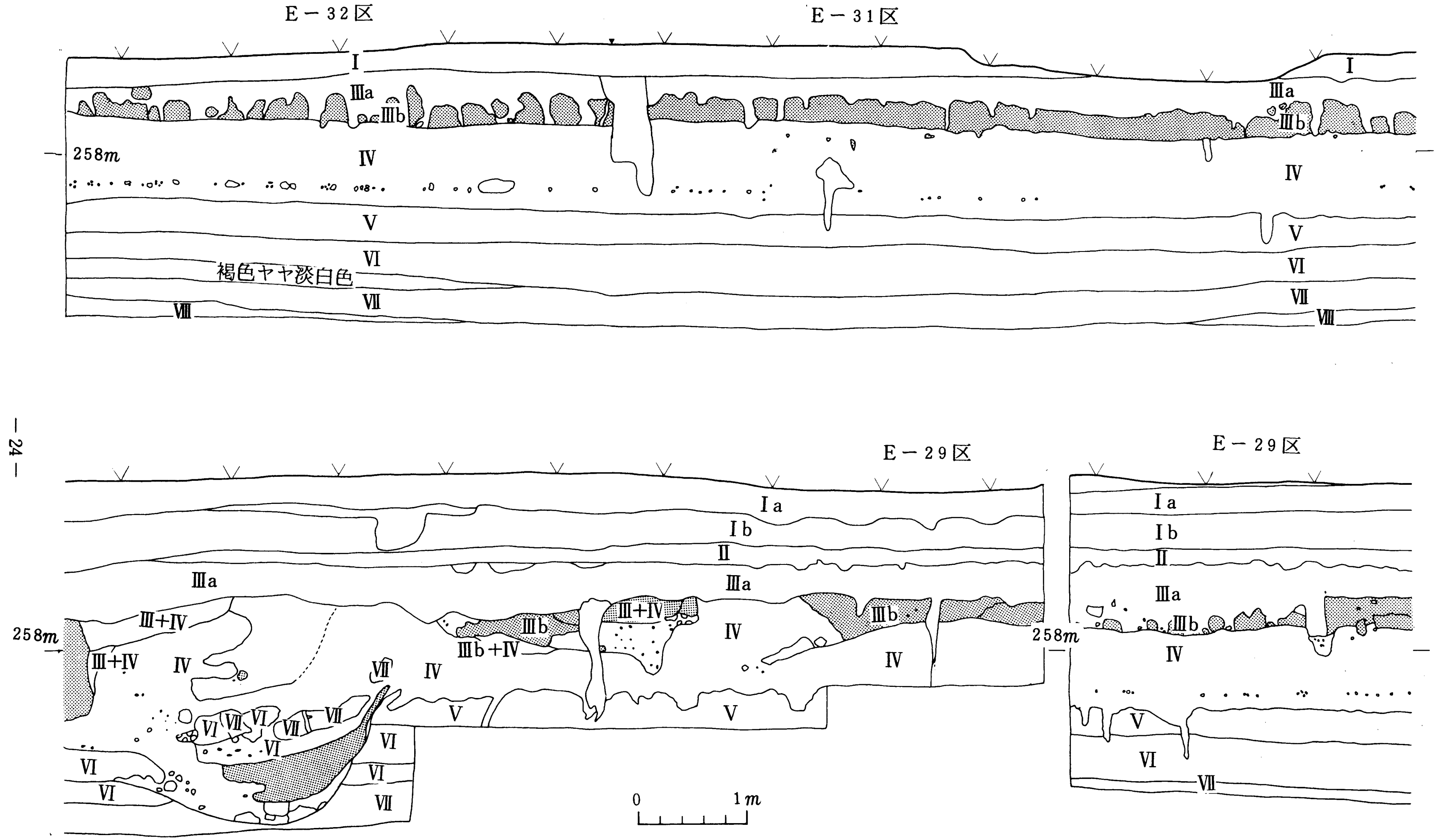
C－26・27・28区のⅣ層最下部からⅤ層最上部にかけて細石刃があった。細石刃核の出土はなく，また，その他の剥片等も確認していない。

第Ⅵ層　暗茶褐色粘質土層

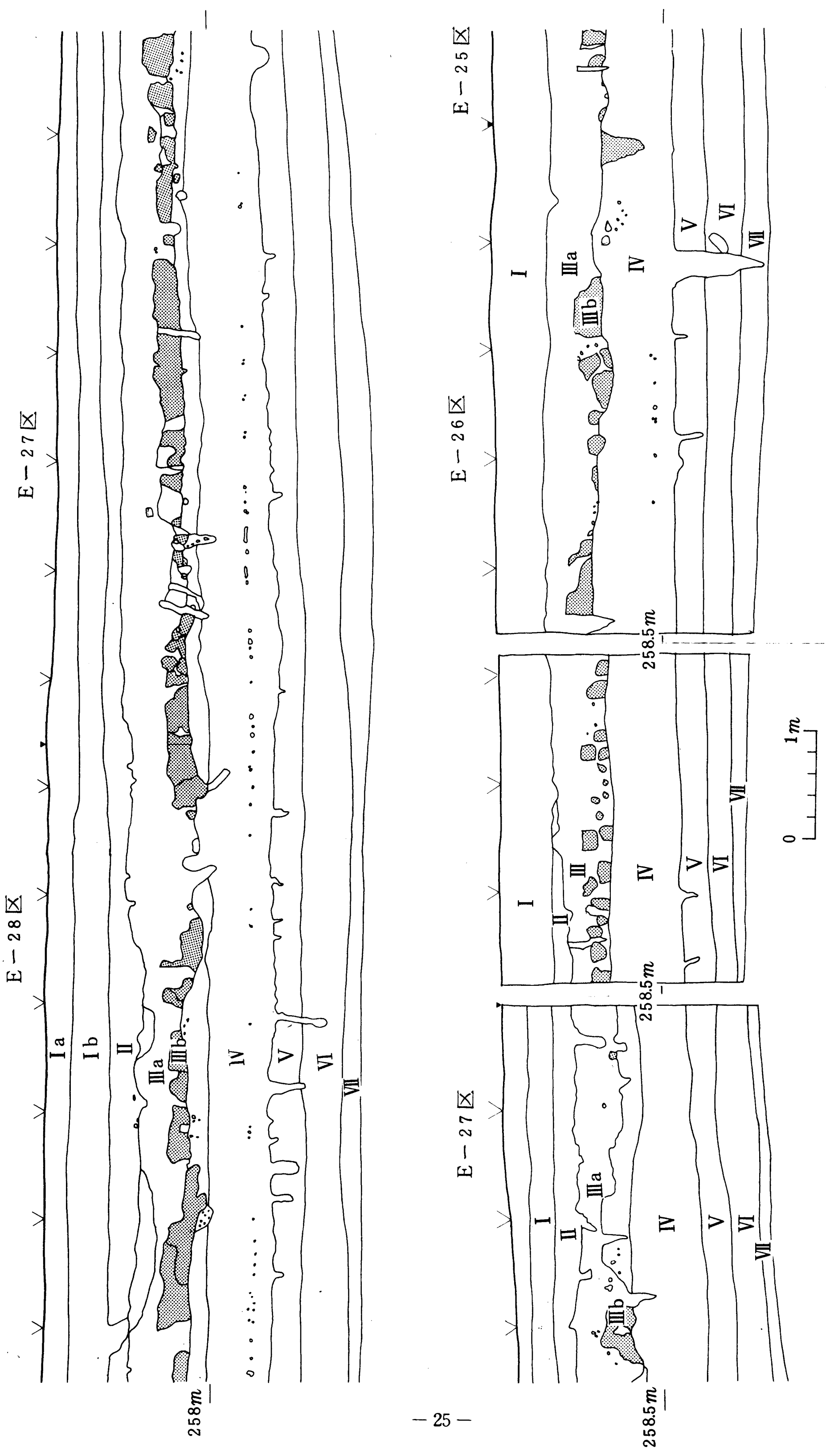
Ⅵ層下部からⅦ層最上部にかけて，ナイフ形石器，剥片・石核等の旧石器時代の遺物が包含されている。石材は多種にわたり，黒曜石・玉髄・頁岩・チャート等である。

第Ⅶ層　黄シラス

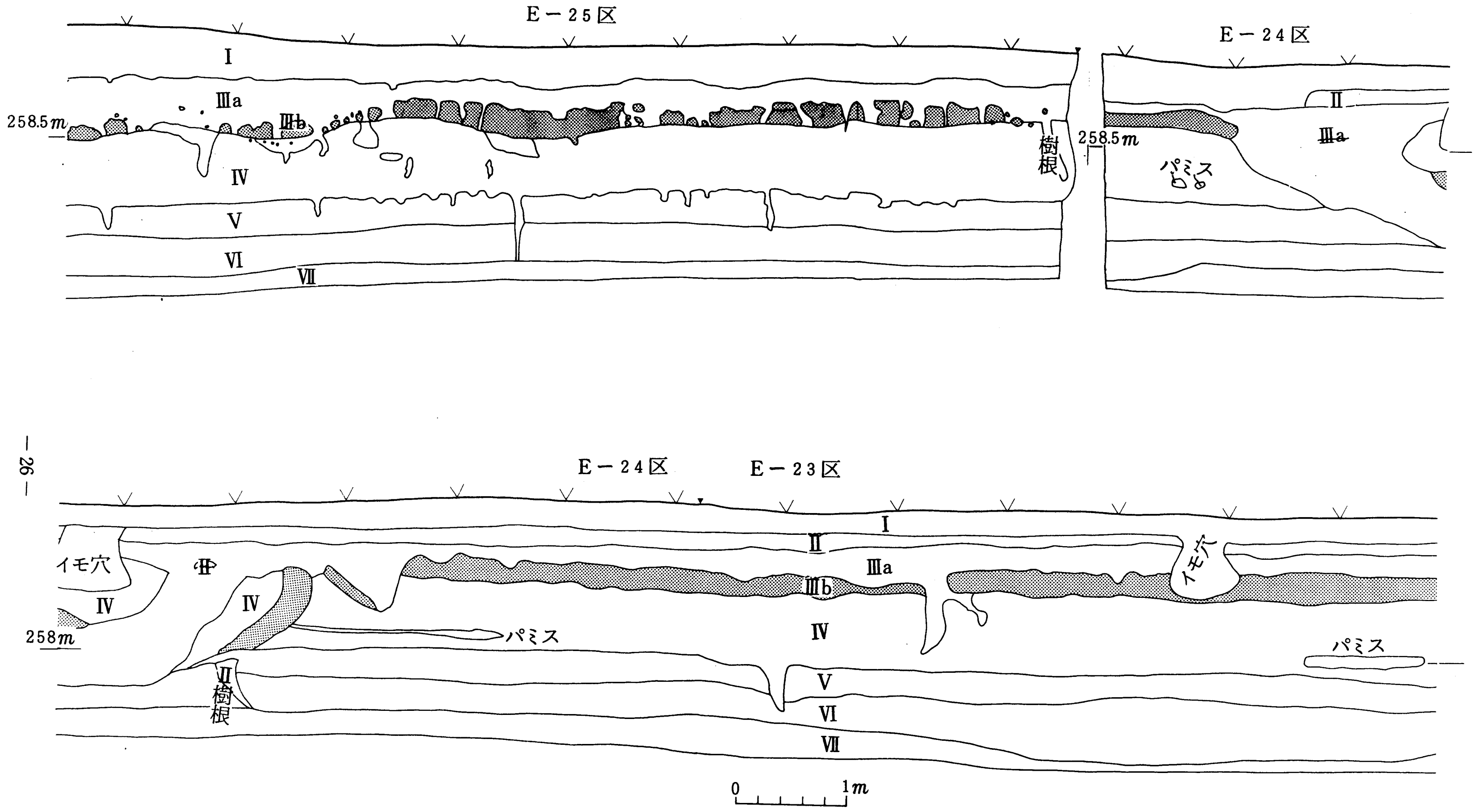
Ⅶ層最上部に石器がみられたが，Ⅵ層の遺物と異ならず同時期のものと思われる。それ以下は無遺物層である。


E－32区
E－31区
E－29区
E－29区
258m
褐色ヤヤ淡白色
Ia
Ib
IIIa
IIIb
III+IV
IIIb+IV
0
1m

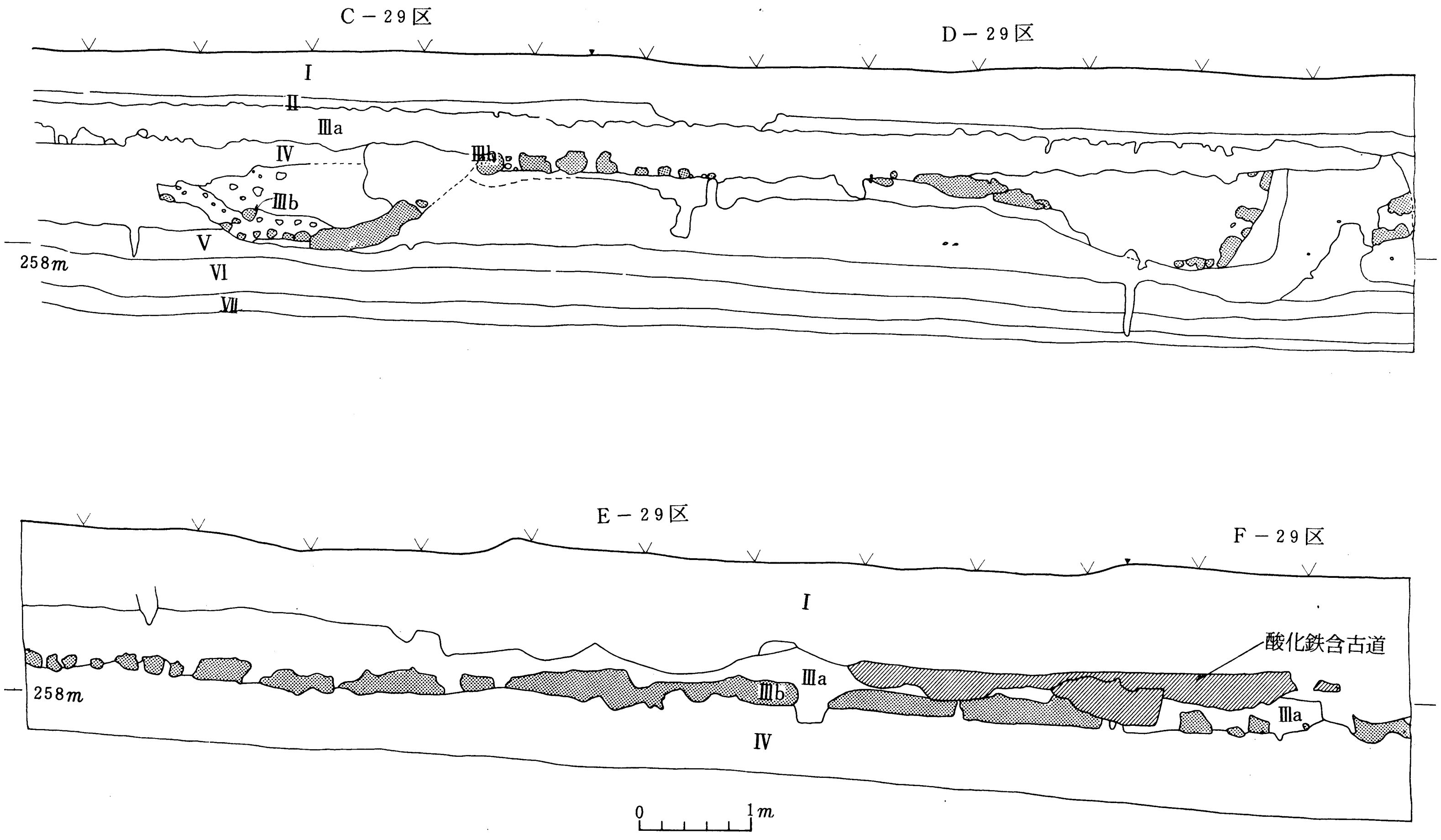
第3図 地 層 図（1）



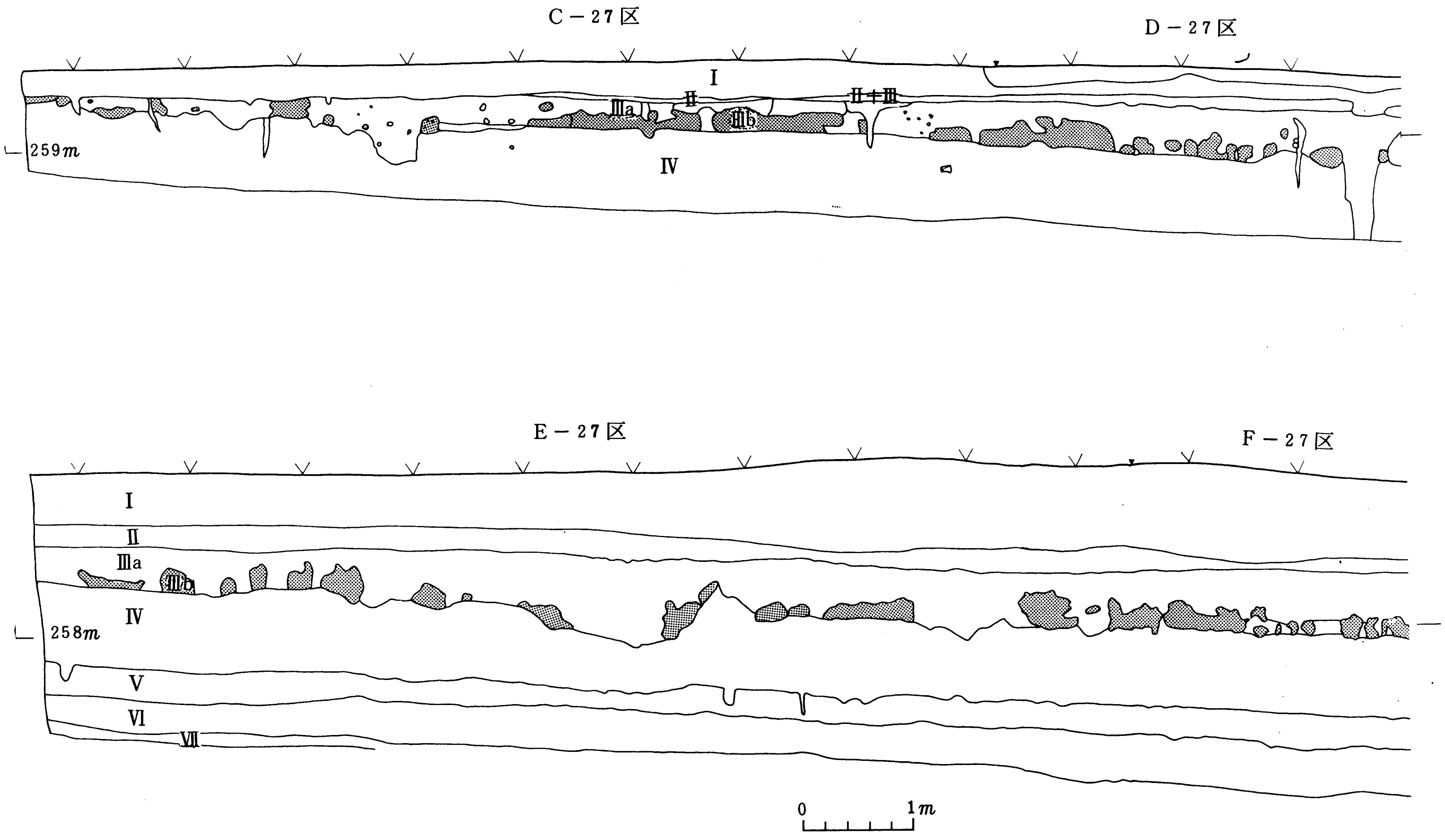
第4図 地層図(2)



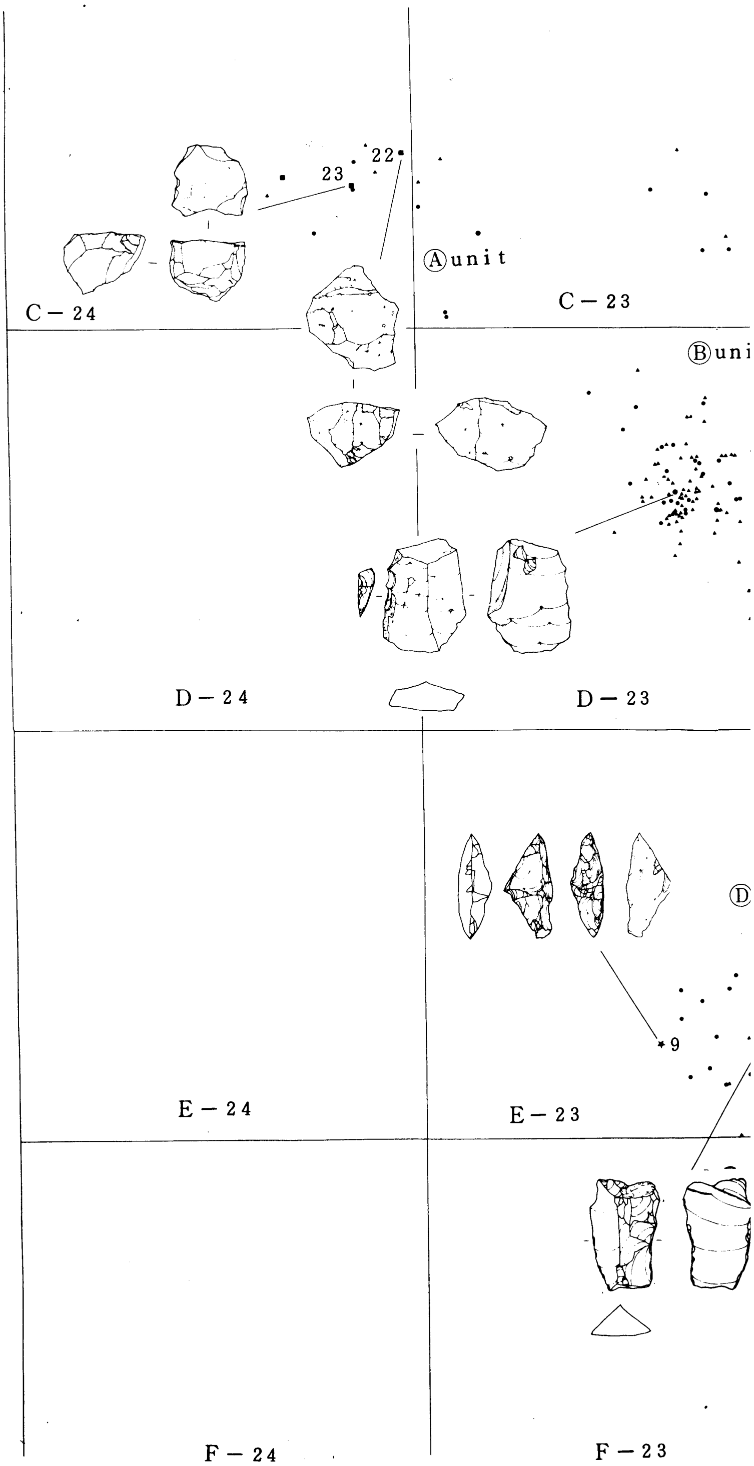
第5図 地層図(3)

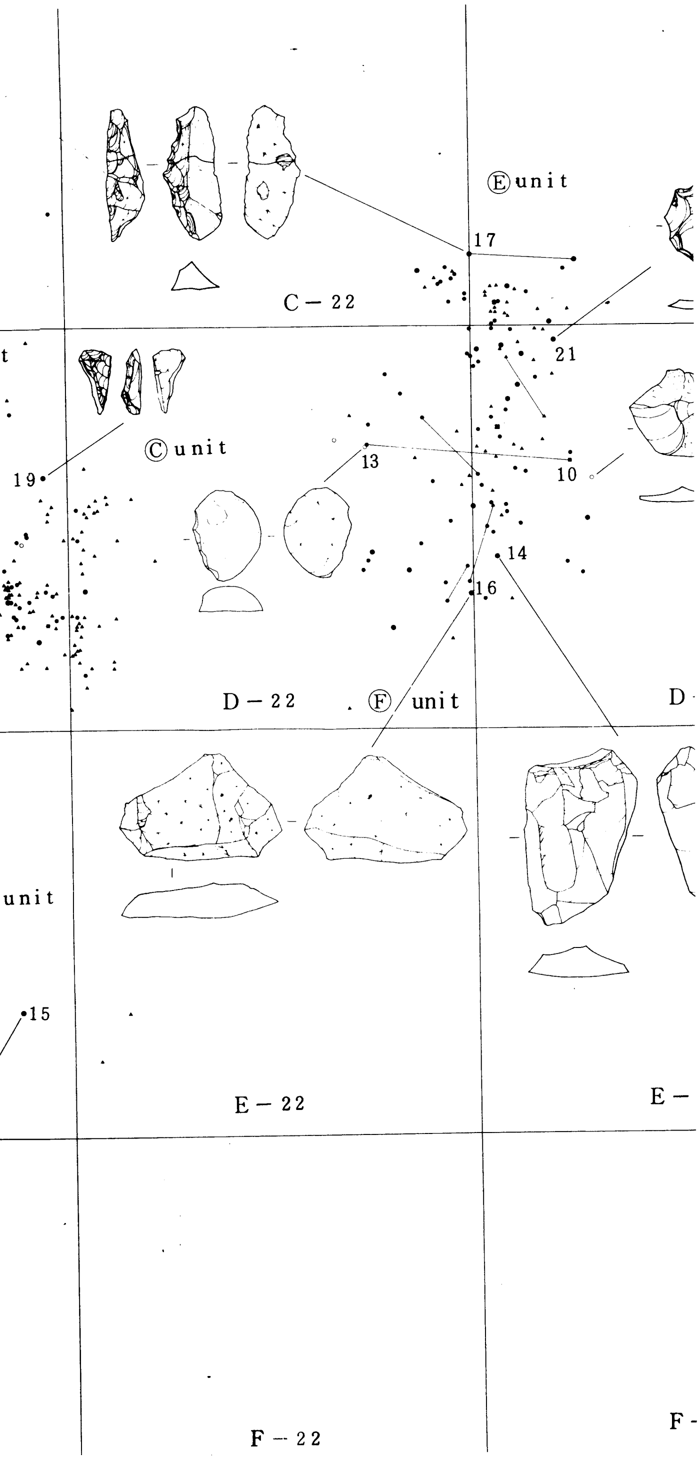

C－29区
D－29区
I
II
IIIa
IV
IIIb
IIIb
V
VI
VII
258m
E－29区
F－29区
I
酸化鉄含古道
IIIa
IIIb
IIIa
IV
258m
0
1m

第6図　地　層　図（4）

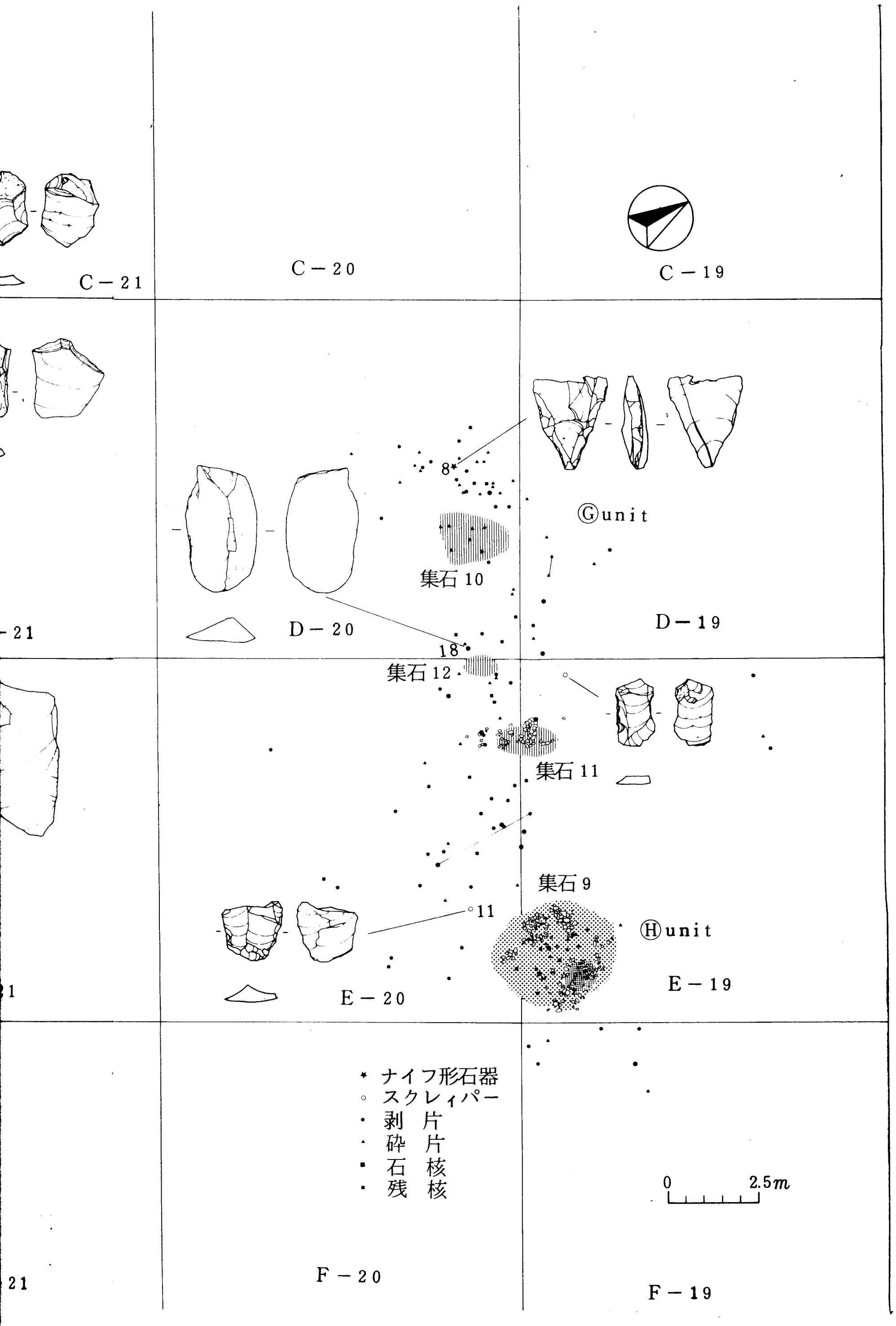


第7図 地 層 図（5）


C－24
C－23
D－24
D－23
E－24
E－23
F－24
F－23
Ⓐunit
Ⓑuni
Ⓓ
22
23
9



第８図　第Ⅵ層下部遺物分布図


C－21
C－20
C－19
D－20
D－19
8
Ⓖunit
集石 10
18
集石 12
集石 11
集石 9
11
Ⓗunit
E－20
E－19
ナイフ形石器
スクレィパー
剥 片
砕 片
石 核
残 核
0
2.5m
F－20
F－19
21

第4章　遺構・遺物

第1節　旧石器時代

旧石器時代の遺物は，Ⅳ層下部に細石刃・調整剝片が，Ⅵ層下部にナイフ形石器・スクレイパー・剝片・石核・砕片があり，Ⅵ層下部の遺物の出土状況はまとまり（ユニット）をもって構成されている。ユニットはＡ～Ｈの８か所が認められた。また，集石が４基検出された。

（1）遺　　構

Ｅ－19・20区に集石９・11，Ｄ－20区に集石10，Ｄ・Ｅ－20区に集石12を検出した。検出状況は，Ⅵ層最下にみられ，拳大の安山岩の円礫が集中しているものである。集石の断面はほぼ一面となり，掘り込みなど土層の変化はみられない。集石⑨は，Ｅ－19・20区　Ⅵ層下部に検出され，径６ｍの楕円形状に160個の大小の円礫・角礫が散在し，北西部（３ｍ×２ｍ）と南東部（３ｍ×２ｍ）の大まかに二つに分けられる。南東部の集石の周辺には1.5m ×1.5m の円形状に特に多くの炭化物がみられる。集石⑩は，Ｄ－20区　Ⅵ層下部に検出され，3.5m ×３ｍのだ円形状に安山岩の大小の円礫・角礫を集めたものである。集石⑪は，Ｅ－19・20区　Ⅵ層下部に検出され73個の安山岩の円・角礫が径５ｍ×1.5ｍの範囲に散在し，特に中心部では1.5m ×１ｍに約50個の円礫・角礫が集まっている。炭化物等はみられない。集石⑫は，Ｄ・Ｅ－20区　Ⅵ層下部に検出され20数個の安山岩礫が1.5m ×１ｍの範囲にみられた。炭化物等はみられなかった。

（2）遺　　物

Ⅳ層下部よりⅤ層上部にかけて細石刃と細石刃剝出の際みられる調整剝片が出土した。その他の遺物はみられなかった。Ⅵ層下部からⅦ層上部にかけて約2000点の遺物が出土し，石材には黒曜石・頁岩・石英・玉髄・チャートがあり，器種もナイフ形石器・スクレイパー・剝片・石核などが出土している。

細石刃（１～５）第11図　図版５

細石刃は５点出土した。層位はⅣｂ層からⅤ層に包含されている。この層位は他の遺跡（溝辺台地～栗野）の桜島パミス下の層位にあたり細石器文化層にあたる。全て分割されており，細石刃核は出土しなかったが，周辺に包含層のある可能性がある。

調整剝片（６・７）第11図　図版５

６，７は調整剝片と思われるものである，気泡の少ない茶褐色の良質の黒曜石であり，細石刃核の調整剝離における剝片と思われ，層位はⅣ層下部の細石器文化層である。６，７ともまったく同タイプのものである。

ナイフ形石器（８・９）第11図　図版５

ナイフ形石器は２点出土した。８は頁岩を用い背部と基部に調整剝離痕がみられるが刃部の先端部には調整途中と思われる痕が残っている。９は黒曜石で両面からの調整剝離によって背部を形成し，刃部には使用痕が認められる。

スクレイパー（10～13）

スクレイパーは５点出土した。全てⅥ層の出土である。10は，石英質で自然面を残した剝片を利用し，側縁部に調整剝離を加えている。11も石英質で折断剝片を利用しⅥ層下部に出土した。縁辺部に調整剝離が加えられている。12，13は黒曜石製であり，13は円礫状の原石を第一加撃により剝離された剝片を利用し，側縁部に調整剝離を加えてスクレイパーとしたものである。

剝片（14～21）

剝片はⅥ層下部からⅦ層最上部にかけて全部で38点出土した。そのうち12点を図示した。14は頁岩製の調整された石核から剝離されたと思われる縦長剝片である。15はよく整形された玉髄製の縦長剝片であり，縁辺部には使用痕がみられる。16は，黒曜石製の厚みのある大形の剝片である。17は縁辺部に加工痕をもつ縦長剝片であり，自然面を残した黒曜石を石材として用いている。18は玉髄製の縦長剝片である。縁辺部に使用痕がみられる。19，20は縁辺部の一部に加工痕をもつ黒曜石製の剝片である。

石核（22，23）

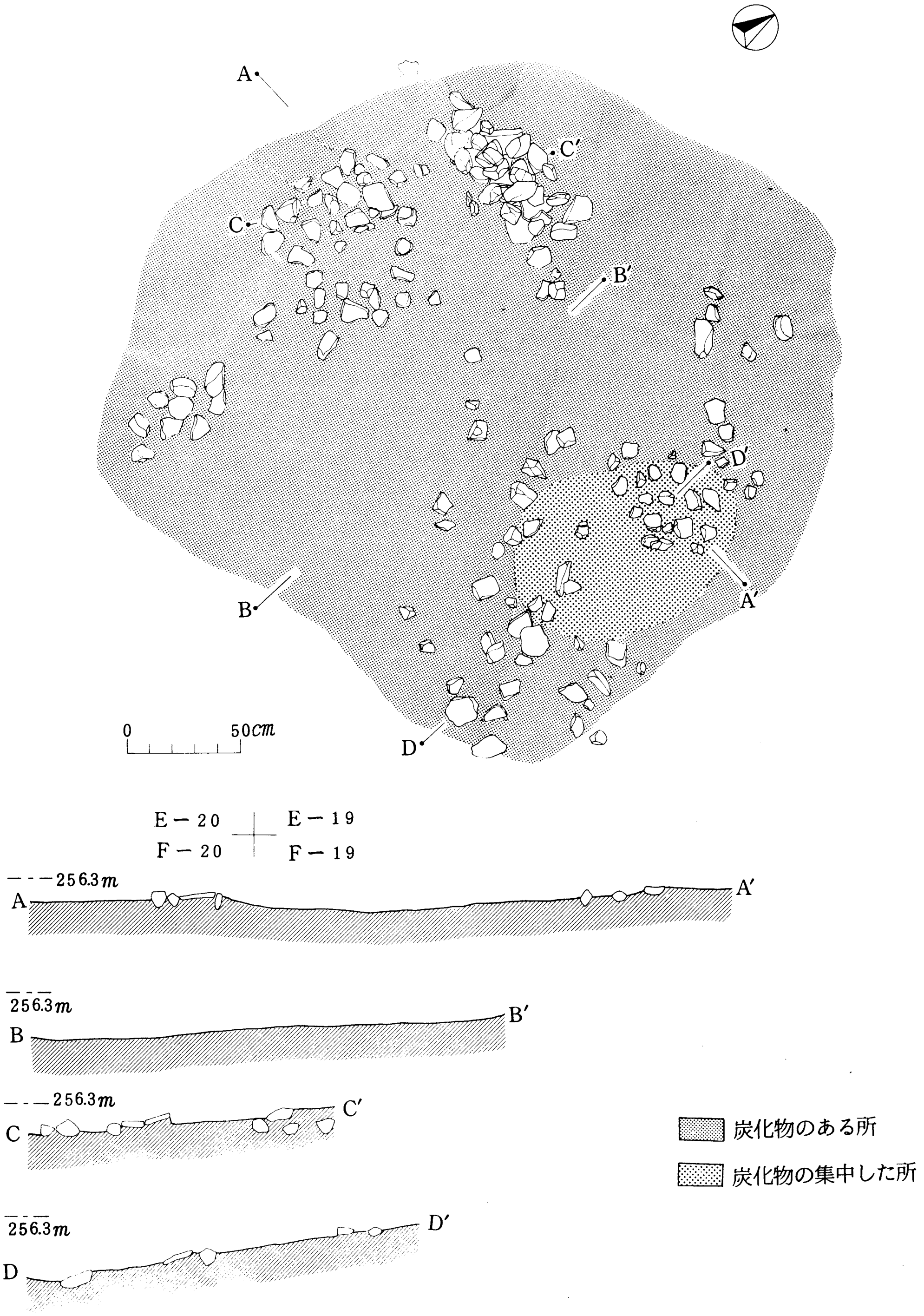
石核はⅥ層下部より４点出土している。石材は黒曜石と玉髄を使用している。22は，Ｃ－24区Ⅵ層下部に出土した自然面を残した略円錐形の石核である。剝離方向に方行性がなく，また，剝離された剝片も小片であったと思われる。23も，Ｃ－24区，Ⅵ層最下部より出土した略円錐形の石核である。これも剝離方向に一定した方向性がない。石材は玉髄を利用し，自然面を残している。

（３）小括

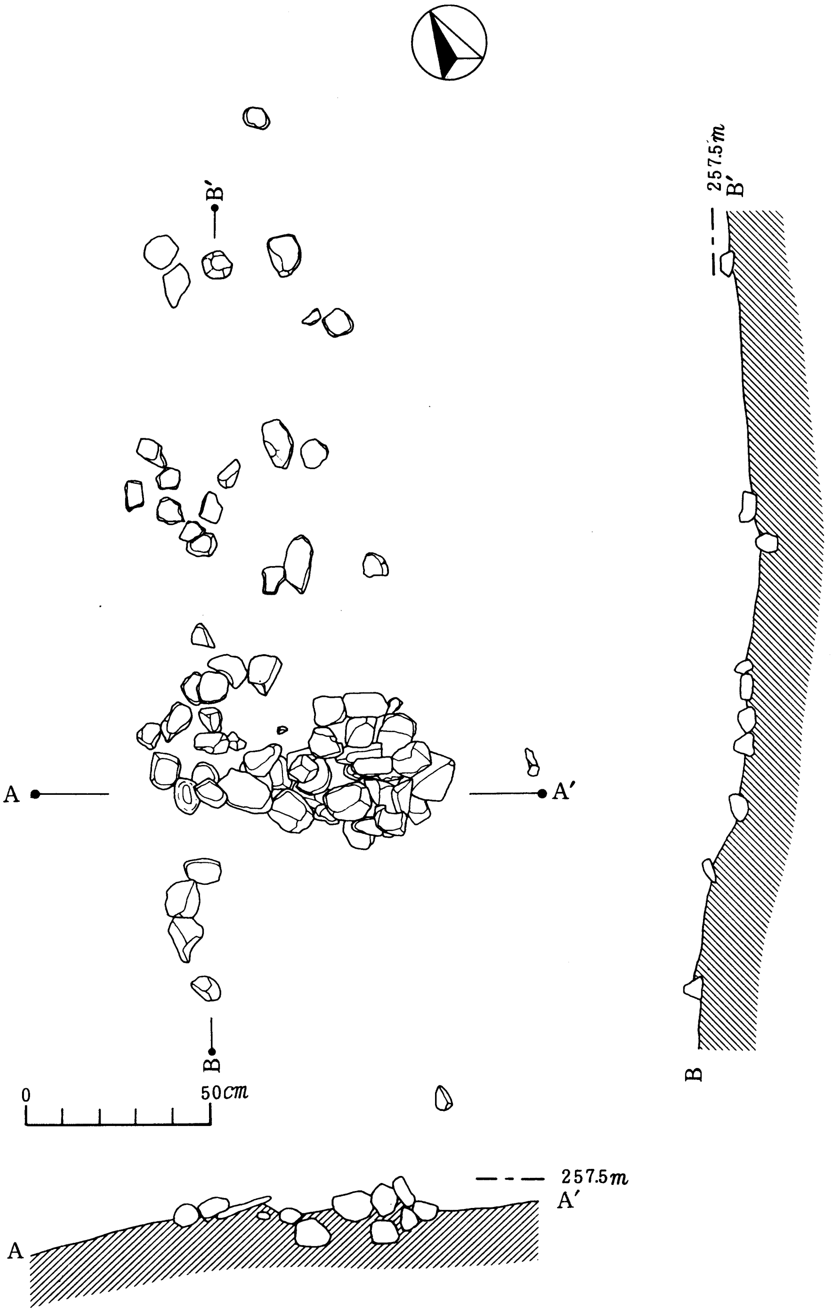
最近では，県内各地で旧石器時代の遺跡が発見され，また調査がすすめられてきているが，その多くが細石器文化に伴なうものであり，また遺物の集中等はみられるものの遺構の検出は少なかった。木場Ａ遺跡において，シラス直上より集石，炭化物集中等を検出したことは，大きな意義があるものと思われる。

遺物の集中部は８ケ所みられ，３～５ｍの楕円形状の範囲に30～２00点の遺物がみられた。第８図で示めされるように，遺物の出土状況は，かたよりがなく，全体的に砕片と剝片の組み合わせが多い。ただ，Ａユニットには石核が４点のうち３点出土し，他のユニットと若干の違いが感じられる。

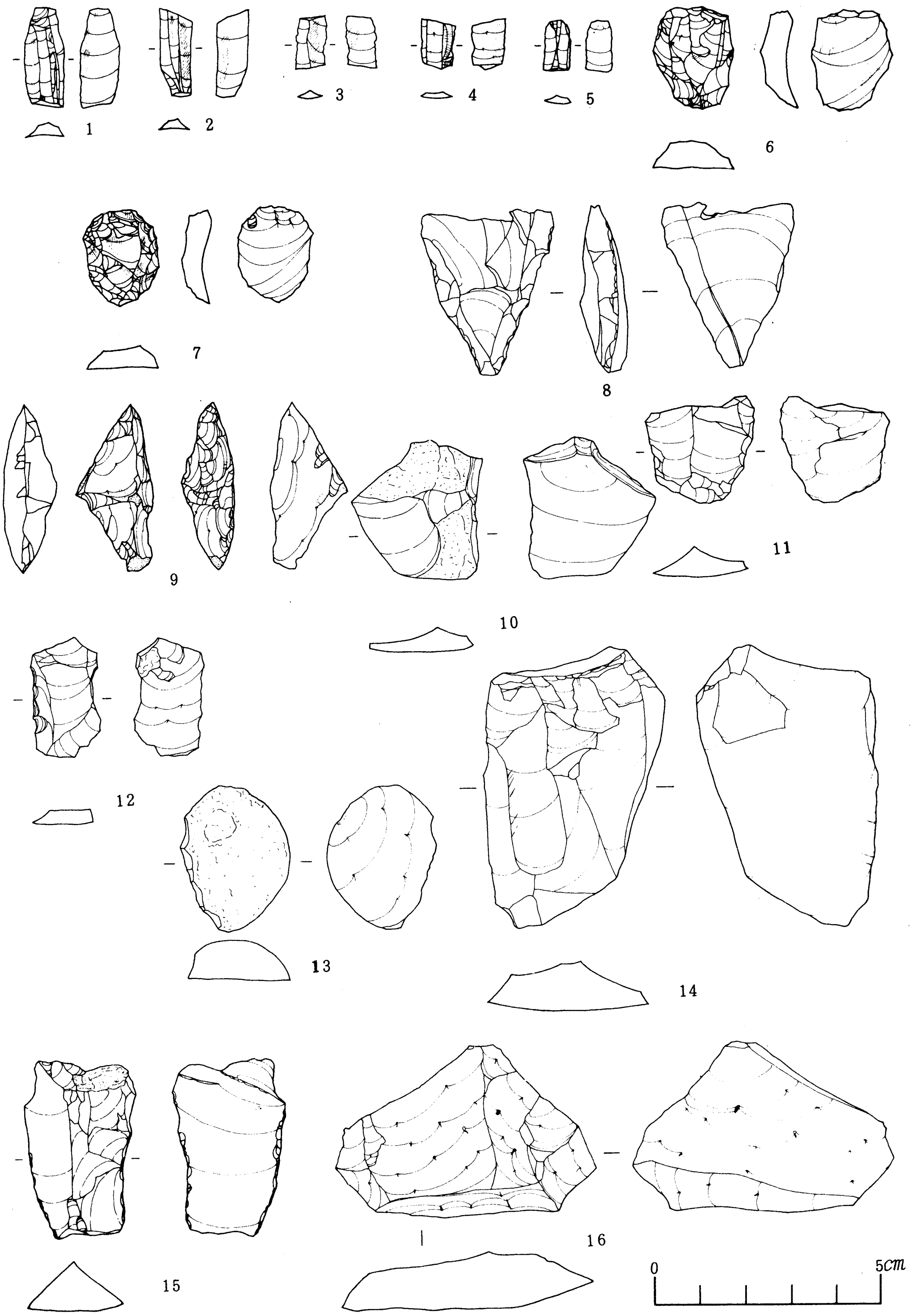
集石は４基検出された。いずれも拳大の安山岩の円礫・角礫が集まったもので，礫には火をうけた形跡はみとめられなかった。しかし，集石９は，炭化物も多く，礫も他の集石の礫と比較すると若干差があるように思われる。



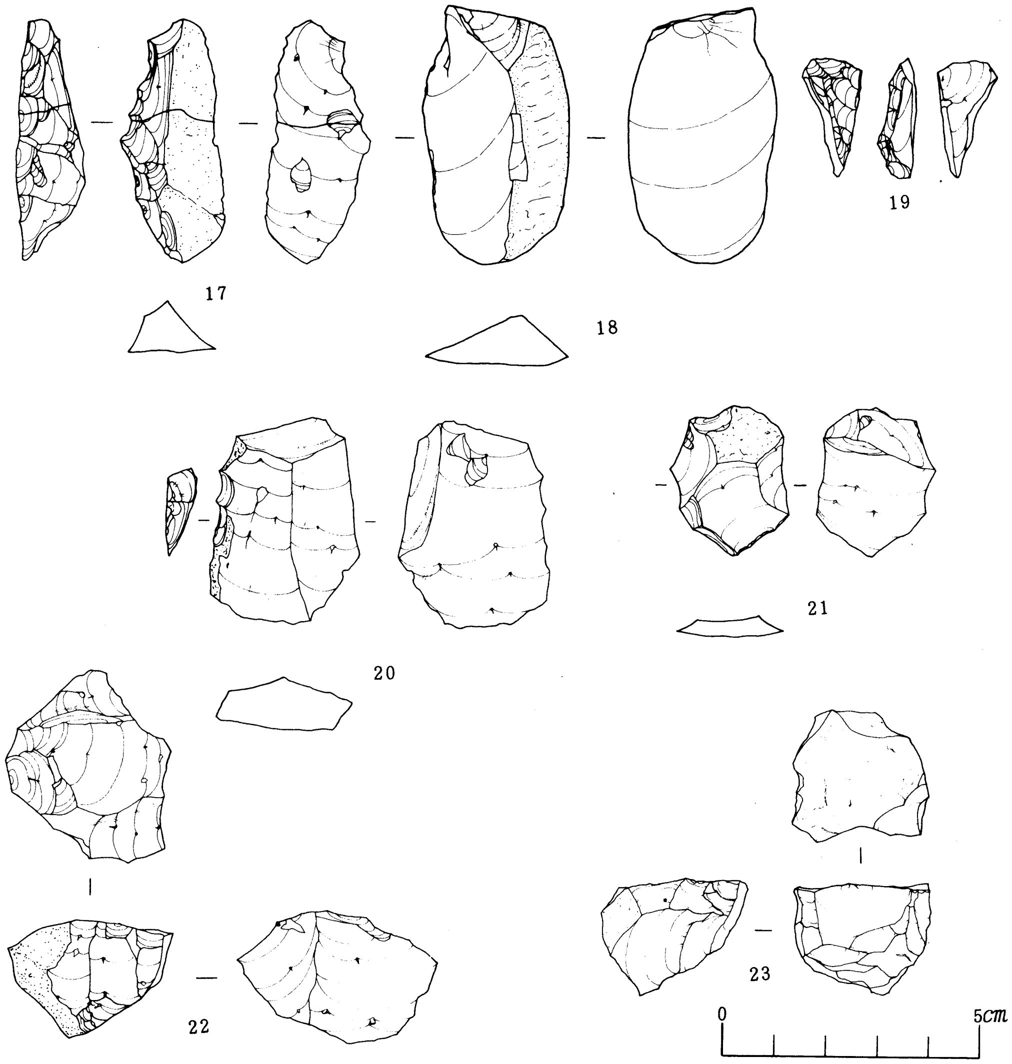
第9図　集　石　9



第10図　集　石　11



第11図　旧石器時代石器（1）

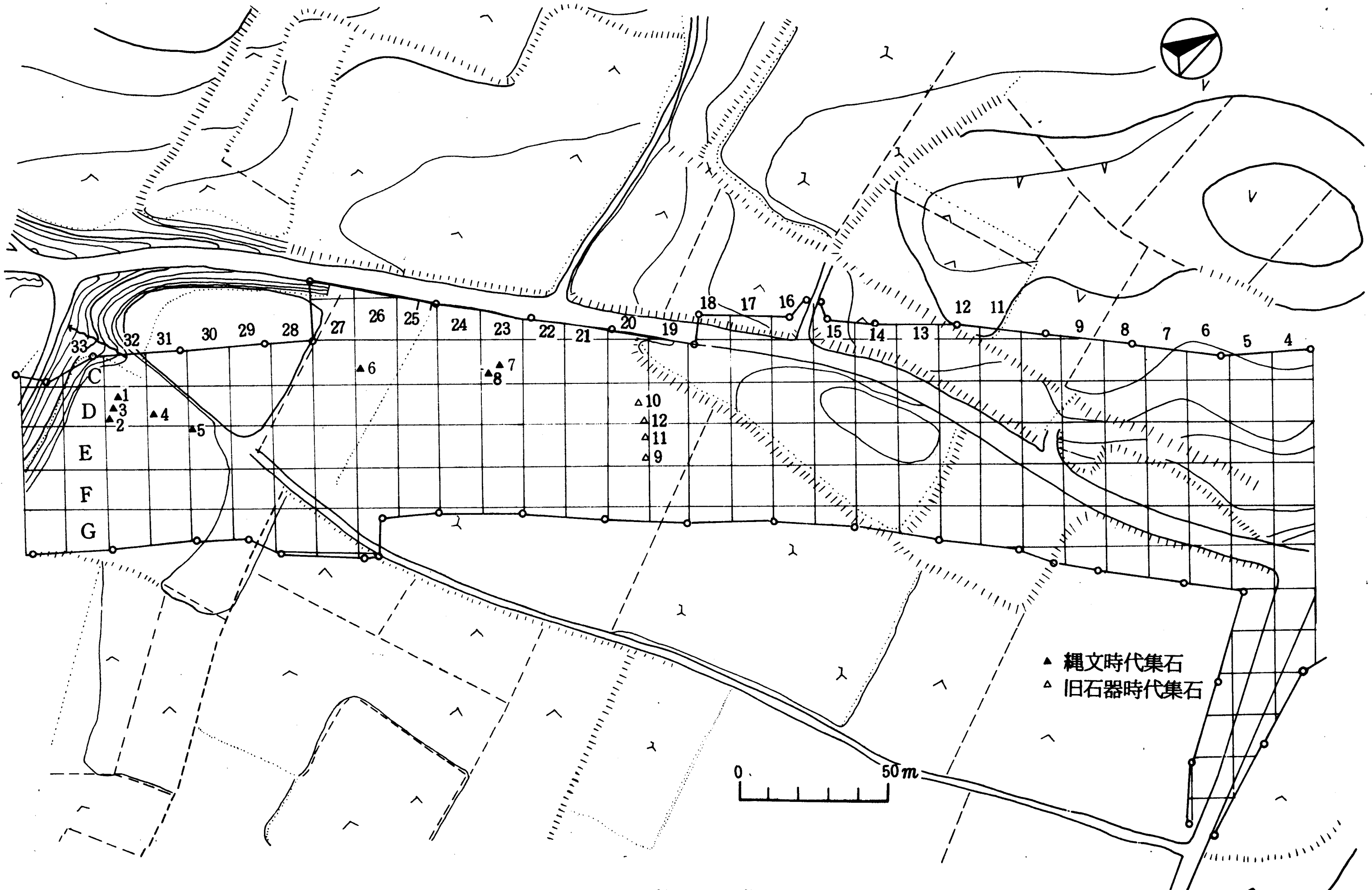


第12図　旧石器時代石器（2）

第1表 旧石器時代石器一覧表

番号	器種	区	層	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考	挿図番号
1	細石刃	C−28	4b直上	2.14	0.84	0.28	0.5	黒曜石		1
2	〃	C−28	4b直上	1.70	0.60	0.25	0.25	黒曜石		2
3	〃	D−31	4b	1.06	0.64	0.17	0.2	黒曜石		3
4	〃	C−27	5	1.01	0.69	0.14	0.2	黒曜石		4
5	〃	C−27	4下	1.10	0.50	0.12	0.1	黒曜石		5
6	剥片	C−27	4下	2.05	1.62	0.48	1.70	黒曜石	調整剥片	6
7	〃	C−27	4下	2.34	1.38	0.25	0.95	黒曜石	調整剥片	7
8	ナイフ形石器	D−20	6	3.47	2.85	0.75	7.20	頁岩		8
9	〃	E−23	7上	3.63	1.63	1.03	2.20	黒曜石		9
10	スクレイパー	D−21	6	3.10	2.60	0.76	6.70	石英		10
11	〃	C−23	6	3.42	2.00	1.12	8.50	黒曜石		
12	〃	E−20	6下	2.15	2.28	0.73	3.55	石英		11
13	〃	E−19	6最下	2.62	1.25	0.27	1.55	黒曜石		12
14	〃	D−22	6最下	3.14	2.29	0.79	6.20	黒曜石		13
15	剥片	E−23	6最下	3.78	2.28	1.12	8.75	玉髄		15
16	〃	D−21	6最下	5.64	3.84	1.16	30.50	頁岩		14
17	〃	D−22	6下	5.63	3.70	1.00	24.00	黒曜石		16
18	〃	C−21	6下	3.11	1.70	1.20	5.70	黒曜石		17
19	〃	D−20	6下	5.00	2.80	1.22	13.50	玉髄		18
20	〃	D−23	6最下	2.25	1.06	0.48	1.05	黒曜石		19
21	〃	D−23	7最上	3.90	2.74	1.00	11.00	黒曜石		20
22	〃	D−21	6最下	2.67	2.18	0.67	3.20	黒曜石		21
23	〃	E−19	6最下	1.45	1.45	0.46	0.70	チャート		
24	〃	D−22	6中下	4.72	2.20	0.63	6.20	黒曜石		
25	〃	F−19	6下	3.13	2.19	0.52	3.20	チャート		
26	〃	C−22	6下	3.52	3.20	1.36	17.70	石英		
27	〃	D−21	6	3.00	2.23	1.20	5.20	黒曜石		
28	〃	E−19	6下	2.74	1.68	0.42	2.40	チャート		
29	〃	E−20	6下	2.58	1.63	0.72	3.00	黒曜石		
30	〃	E−19	6最下	2.84	3.14	1.78	15.72	頁岩		
31	〃	D−21	6	4.09	2.01	0.64	5.50	黒曜石		
32	〃	D−21	6下	3.20	2.28	0.70	6.00	黒曜石		
33	〃	D−22	6下	3.44	1.98	1.00	5.55	黒曜石		
34	〃	D−22	6最下	4.42	4.34	1.24	32.02	黒曜石		
35	〃	E−19	6下	2.73	2.15	0.75	4.70	石英		

番号	器　種	区	層	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石　質	備　考	挿図番号
36	剝　片	E－20	6　下	3.20	1.38	0.83	3.40	黒曜石		
37	〃	D－20	6　下	4.56	3.27	1.07	14.00	黒曜石		
38	〃	C－21	6　中	1.38	0.57	0.14	0.20	黒曜石		
39	〃	D－21	7最上	5.70	5.76	0.61	23.70	頁　岩		
40	〃	D－21	7最上	2.00	1.96	0.67	20.00	黒曜石		
41	〃	D－21	7最上	5.24	4.00	1.26	29.50	石　英		
42	〃	D－21	6最下	2.20	1.52	1.00	2.55	黒曜石		
43	〃	D－19	6　下	3.00	2.83	0.85	8.05	黒曜石		
44	〃	E－20	6　下	5.23	4.05	1.90	40.05	玉　髄		
45	〃	D－22	6	5.24	3.74	1.00	19.05	凝灰岩		
46	〃	D－22	7最上	5.62	3.15	1.20	17.55	黒曜石		
47	〃	D－23	7最上	1.43	1.24	0.22	0.50	黒曜石		
48	〃	D－23	7最上	3.38	3.30	0.63	7.20	黒曜石		
49	〃	D－23	7最上	3.59	3.10	0.90	8.55	黒曜石		
50	〃	D－22	6	3.00	2.48	0.65	5.00	黒曜石		
51	〃	E－19	6	3.70	1.34	0.70	2.70	頁　岩		
52	〃	C－21	6最下	4.00	1.50	0.55	2.40	黒曜石		
53	石　核	C－24	6最下	3.68	2.68	2.10	20.90	黒曜石		2 2
54	〃	C－24	6最下	5.67	4.00	1.62	24.75	玉　髄		2 3
55	〃	D－19	6　下	2.57	2.35	1.30	9.40	黒曜石		
56	〃	D－21	6最下	5.00	3.63	1.73	35.70	黒曜石		

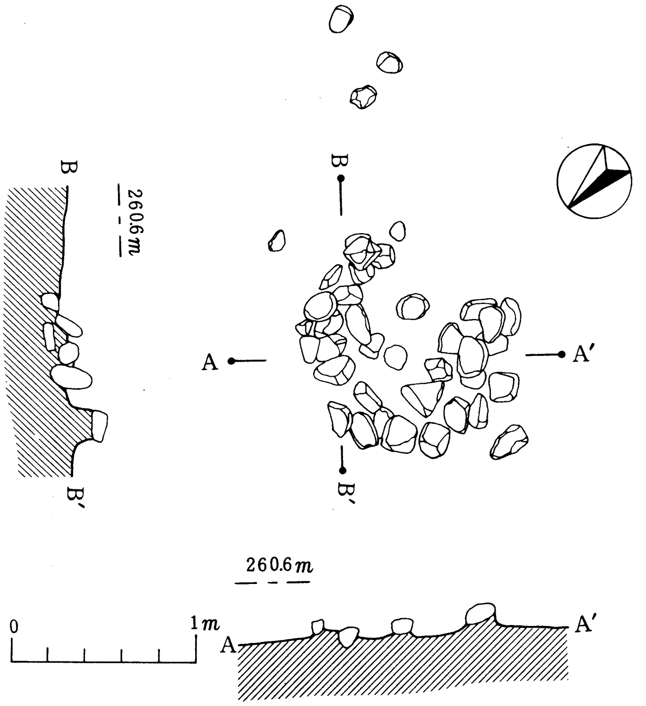

▲ 縄文時代集石
△ 旧石器時代集石
0
50m
4
5
6
7
8
9
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
C
D
E
F
G
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12

第13図　集石分布図

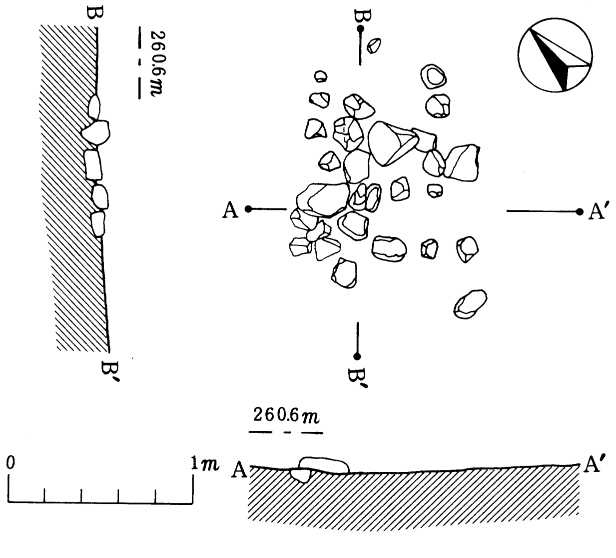
第２節　縄文時代

（１）遺　構

今回の発掘調査の結果，縄文時代の遺構としては，集石が８基検出された。



第14図　集　石　１



第15図　集　石　２

集　石（第14～20図）

縄文時代の集石遺構は，土器分布の状況と同じように23区，２6区，３１・３２区に分布し８基を確認した。検出状況は，Ⅳ層にみられ，一か所に集中しているものから，散乱しているものと形態はまちまちであるが，集石として記録した。大半が拳大の安山岩の角礫や円礫の自然石からなる。集石の断面はほぼ一面となり，落ち込みなど土層の変化がみられない。集石番号は検出順につけた。

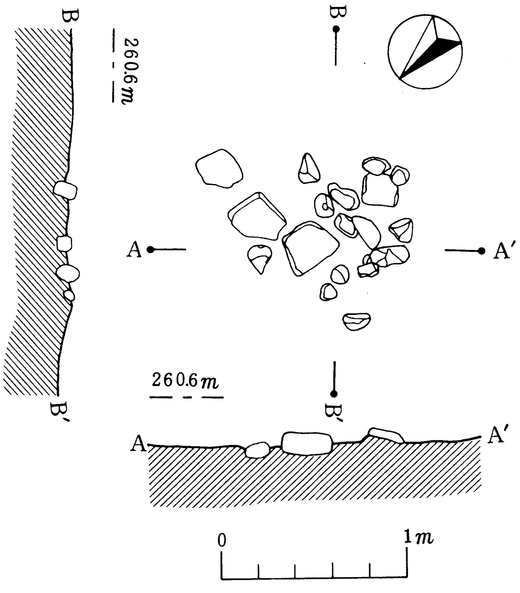
集石①は，D－32区　Ⅳ層に検出され，径60cmの円形状に38個の拳大の円礫・角礫を集めている。南側に礫がみられず馬蹄形を呈している。

集石②

D－32区Ⅳ層に検出され，径約50cmの範囲に32個の大小の円礫・角礫を集めたものである。

集石③

D－32区Ⅳ層に検出され，径約50cmの範囲に19個の大小の円礫・角礫を集めたものである。



第16図　集　石　3

集石④

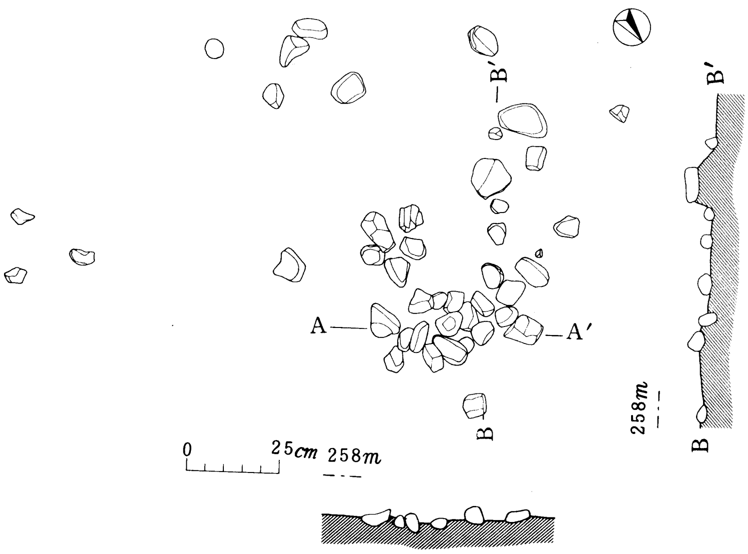
D－31区　Ⅳ層に検出され，33個の拳大の円礫・角礫を集めたものである。

集石⑤

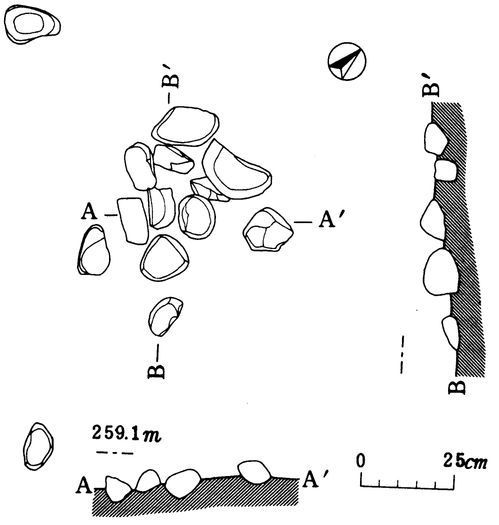
E－30区　Ⅳ層に検出され，1 m ×50cmの範囲に45個が集中しその周辺に20個が散らばっている。

集石⑥

C－26区　Ⅳ層に検出され，12個のやや大きな礫が集まっている。他の集石と性格を異にするが灰や焼石などの変化はみられなかった。



第17図　集　石　5



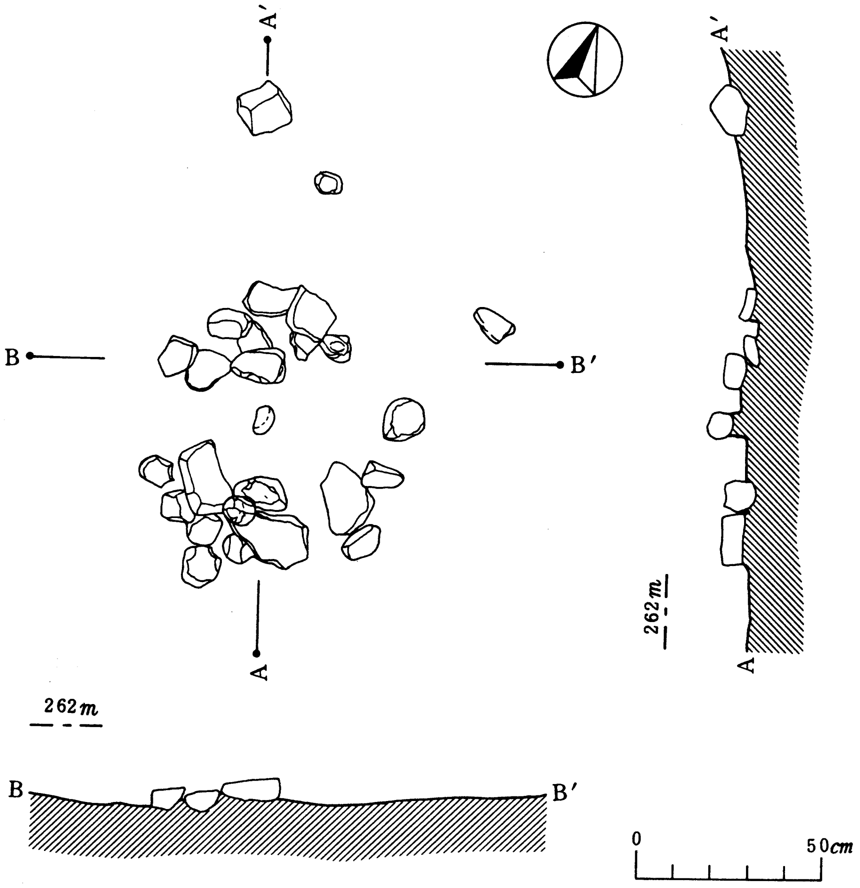
第18回　集　石　6

集石⑦

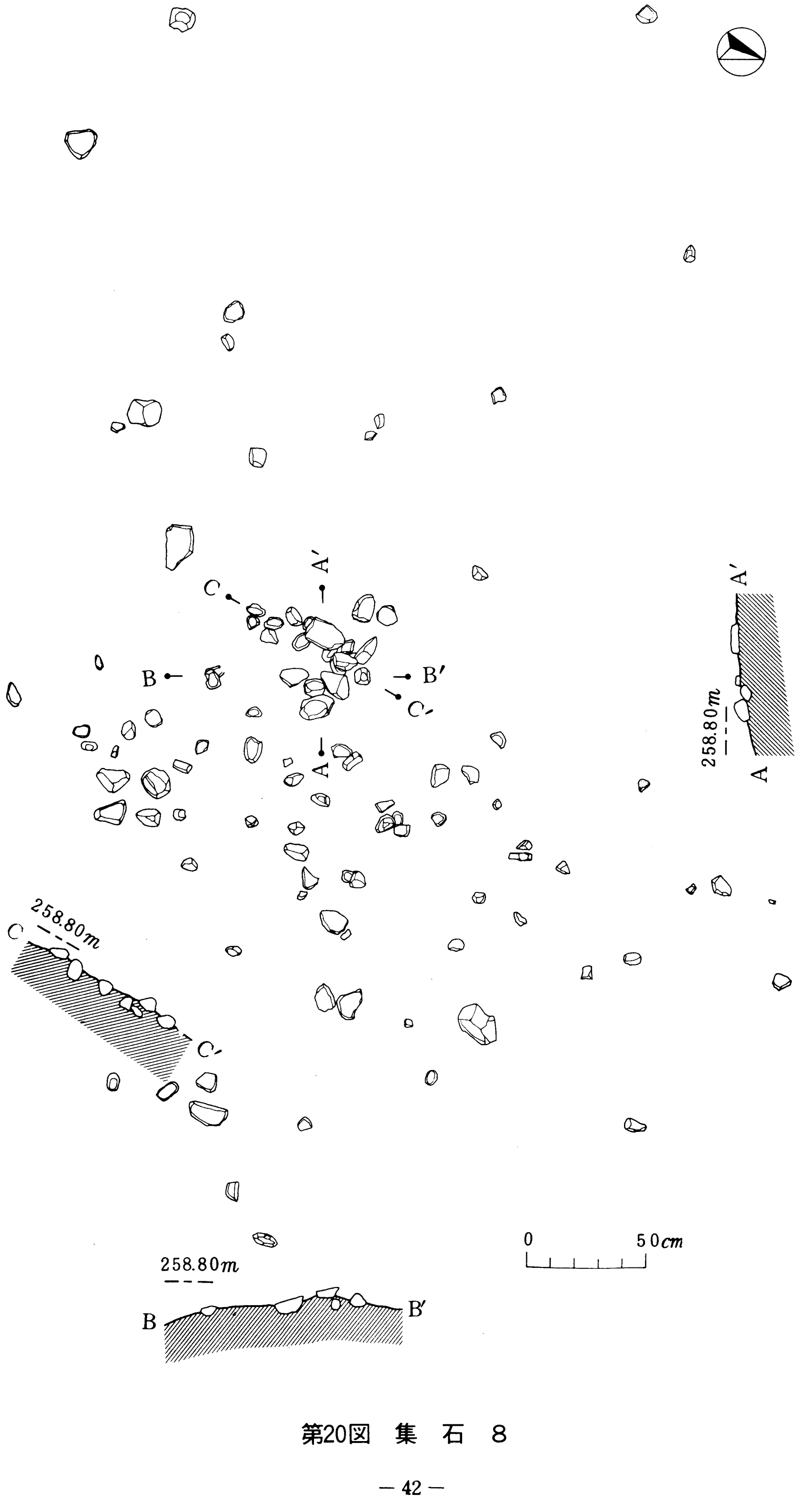
C－23区　Ⅳ層に検出され，約60cmの円形に21個の大小の円礫・角礫を中心をあけめぐらしてある。これにも炭・焼石など確認できなかった。

集石⑧

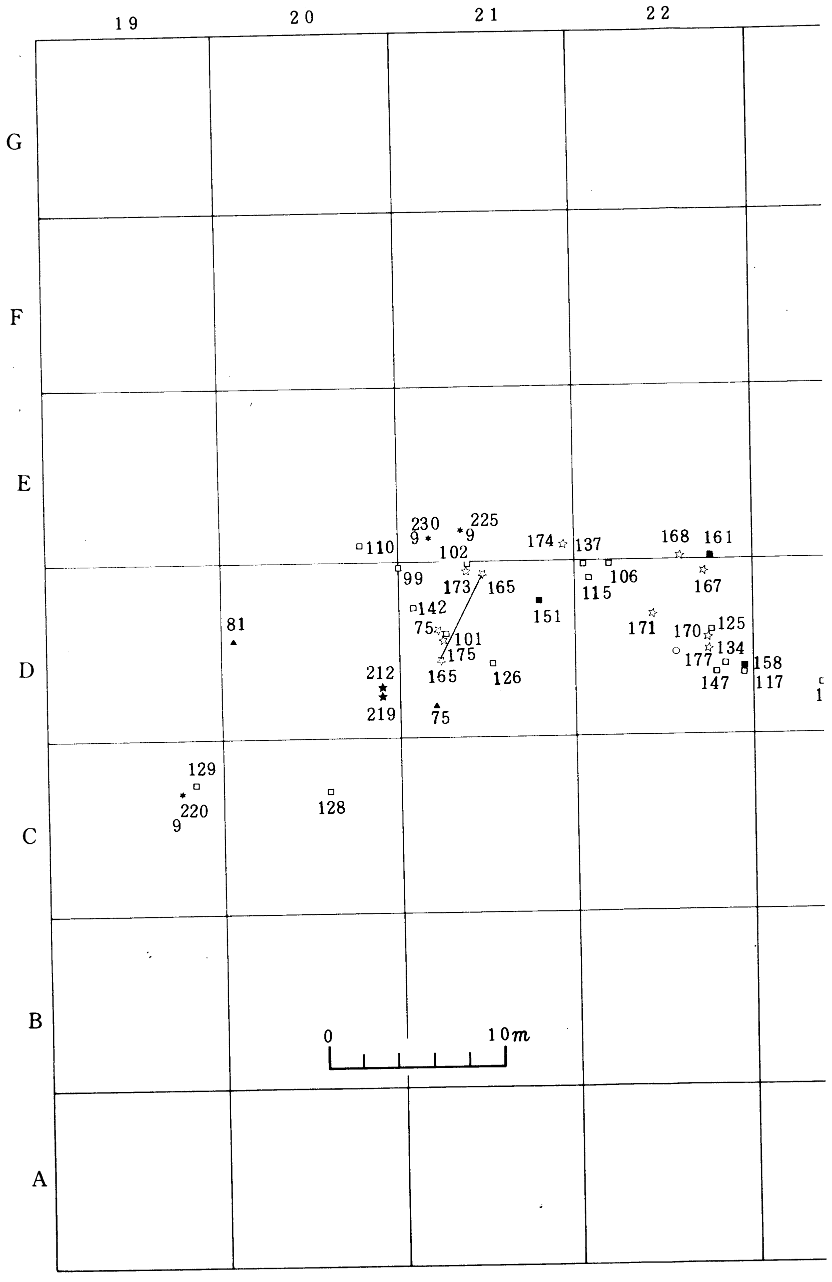
C－23区　Ⅳ層に検出され，3ｍ四方の広い範囲に110個の大小の円礫・角礫が点在している。他の集石と比較して一部に集中がみられるが広範囲にちらばっている状態である。



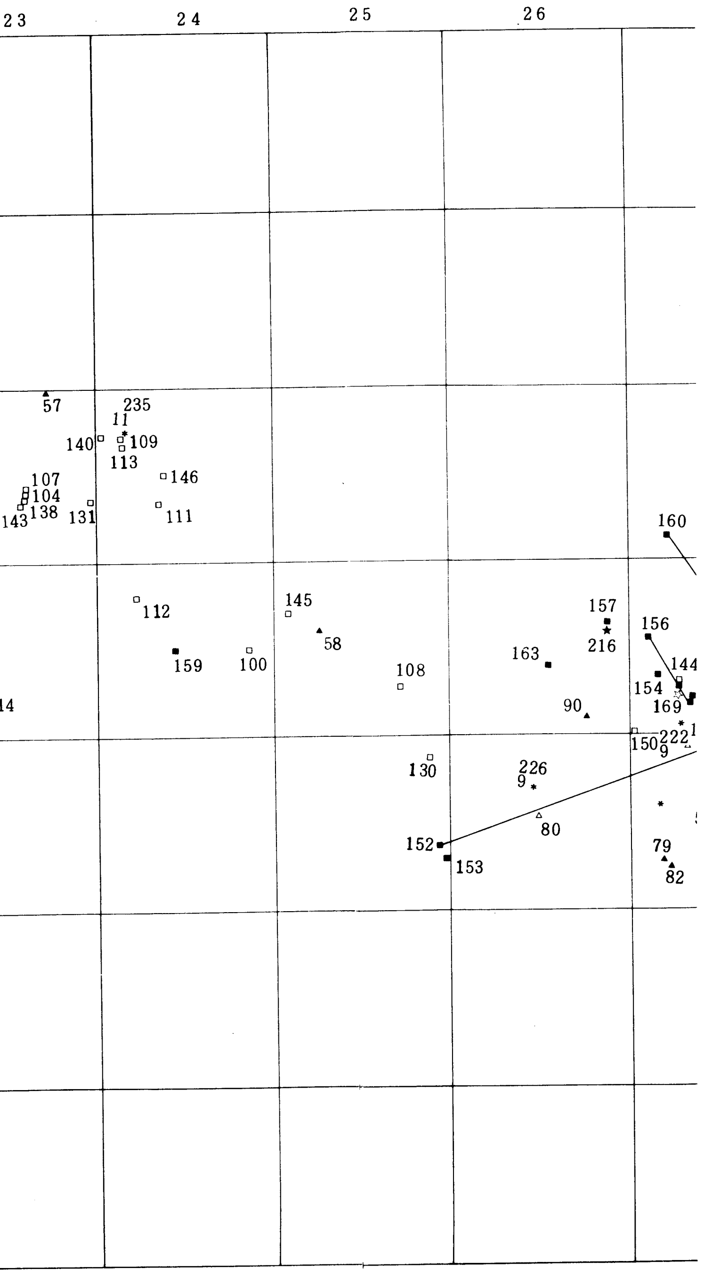
第19図　集　石　7



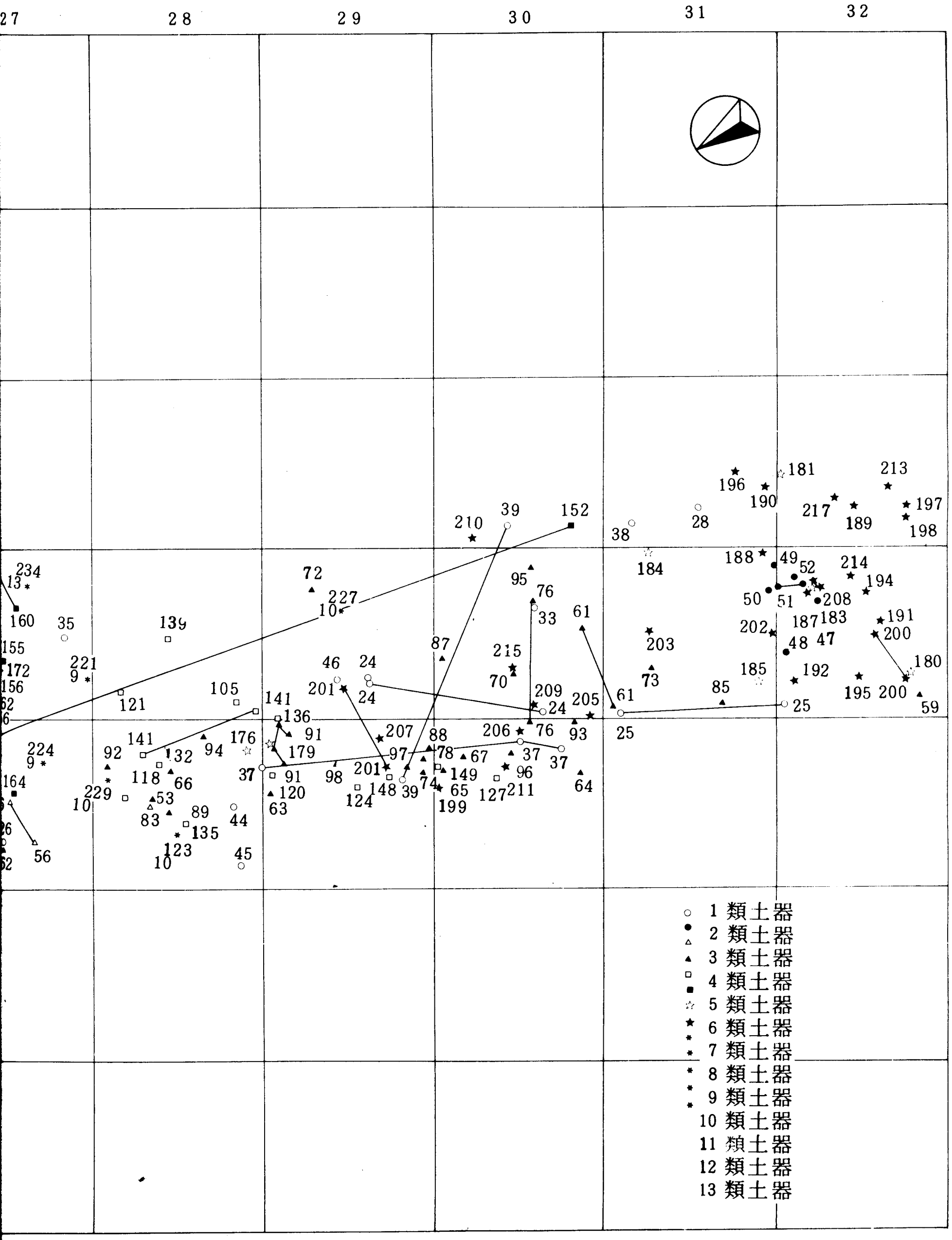
第20図　集　石　8



19
20
21
22
G
F
E
D
C
B
A
230
225
110
102
174
137
168
161
99
173
165
106
115
167
142
151
81
171
170
125
75
101
175
134
177
158
212
165
126
147
117
219
75
129
220
128
0
10m



第21図　縄文時代土器分布図


1 類土器
2 類土器
3 類土器
4 類土器
5 類土器
6 類土器
7 類土器
8 類土器
9 類土器
10 類土器
11 類土器
12 類土器
13 類土器

（2）遺　物

A．縄文式土器

縄文式土器は，全面にわたり散乱した状態で出土した。小破片が多く，完形に復元できたものはなかった。出土量はⅣ層がほとんどである。類別して説明したい。

1類土器（第22図　**24～46**）図版　11

厚い器壁を有する円筒形の土器で，内面調整が平滑になされたものが多い。文様によってさらに細分できる。aは**24～35**である。**24・25**は口縁部外帯に4～5条の刺突連点文を巡らし，口唇部に刻線を施す。**26～35**は，口唇部に平担面を有し，**32**を除き刻目はみられない。文様は口縁端部から間隔をおいて下位に1・2条刺突連点文を施し，間を縦列の連点文で埋めたもの（**31・34**）斜めの連点文で埋めたもの,（**33・35**）横位の連点文で埋めたもの（**26**），その他の連点文を施したもの（**27～30**）がある。「施文」以下は綾形状の貝殻条痕で調整したもの（**27・30・34**）がみられた。bは**36～40**である。口縁部外帯に貝殻腹縁部の先端を横位に刺突するもので4条（**36・37・39**），8条（**38・40**），巡らしている。**37・39**は口唇部に刻目を有している。胴部は**37**は縦に，**38**は綾杉状に貝殻腹縁による調整を行っている。cは貝殻腹縁による刺突文が横位の綾杉状に施されるものである。（**42**）口は口縁部外帯に横位の沈線を10数条巡らしたものである。施文具は貝殻かどうかは，器壁の磨滅が著しく不明である。口唇部の刻目はない。

43～46は胴部破片である。いずれも貝殻条痕による調整を施し，**44～46**は綾杉状を呈する。

分布はC・D－29区を中心に全体にまばらに散布している。層はⅣ層に大部分が出土している。

2類土器（第22図　**47～52**）図版　12

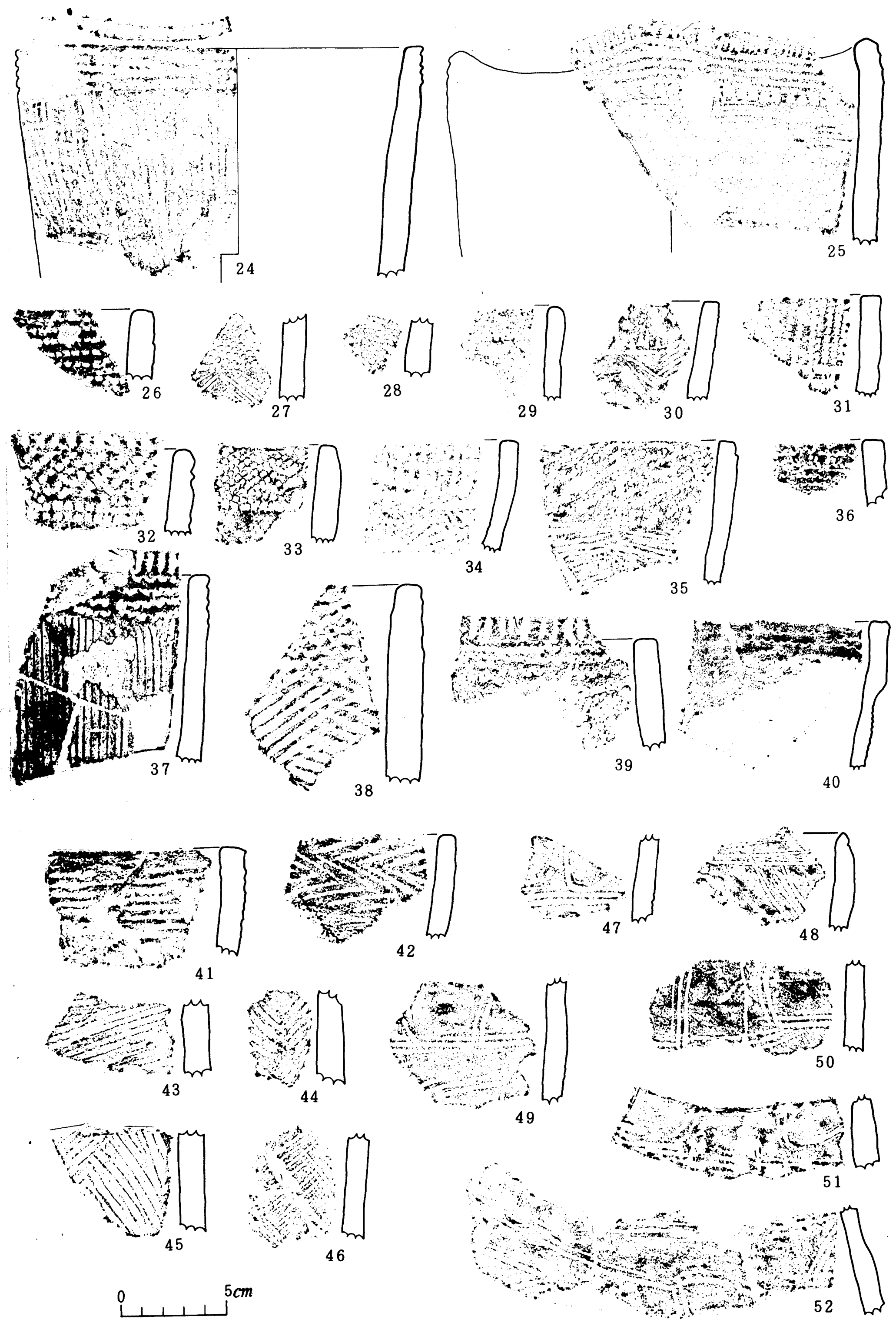
D－32区を中心に10数点Ⅳ層に出土している。同一個体と思われる破片が多い。箆状の施文貝で2条～3条の平行沈線を横位または縦位に不規則に施す。器面はナデによる調整がなされているが，粗製である。外面は明褐色だが，内面は灰褐色である。

D・E－32区からほとんど出土した。Ⅳ層出土である。

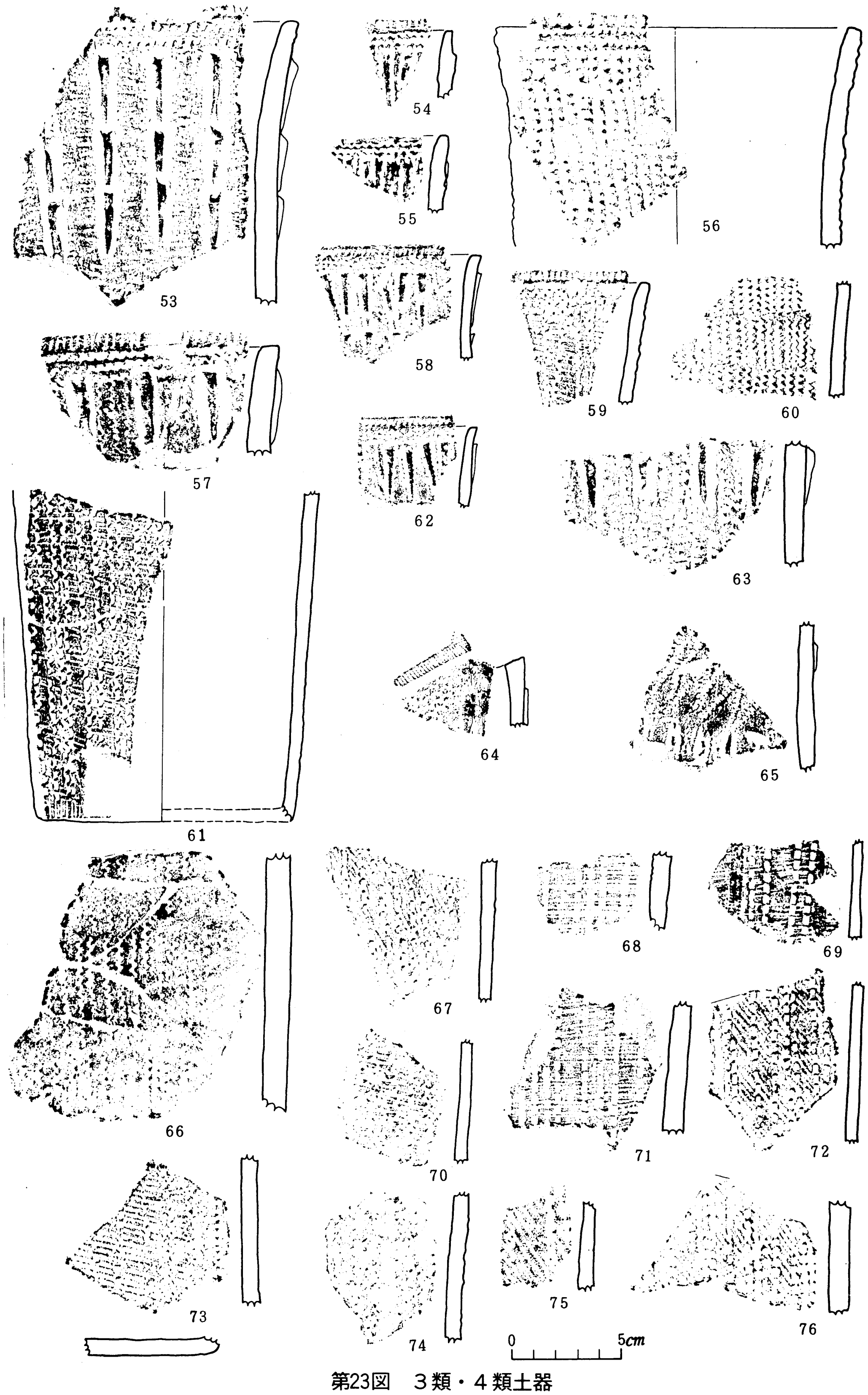
3類土器（第23図　**56・60**　第24図　**80・83**）図版　13

56はやや外反する円筒形を有し，口唇部に刻目をもち，口縁部には横位に貝殻刺突線文を3条巡らし，胴部は貝殻腹縁による押圧文を全面に施している。**60**は胴部破片である。器壁は薄く内面調整は丁寧である。**80・83**は胴部に斜めの貝殻腹縁による押圧文がみられる。平底で側面は箆先による縦位の刻線を密接に施している。

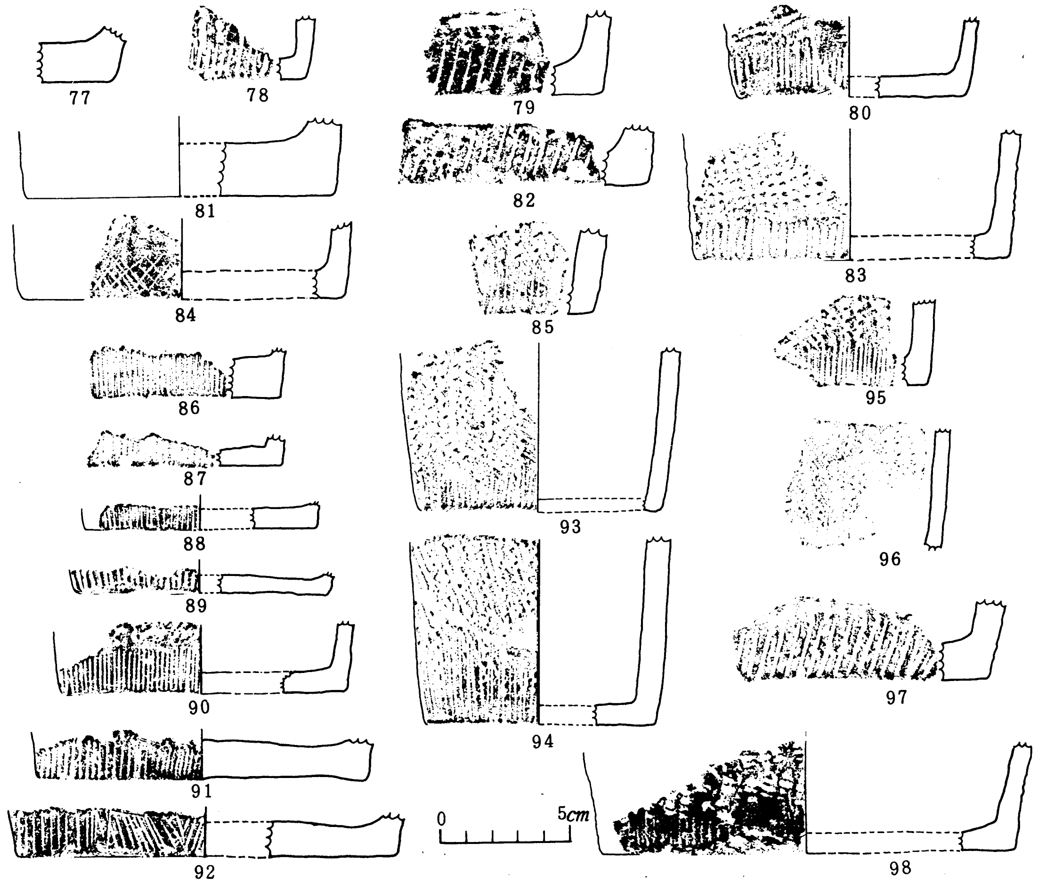
4類土器（第2図　**53・57～59・61～76**　第3図　**77～79・81・82・84～98**）図版　14


24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
47
48
43
44
49
50
51
45
46
52
0
5cm

第22図　１類・２類土器


53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
0
5cm

第23図　３類・４類土器



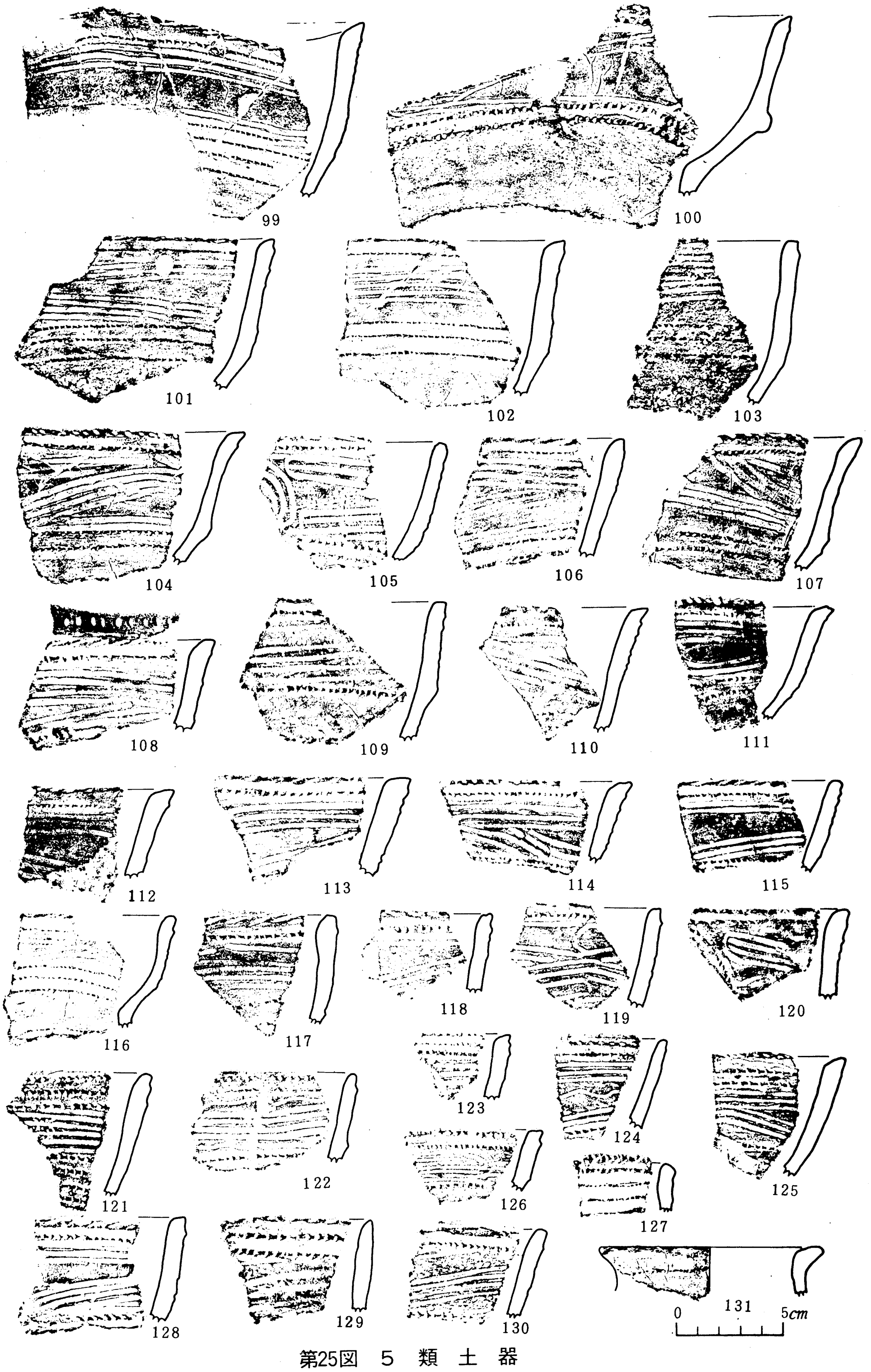
第24図　4　類　土　器

口縁部のやや外反する円筒形で，口唇部に刻目，口縁部に貝殻刺突線文を横位に3条巡らしその下に楔形の凸帯を3列（**53**）あるいは鋸歯状に（**58・62**）張り付けたものである。**59**は楔形凸帯を有しない。胴部は横，または斜めに貝殻条痕を施し，さらに縦に貝殻刺突線を重ねるものが多い。**66**は縦の貝殻刺突線文を密に施す。器壁は比較的薄い。**64**は角筒の口縁部で楔形の凸帯をもち，**73**は角筒の胴部破片である。

54・55は楔形凸帯をもつ口縁部であるが胴部は不明であり，3類，4類いずれとも判別できなかった。

底面は良く調整された平底で側面に縦位の刻線を密に施している。（**87～92・94**）刻線が斜めでやや荒いもの（**79・82・97**）斜格子目状を呈するもの（**84**）などがある。**77・81**は胎土も粗製で器壁も厚い。底部側面は横位の条痕がみられ，本類の底部とやや異なっている。**86**は角筒の底部で底面は平滑な調整がなされている。

これらの土器はC－28区，D－30区を中心に多く出土し，層はⅣ層に出土している。


99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
0
5cm

第25図　5　類　土　器

第26図　5　類　土　器

5類土器（第25・26図）図版　15

破片のみで器形は不明である。円筒形と思われる胴部に，ラッパ状に開く口縁部が付く。口縁部は途中でやわらかく「く」字形に屈折する。口縁端部は外側へ小さく開き，先端部外端に刻目を附す。波状口縁が主で，平縁はみられない。文様は口縁下に１条～２条の刻目のある細隆線凸帯を巡らし,「く」字状のふくらみの部分に２条～３条を巡らす。この間に浅い沈線文を横位に，また斜めに施している。**105・119・132・133**のごとく波状曲線を描くものもある。刻目のある細隆線凸帯は頸部のくびれ部にも１条施す。**123・124・130**は沈線文間に刺突連点文を施す。**131**は口縁部が小さく外反する小形土器であるが，口縁端部に刻目を頸部に刻目のある細隆線凸帯を付す。色調は灰褐色を呈したものが多く，器面の調整は内外とも丁寧な撫で仕上げを行っている。器壁は比較的薄い。

分布はＣ－28・29区，Ｄ－21・22区を中心にし，層はⅣ層でも比較的上位に多い。

6類土器（第６図）図版　17

５類と器形は同一であるが多少の差異が認められたので，別に分けた。文様は細隆線刻目凸帯文と沈線文，Ｄ唇部の刻目の組み合わせに刺突連点文が新しく加わっている。５類土器の中

にも連点文が少量みられたが，ここでは連点文を文様構成の要素として組み入れている。**151**は沈線間に2条の並列する連点を，**154**は文様帯の上部に一列，中・下位にそれぞれ2条の並列する連点を施す。**155・157**は沈線と沈線の間の空間部に連点を密に施している。**151・157・160**は細隆線刻目凸帯の一部を結び目を表現するかのように瘤状に小さく突起させている。また口縁端部の内側にも刻目を施すものもある。（**151・156・160・162**）刻目は口縁端部の外先端が斜めに入るのに対し，内面の刻目はまっすぐで，鋭く刻まれている。**157・159・160**の山形口縁部の裏面には山頂部から弧状に数条の沈線を施している。5類の文様帯には，空間部が多くみられたが，6類は文様帯全面に密に沈線，連点を施している。**152・153・154**は口縁部の細隆線刻目凸帯を除い

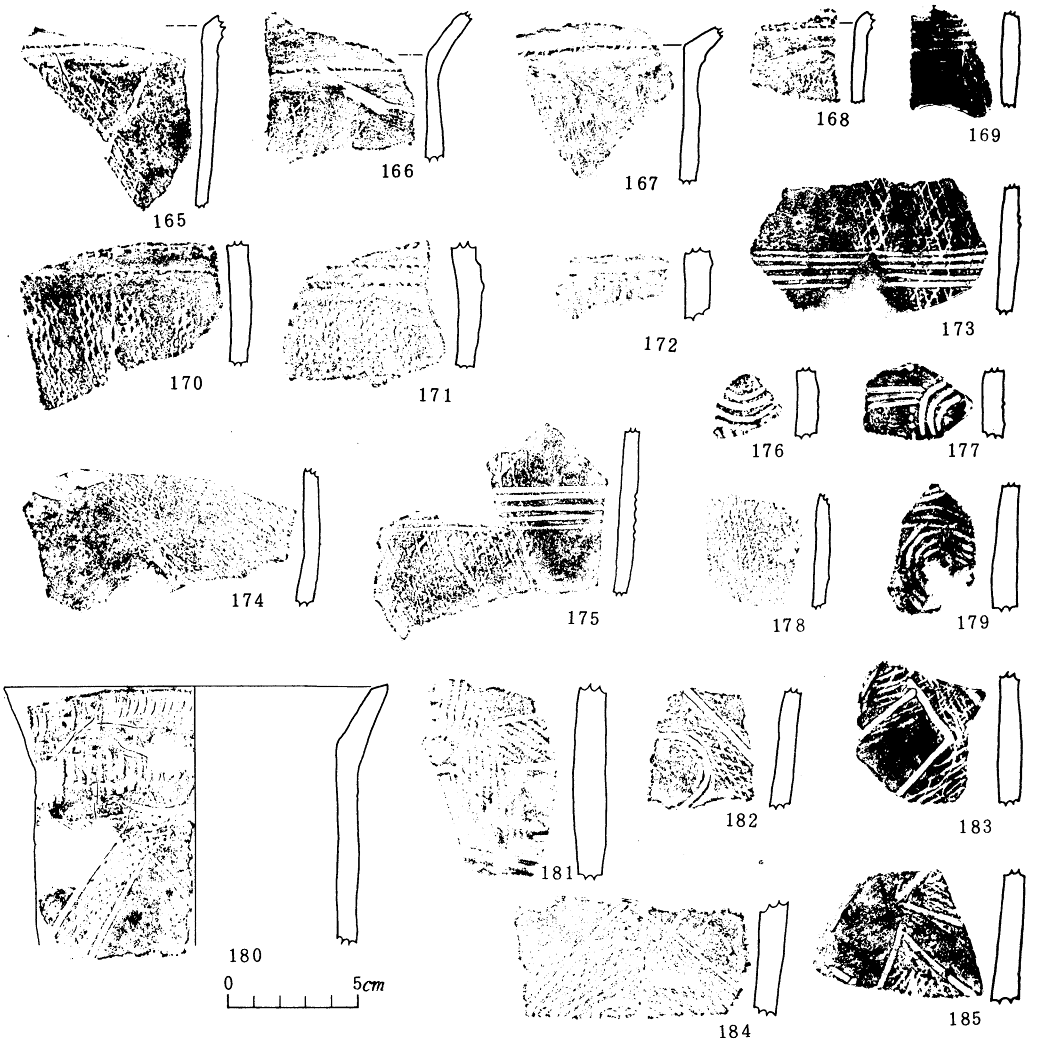
第27図　6　類　土　器

て，下方の凸帯は明確でない。５類に比べて，褐色を呈したものが多く，胎土も粗で作りも荒い。施文も端正さがみられない。

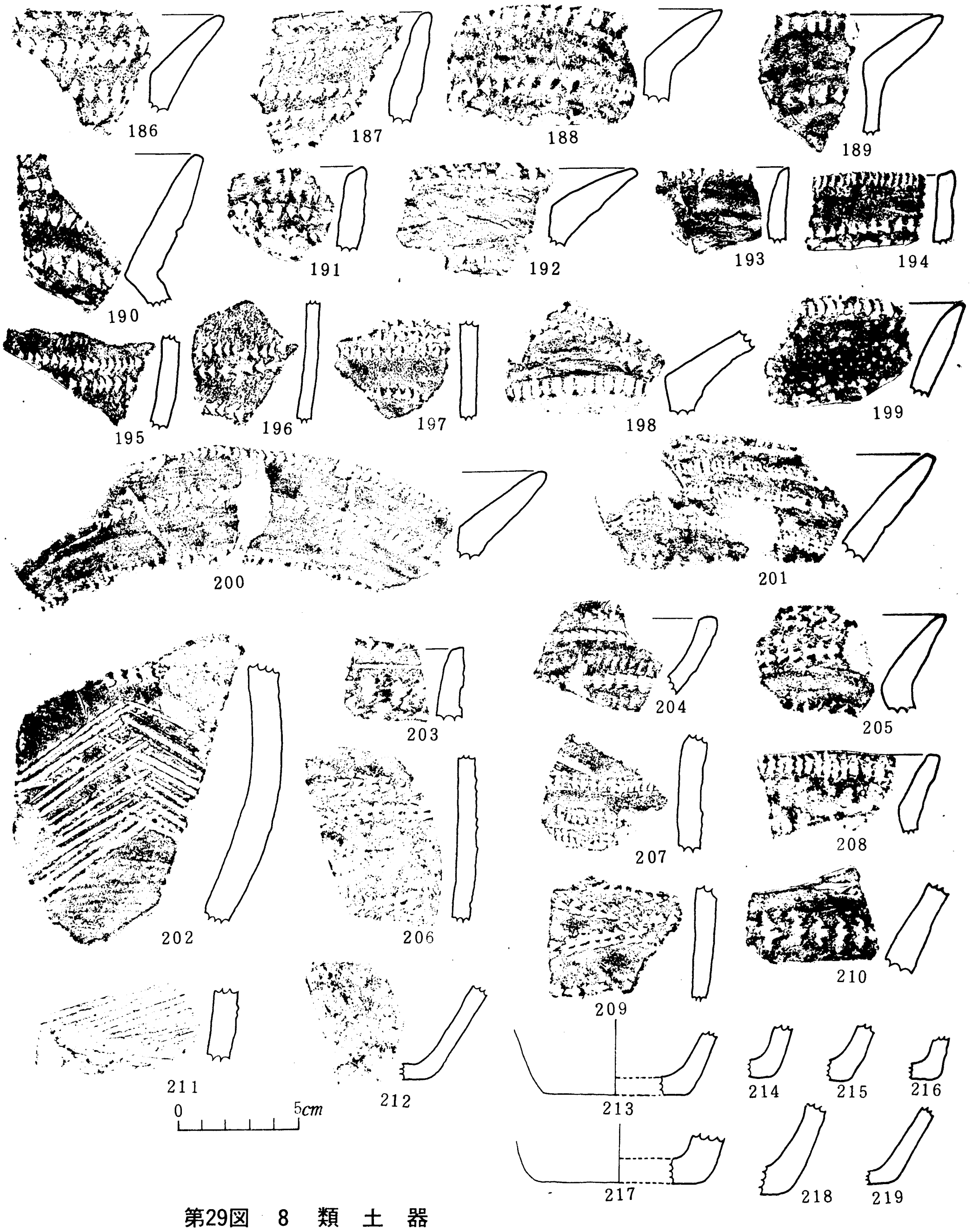
Ｄ－27区を中心に分布がみられ，層はⅣ層に多く出土している。

７類土器（第28図）図版　18・19

撚糸文を有する土器を集めた。円筒形の胴部の破片が多い。口縁部へかけてくびれ，内面に稜線を持っている。くびれ部外面には１条の細隆線刻目凸帯をめぐらす。（**165～168**），胴部には３条の細隆線刻目凸帯をもつもの（**170・171**），数条の沈線をめぐらすもの，（**171・173・175**）が



第28図　７　類　土　器



第29図　8　類　土　器

ある。撚糸文は間隔をおいて密に施されたもの（170），斜格子目状のものなどがある。（173～175）これらを7ａ類とする。撚糸文を篦先の直沈線文で区切り，他の部分を磨り消してしまうもの（180～185）もある。7ｂ類とする。180は小さく直線的に外反した口縁部に貝殻腹縁による刺突

文を２列に並べて施している。ａは薄手で灰褐色をした土器が多く，器壁も内外面ともに丁寧な調整がなされている。ｂは灰褐色を施し厚手で器面調整も荒い。

176・177・179は重弧状の沈線文を有するもので，**177**は刺突連点文も施している。

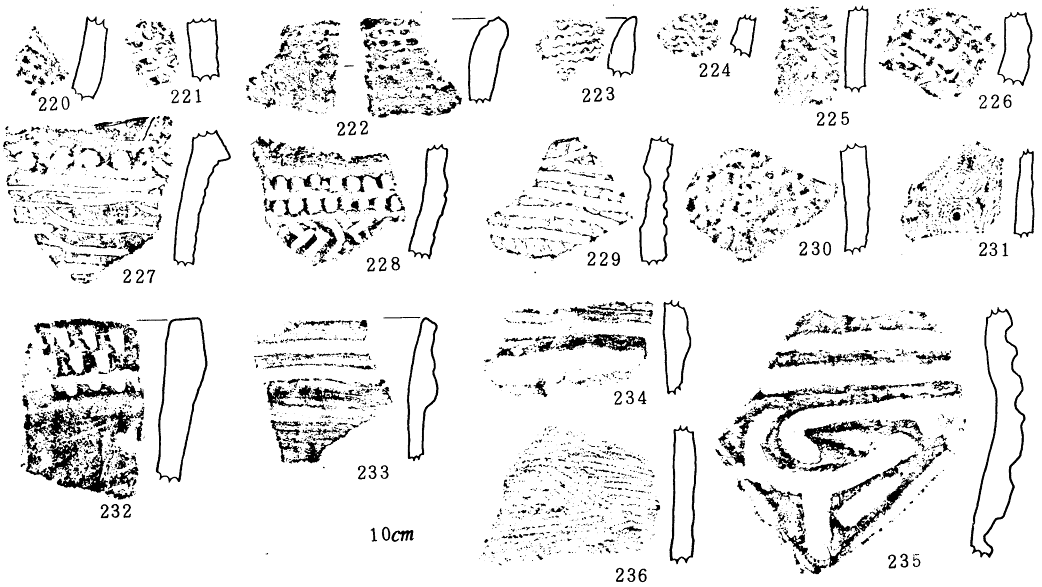
分布はＤ－21・22区にみられ，層はⅣ層上位に多く出土した。

８類土器（第29図）図版　19・20

口縁部がラッパ状に小さく開き，口唇部はやや尖り気味となる。頸部は内面に稜線を有する。器壁は厚く茶褐色を呈するやや粗製の土器である。器面の調整は撫で及び細い条痕によってなされている。文様は施文具によって２つに分類できる。**186～200**は口唇部の先端部及び外面と頸部のくびれ部およびその中間に，横位や斜位に箆状の施文具による連続刺突文を施すものである。箆状施文具の先端部の差異によって刺突文が，やや丸味を帯びたもの（**186**）三角状に尖るもの（**188・194・197**）爪形状に細く鋭いもの（**195・196**）幅のあるもの（**200**）など多岐にわたっている。一方**201～211**は施文具に貝殻の腹縁部を利用したものである。前者をａ，後者をｂと呼ぶことにする。**202～211**のごとく，幾何学的な箆描きの区画内に，貝殻による条線を充当したものもみられる。（ｃ）**213～219**はこれらの底部の破片とみられる。粗製である。くすんだ褐色を呈し，無文である。

分布はＤ－32区を中心として分布し，Ⅳ層の比較的上位に多い。

９類土器（第30図　**220～226・230・231**）図版　21



第30図　９～13類土器

押型文土器である。出土したもの全部をあげた。**220〜222**は楕円押型文で，**222**は外反する口縁部内面にもみられる。**223**は穀粒押型文とも呼ばれる粒の小さいものである。**224〜226・230**は山形の押型文である。**225・226・230**は器面荒く，押型文を施文したあと，さらに撫で消した部分がみられる。**231**は同じ円状の押型文で５重のものである。１点出土した。

分布はＤ・Ｃ－27区にほとんど出土した。Ⅳ層である。**231**はＦ－29区でⅣ層出土である。

10類土器（第30図　**227〜229**）図版　21

刻目凸帯と篦描きの沈線を有する土器である。内外とも淡い褐色を呈し，撫でおよび細い条痕による調整を行っている。**227**は刻目の凸帯部分が「く」字状に屈折し，これを境に一面に篦描きの沈線文を施す。他は不明である。**228**は胴部屈折部に２条の低い刻目凸帯を密接して施し，一面に凹線文を連続して刻する。他面は条痕がみられる。**229**は深い篦描沈線の間に荒い刻目を施している。

227はＤ－29区Ⅳ層直上，**228**はＤ－20区Ⅲ下層・**229**はＣ－28区Ⅳ層上面出土である。

11類土器（第30図　**235**）図版　21

茶褐色で焼成良好の器面に太い凹線で曲線文や横線文を描く。凹線の起端部は強く押捺されている。内面は手捏仕上げのあと細い条痕で丁寧な調整がなされている。

Ｄ－28区－Ⅲａ上層の出土である。

12類土器（第30図　**232**）図版　21

直口する厚手の口縁を有し，口縁端は平担面を有する。口縁部がやや肥厚し，その部分に３列にわたり竹管状の施文具で斜めに押捺している。その下位に小さい刺突文が施されている。口縁部平担面にも指頭による押捺が施されている。内外とも細い条痕で調整され，外面は黒褐色を呈している。

Ｃ－30区Ⅲa層出土

13類土器（第30図　**233・234**）図版　21

口縁部に断面三角形の肥厚帯を有し，その部分に横位の凹線を施す。凹線の両端部は強く刺突されている。茶褐色を呈し，胎土は密である。横位の細い条痕によって，丁寧な調整がなされている。２つともＤ－17区－Ⅲa層出土である。

その他の土器

236は内外とも貝殻条痕による調整痕がみられる。内面灰褐色，外面黄褐色を呈する。

B. 石　器

1. 石　鏃

石鏃は185点出土した。小破片のため実測不能のものを除き163点を図示した。基部の形態によって大きく平基式と凹基式に分け，さらに細かい分布によって平基式をA～Cと3つに，凹基式をA～Nと14に細分類した。また，長さが1.5cm未満の小さい鏃については特に小石鏃として別にあげ，さらに特殊な有茎鏃や雁股鏃も別にした。

基部や側辺，先端部の差異はａｂｃ…として表に加えた。内容は下記の如くである。

平基式の形態分類

○側辺部分，ａ．鋸歯状を呈する。ｂ．側辺が内弯する。ｃ．側辺がまっすぐで三角形を呈する。ｄ．正三角形を呈する。ｅ．側辺が外弯する（外曲する）最大幅下端（ア），最大幅下方（イ），最大幅上方（ウ），極端に外曲する（エ），

○先端部分，ａ．非常に鋭い，ｂ．普通，ｃ．鈍い，ｄ．丸い，ｅ．平ら，ｆ．不明，

凹基式の形態分類

○基部分，ａ．脚端が鋭く抉りが非常に深い　ｂ．脚端が鈍く抉りが非常に深い　ｃ．脚端が円く抉りが非常に深い　ｄ．脚端が鋭く抉りが深い　ｅ．脚端が鈍く抉りが深い　ｆ．脚端が丸く抉りが深い　ｇ．脚端が鋭く抉りが浅い　ｈ．脚端が鈍く抉りが浅い　ｉ．脚端が丸く抉りが浅い　Ｊ．脚端が鈍く非常に抉りが浅い　ｋ．脚端が鋭く非常に抉りが浅い　Ｉ．脚部欠損で不明。

○側辺部分　ａ．鋸歯状を呈する　ｂ．側辺が内弯する　ｃ．側辺がまっすぐで二等辺三角形を呈する。ｄ．正三角形を呈する　ｅ．側辺が外弯する（外曲する）最大幅下端ア）最大幅下方(イ)　最大幅上方(ウ)　極端に外曲する(エ)　ｆ．五角形を呈する

○先端部分　ａ．非常に鋭い　ｂ．普通　ｃ．鈍い　ｄ．丸い　ｅ．平ら　ｆ．先端部欠損で不明

次に類別ごとに説明していきたい。

平基式

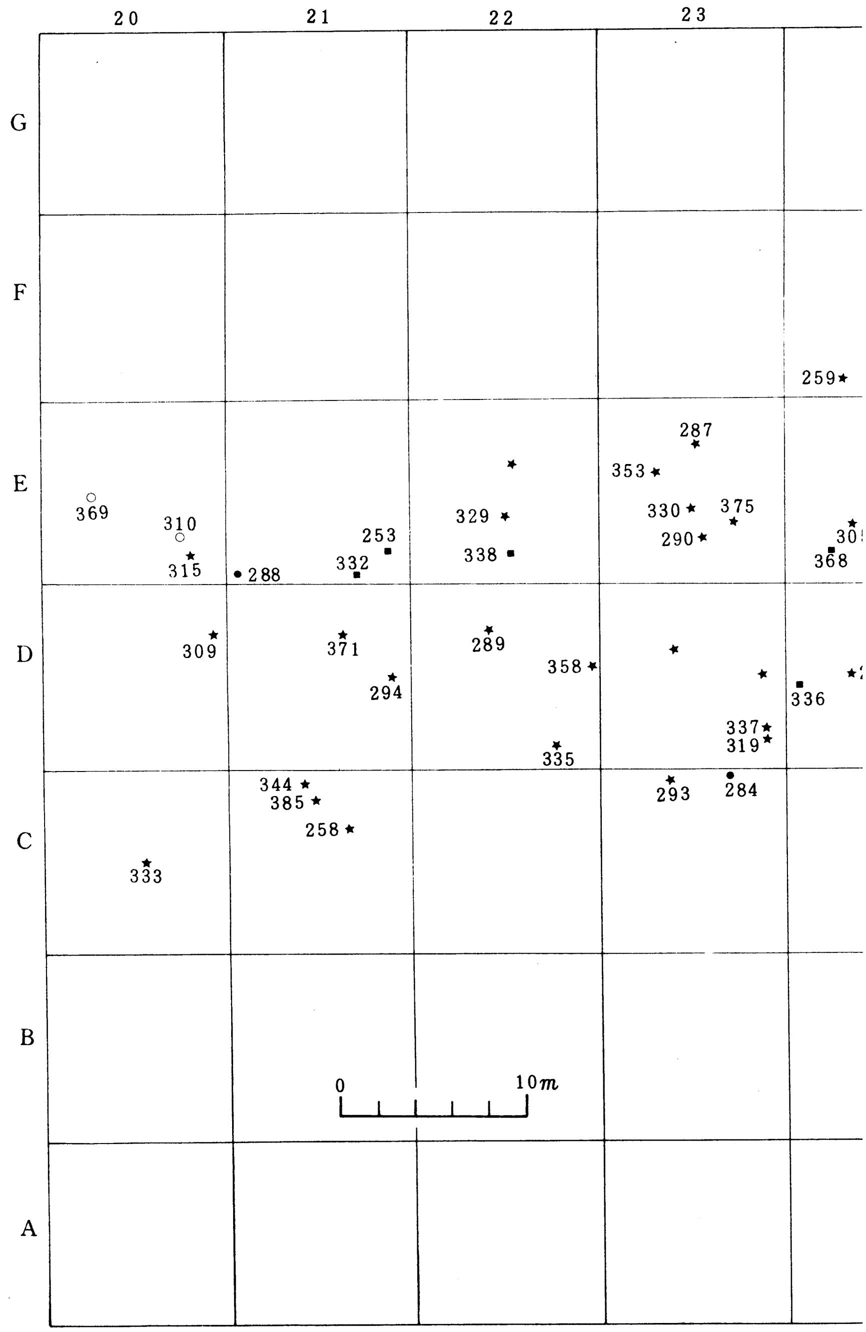
基部に抉りのない平根のもので，18点発見された。凹基式が大半を占めているので，全体の約1割に満たない。A類～C類まで3つに分類した。

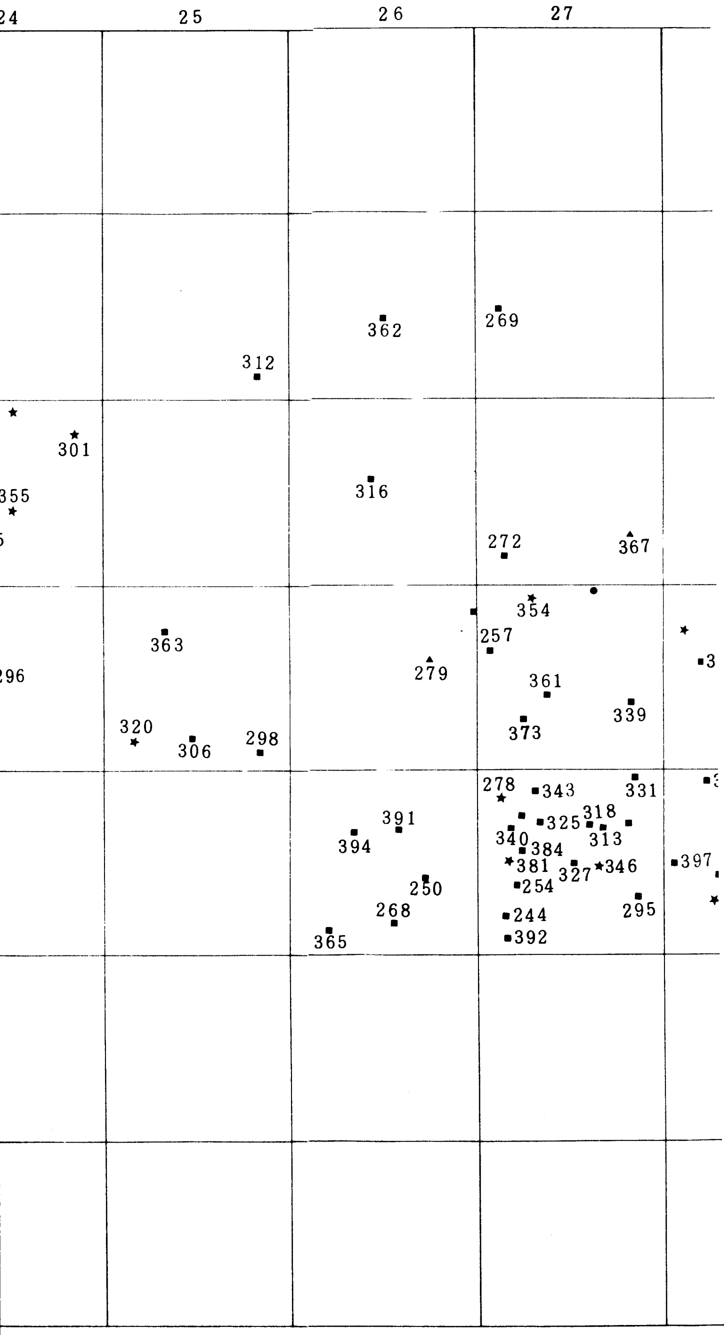
A類（第32図　**237・238**）図版　22

薄手の磨製石鏃である。両面共に丁寧な研磨によって，表面が平滑となっている。**237**はほぼ正三角形，**238**はやや長身である。共に粘板岩製。厚さが0.1～0.2cmときわめて薄い。

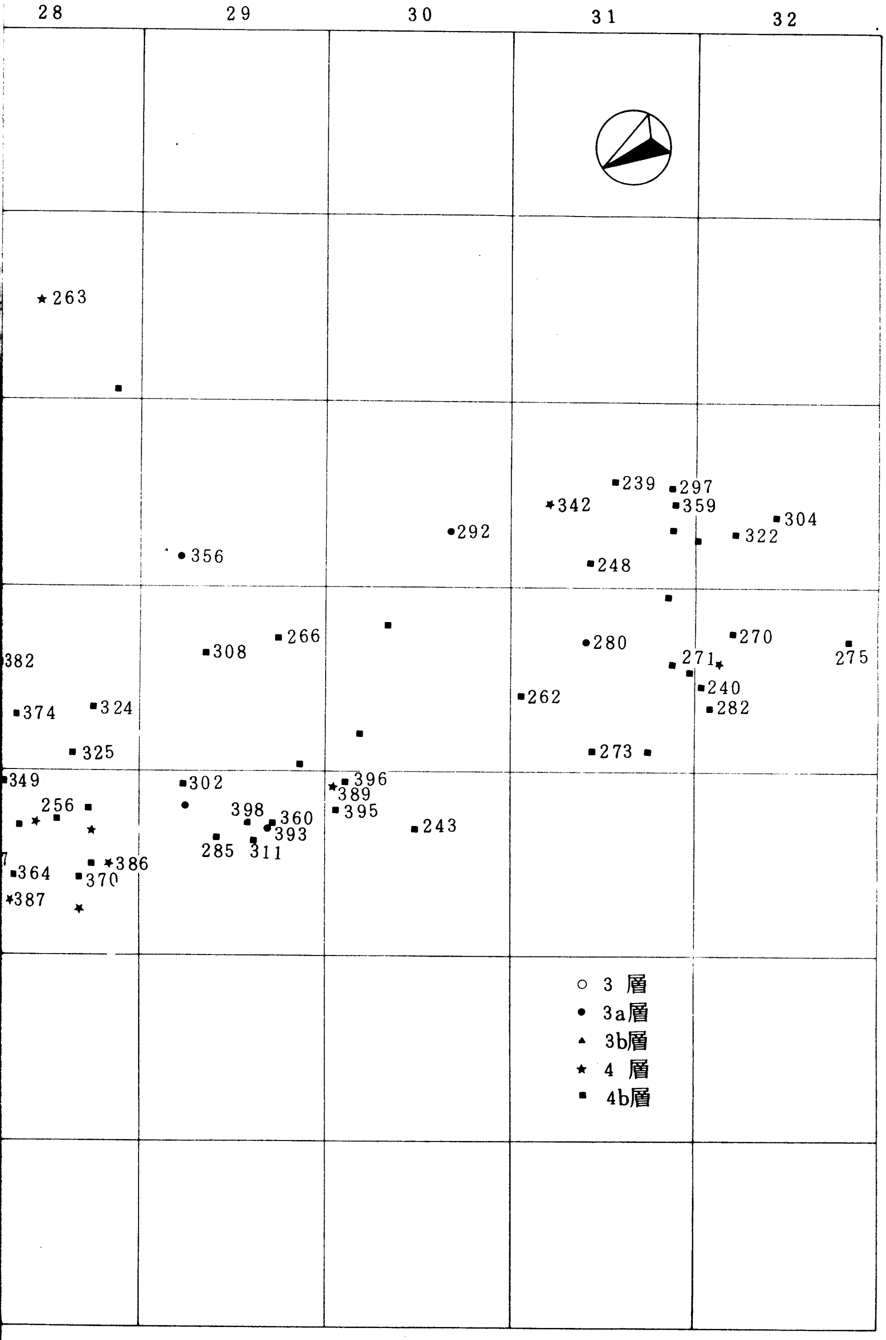
B類（第32図　**239～243**）図版　22

側辺がまっすぐで，二等辺三角形を呈し，C類に比べてやや大形のものである。**239**は両面に自然面を残す。**240**は全体に薄手に仕上げられ両側縁はやや外弯し，両面とも丁寧な押圧剝離がなされている。**242**は不安定な剝片を利用し，周辺に簡単な調整を加えている。長さ2.5cm前後のものが多い。


20
21
22
23
G
F
E
D
C
B
A
259
287
353
369
310
315
288
253
332
329
338
330
375
290
368
309
371
294
289
358
336
337
319
335
344
385
258
293
284
333
0
10m



第31図　石鏃層位別分布図


28
29
30
31
32
3 層
3a層
3b層
4 層
4b層

C類（第32図　**243～252**）図版　22

長さが1.5cmから2cm未満のもので，やや厚みがあり，全体に小形でコロコロした不安定な鏃を集めた。**244**は全体に丹念な剥離が施され，両側縁は中央部へわずかにくびれる。**245**は全体に丸味をおび，細かい剥離が施されている。他は主要剥離面を多く残し，周辺部に簡単な調整を加えたものである。石材は黒曜石がほとんどである。

凹基式

基部に，抉りのあるもので，本遺跡出土の石鏃の90％以上を占めている。形態分類によってA類～N類まで**250**に分けた。

A類（第32図　**253～259**）図版　22

全形に比較して，抉りが浅く小さいものをあげた。**257**・**258**は長身の二等辺鏃で，側縁の剥離も細かく仕上げられている。**259**は剥片の片面に簡単な調整を加えたもの。**254**は平基式C類に類似のもので，厚い鏃身を有し，側縁に粗い剥離を加えている。**256**は自然面を残す剥片を利用し，周縁部に粗い剥離を加えたもので，丸味を帯びて先端部分が鈍い。

B類（第32図　**260～268**）図版　22

均正のとれた三角形，および二等辺三角形を呈し，抉りは脚端部から広く，浅く形成されている。全体に薄手で，側縁の剥離も細かく調整されている。**260**は尖端部分をさらに一段と細かく鋭く尖らしている。特殊な例である。**262**は側縁の剥離痕が深く刻まれて，鋸歯状を呈している。**263**は側縁がやや内弯する。**268**は身中央部に凸起部分を残す。

C類（第33図　**269**・**277**）図版　23

等辺の三角形を呈し，抉りが小さくまた浅いものである。幅が1.4cm内外で全体に小形で形がよく整っている。D類に比較して器厚がやや薄い。**269**・**270**・**276**・**277**は側縁部に密な交互剥離をなし薄手で逆刺も鋭い。**273**・**275**は，小剥片を利用し，周辺部に調整を加えている。**276**は石英，他はすべて黒曜石である。

D類（第33図　**278～283**）図版　23

正三角形をなし，中央部が脹らんで厚みをもち，不安定でコロコロした感じのものである。基部は逆刺が鋭く，抉りが非常に浅い。**283**は二等辺三角形をなくし側縁に交互剥離を行っている。すべて黒曜石製である。長さ1.5cm内外のものが多い。

E類（第33図　**284～299**）図版　23

基部は，両端に面を残し中央部に深い抉りを有するもので，C・D類に比較して大形のものである。二等辺三角形で側縁にやや丸味を帯びたものが多い。長さも2.5～3cm前後のものが多く，**284**・**285**は4cmにも達している。**286**・**293**・**297**の逆刺が鋭く尖るものと，**285**・**290**・**298**の丸くなるものに分けられる。全体に剥離調整痕は大きいが綿密である。**288**・**293**のように主要剥離面を一面に残すものもある。石材として黒曜石は**284**・**285**・**287**・**288**・**292**・**296**で，チャートや玄武岩製のものが多い。**284**・**285**は重さが4g を越えている。

F類（第34図　**300～316**）図版　24

二等辺三角形を呈し，抉りが大きく深いもので，E類に比べへ脚端部が，丸くあるいは細くなる。長さに比較して，幅がせまくなり，細身の長身鏃が多い。**301〜306**は側縁部から先端部へ鋭く尖る。**301・302・306**は抉りも深く大きい。**300**は剥離面の一部をそのまま側縁部に残している。長さ2.5cm前後，幅1.5cm，前後のものが多い。

G類（第34図　**317〜323**）図版　24

三角形を呈し，抉りのやや深いもので，側縁部が丸味をなし，最大幅が下端，および下方にくる。F類に比較して長さの短いものである。**323**は一面に剥離面を残し，周辺部だけを調整している。長さ2cm余り幅1.6cm，厚さ0.5cm前後のものが多い。

H類（第34図　**324〜332**　第35図　**333〜337**）図版　24・25

U字及び半円状のえぐりをもち，脚端部のすぼまったハート形をなすもので，円脚鏃ともよばれる。鏃身の大きさに比べてえぐりは小さい。**329・331・332・334**のごとく先端部の鋭く尖ったものと，**325・335・336**のごとく鈍いものがある。断面は片面で凹曲ないし平担で，他面は中央部が凸状に厚くなるものが多い。(**328・330・332・334・335・336**) **332**は両面とも主要な剥離面を残し，側縁および，抉りに簡単な調整を加えたものである。長さ2.5cm余りのものが大部分である。石材は黒曜石が少なく玄武岩およびチャートがほとんどを占めている。

I類（第35図　**338〜351**）図版　25

抉りの大きく，深いもので鍬形鏃ともよばれるものをあげた。**338〜340・344**の側縁部が直線で正三角形を呈し，丁寧な押圧剥離を加えているもの，**343・345〜349**の側縁部がやや丸味を帯びているのなどがある。**339・340・349〜351**は小形のものであるが，両面とも剥離調整が丁寧である。**341**は，片脚が小さく仕上げられている。**342**は側縁下方に小さくくびれ部を有する特殊なものである。石材はチャートが大半を占めている。

J類（第35図　**352〜355**）図版　25

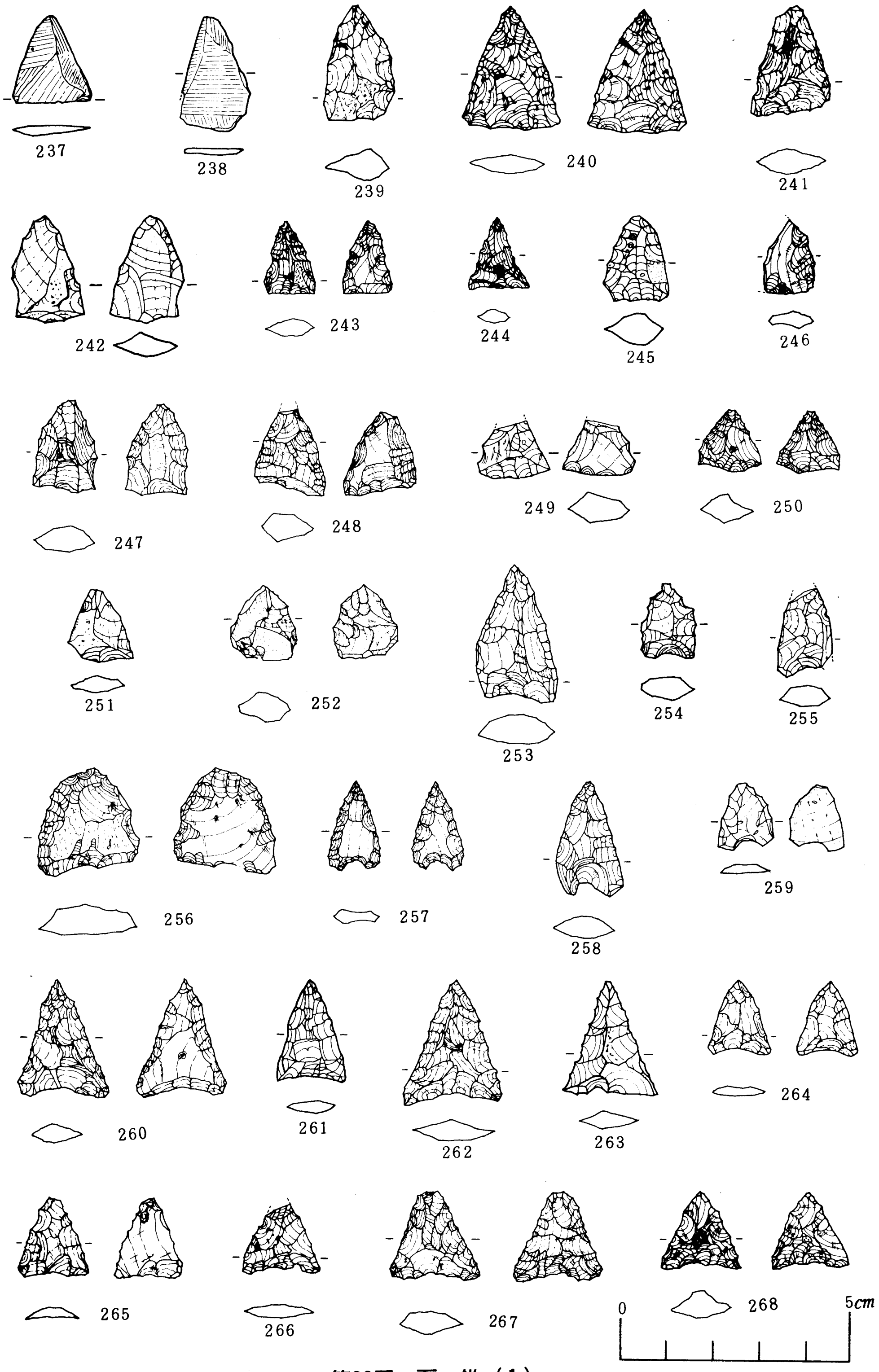
長さ3cm，幅2.5cm余りの比較的大きな粗製の石鏃である。玄武岩製の剥片を利用し，側縁部や抉りを荒く，簡単に調整している。**352**は両面とも主要剥離面を残し，側縁は片面より荒い調整を行っている。

K類（第35図　**356〜364**）図版　25

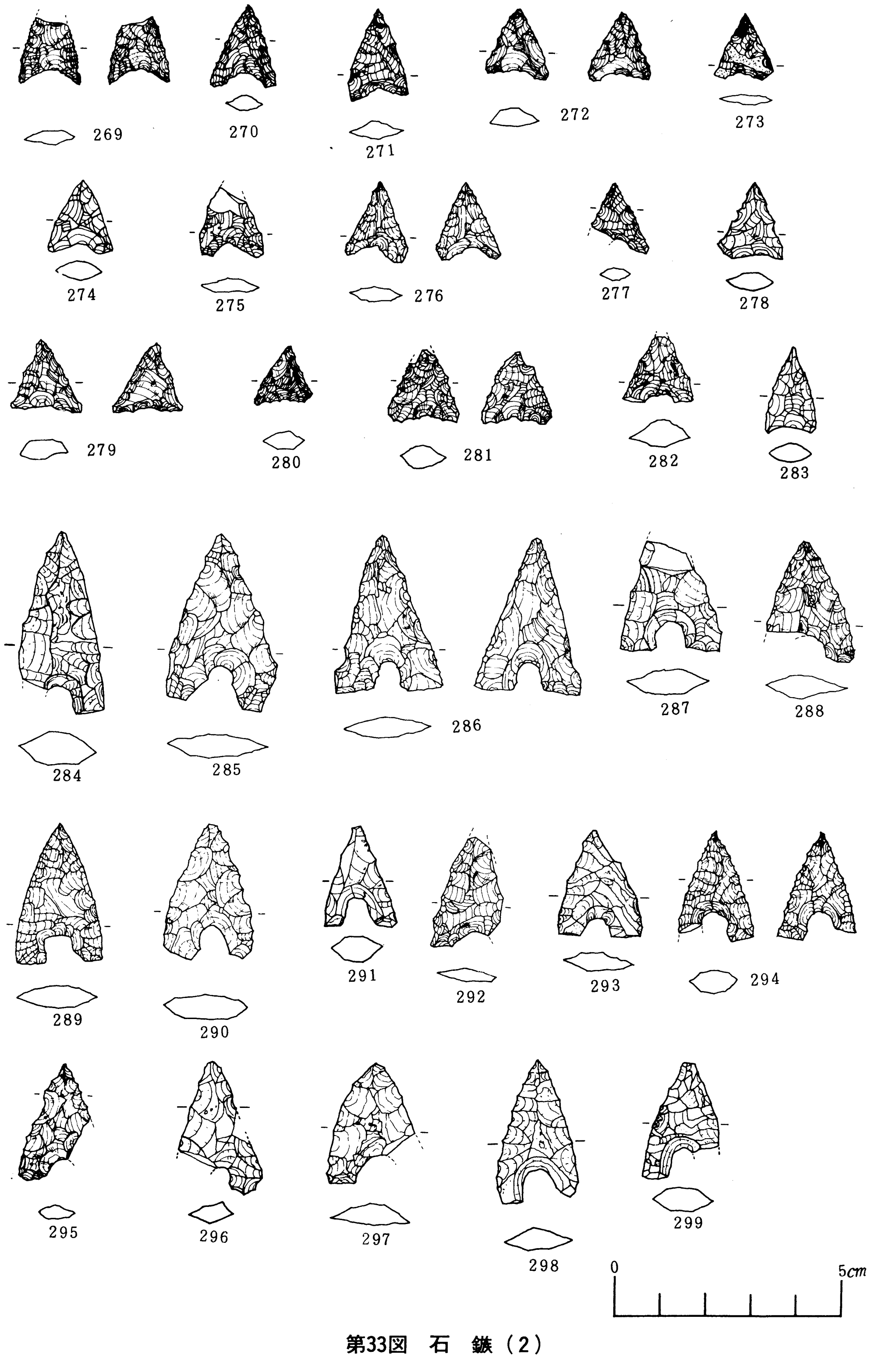
長身鏃で，側縁が内弯し，中央部分から先端部へ鋭く尖るスマートな鏃身をもつものである。脚端部は大きく開，**356・360・362・363**のような大きく深い抉りを持つものと，**358・359・361**の浅い抉りをもつものがある。**356〜359**は，周縁部が細かく小さな剥離によって調整されている。**359**は先端部が一段と小さく尖る。**361**は弯曲した剥片を利用し，側縁部に荒い調整を行っている。長さ3cm，幅1.6cm，厚さ0.4cm余りのものが多い。

L類（第35図　**365**　第36図　**366〜369**）図版　25・26

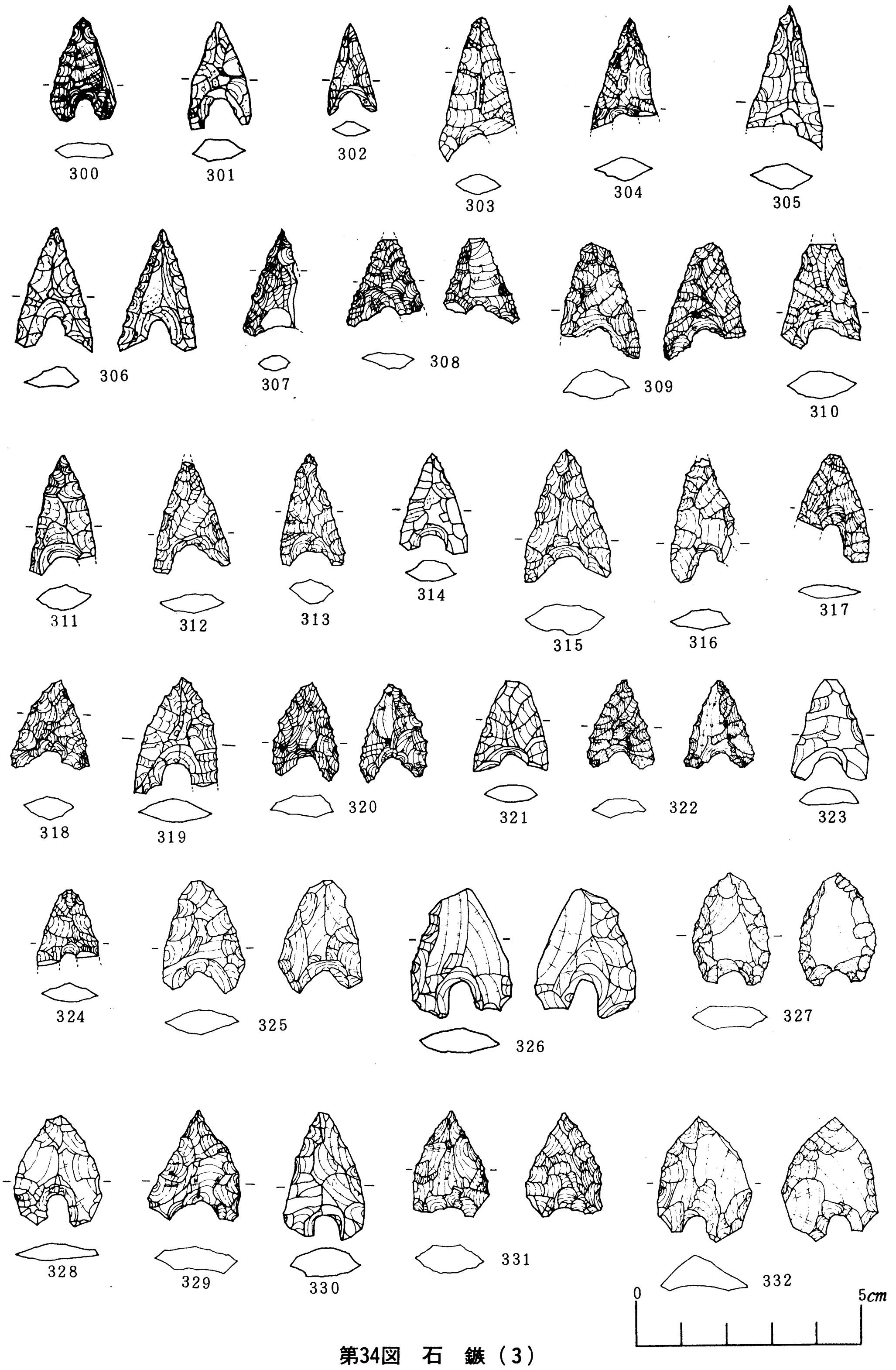
形状が五角形をなすもので，五角形鏃とよばれるものである。抉りは**366〜369**のごとく小さく浅い。**365〜367**は薄い剥片を利用し，全面に細かな剥離調整を行っている。**368**は荒い剥離を施しただけである。未製品であろう。**369**は小形の精製品であるが，側縁が段をなし，五角形状に角


237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
0
5cm

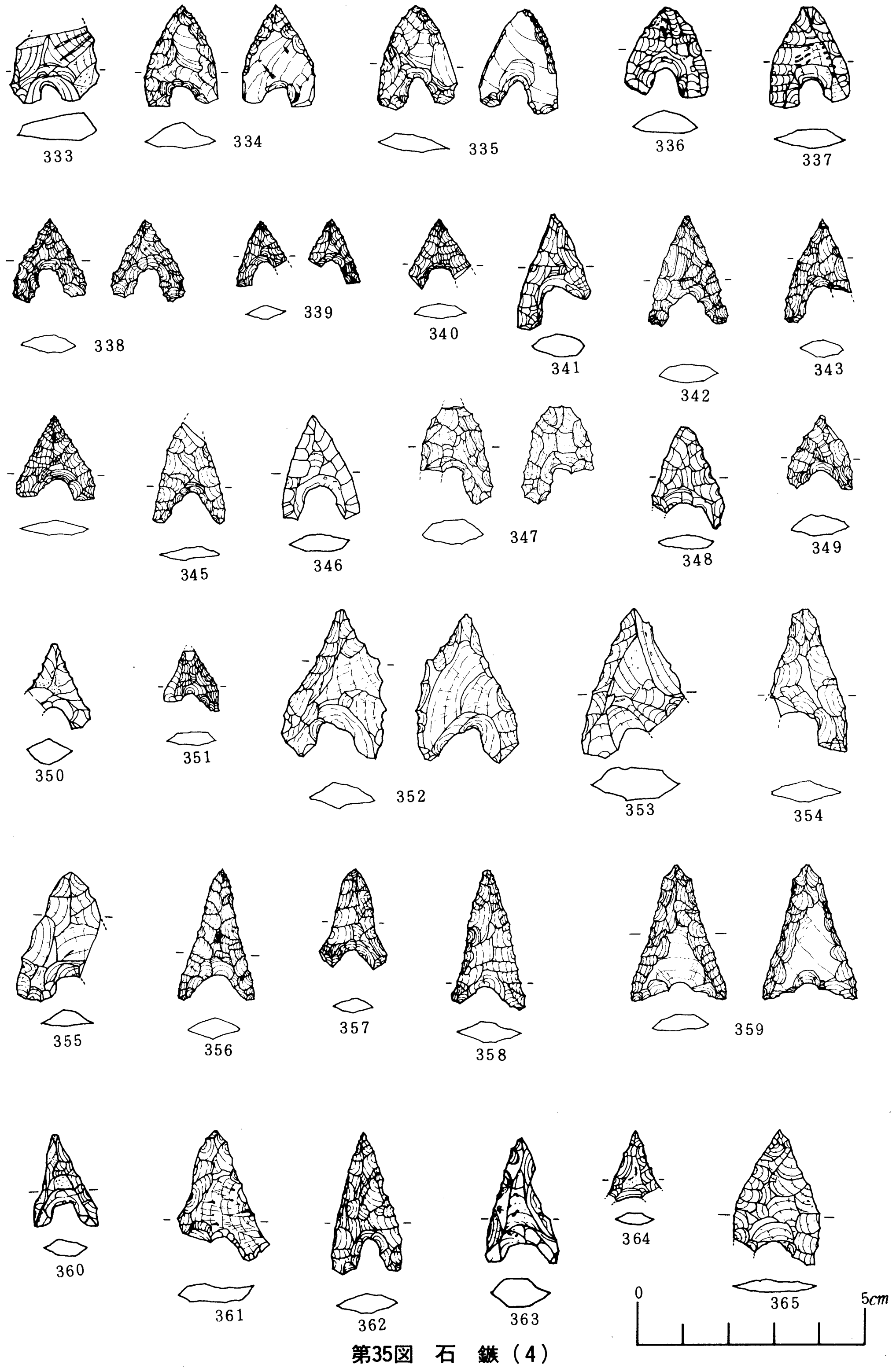
第32図　石　鏃（1）


269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
0
5cm

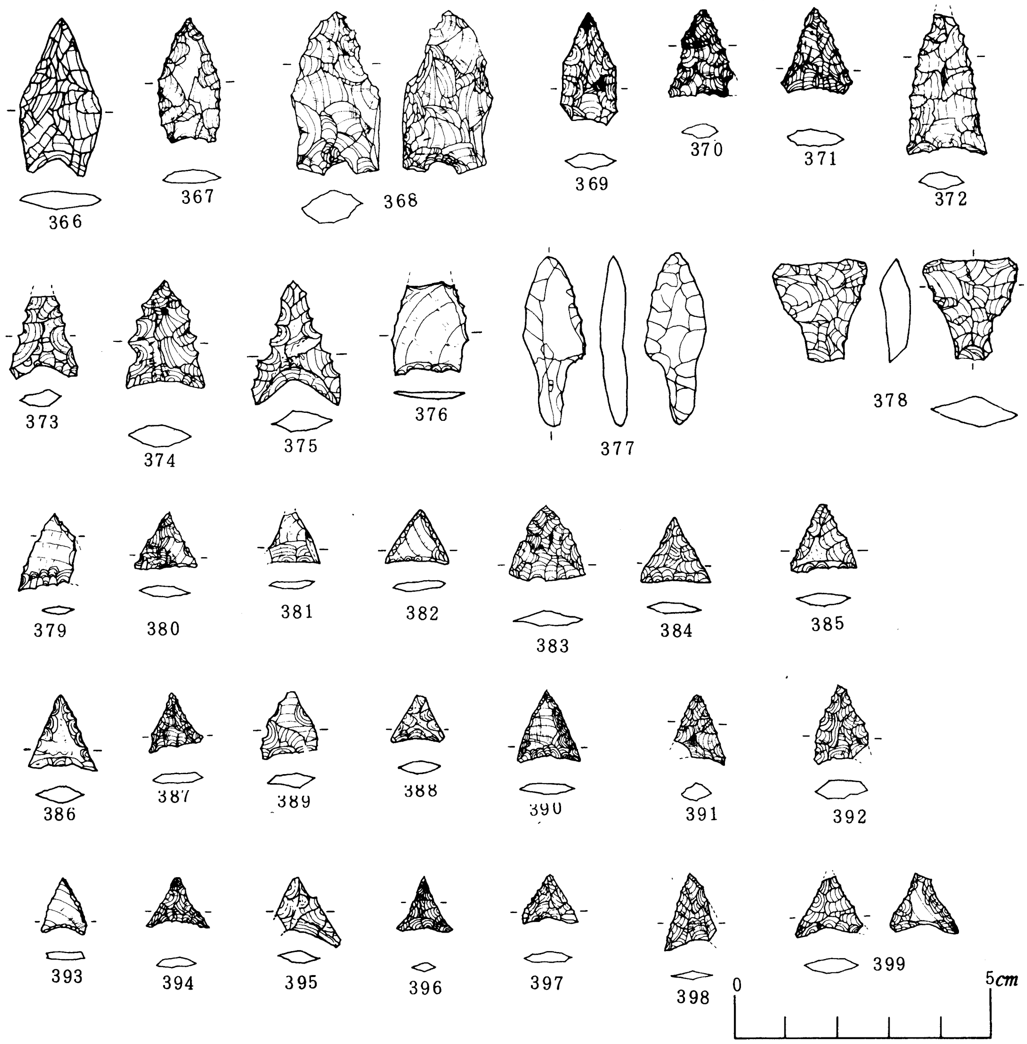
第33図　石　鏃（2）


300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
0
5cm

第34図　石　鏃（3）


333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
0
5cm

第35図　石　鏃（4）



第36図　石　鏃（5）

張っている。長さが3㎝に近いものが多い。石質は黒曜石1，石英2，チャート2である。

M類（第36図　**370〜375**）図版　26

側縁部が鋸歯状を呈するものをあげた。形状は多様で**370〜372・374**の浅い抉りをもつもの，**375**の側縁部が内弯するもの，**372**の柳葉形をなすものなどである。**375**は先端部が尖り両脚も長く，抉りも深い。玄武岩製である。**372**は頁岩。他は黒曜石である。

N類（第36図　**376**）図版　26

薄い剝片を利用し，側縁に簡単な調整を施したもので，基部の抉りが浅く，両端を逆刺状に小さく尖らしたものである。玄武岩製である。

小石鏃

黒曜石の剥片を礎材として長さが1～1.5cm，幅が1cm余り，薄手の小指爪先大の大きさに仕上げた小形石鏃の一群で，特に小石鏃として別に取りあげた。形状によって3つに分類した。

A類（第36図　**379～385**）図版　26

平基式である。正三角形を呈し，形が整っている。薄手の剥片を利用し，側縁部に細かい調整を行ったもので，**379**・**381～383**は中央部に主要剥離面を多く残している。

B類（第36図　**386～392**）図版　26

浅い抉（えぐ）りをもつ凹基式の石鏃である。形状はほぼ正三角形を呈する。**388**・**390**は主要剥離面を残すが，全体に細かい剥離を丁寧に施したものが多い。

C類（第36図　**393～399**）図版　26

全形はほぼ正三角形を呈するが，抉（えぐ）りの深いものをあげた。**393**・**396**・**399**は側縁部を内彎させ，先端部を細く小さい調整を行っている。**394**は小さい剥片の周縁に簡単な剥離を加えただけのものである。

有茎鏃（第36図　**377**）図版　26

1点出土した。一面は側縁部に細かな剥離調整を施す。他面は主要剥離面を多く残し，側縁は荒い調整を行っている。先端部はやや鈍い。玄武岩製である。

雁股鏃（第36図　**378**）図版　26

逆三角形状を呈する。側縁はやや内彎し，基部は細まる。刃部は水平で，基端部は欠損している。側縁部及び先端部は，粗い剥離調整を行っている。先端部は鈍い。

第2表　石　鏃　一　覧　表

番号	形式		区	層	基部	側辺	先端	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	欠損部	挿図番号	備考
1	平基式	A	3	Ⅲa		c	b	1.90	1.70	0.20	0.60	粘板岩		237	磨製石鏃
2		A	ネ	Ⅲa		c	f	(2.45)	(1.50)	0.11	(0.80)	粘板岩	片側基部	238	磨製石鏃
3		B	E−31	Ⅳb		e(イ)	b	2.50	1.50	0.70	2.35	石英	片側基部	239	
4		B	D−32	Ⅳb		c	b	2.70	2.20	0.44	1.95	黒曜石		240	
5		B	D−31	Ⅳb		c	c	2.42	1.80	0.55	1.88	玄武岩		241	
6		B	E−22	Ⅳb上		c	c	2.30	1.50	0.50	1.37	玄武岩		242	
7		C	C−30	Ⅳb		c	b	1.60	1.10	0.39	0.61	黒曜石		243	
8		C	C−27	Ⅳb		b	b	1.60	1.35	0.29	0.60	黒曜石		244	
9		C	ネ	Ⅳ		e(ア)	c	1.90	(1.40)	0.70	(1.35)	黒曜石		245	
10		C	D−31	Ⅳb		e(イ)	b	1.65	(1.10)	0.35	(0.67)	黒曜石		246	
11		C	D−31	古道直上		e(イ)	c	2.00	1.50	0.55	1.55	玄武岩		247	
12		C	E−31	Ⅳb直上		c	f	(1.35)	(1.50)	0.40	(0.80)	黒曜石		248	
13		C	不明			e(ア)	f	(1.85)	1.60	0.60	(1.80)	チャート		249	
14		C	C−26	Ⅳb		e(イ)	b	(1.20)	(1.60)	0.65	(1.30)	黒曜石	先端	250	

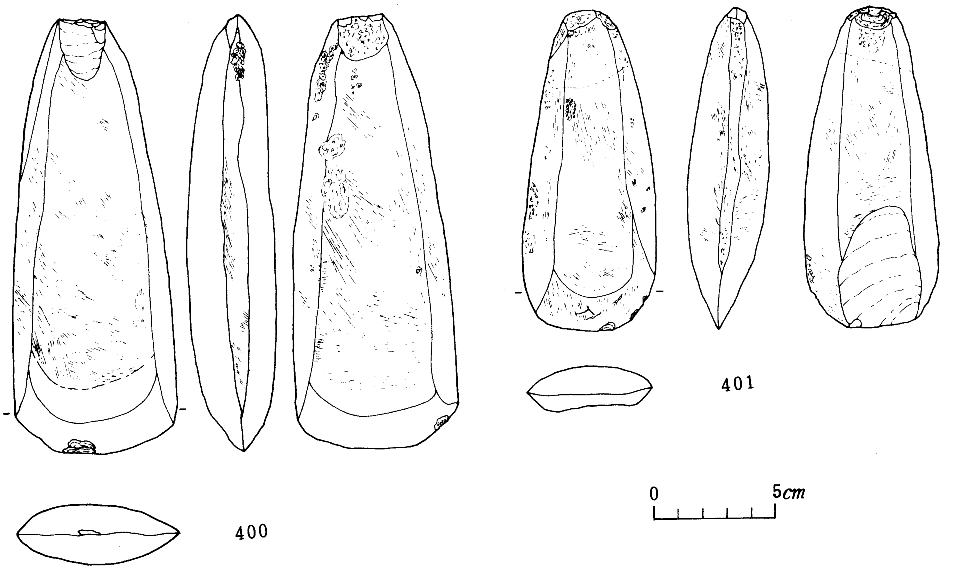
番号	形式		区	層	基部	側辺	先端	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	欠損部	挿図番号	備考
15	平基式	C	D−31	古道直上		d	c	1.40	1.35	0.60	0.82	黒曜石		251	
16		C	C−27	Ⅳb上		c	c	1.50	(1.40)	0.35	(0.65)	チャート	片側基部	252	
17		C	C−29	Ⅲa		e(イ)	d	1.62	1.42	0.62	1.23	黒曜石			
18		C	C−28	Ⅳb上		d	f	(1.60)	(1.40)	0.56	(1.13)	黒曜石	片側基部		
19	凹基式	A	E−21	Ⅳb上	j	e(イ)	b	3.00	1.80	0.60	3.20	チャート		253	
20		A	C−27	Ⅳb	j	e(イ)	b	1.60	1.20	0.50	0.15	黒曜石		254	
21		A	E−22	Ⅳ	h	e(ア)	f	(1.95)	(1.20)	0.40	(1.20)	黒曜石	先端 片脚	255	
22		A	D−30	Ⅳb上	h	c	d	(2.10)	1.42	0.32	(1.26)	石英			
23		A	E−21	Ⅳ	h	e(ア)	c	2.20	1.80	0.59	1.85	チャート			
24		A	C−28	Ⅳb直上	i	e(イ)	d	2.30	2.30	0.65	3.60	黒曜石		256	
25		A	D−27	Ⅳb上	i	c	a	1.92	1.12	0.31	0.60	玄武岩		257	
26		A	C−21	Ⅳ直上	i	c	c	2.50	1.50	0.50	1.30	黒曜石		258	
27		A	F−24	Ⅳ	h	e(ア)	c	1.42	1.20	0.17	0.55	チャート		259	
28		B	E−31	Ⅳb上	j	c	a	2.49	2.00	0.41	1.35	玄武岩		260	先端部さらに鋭く尖る
29		B	F−18	Ⅳ	k	c	a	2.20	1.50	0.30	0.66	チャート		261	
30		B	D−31	Ⅳb	k	c	b	2.80	2.20	0.45	1.71	玄武岩		262	
31		B	F−28	Ⅳ	k	c	b	2.42	2.00	0.35	1.15	チャート		263	
32		B	D−30	古道直上	k	e(ア)	b	1.70	1.38	0.20	0.47	玄武岩		264	
33		B	E−31	Ⅳb直上	j	c	f	1.86	1.50	0.25	1.45	玄武岩	先端	265	
34		B	D−29	Ⅳb	j	d	f	(1.60)	1.70	0.29	(0.60)	石英	先端	266	
35		B	E−31	Ⅳb直上	J	c	f	1.95	1.86	0.25	1.45	チャート	先端	267	
36		B	C−26	Ⅳb	k	d	b	1.80	1.70	0.60	0.76	黒曜石		268	
37		C	F−27	Ⅳb上	d	c	f	(1.50)	1.40	0.31	(0.45)	黒曜石	先端	269	
38		C	D−32	Ⅳb	f	c	a	1.90	1.50	0.30	0.55	黒曜石		270	
39		C	D−31	Ⅳb	h	c	a	2.10	1.30	0.40	0.82	黒曜石		271	
40		C	E−27	Ⅳb	h	h	b	1.60	1.40	0.42	0.55	黒曜石		272	
41		C	D−31	Ⅳb	h	d	a	1.42	1.35	0.21	0.21	黒曜石	片脚	273	
42		C	E−19	Ⅳ	g	c	a	1.60	1.40	0.40	0.60	黒曜石		274	
43		C	D−32	Ⅳb上	f	c	f	(1.75)	(1.25)	0.42	(0.30)	黒曜石	先端	275	
44		C	D−28	溝内	d	c	a	1.80	1.40	0.30	0.60	石英		276	
45		C	D−31	古道上	d	d	a	1.32	(1.30)	0.50	(0.40)	黒曜石	片脚	277	
46		D	D−27	Ⅳb直上	k	d	b	1.35	(1.30)	0.42	(0.45)	黒曜石	片脚		
47		D	C−27	Ⅳ	k	c	a	1.65	1.45	0.40	0.55	黒曜石		278	

番号	形	式	区	層	基部	側辺	先端	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	欠損部	挿図番号	備考
48		D	C−26	Ⅲc下	k	d	b	1.60	1.60	0.22	0.75	黒曜石		279	
49		D	D−31	Ⅳb上	k	d	a	1.32	1.30	0.40	0.49	黒曜石		280	
50		D	E−32	Ⅳb	h	d	b	1.60	1.60	0.60	0.90	黒曜石	先端	281	
51		D	D−32	Ⅳb	e	d		1.50	1.60	0.60	0.90	黒曜石		282	
52		D	E−16	Ⅳ	k	c	a	1.95	1.10	0.40	0.60	黒曜石		283	
53		E	C−23	Ⅲa	e	e(ア)	b	4.00	1.80	0.70	4.38	黒曜石	先端	284	大形鏃
54		E	C−29	Ⅳb上	f	c	b	3.90	2.41	0.51	4.25	黒曜石		285	大形鏃
55		E	D−29	Ⅳb	d	c	b	3.52	2.40	0.45	3.13	チャート		286	大形鏃
56	凹	E	E−23	Ⅳ	d	c	f	2.40	2.20	0.50	2.30	黒曜石	先端	287	大形鏃
57		E	E−21	Ⅲa下	d	c	c	2.70	0.92	0.50	1.82	黒曜石	片脚	288	
58		E	D−22	Ⅳ	j	c	a	3.12	1.95	0.50	2.70	チャート		289	
59		E	E−23	Ⅳ上	f	e(イ)	f	3.00	2.20	0.50	2.60	玄武岩		290	
60		E	不明		d	c	f	2.30	1.60	0.60	1.30	チャート		291	
61		E	E−30	Ⅲa	d	c	f	2.50	1.52	0.29	1.01	黒曜石	先端 片脚	292	
62		E	C−23	Ⅳ上	d	c	b	2.30	1.90	0.40	1.55	チャート		293	
63		E	D−21	Ⅳ	e	c	a	2.40	1.62	0.50	1.45	チャート	片脚	294	
64	基	E	C−27	Ⅳb上	e	c	a	2.61	(1.60)	0.30	(1.30)	チャート	片脚	295	
65		E	D−24	Ⅳ上	f	c	a	2.90	(1.90)	0.40	(1.95)	黒曜石	側縁 片脚	296	
66		E	E−31	Ⅳb	e	e(ア)	c	2.67	(1.90)	0.50	(2.00)	チャート	片脚	297	
67		E	D−25	Ⅳb上	f	e(イ)		3.10	1.80	0.45	2.07	玄武岩		298	
68		E	ネ	Ⅳ	d	e(ア)	f	2.60	1.60	0.50	1.56	チャート		299	
69		F	E−27	Ⅲb下	f	c	c	2.32	1.50	0.30	1.13	黒曜石		300	
70		F	E−24	Ⅳ	f	e(イ)	a	2.40	1.40	0.45	1.05	石英		301	
71		F	C−29	Ⅳb	d	c	a	2.00	1.10	0.30	0.45	黒曜石	片脚	302	
72	式	F	ネ	Ⅳ	d	c	c	3.30	(1.70)	0.45	(2.20)	石英	片脚	303	
73		F	E−32	Ⅳb	d	c	a	(2.55)	1.50	0.50	(1.29)	チャート	片脚	304	
74		F	E−24	Ⅳ	l	c	a	(3.10)	(1.70)	0.55	(2.10)	チャート	片脚	305	
75		F	D−25	Ⅳb上	f	c	a	2.70	1.70	0.40	1.67	黒曜石		306	
76		F	D−30	Ⅲa下	i	c	a	2.40	(1.20)	0.32	(0.84)	黒曜石	側縁 片脚	307	
77		F	D−29	Ⅳb直上	d	c	f	(1.90)	(1.65)	0.40	(0.70)	黒曜石	先端 片脚	308	
78		F	D−20	Ⅳ	d	e(ア)	f	(2.60)	1.80	0.32	(1.30)	黒曜石	先端 片脚	309	
79		F	E−20	Ⅲ	f	c	f	(2.30)	1.80	0.60	(2.20)	チャート	先端	310	
80		F	C−29	Ⅳb	d	e(ア)	a	(2.60)	1.42	0.55	(1.72)	黒曜石	片脚	311	

番号	形式		区	層	基部	側辺	先端	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	欠損部	挿図番号	備考
81		F	F−25	Ⅳb	f		c	2.50	1.70	0.40	1.75	チャート		312	
82		F	C−27	Ⅳb	b	c	a	2.50	1.43	0.51	1.34	黒曜石		313	
83		F	ネ	Ⅳ	f	c	a	2.20	1.50	0.41	1.25	チャート		314	
84		F	E−20	Ⅳ上	d	c	b	3.00	1.90	0.60	2.95	石英		315	
85		F	E−26	Ⅳb上	d	c	f	2.80	(1.40)	0.45	(1.55)	チャート	片脚	316	
86		G	表採		f	e(ア)	c	2.42	(1.65)	0.30	(1.00)	チャート	片脚	317	
87		G	C−27	Ⅳb上	d	e(ア)	b	2.00	1.80	0.50	1.47	チャート		318	
88		G	D−23	Ⅳ上	d	e(ア)	b	2.60	1.80	0.50	1.90	チャート	片脚	319	
89	凹	G	D−25	Ⅳ	d	e(イ)	a	2.30	1.50	0.50	1.22	黒曜石		320	
90		G	D−22	Ⅳ上	d	e(イ)	f	2.00	1.60	0.43	1.10	石英	先端 両脚	321	
91		G	E−32	Ⅳb	f	e(イ)	a	2.00	1.50	0.42	0.85	黒曜石		322	
92		G	E−24	Ⅳ	f	e(イ)	c	2.21	1.70	0.40	1.35	頁岩		323	
93		G	D−28	Ⅳb上	l	c	d	1.70	1.40	0.40	0.95	チャート	両脚	324	
94		H	C−27	Ⅳb上	i	e(イ)	c	2.50	1.90	0.55	2.38	玄武岩		325	円脚鏃
95		H	C−19	Ⅳ	f	e(イ)	f	2.90	2.20	0.55	2.85	玄武岩		326	円脚鏃
96		H	C−27	Ⅳb上	f	e(イ)	c	2.50	1.80	0.30	2.45	玄武岩		327	円脚鏃
97	基	H	D−28	Ⅳb直上	f	e(イ)	c	2.50	2.00	0.35	1.97	チャート		328	円脚鏃
98		H	E−22	Ⅳ	e	e(ア)	a	2.50	2.10	0.50	2.76	チャート		329	円脚鏃
99		H	E−23	Ⅳ	f	e(イ)	b	2.80	1.80	0.60	2.15	玄武岩		330	円脚鏃
100		H	C−27	Ⅳb	h	e(イ)	a	2.35	1.70	0.31	2.29	チャート		331	円脚鏃
101		H	E−21	Ⅳb直上	f	e(イ)	c	2.80	2.08	0.65	3.73	玄武岩		332	円脚鏃
102		H	C−20	Ⅳ上	i	e(イ)	f	(1.70)	1.95	0.60	(1.90)	黒曜石	半欠	333	円脚鏃
103		H	E−27	Ⅳb	d	e(ア)	b	2.30	1.62	0.60	1.20	チャート		334	円脚鏃
104		H	D−22	Ⅳ上	f	e(ア)	b	2.30	1.80	0.40	1.40	チャート		335	円脚鏃
105	式	H	D−24	Ⅳb上	(　)	e(ア)	c	2.00	1.80	0.45	1.47	チャート		336	円脚鏃
106		H	D−23	Ⅳ直上	f	e(イ)	c	2.20	1.72	0.40	1.60	チャート	先端	337	円脚鏃
107		I	E−22	Ⅳb	c	d	a	1.94	1.62	0.40	0.76	チャート		338	鍬形鏃
108		I	D−27	Ⅳb	a	d	a	1.50	(1.10)	0.30	(0.27)	チャート	片脚	339	鍬形鏃
109		I	C−27	Ⅳb	l	d	b	1.60	(1.40)	0.30	(0.37)	チャート	片脚	340	鍬形鏃
110		I	E−21	Ⅳ上部	c	e(イ)	b	2.55	1.65	0.51	1.15	チャート		341	片脚鏃
111		I	E−31	Ⅲa	c	c	b	2.45	1.75	0.40	1.15	チャート		342	両脚にくびれあり
112		I	C−27	Ⅳb直上	c	e(ア)	a	2.35	(1.50)	0.40	(0.94)	チャート	片脚	343	鍬形鏃
113		I	C−21	Ⅳ	a	d	a	1.90	1.75	0.30	0.82	黒曜石		344	鍬形鏃

番号	形式		区	層	基部	側辺	先端	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	欠損部	挿図番号	備考
114	凹基式	I	D−27	Ⅲa	a	e(ア)	f	2.25	1.60	0.25	0.94	玄武岩	先端	345	鍬形鏃
115		I	C−27	Ⅳb	a	e(イ)	f	(2.00)	(1.50)	0.47	(1.05)	黒曜石	先端 片脚		鍬形鏃
116		I	C−27	Ⅳ	c	e(ア)	a	2.27	1.70	0.40	1.06	黒曜石		346	鍬形鏃
117		I	F−25	Ⅳb上	c	e(ア)	f	(2.20)	(1.60)	0.52	(1.20)	玄武岩	先端 片脚	347	鍬形鏃
118		I	F−21	Ⅳ	a	e(イ)	c	2.25	(1.60)	0.30	(0.75)	玄武岩	片脚	348	鍬形鏃
119		I	C−28	Ⅳb直上	c	e(イ)	a	1.60	1.25	0.22	0.72	石英		349	鍬形鏃
120		I	C−28	Ⅳb上	a	e(ア)	f	(1.50)	1.20	0.30	(0.37)	黒曜石	先端 片脚	350	鍬形鏃
121		I	D−27	Ⅳb上	c	b	a	2.00	(1.60)	0.35	(0.67)	チャート	片脚	351	鍬形鏃
122		J	表採		c	e(イ)	a	3.30	2.30	0.60	3.40	玄武岩		352	粗製
123		J	E−23	Ⅳ	c	d	b	3.20	(2.00)	0.70	(3.80)	玄武岩	片脚	353	粗製
124		J	D−27	Ⅳ	a	e(ア)	b	3.20	(1.65)	0.45	(2.00)	玄武岩	片脚	354	粗製
125		J	E−24	Ⅳ	b	c	b	2.85	(1.70)	0.35	(2.10)	玄武岩	片脚	355	
126		K	E−29	Ⅲa	a	b	a	2.85	1.65	0.42	1.05	黒曜石		356	
127		K	E−29	古道	a	b	b	(2.25)	(1.50)	0.30	(0.64)	石英		357	
128		K	D−22	Ⅳ上	d	b	b	3.10	1.65	0.45	1.53	チャート		358	
129		K	E−31	Ⅳb直上	d	b	a	3.01	2.10	0.40	1.67	玄武岩		359	先端部さらに鋭く尖る
130		K	C−29	Ⅳb	c	b	a	2.05	1.40	0.35	0.70	チャート		360	
131		K	D−27	Ⅳb直上	e	b	b	2.90	(2.10)	0.40	(2.25)	チャート	片脚	361	
132		K	F−26	Ⅳb	c	b	a	3.15	1.60	0.45	1.70	チャート		362	
133		K	D−25	Ⅳb上	f	b	a	2.75	1.68	0.60	1.60	玄武岩		363	
134		K	D−28	Ⅳb	l	b	a	(1.50)	(1.15)	0.25	(0.27)	黒曜石	両脚	364	
135		L	C−26	Ⅳb	d	f	a	2.95	(1.90)	0.30	(1.35)	黒曜石	片脚	365	
136		L	F−18	Ⅳ	d	f	a	3.02	1.60	0.35	1.40	石英		366	
137		L	E−27	Ⅲc	k	f	a	2.20	1.22	0.22	0.74	石英		367	五角形鏃
138		L	E−24	Ⅳb上	g	f	b	3.20	1.65	0.62	3.90	チャート		368	五角形鏃
139		L	E−20	Ⅲ	J	f	a	2.22	1.10	0.30	0.74	チャート		369	五角形鏃
140		M	C−28	Ⅳb上	k	a	b	1.75	(1.22)	0.25	(0.47)	黒曜石	片脚	370	鋸歯
141		M	D−21	Ⅳ	l	a	b	1.70	1.40	0.31	0.63	黒曜石	片脚	371	鋸歯
142		M	D−27	Ⅳb	k	a	f	(2.70)	1.60	0.32	(1.40)	頁岩	先端	372	鋸歯
143		M	ヒ	Ⅳ	d	a	b	(1.60)	1.30	0.30	(0.50)	黒曜石	先端	373	鋸歯
144		M	D−28	Ⅳb	g	a	a	2.15	1.60	0.42	0.86	黒曜石		374	鋸歯
145		M	C−23	Ⅳ上	a	a	a	2.40	1.70	0.35	1.00	玄武岩		375	鋸歯
146		N	6	Ⅳ	k	e(ア)	b	(2.20)	1.90	0.51	(0.63)	玄武岩	先端	376	

番号	形式		区	層	基部	側辺	先端	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	欠損部	挿図番号	備考
147	小石鏃	A	C－27	Ⅳ				1.45	(1.00)	0.15	(0.28)	黒曜石	片基端部	379	
148		A	D－28	Ⅳb				1.60	1.30	0.20	0.17	黒曜石		380	
149		A	D－28	Ⅳb直上				1.00	0.90	0.12	0.10	黒曜石	片基端部	381	
150		A	C－27	Ⅳ				1.20	1.00	0.15	0.15	黒曜石		382	
151		A	C－21	Ⅳ				1.50	1.50	0.22	0.48	黒曜石		383	
152		A	C－28	Ⅳ下				1.32	1.20	0.20	0.20	黒曜石		384	
153		A	C－28	Ⅳ				1.30	1.30	0.25	0.35	黒曜石		385	
154		A	D－31	Ⅵb						0.21	0.05	黒曜石	半欠		
155		A	C－29	Ⅳb直上						0.35	0.23	黒曜石	半欠		
156		B	ネ	Ⅳ	g	d	a	1.40	1.30	0.30	0.38	黒曜石		386	
157		B	C－30	Ⅳ	g	d	a	(1.07)	1.10	0.20	(0.14)	黒曜石		387	
158		B	C－29	Ⅳ	k	d	b	1.30	1.10	0.25	0.33	黒曜石		388	
159		B	C－26	Ⅳb	k	d	b	(1.00)	(0.90)	0.30	(0.15)	黒曜石		389	
160		B	C－27	Ⅳb上	g	d	a	1.40	1.30	0.20	0.51	黒曜石		390	
161		B	C－29	Ⅵb上	g	d	a	1.40	(1.00)	0.32	(0.31)	黒曜石	片脚	391	
162		B	C－26	Ⅳb上	k	d	a	1.55	(1.10)	0.35	(0.50)	黒曜石	片脚	392	
163		C	C－30	Ⅲa	d	d	b			0.18	0.07	黒曜石	先端 片脚		
164		C	C－30	Ⅳb	d	d	a	1.12	0.90	0.15	0.14	黒曜石		393	
165		C	C－30	Ⅳb上	k	d	a	0.90	1.30	0.18	0.11	黒曜石		394	
166		C	C－28	Ⅳb	f	d	b	1.35	(1.30)	0.25	(0.20)	黒曜石	片脚	395	
167		C	C－29	Ⅳb	k	d	a	1.20	1.07	0.18	0.11	黒曜石		396	
168		C	C－29	Ⅳb直上	g	d	a	1.00	1.10	0.20	1.50	石英		397	
169		C	C－27	Ⅳb上	g	c	b	1.60	(1.05)	0.15	(0.21)	黒曜石	片脚	398	
170		C	D－31	古道直上	g	d	b	(1.20)	(1.30)	0.30	(0.29)	黒曜石	先端	399	
171	特殊		E－31	Ⅳ				3.30	1.20	0.50	1.80	玄武岩		377	有茎鏃
172			D－31	Ⅳf				(2.00)	1.85	0.60	(1.55)	黒曜石	下端	378	雁股鏃



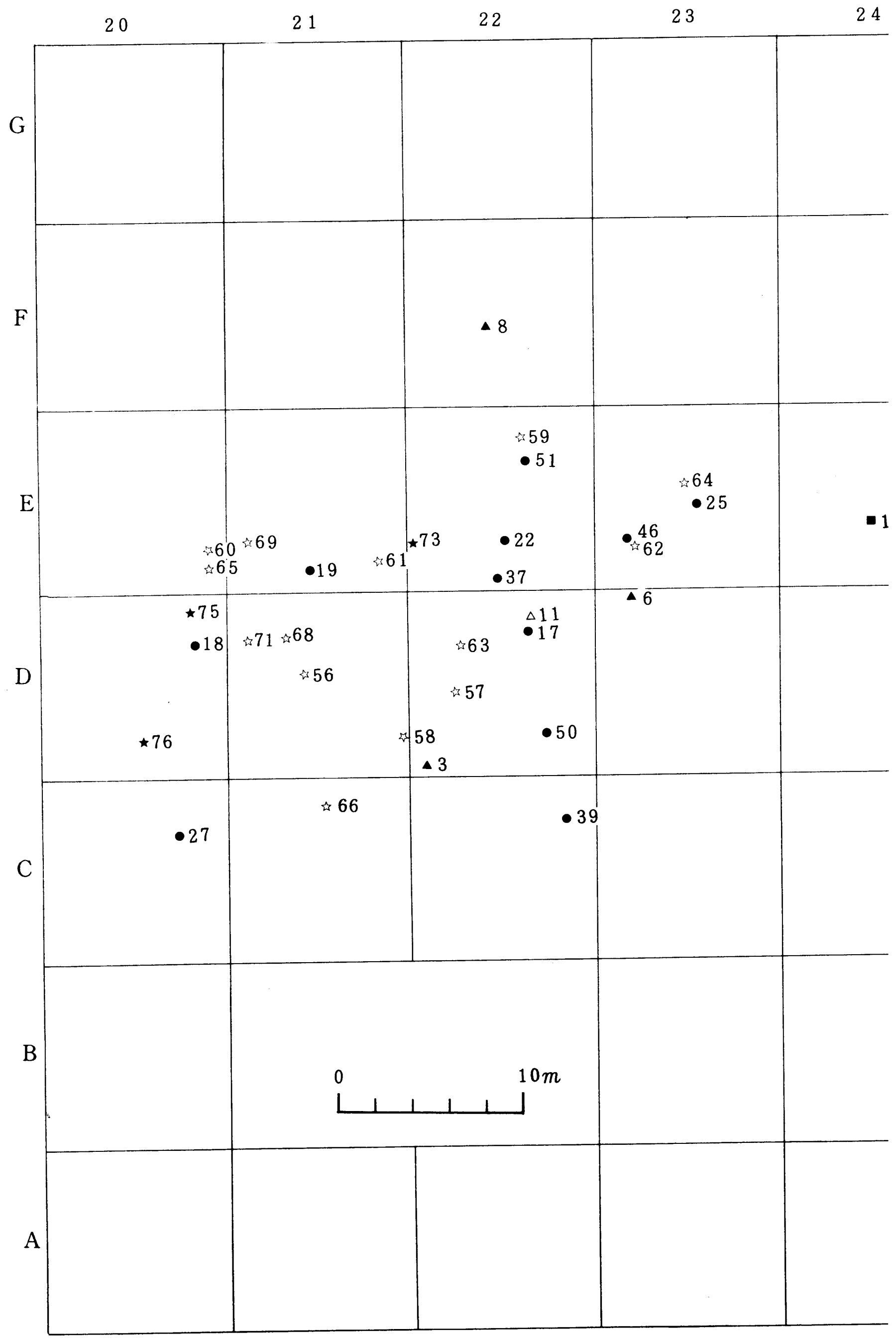
第37図　磨　製　石　斧　実　測　図

2．磨製石斧（第37図，図版27）400・401

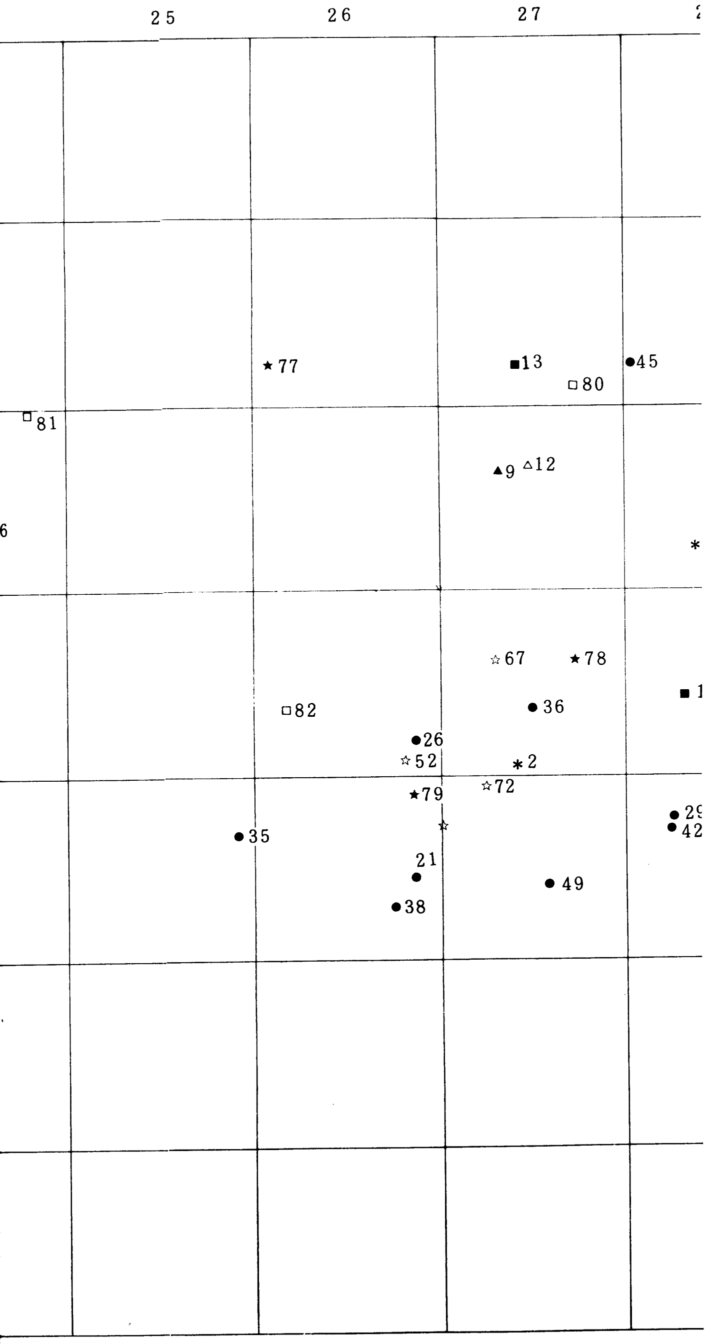
石斧はⅢａ層より２点出土したが，何れも磨製である。**400**は太形蛤刃で，刃部角約75度を測り，多方向の夥しい擦痕が見られる。基部上部には敲打痕が残り，緻密な質の砂岩製である。**401**も本来は太形蛤刃であったと思われるが，刃先を鋭くするために剝離して再度磨き，刃部角を約55度にしている。**400**よりも細かい粒子の砂岩製で，灰色を呈する。

3．石　匙（第39図，図版27）402～408

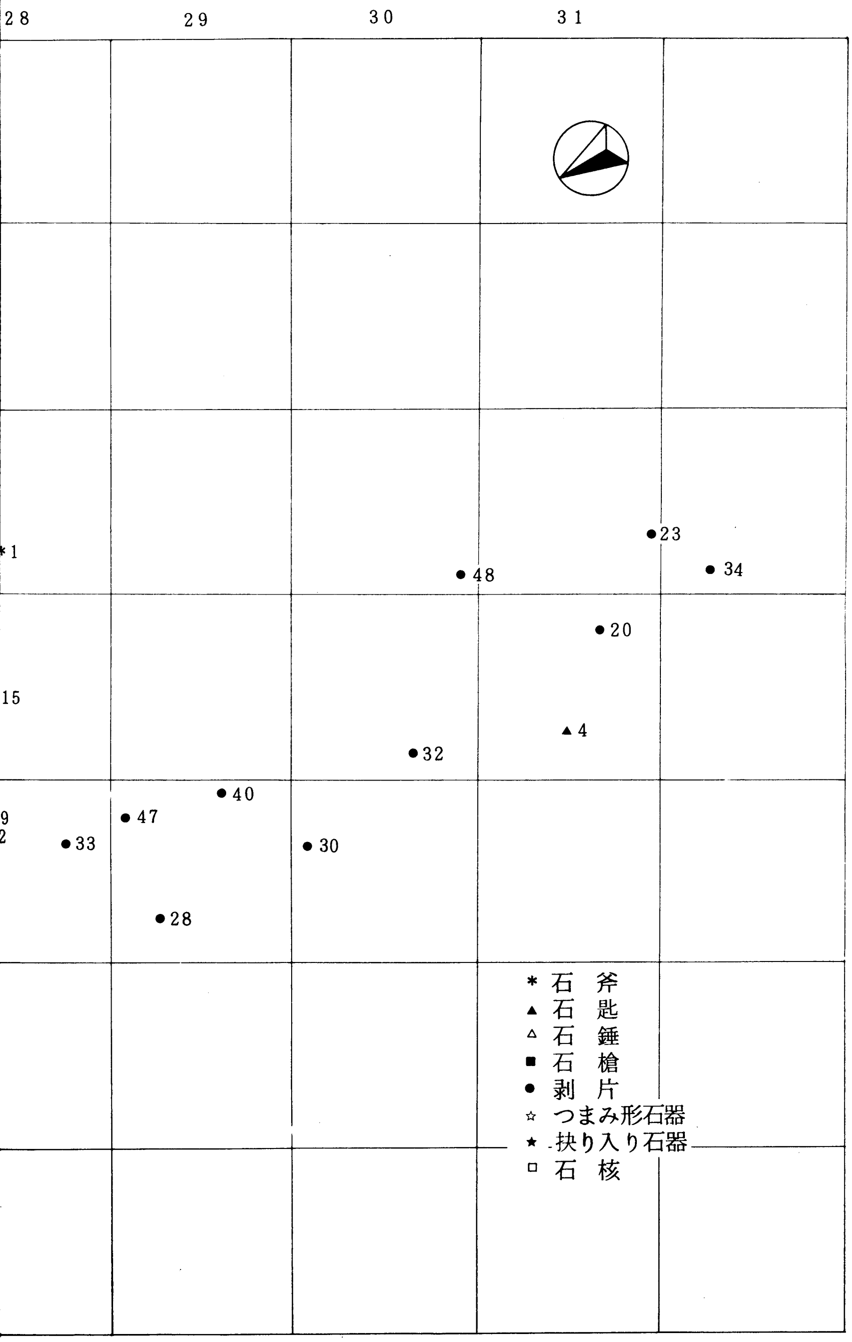
横型５点，縦型２点。**408**以外はⅣ層からの出土で，表採品も他の遺物から類推するとⅣ層中にあったものと思われる。**402～406**は横型石匙であるが，**405**以外はすべて外彎刃である。**402**は略平行四辺形を呈し，刃部も大まかに加工した粗製石匙で，つまみ部も薄く，打瘤部に自然面が残る。**403**は三日月形を呈し，厚手の精製石匙である。つまみ部と片面の刃部の加工は粗で，刃部角約60度を測る。404は玉髄の自然面を残した剝片で簡単なつまみを施し刃部は弯曲している。405も粗雑な玉髄を用いている。つまみ部はみられないが交互剝離の施しが石匙に類似しているため石匙の項に記載した。406はチャートで石匙の項にいれたが剝離等より石槍の分類の可能性もある。407は玄武岩を用いた撥状の石匙である。つまみ部はよく整形され，側縁部も交互剝離が施されているが下縁部は粗雑である。408はチャート製の縦長剝片の打瘤部側につまみを付けている。刃部は直線をなすもので先端部が欠損しているが，刃部には細かな調整を施こしている。

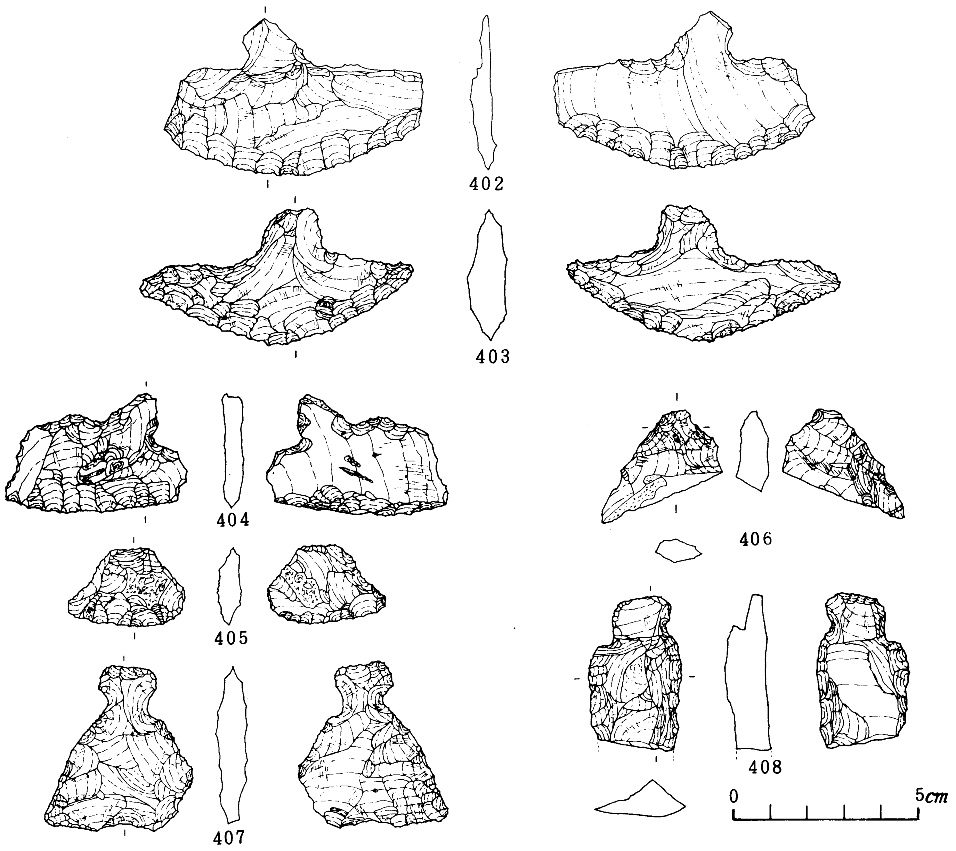


20
21
22
23
24
G
F
E
D
C
B
A
8
59
51
64
25
1
60
69
65
19
61
73
22
46
62
37
6
75
11
17
18
71
68
63
56
57
76
58
50
3
66
39
27
0
10m



第38図　縄文時代石器分布図


28
29
30
31
*1
15
9
2
●23
●34
●48
●20
▲4
●32
●40
●47
●33
●30
●28
* 石 斧
▲ 石 匙
△ 石 錘
■ 石 槍
● 剥 片
☆ つまみ形石器
★ 抉り入り石器
□ 石 核



第39図　石　匙　実　測　図

4．石錐（409・410）第40図　図版28

409は玄武岩の剥片を用い先端部を両端から加工調整して錐部を作り出したものであるが，尖頭状石器の可能性もある。410は断面三角形のやや厚めのチャートを用い頂部の一稜に両端から加工調整して錐部を作り出したものである。

5．石槍（411～414）第40図　図版28

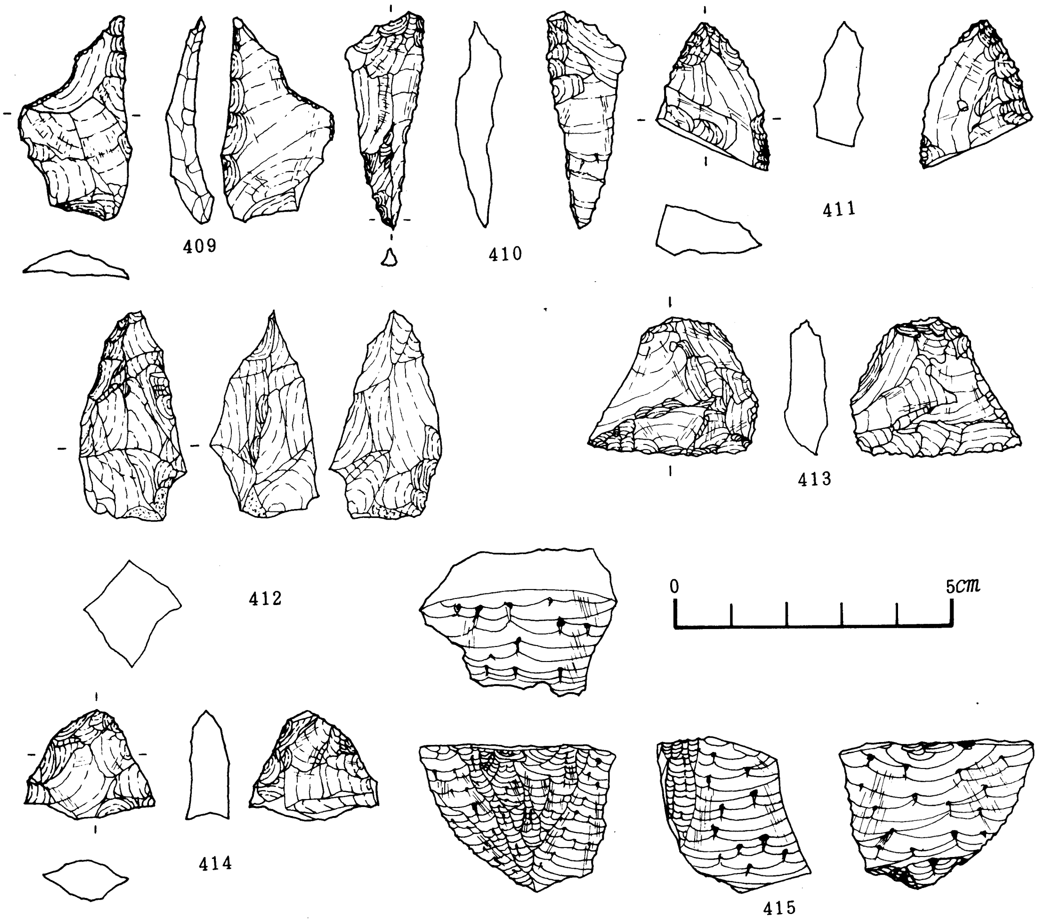
尖頭状石器であり，412が玄武岩であるが，他は全てチャートであり欠損している。チャート製の石槍は所謂木葉形尖頭器と呼ばれるものに類似している。

6．石核（415）第40図　図版28

定形の石核より残核ともとれる三船の黒曜石である。

7．加工痕のある剥片（416～428）第41図　図版28

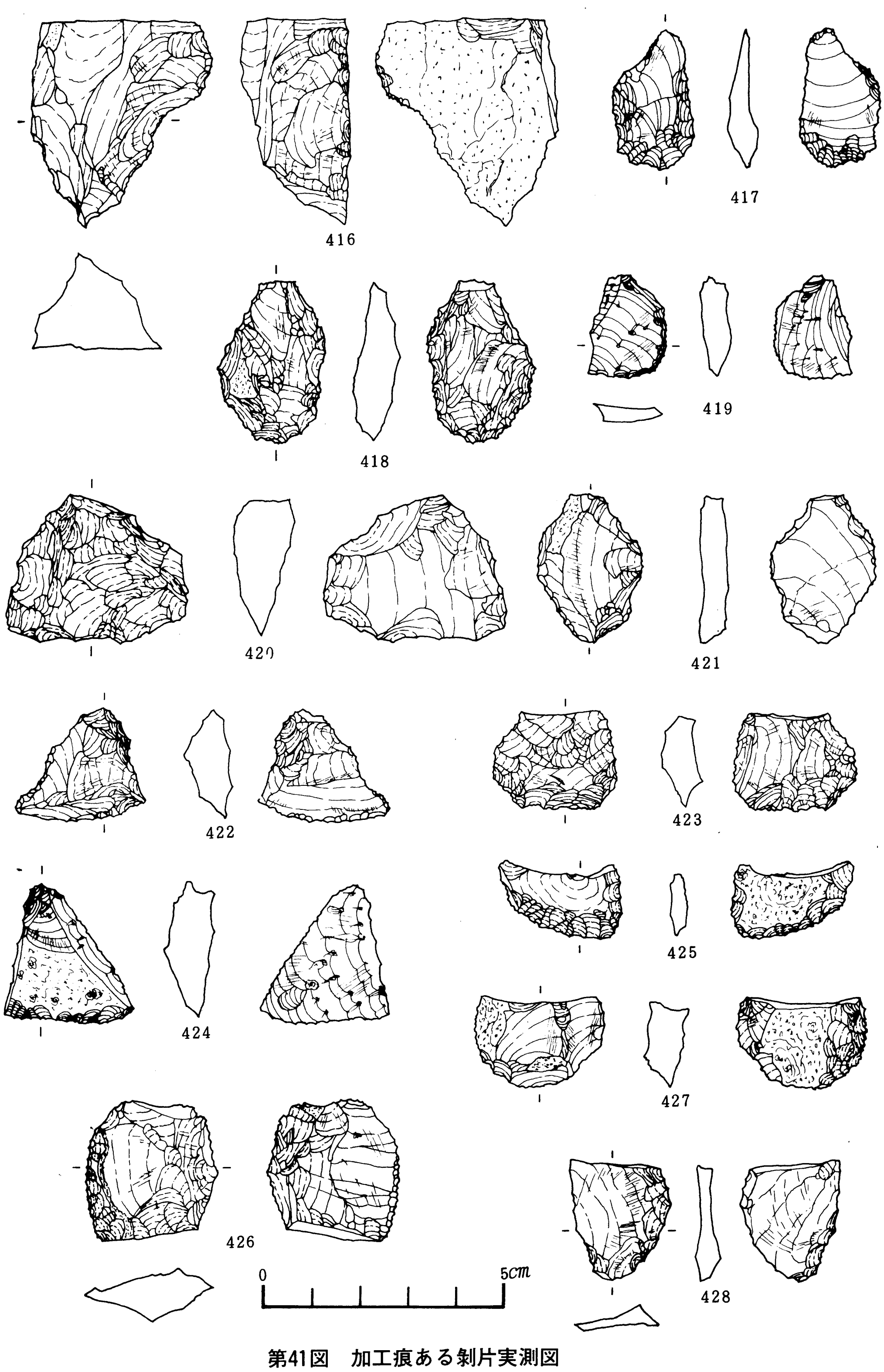
加工痕のある剥片と頃を設けたが，スクレイパーと呼ばれるものがほとんどである。416はチャートの原石を用い側縁部に調整剥離が施されている。417～422は石材の差はあるが，全て剥片の縁辺部に交互剥離による加工が施されたスクレイパーである。欠損しているものが多い。423はチャートを用いた側辺に片面加工を下縁部に両面加工を施したスクレイパーである。その他も全てチャート製のスクレイパーである。



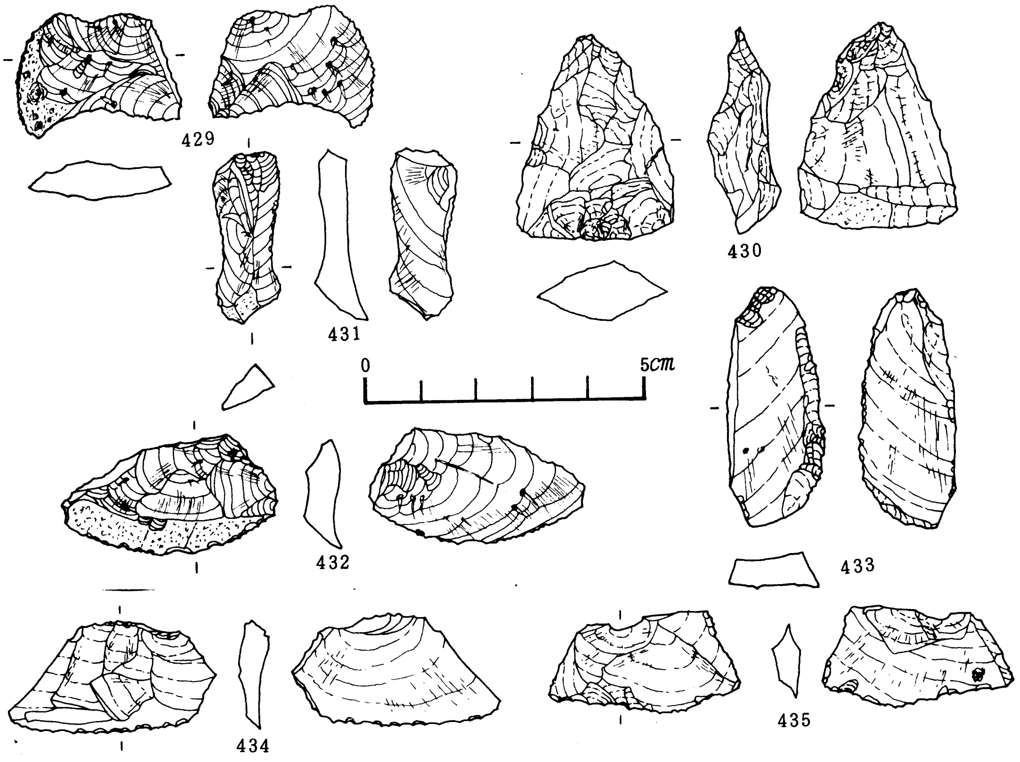
第40図　石 錐・石 槍・石 核 実 測 図

8．使用痕のある剝片（429～438）第42図　図版29

使用痕のある剝片は，13点出土した。石材は黒曜石・玄武岩・チャートを利用している。出土層位はⅣ層が主である。429は横剝ぎ剝片であり，自然面を残し，縁辺部一ケ所に使用痕がみられる。430は，玄武岩で表裏共剝離痕がみられ，石鏃の調整加工前とも思われるがここでは縁辺部の使用痕より剝片にいれた。431は気泡の少ない良質の黒曜石を用い，細石器文化に検出される調整剝離に類似している。調整された石核から剝離されたものであろう。側辺部に使用痕がみられる。432は横長の自然面を残した黒曜石製剝片で，下縁辺部に使用痕がみられる。433は，チャート製の縦長剝片であり石縁辺部に加工痕，使用痕がみられる。434，435とも玄武岩を利用した横剝ぎの剝片であり，下縁辺部に使用痕がみられる。436，437，438はいずれも石材の差異は認められるものの，細石刃状の剝片である。稜がしっかりしていないのとⅣ層上部より出土し，細石刃の確認が出来なかったものである。いずれも側辺に使用痕がみられる。



第41図　加工痕ある剝片実測図



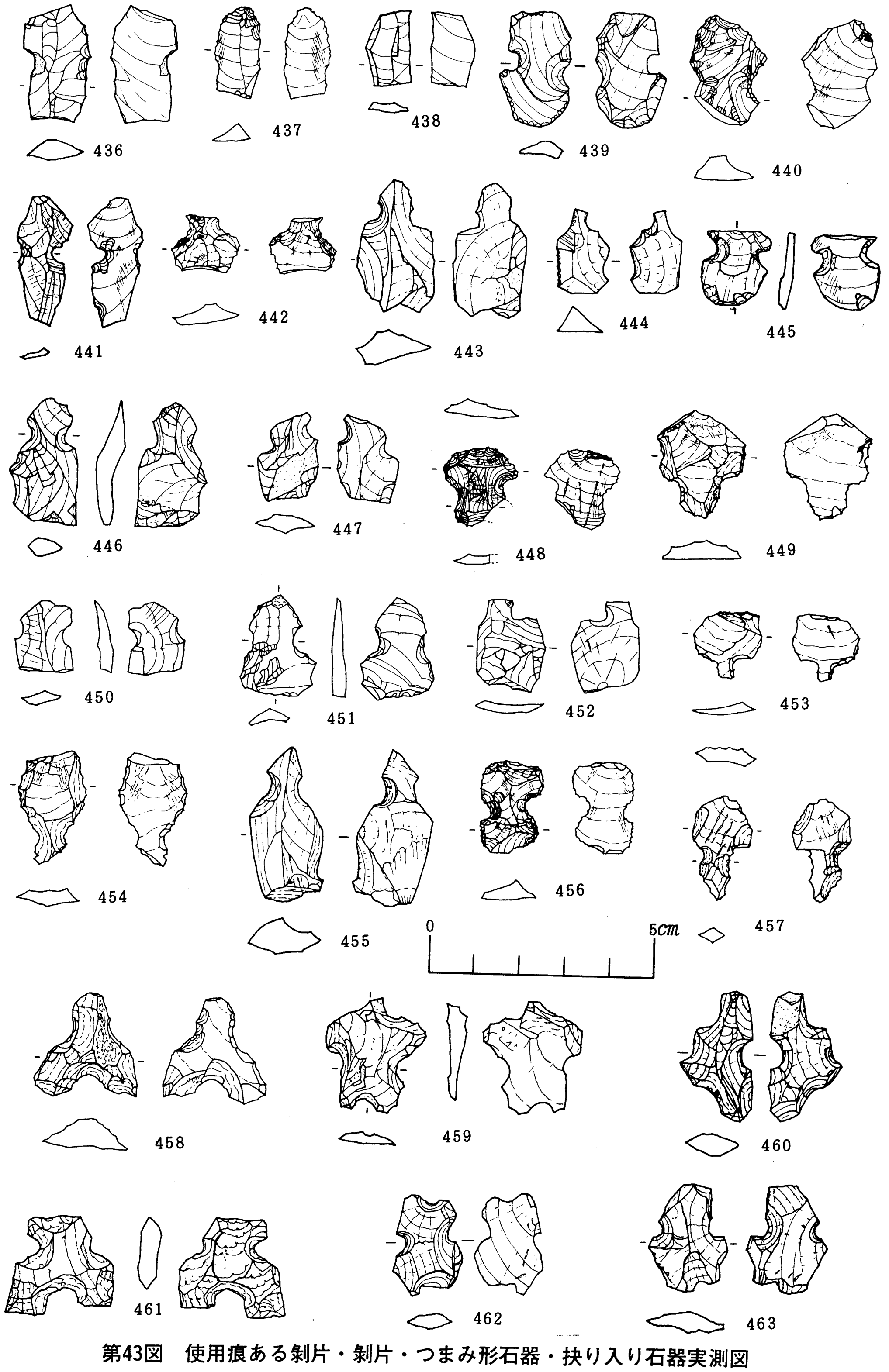
第42図　使用痕ある剝片実測図

9．つまみ形石器（439～457）

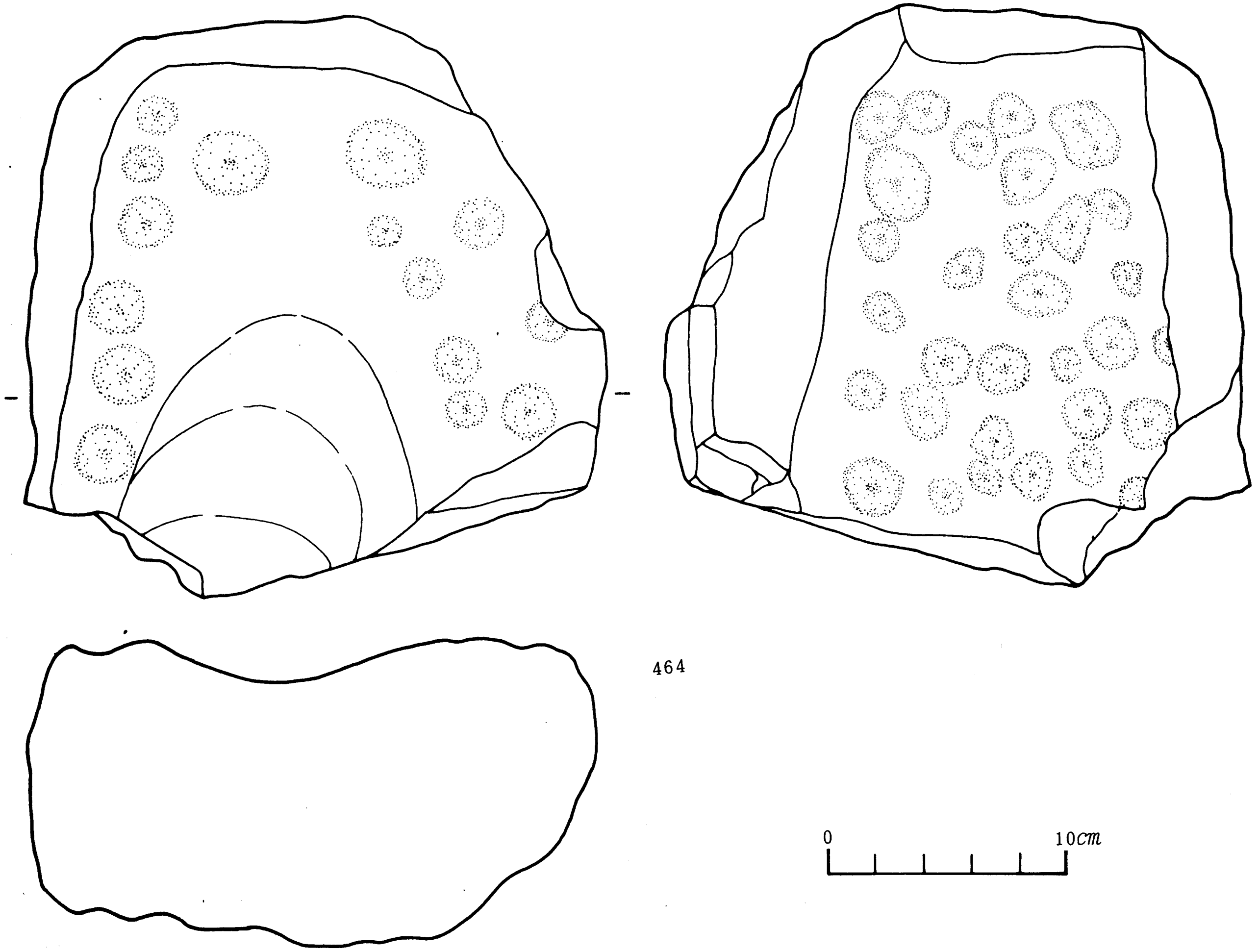
最近，西北九州で調査報告がなされているつまみ形石器と思われるものである。石材は黒曜石，玄武岩，チャートを用い19点出土している。縦長剝片を主として用いているが，444，450のように横剝ぎ剝片を利用したものもある。抉りも打撃点付近にあるもの，ほぼ中間部にあるもの，先端部にあるものと一定の方向性をもっていない。また抉りの打撃点は，表裏二点からのものは少なく，一点からの打撃による抉りが多くみられる。

10．抉り入り石器（458～463）

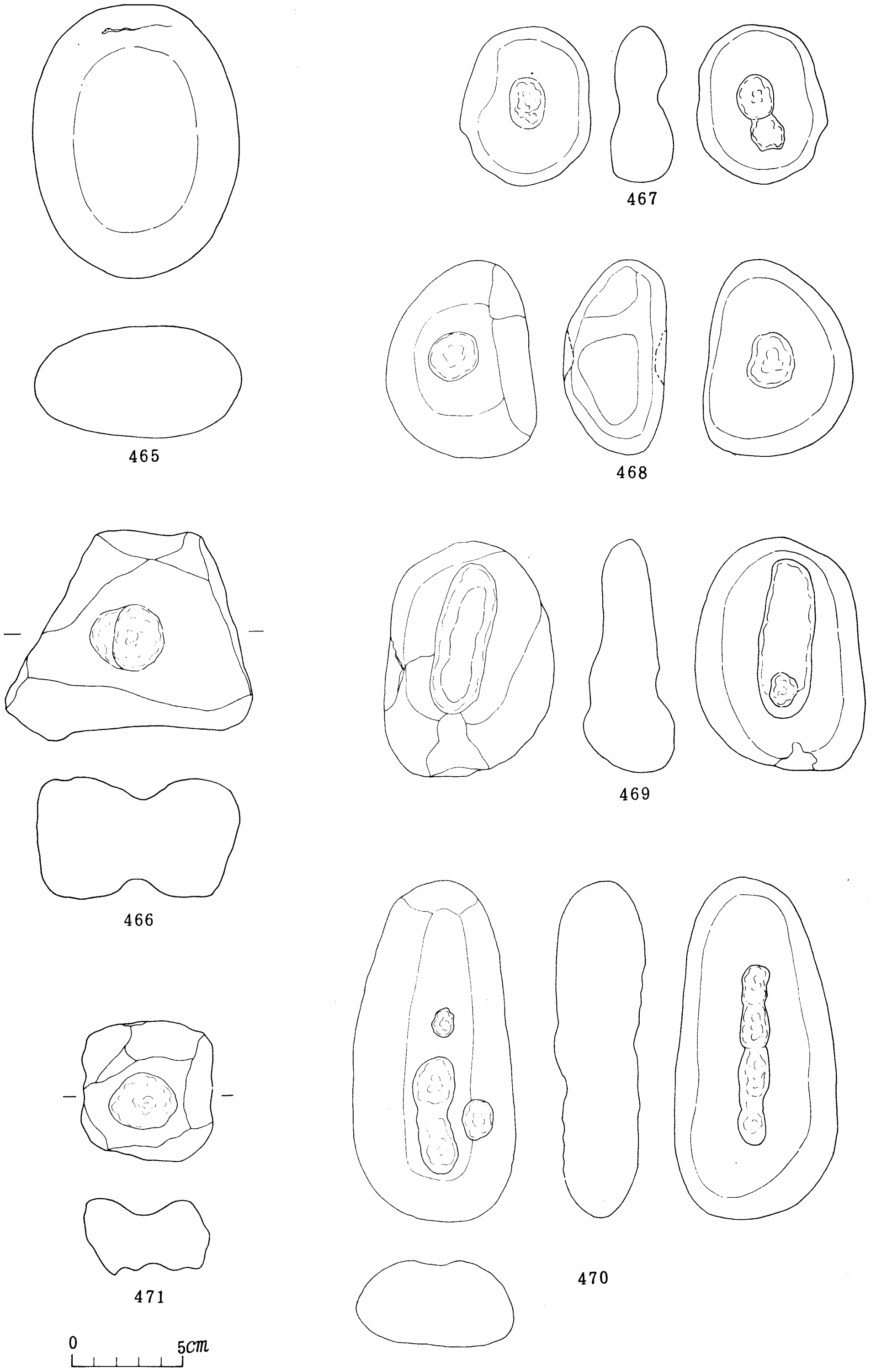
抉り入り石器は，つまみ形石器が左右対称の二つの抉りをもっているのに対し，それ以上抉りを入れた石器である。458は玄武岩を用い3個所の抉りがみられる。459も玄武岩で4個所抉りがみられ人形（ひとがた）をしている。460は砂岩で4個所に抉り，461は玄武岩製で3個所に抉りを入れよく整形されている。462，463は石材の差異はあるが，つまみ形石器の上縁と下縁に抉りを入れたものである。



第43図　使用痕ある剝片・剝片・つまみ形石器・抉り入り石器実測図



第44図　蜂ノ巣石



第45図　磨　石・凹　石

蜂ノ巣石（464）

蜂ノ巣石と呼ばれる石皿が２点出土した。２点とも安山岩の自然礫を利用し，表裏に１～２cmの敲打による凹みをもつものである。図示できなかったものは，取り上げたとたんバラバラになり，実測不可能となってしまった。464も，剥脱しているがほぼ原形をとどめている。石皿の特徴を示めすくぼみ部がある方を表とすると，くぼみを取り囲むように小さな凹みが15個所みられた。また裏面には，33個所の凹みをもっている。石皿の全体として，このままの形であったのか，石皿が破損して凹みをつけたのかは不明であるが，２点とも同型である。

磨石（465）

自然の川原石を利用し，磨いた跡があるものであるが，当遺跡では凹みのある磨石が多く，凹みのあるものは凹石として区別した。465は川原石を利用した，安山岩のものである。

凹石（466～471）

凹石は大きく分けて，磨石兼用のもの，ハンマーストンを利用したもの，凹石だけの用途の三通りに分けられる。467は，磨石の用途を残し，中央部表裏に敲打による凹みのあるものである。468は一見いびつな形の磨石でやはり，中央部表裏に敲打による凹みをもつ。469,470は，楕円状の自然石を利用したもので，表裏二ケ所に細長い敲打による凹みをもつものである。469は砂岩。470は安山岩であり先端部にも敲打痕がみられる。466，471は角礫を用いた表裏二箇所に凹みをもつ凹石である。

第3表 石 器 分 類 表

番号	形式	区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質	備考	挿図番号
1	石斧	E−28	3 a 下	17.95	6.65	3.6	689.0	砂岩		400
2	〃	D−27	3 a 上	13.30	5.20	3.40		砂岩		401
3	石匙	D−22	4 上	7.10	4.30	0.60	18.5	玄武岩	横型	402
4	〃	E−31	4 b 上	7.42	3.70	1.00	19.15	玄武岩	横型	403
5	〃	12	表 − Ⅲ	4.90	3.20	0.50	10.10	玉髄	横型	404
6	〃	D−23	4 上	(3.20)	(2.10)	0.65	(3.90)	玉髄	横型	405
7	〃	13	表 − 4	(3.30)	(2.20)	(0.85)	(3.55)	チャート	横型	406
8	〃	F−22	4	(4.50)	4.05	0.80	(11.65)	玄武岩	縦型	407
9	〃	E−27	3 c 下	4.20	2.45	1.00	10.5	チャート	縦型	408
10	石錐	D−26	表	3.70	2.05	0.45	3.10	玄武岩		409
11	〃	D−22	4 上	4.00	1.40	0.80	3.4	チャート		410
12	〃	E−27	4 上	2.45	2.10	0.75	2.25	石英(?)		
13	石槍	ヒ		3.10	(2.50)	0.80	(6.25)	チャート		413
14	〃	80−ヒ	4 a	(2.35)	(2.00)	(0.80)	(3.35)	チャート		414
15	〃	D−28	3 a 下	3.80	1.95	1.90	10.4	玄武岩		412
16	〃	E−24	4	(2.70)	(2.00)	(0.90)	(3.55)	チャート		411
17	加工痕のある剥片	D−23	4 上	2.90	1.65	0.61	3.15	チャート		417
18	〃	D−20	4	3.35	2.20	0.85	6.25	チャート		418
19	〃	E−21	4 b 直上	3.60	3.50	1.25	14.65	チャート		420
20	〃	D−31	4 b 直上	2.12	1.60	0.60	1.80	黒曜石		419
21	〃	C−26	4 b	3.10	2.20	0.52	4.35	チャート		421
22	〃	E−22	4	2.70	2.30	0.95	4.55	チャート		422
23	〃	E−31	4 b 直上	2.55	2.10	0.71	4.50	チャート		423
24	〃	F−24		2.90	2.70	0.95	5.25	黒曜石		424
25	〃	E−24	4	2.90	2.80	0.93	8.05	チャート		426
26	〃	D−26	4 b	2.50	1.50	0.35	1.90	玉髄		425
27	〃	C−20	4 上	2.60	1.70	0.70	4.90	玉髄		427
28	〃	C−29	3 a	2.4	1.55	0.80	2.95	黒曜石		
29	〃	C−28	4 b 上	3.0	2.25	1.00	5.70	チャート		
30	〃	C−30	4 b 直上	3.55	2.35	0.50	5.70	チャート		
31	〃	93	表−4 b	2.50	2.05	0.50	2.55	チャート		428
32	〃	D−30	4 b	2.30	1.50	0.85	2.20	石英		

番号	形　　式	区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質	備考	挿図番号
33	加工痕のある剝片	C－28	4 b	2.70	1.90	0.70	3.20	チャート		
34	〃	E－32	4 b	4.30	3.70	2.00	30.80	チャート		416
35	使用痕のある剝片	C－25	4	2.90	2.30	0.70	4.00	黒曜石		429
36	〃	D－29	4 b 上	2.60	1.40	0.50	2.25	玄武岩		436
37	〃	E－22	4	3.70	2.85	1.10	9.55	玄武岩		430
38	〃	C－26	4 b	3.90	2.10	0.60	4.60	黒曜石		432
39	〃	C－22	4 上	3.80	1.95	0.50	2.80	玄武岩		434
40	〃	C－29	4 b	3.10	1.20	0.50	2.00	黒曜石		431
41	〃			4.40	1.80	0.60	6.25	チャート	I・J トレンチI	433
42	〃	C－28	4 b	3.10	3.45	1.05	9.80	チャート		
43	〃	26	F － I	2.00	1.30	0.25	1.20	黒曜石		
44	〃	57	表－4 b	3.50	1.60	0.50	2.50	玄武岩		435
45	〃	D－28	4	3.40	1.60	0.60	2.45	玄武岩		
46	〃	E－23	4 上	2.00	1.00	0.35	0.57	チャート		437
47	〃	C－29	4 b	3.30	2.60	0.25	2.95	黒曜石		
48	剝　　片	E－30	4	2.65	2.30	2.10	18.33	変成質砂岩？		
49	〃	C－27	4 b	1.70	0.90	0.20	0.40	黒曜石		438
50	〃	D－22	4	2.50	2.90	1.05	9.10	チャート		
51	〃	E－22	4 上	4.15	1.50	0.05	3.50	玉髄		
52	つまみ形石器	D－26	4 b	2.55	1.60	0.50	1.50	玄武岩		439
53	〃	F－24	4 上	2.40	1.70	0.38	1.35	黒曜石		440
54	〃	50	表－3 a	2.90	1.65	0.55	2.65	玄武岩		443
55	〃	103	表－3 下	2.85	1.20	0.70	0.80	黒曜石		441
56	〃	D－21	4 上	1.50	1.30	0.15	0.63	黒曜石		442
57	〃	D－22	3	1.95	1.00	0.40	0.45	チャート		
58	〃	D－21	4 上	1.85	1.18	0.20	0.85	玄武岩		444
59	〃	E－22	4	1.65	1.45	0.55	0.60	黒曜石		445
60	〃	E－20	4	2.80	1.50	0.22	2.20	チャート		446
61	〃	E－21	4 b 上	2.00	1.30	0.40	1.005	玄武岩		447
62	〃	E－23	4 上	1.72	1.65	0.40	0.85	黒曜石		448
63	〃	D－22	4 上	1.90	2.30	0.35	1.65	玄武岩		449
64	〃	E－23	4	2.20	1.60	0.04	1.60	玄武岩		
65	〃	E－20	4 上	1.65	1.25	0.25	0.65	玄武岩		450

番号	形式	区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質	備考	挿図番号
66	つまみ形石器	C－21	4　上	2.25	1.35	0.20	1.00	チャート		451
67	〃	D－27	4 b 上	2.05	1.50	0.20	0.80	チャート		452
68	〃	D－21	4	1.50	1.50	0.20	0.40	玄武岩		453
69	〃	E－21	4	2.50	1.50	0.30	1.15	玄武岩		454
70	〃	C－27	4　b	3.40	1.61	0.80	3.95	玄武岩		455
71	〃	D－21	4	2.00	1.30	0.40	0.96	チャート		456
72	〃	ヒ		2.30	1.30	0.30	0.95	玄武岩		457
73	抉り入り石器	E－22	4	2.30	2.30	0.60	1.87	玄武岩?		458
74	〃	73	3 a 下	2.50	2.15	0.21	1.75	玄武岩		459
75	〃	D－20	4	2.85	1.60	0.50	1.95	砂岩		460
76	〃	D－20	4	2.40	2.20	0.40	2.15	玄武岩		461
77	〃	F－26	4 b 上	2.20	1.55	0.21	1.005	玄武岩		462
78	〃	D－27	4 b 上	2.40	1.70	0.50	1.55	砂岩		463
79	〃	C－26	4　b	2.10	1.75	0.47	1.50	玄武岩		
80	石核	D－27	4　下	2.35	2.60	2.05	55.25	黒曜石		
81	〃	E－24	4	3.50	2.60	2.10	33.40	黒曜石		415
82	〃	C－26	4 b	2.20	2.80	1.90	11.10	黒曜石		

(3) 小　括

縄文式土器

縄文式土器を主とし，弥生式土器も少量出土している。縄文式土器は5類土器が最も多い。次に4類土器である。以下特徴的なものについてまとめてみたい。

1類土器

内厚の器壁と内面平滑な調整，円筒形で平坦面を有する口唇部，稜杉状の胴部など石坂式の特徴をもっている。しかし，口唇部に刻線のないもの，胴部に縦に貝殻条痕による調整を行っているもの，aの3～12のごとく連点刺突文による文様を有するものなどもあり，変化に富んでいる。aは石峰遺跡①の連点鋸歯文土器との類縁関係が深い。

2類土器

少量の出土であったが箆(へら)状施文具による平行沈線を文様の基本とするもので，三代寺遺跡②の第Ⅳ類土器に酷似している。

3類土器

数片の出土である。口縁部は貝殻刺突線文を施し，胴部は貝殻腹縁による押圧文で調整している。吉田式③の特徴と類似しているが，押し引き文と押圧文という施文法が異なっている。加栗山遺跡のⅢbに該当するものであろう。

4類土器

本遺跡では5類土器についで，多く出土した。口唇部の平坦面，口縁部の貝殻縁を刺突した文様，胴部の貝殻条痕とさらに重複しての貝殻刺突線文，楔形凸帯等の特徴から前平式土器と考えられる。波状口縁で山形隆起部を有する角筒土器を伴っている。

5類土器

本遺跡で最も多く出土したが，破片のみで完形品はみられなかった。特徴をまとめると①ラッパ状に開く大きな口縁で，途中で屈折してやわらかい「く」字形を呈すること。②波状口縁を有すること。③文様は口縁端部の刻目と，口縁上部，屈折部，頸部付近にみられる細隆線刻目凸帯を有することと，これらの間に浅い沈線文を施すこと。④頸部のくびれ部内面に稜線をもつことなどである。これらの特徴はすでに石峰遺跡出土の土器の中に平栫式土器の一部として「…口縁部の肥厚の痕跡が屈曲となって残り，刻目凸帯が細隆線化し，頸部と胴部の堺の土器内面の稜線は，次に出現する塞ノ神式の特徴であり，移行形態としての様相を示している。…」と報告されている④。これらの土器は，以上のごとく平栫式から塞ノ神式への移行形態の土器として考えられるが，胴部以下の文様については不明である。しかしながら，出土状況によれば7類a土器と共伴して出土していたことは確実である。共に分布はD－21・22区にみられⅣ層上位に多く出土している。また土器の色調，胎土も良く類似しており，文様に細隆線刻目凸帯を有することなどが共通点が多く，5類土器の胴部にあたるものと考えられる。7類aは沈線で区画されない撚糸文を有する土器で塞ノ神A式aと呼ばれるものである⑤。これらのことから5類土器は，口縁部は平栫式から塞ノ神式へという移行形態を示し，胴部はすでに塞ノ神Aa

式というまさに平栫式と塞ノ神式をつなぐ型式変化の中の中間的な特徴をもつ土器といえよう。

6類土器

5類土器の特徴に，さらに刺突連点文を加えたものである。したがって口縁部の文様帯部分は空間のないように文様が施文されている。細隆線刻目凸帯文も，凸帯そのものが簡略化され，刻目だけが強調されている。器形も途中の屈折部がなくなり，直線的に開く傾向がある。胎土，焼成共に5類土器とは異なっているが，5類同様平栫式から塞ノ神式への中間形態の土器といえよう。

7類土器

7a類は撚糸文を縦および網目状に間隔をおいて施したもので，塞ノ神A式aといわれるものである。すでに前述したように5類土器と同じ，細隆線刻目凸帯を有し，また⑥出土状況から5類土器の胴部破片と思われる。7b類は直沈線文で区切られた中に撚糸文を配するもので，塞ノ神A式bと考えられる。

8類土器

箆(へら)状の刺突具で連点文を施するもの（a）や，貝殻腹縁部で連続した刺突文を有するもの（b）幾何学的な箆(へら)描きの沈線内に貝殻条痕を充当したもの（c）などに細分類した。Cは塞ノ神B式cに当り，a・bは塞ノ神B式dと考えられる。塞ノ神B式dは貝殻文による連続刺突文を主とするが，箆(へら)状の刺突具（先端部が丸味をおびたもの，三角状に鋭く尖るもの，細く薄いもの，爪形状をなすもの等さまざまである。）を用いている点は注目される。

9類以下は少量の出土であるのでまとめて記録する。9類は押型文土器である。208の多重円状の土器は近年，木佐貫原遺跡，中尾田遺跡と出土例が増えてきている。10類は手向山式土器であろう。頸部と胴部を区切る⑦刻目凸帯を⑧境にして文様を分かつのであるが，沈線文以外の文様は不明であった。11類は阿高式土器，12類は出水式土器，13類は市来式土器である。

本遺跡からは180点あまりの石鏃が出土した。ほとんど全てが打製石鏃である。磨製石鏃はA類の2点がみられたが，Ⅲa層出土のものである。本遺跡はⅢa層から弥生式土器も少量出土しており，この石鏃も弥生時代のものと考えて良い。

一方，打製石鏃は，Ⅲ層出土の11点を除き，他はすべてⅣ層出土のものである。Ⅳ層は早・前期にあたるとみられ，これらの石鏃も縄文時代早前期のものであろう。分布範囲はⅢ層出土のものが，全面に点在しているのに対し，Ⅳ層出土のものはC－27区を中心にC－28，29区・D－27・28区にほとんど集中を示している。またD・E－31・32区，E－23・24区にもまとまりがみられた。また平基式石鏃はC－26区から30区にかけて出土した。

石鏃の形態は凹基式が90％以上を占めている。しかしながら，明確な「わたくり」を表現するものは66％あまりである。E類～K類などである。凹基式の中でもA・B類は抉(えぐ)りが浅く，小さいもので平基式に類似したものが多い。また小石鏃としたものは小形であり，「わたくり」を作り出すのは不可能だからであろう。

石鏃の形態によって大きな差異が認められた。E類，J類などのように長さが2.5～3.5cm，

重さが3g 余りの大きな鏃と，小石鏃として分類した長さ1cm余り，0.2g 前後の小さな剥片鏃である。使用法や目的が異っているのであろう。小石鏃については，剥片鏃，細石鏃，小形の三角鏃など各種の呼称がある。

凹基式石鏃については，正三角形鏃（D類），二等辺形角形鏃（B・C・E・F・G類），円脚鏃（H類），鍬形鏃（I類），長身鏃（K類），五角形鏃（L類），鋸歯状石鏃（M類）など多種類にわたっていることも貴重な成果であった。

有茎鏃については，草創期にまれに見られるが，これは有舌尖頭器における舌部製作の技法が石鏃の一部に影響を残しているものであり，前期になって，東北地方北部以北において前期初頭に明瞭な石鏃の組成の一つとして出現する。

（註）

① 鹿児島県教育委員会「石 峰 遺 跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（12）１９８０年

② 鹿児島県教育委員会「三代寺遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（11）１９７９年

③ 鹿児島県教育委員会「加栗山遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（13）１９８１年

④ ①に同じ

⑤ 河口貞徳「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』第6号　１９７２年

⑥ ⑤に同じ

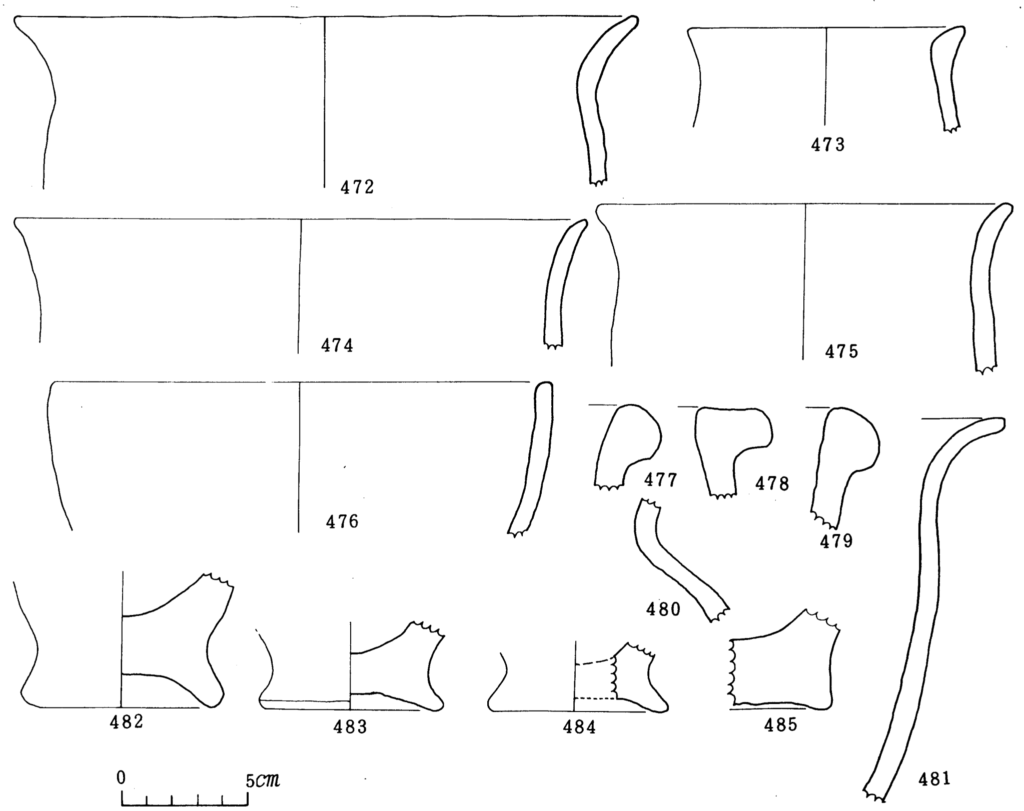
⑦ 鹿児島県教育委員会「木佐貫原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（11）1979年

⑧ 鹿児島県教育委員会「中 尾 田 遺 跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（15）1981年

⑨ 鹿児島県教育委員会「放 光 寺 遺 跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（2）1976年

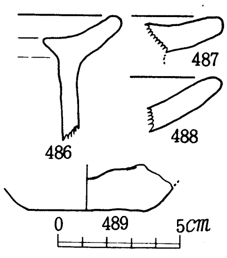
第3節　弥生時代

Ｆ－21区に４片，他は21区～30区にひろがって少量出土している。層はⅢａ層上面やⅣ層溝状遺構の埋土，古道など一定していない。472～475，481は甕形土器の口縁部である。胴部がやや張り，頸部でやわらかくくびれ，口縁部にかけて外反する。内面に稜線を有しない。口唇部は丸く仕上げている。器壁は薄く，胎土は粗で砂粒子が露出しているものが多い。明黄褐色を呈し外面には媒が付着している。外反する口縁部分の内外面は刷毛目による横位の条痕で調整を施している。473はわずかに外反する小さい口縁部が付く。476は鉢形土器で直口気味に開き，口縁端部でやや内弯気味となる。内外とも灰褐色を呈し，刷毛目調整がみられる。477～479は口縁部に部厚い逆Ｌ字形の丸味を帯びた凸帯を付けている。器壁も厚く，くすんだ茶褐色を呈する。器形は不明である。222は明褐色を呈した壺形土器の肩部付近に当り，内面に指頭による調整痕がみられる。器面の磨滅ははげしく，砂粒子が露出している。482～485は底部である。いずれも浅い上げ底を有する。482～484は底面端部がやや外側へ張り出す。485は平底気味である。482は手捏状に調整し，他は刷毛目によって器面の調整を行っている。



第46図　弥生式土器（１）

486～488は甕形土器の口縁部で，石英・黒雲母などの微石粒を多量に含む砂質土を用いる。486と487は口縁端が内外に拡張する，いわゆる鋤先状の口縁で，上縁がややくぼんでいる。486はE28区から出土したもので，黄みがかった褐色を呈し，表面が相当に磨滅しているが，なで整形である。487はE－27区で出土し，外面はやや黒色化している。488はD－27区で出土したくの字状の口縁で，褐色を呈す。489はD17区で出土した壺形土器の底部で，丸みをもって胴部へ移る。茶褐色を呈し，焼成は良い。



第47図　弥生式土器(2)

第4節　古墳時代

古墳時代の遺物は土器のみで，器形として甕形土器・小型甕形土器・鉢形土器・高坏形土器がある。

甕形土器（490～502）は，口縁部がくの字状に外反し，脚台が付くものである。頸部には貼り付け突帯の付くものと，付かないものがあり，貼り付け突帯には押板圧痕あるいは布目圧痕が付く。脚台は割合に低いものである。胎土は石英粒などの砂粒を多く含む砂質のもので，表面の磨滅が目立つ。整形は内面・外面ともにヘラによる横なでをするものが多いが，490は口縁部の外面がたて方向のハケなで，内面をハケなでのあとヘラなでをしている。499も一部ハケなでをしている。

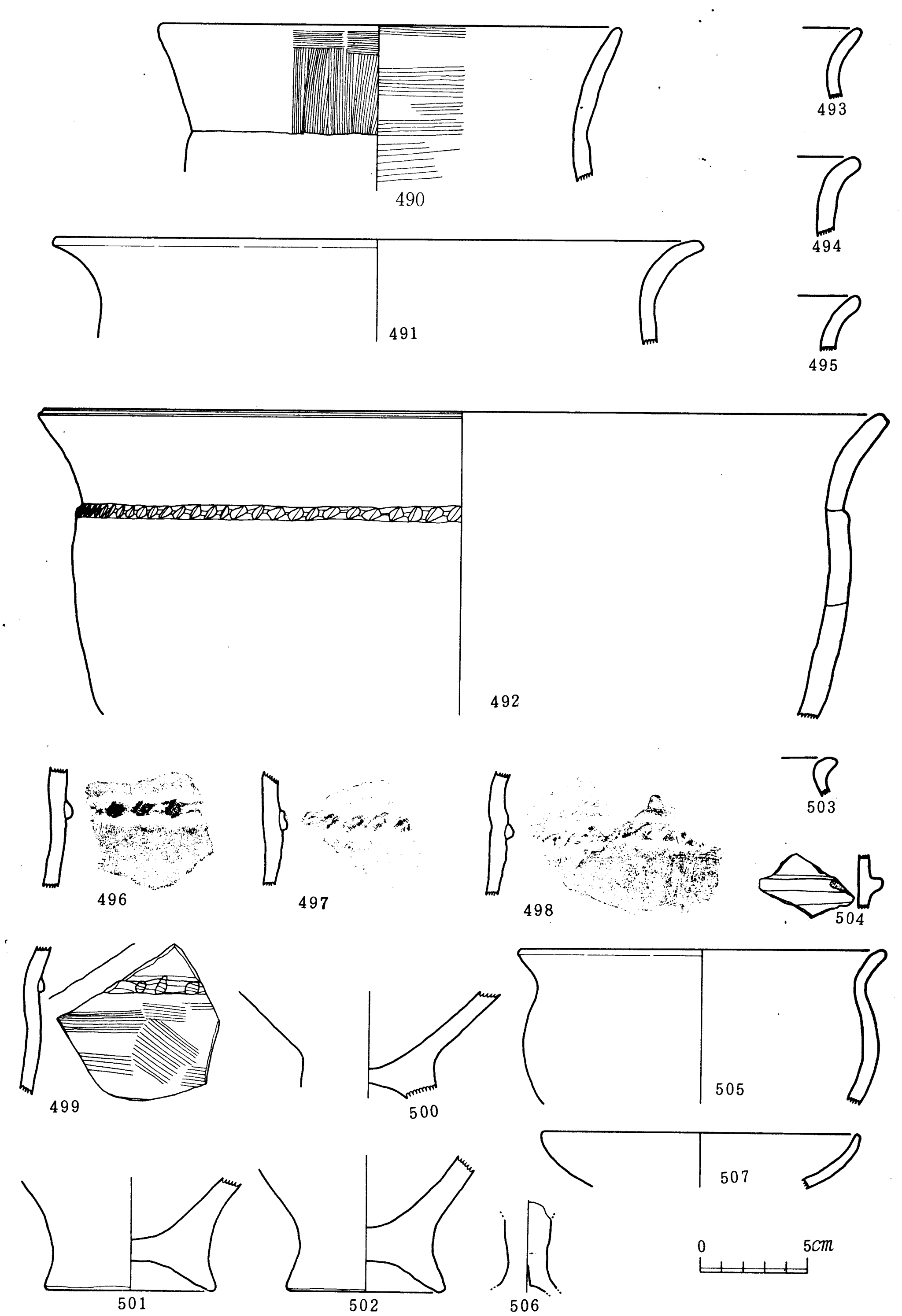
小型甕形土器（503）は口縁部が強く外反するもので，磨滅がいちぢるしい。

鉢形土器（504・505）は，まっすぐ立ちあがり丹塗りのものと，くの字状に外反するものとがある。丹塗りのものは，胴部に断面矩形の突帯が付き，胎土は細かい砂質である。

高坏形土器（506・507）は，口縁端が丸みをもっておさまる浅い坏部と，小型の筒部である。筒部から脚据へは開きながら屈曲する。砂質の胎土で，坏部の磨滅は全面に及ぶ。

図番	出土区	層	色	焼成度	備　考	図番	出土区	層	色	焼成度	備　考
490	D17	Ⅱ	茶褐	ふつう		499	E23	Ⅰ	茶褐	良好	
491	F21	Ⅲa	淡茶褐	〃	スス付着	500			〃	ふつう	
492	F27	〃	〃	良好	磨滅	501	D27	溝	淡茶褐	良好	
493	E20	〃	〃	〃		502	C·D17	Ⅱ	〃	〃	
494	F29	〃	褐	ふつう	磨滅	503			灰褐	ふつう	磨滅が目立つ
495	D30	Ⅲ下	茶褐	良好		504			淡茶褐	〃	丹塗り
496	D27	Ⅳ上	淡茶褐	〃		505	F24	Ⅰ	〃	〃	磨滅
497			茶褐	〃		506	〃	〃	〃	〃	磨滅が目立つ
498			淡茶褐	〃		507	D28	Ⅲa上	茶褐	良好	

第4表　古墳時代の土器一覧表



第48図　古墳時代の土器

第5節　中　世

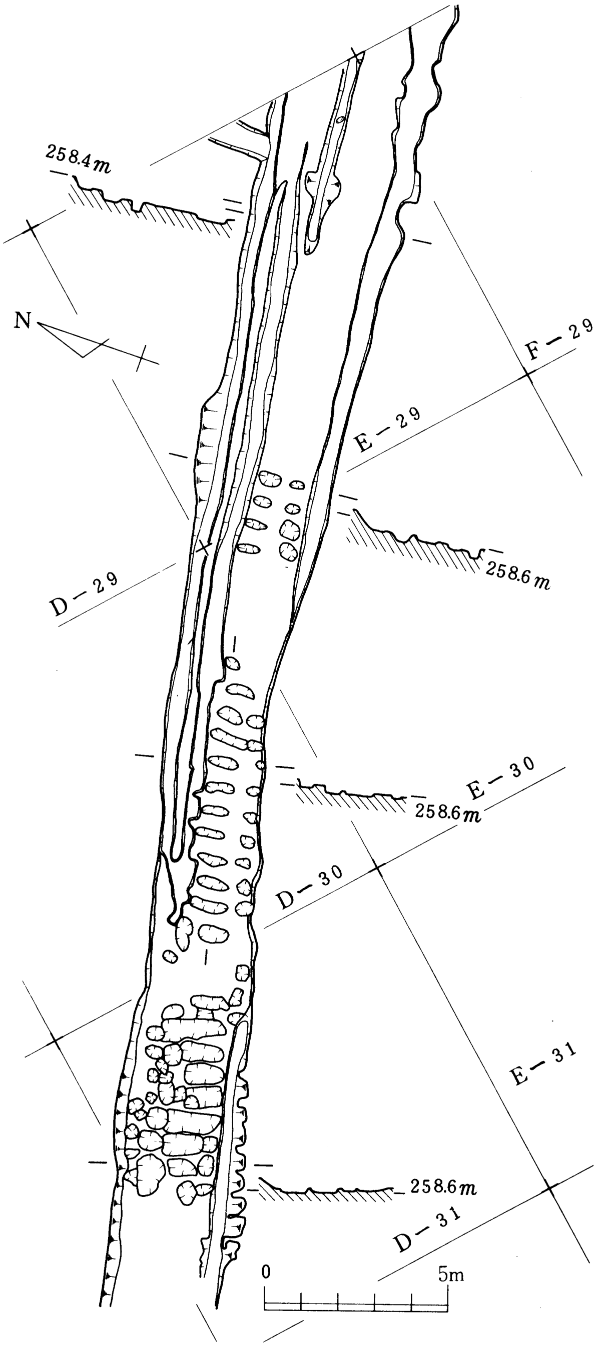
(1) 遺構

a．道路跡

C31区からほぼ東西に縦貫自動車道を横切るようにして道路跡が検出された。これはC31区からD31区・D30区・E30区・E29区を通り，F29区・E28区へと続いている。調査した範囲では完全に埋没し，土手の下になっていたが，東側は現在でも幅1mほどの農道として利用されており，西側は現在，竹などが繁茂して通行不能だが，掘り切りの道路としてその痕跡をとどめている。これは急傾斜でもって西側へ下降し，町道長谷一綾織線と接している。

道路面は非常に固くなっており，茶褐色の固い土がうまっている。道路の幅は1.6m前後を測り，部分的にはその両脇に幅50cm，深さ10～30cmの溝がある。溝のあり方からみると少なくても3回以上，幅の移動があったらしい。溝の底は鉄分が凝固し茶褐色に変化している。道路面にはいわゆるポットホールと呼ばれる凹凸が規則性をもって並んであり，多量の降雨時には流水があったことを示している。

道路面には鉄製刀子・土師器・白磁・青磁・天目・瓦質土器・石鍋などが出土している。これらは15～16世紀頃のものであり，この道路跡の年代を示している。



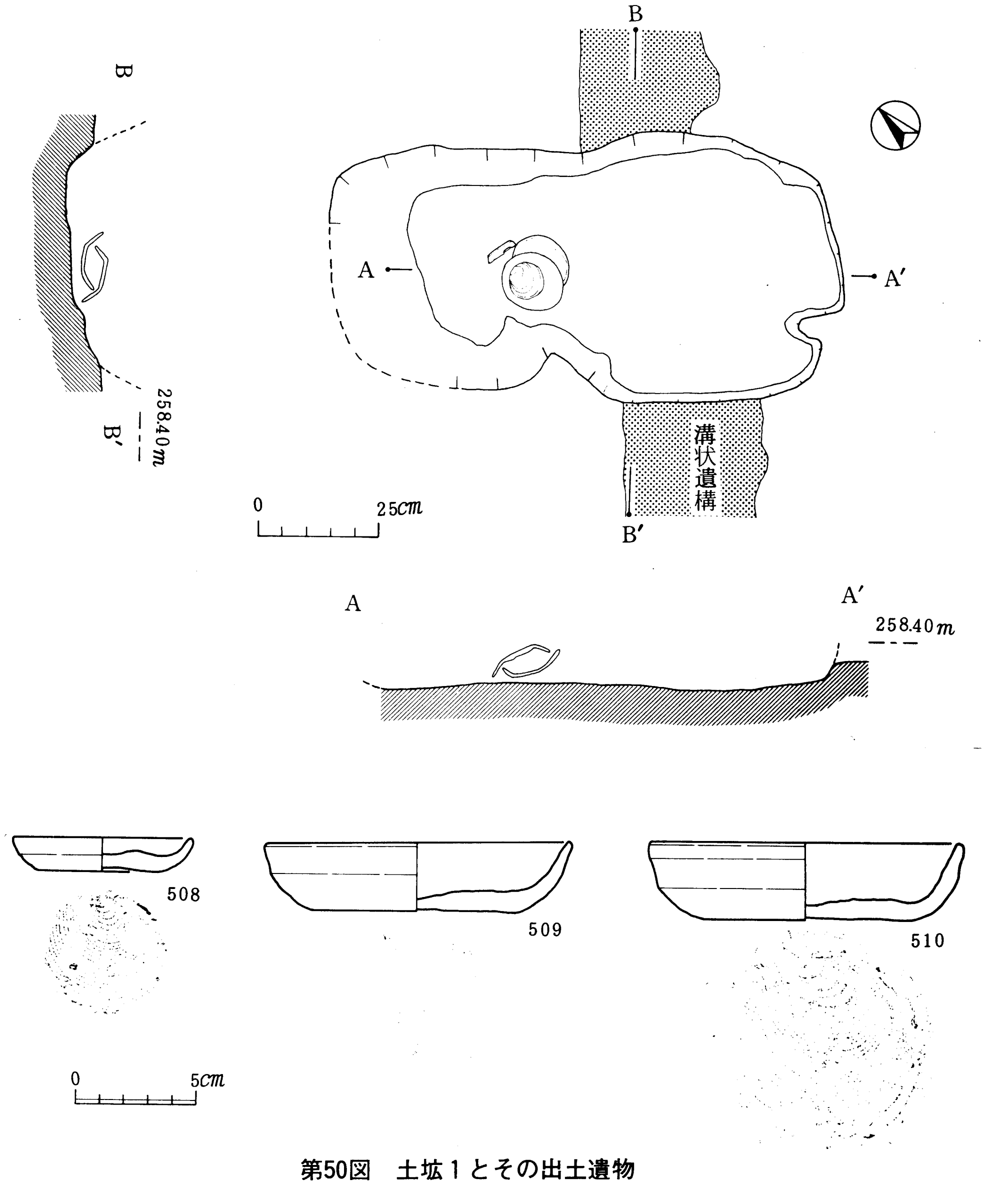
第49図　道路跡

b．土　坑

① 土坑１

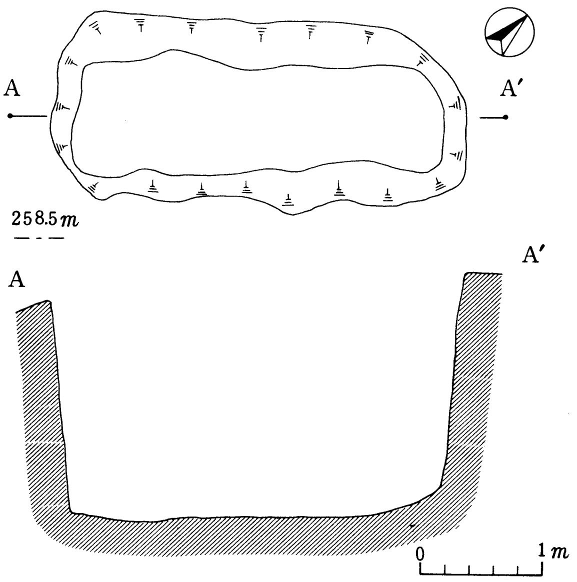
E22区で検出された黒色土のはいっただ円形の土坑である。やや不規則であるが，上面の長径105cm，短径50cm，底面の長径85cm，短径43cm，深さ10cmを測り，主軸はNE47°にある。1号溝より新しい。

土坑の北縁に近く３枚の土師器皿が重なるようにして置かれている。

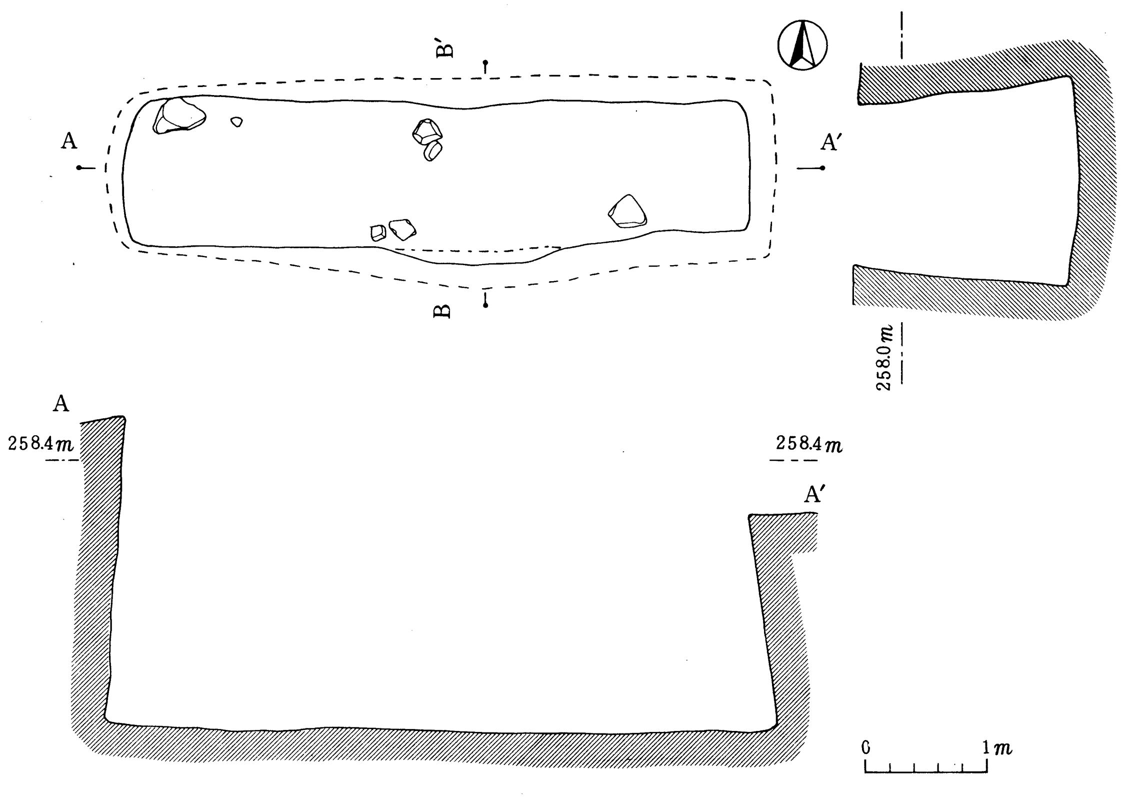


第50図　土坑１とその出土遺物

508は小型の皿で，口縁直径7.5cm，底部直径5cm，高さ1.4cmを測る。底に指圧痕とヘラ様圧痕が各1ケ所みられる。509と510は重なって検出されたもので，509が口縁直径12.8cm，底部直径8.6cm，高さ2.8cmを測る。内面・外面ともにススが付着している。510は口縁直径13cm，底部直径8cm，高さ3.2cmを測る。これらはすべて回転糸切底で，焼成は良好である。胎土は精製した土を使い，淡茶褐色あるいは茶褐色を呈する。



第51図　土　坑　2



第52図　土　坑　3

②土坑２

E33区で検出された角の丸い長方形土坑である。上面で長辺170cm，短辺75cm，底面で長辺150cm，短辺40cm，深さ90cmを測る。主軸はＮＥ42°にあり，黒色土がはいっている。

③土坑３

D30区で検出された長方形土坑である。袋状を呈しており，上面で長辺255cm，短辺60cm，底面で長辺275cm，短辺80cm，深さ90cmを測る。主軸はＮＥ88°にあり，黒色土がはいっている。周縁部に７個の角礫がみられる。

Ｃ．溝

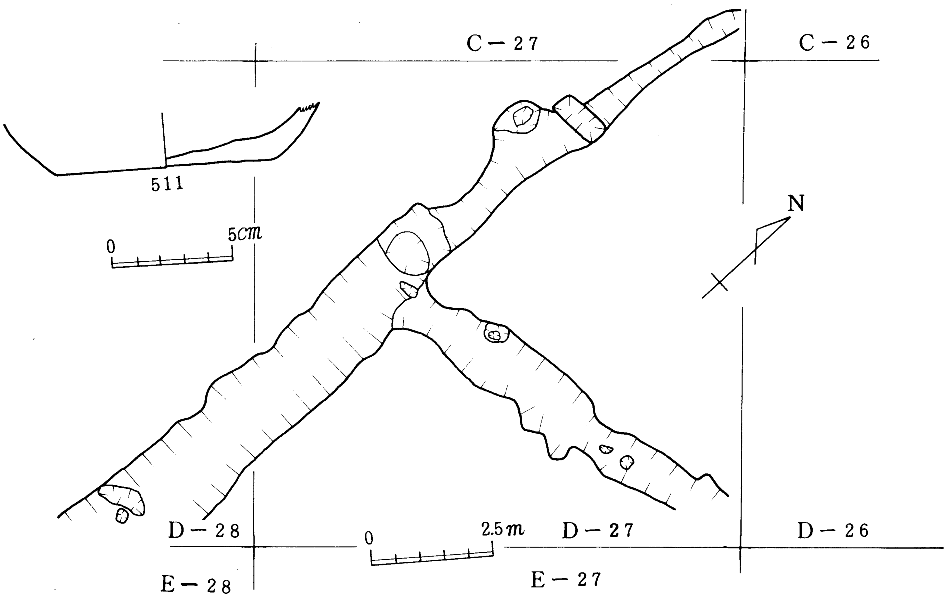
①１号溝

C27区・D27区・D28区に検出された溝で，D27区で南北方向に続く溝と東西方向に続く溝が交わっている。黒色土がはいっているが，残存度が悪いために，三つの端部ともその延長が不明である。幅は40～160cmを測り，南北方向に約17m，東西方向に約7.5m検出された。

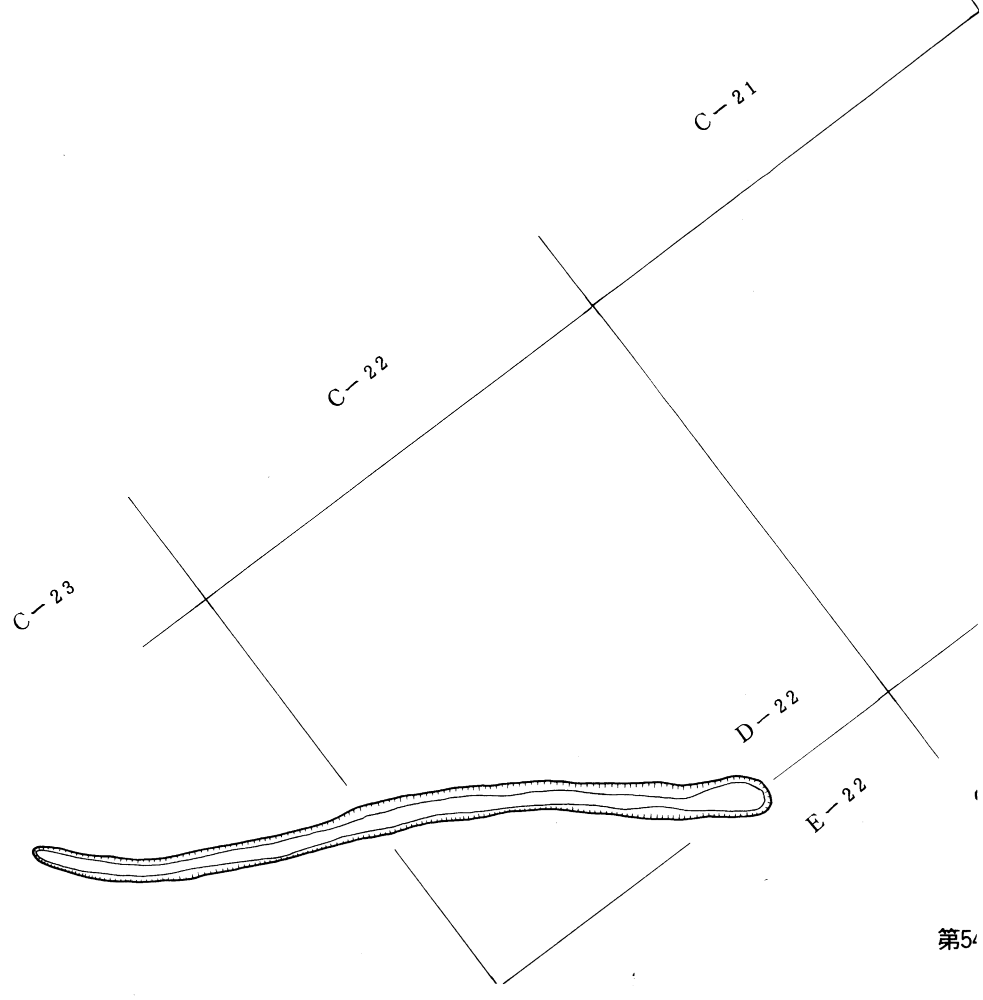
D28区の溝内より出土した土師器皿511は，底部の直径が９cmあり，底部切離しは回転糸切りである。精製した良質土を用い，焼成は良好である。茶褐色を呈す。

②２号溝

D23区からほぼ東西方向へD22区・E22区・E21区に向かい，ここでほぼ直角に向きを変え，E20区・D20区・D19区・D18区・C18区へと向かう溝である。黒色土がはいっているが，残存度が悪いため３ケ所で途切れ，さらに両端の延長も追求できなかった。幅は70～80cm，深さは５～20cmを測り，延長は東西方向に約280m，南北方向に約330m検出された。



第53図　１号溝とその出土遺物



第5

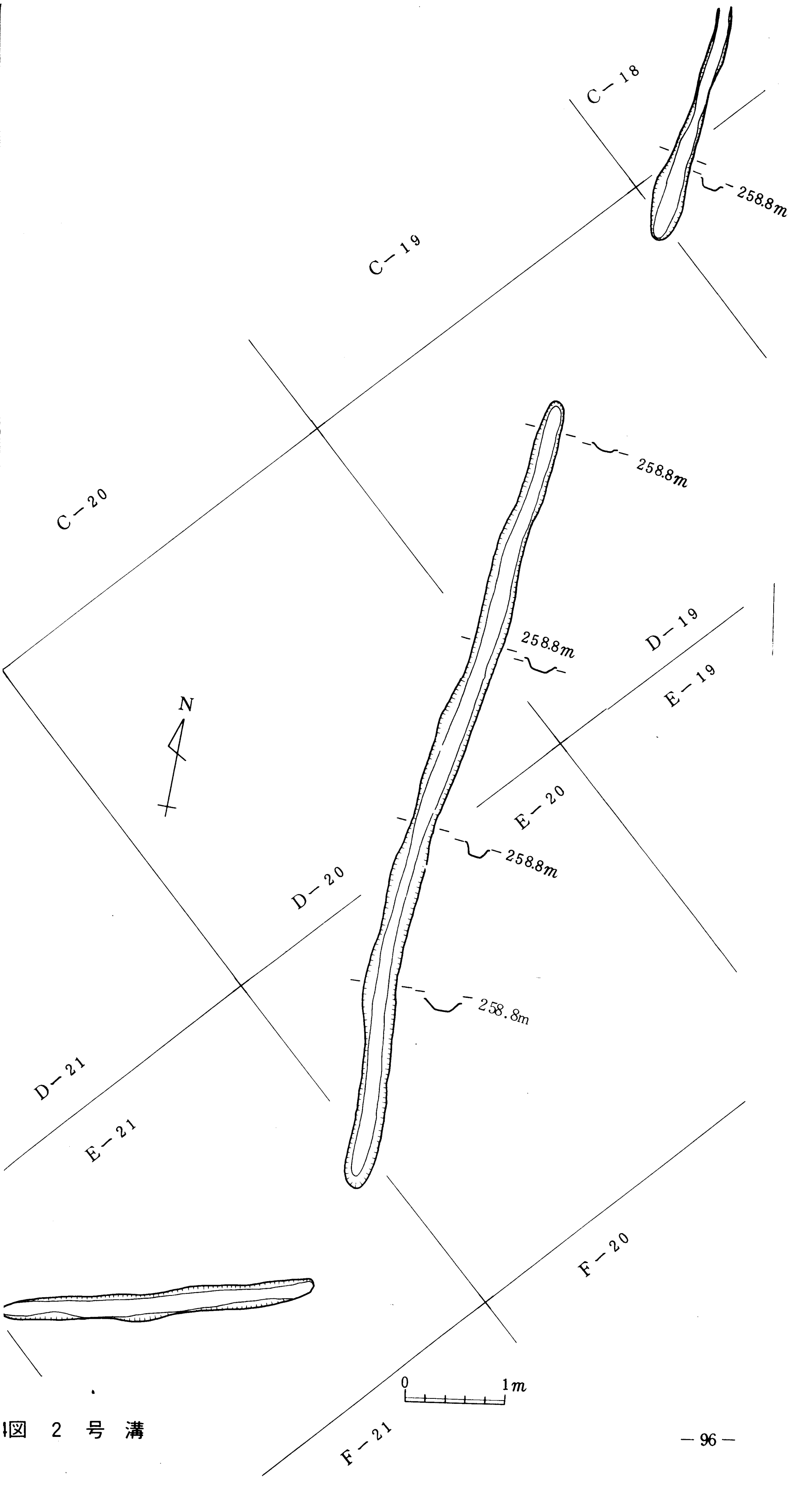

C－18
258.8m
C－19
258.8m
C－20
258.8m
D－19
E－19
N
E－20
258.8m
D－20
258.8m
D－21
E－21
F－20
0
1m
F－21

図　2　号　溝

（2）遺　物

中世の遺物には土師器・須恵器・磁器・陶器・瓦質土器などの土器と，土製品（ふいご口），石製品（石鍋），鉄製品（刀子）がある。

a．土師器（512〜530）

①皿（512〜522）

口縁端は丸みをもっておさまるが，底部から口縁へ向かってまっすぐのびるものと，やや外反するものとがある。底部切離しは513が不明であるが，他は全て糸切りで，514は回転糸切りである。石英粒の多い良質土を用いている。

②坏（523〜526）

坏の口縁部も，まっすぐのびるものと，やや外反するものとがある。口縁端は細くなっておわる。底部は皿との分別がし難い。丸みをもって口縁へのびるものと，底部付近で外へ張り出すものとがある。切り離しは糸切りであるが，523と524はそのあとヘラでナデている。また525はするどいもので木の葉状に線刻を施している。526は内面にボロが付着しており，そのために土師器でありながら須恵質に焼けている。

③甕（527〜529）

口縁端が肥厚し，開きながら胴部へ移る器形をしている。527と528は口縁直径9.6cm，8.8cmと小型で，内面・外面ともヘラによるていねいなナデ整形で仕上げている。529も口縁直径14.6cmとやや小型であるが，外面はヘラによるたてナデ，内面は口縁部がハケによる横ナデ，胴部がヘラによるたて方向のケズリである。微石を多量に含んだ砂質の胎土を用いており，焼成度は良い。

④火舎（530）

断面が矩形の口縁部をもつ火舎で，口縁の少し下に二重の正方形と×印を組み合わせたスタンプ文を巡らしている。外面は研磨に近い横ナデ，内面はていねいな横ナデで仕上げる。こまかく精製した胎土を使っている。

図番	器形	出土区	層	色	焼成度		図番	器形	出土区	層	色	焼成度	
512	皿	D 28	2下	茶褐	ふつう		522	皿	D17	2	茶褐	ふつう	
513	〃	F 27	〃	〃	〃		523	坏	E30	〃	〃	〃	
514	〃	E 22	2	〃	良		524	〃	D29	2下	乳灰	〃	
515	〃	E 23	1	乳褐	〃		525	〃	E71	〃	淡茶褐	〃	
516	〃	F 24	〃	〃	〃		526	〃	E27	〃	茶褐	良	
517	〃	F 23	〃	〃	ふつう		527	かめ			淡茶褐	〃	
518	〃	E 16	〃	〃	〃		528	〃	C27・C29	3a	〃	〃	
519	〃	D 27	2	淡茶褐	良		529	〃	D16・D17	〃	茶褐	〃	
520	〃	採集		黒紫	〃		530	火舎	E29	古道	淡茶褐	〃	
521	〃	D 26	3a	茶褐	〃								

第5表　土師器一覧表

b．須恵器（531～533）

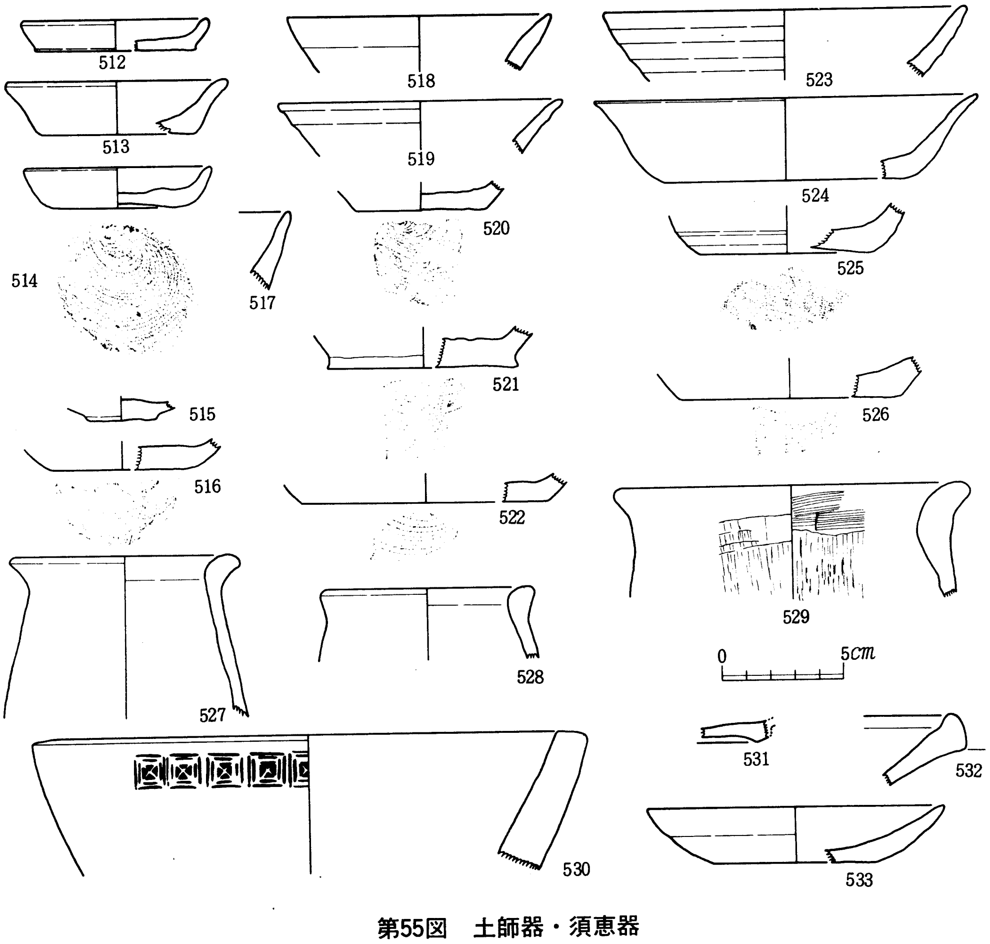
坏・鉢・皿の３点だけが出土している。531はE24区１層で出土した坏の高台部分で，灰色を呈す。532はF15区１層で出土した鉢の口縁で，まっすぐ胴部に移る。口縁端は内側にやや拡張する。暗灰色を呈し，軟質に焼けている。533は口縁直径12.2cm，庭部直径6.8cm，高さ2.3cmを測る皿で，開きながらまっすぐ口縁端へ向かい，端部は細くなっておわる。底部はヘラナデで仕上げる。内面にはボロが付着し，そのために磁器風に焼けている。また，灰色を呈しているが，部分的には紫褐色を呈する。

c．磁器（534～558）

白磁と青磁がある。

①白磁（534～536）

埦の高台が３点出土している。534はD31区の古道から出土したもので，小型である。黄みをおびた白色土に貫入のはいった白色釉をかけているが，外面の底部から高台には釉がかかっていない。535は底部から高台へ移る部分に段をもつもので，灰白色土に緑がかった白色釉が



第55図　土師器・須恵器

かかっている。536はF24区1層で出土したもので，やや大きい。床付き部分には釉がつかない。灰白色土に青っぽい白色釉がかけられる。

②青磁（537～558）

坏・皿が出土している。口縁の形で坏が2種，皿が2種に分けられる。また底部も4種に分けられる。

坏Ⅰ類（537～539）　口縁端がやや肥厚するものである。538は釉が厚く，内面に陰刻らしきものもみられるが，図柄がはっきりしない。

坏Ⅱ類（540～543）　口縁が端部近くで外反するものである。540は全体が復元できる唯一のもので，口縁直径11.4cm，高台直径6.4cm，高さ3.7cmを測る。高台の内面には釉がかからない。口縁直径は13.4cm～15.4cmと割に大きい。

皿Ⅰ類（544）　やや外に反って端部へ向かうもので，口縁直径15.6cmと大きい。胴部より下には釉がかからない。

皿Ⅱ類（545～548）　口縁部が強く外反するもので，外面に片彫りの無稿蓮花文，内面に横線のあるものがある。

底部Ⅰ類（549）　いわゆる碁質底で，底部には釉がかからない。釉が青白く，青白磁の可能性もある。

底部Ⅱ類（550）　内底部および底部・高台内に釉がかからない。高い高台である。底部と高台の境に明瞭な段をもつ。

底部Ⅲ類（551～556）　高台が直に立ち上がるもので，低い高台である。釉は，高台内面にかからないもの（551・552・554），高台内面の一部にかからないもの（553），床付き部より内側は全体にかからないもの（556）があり，内面はほとんど全体にかかっているが，554は内底部中央にも釉がなくて光沢を呈している。

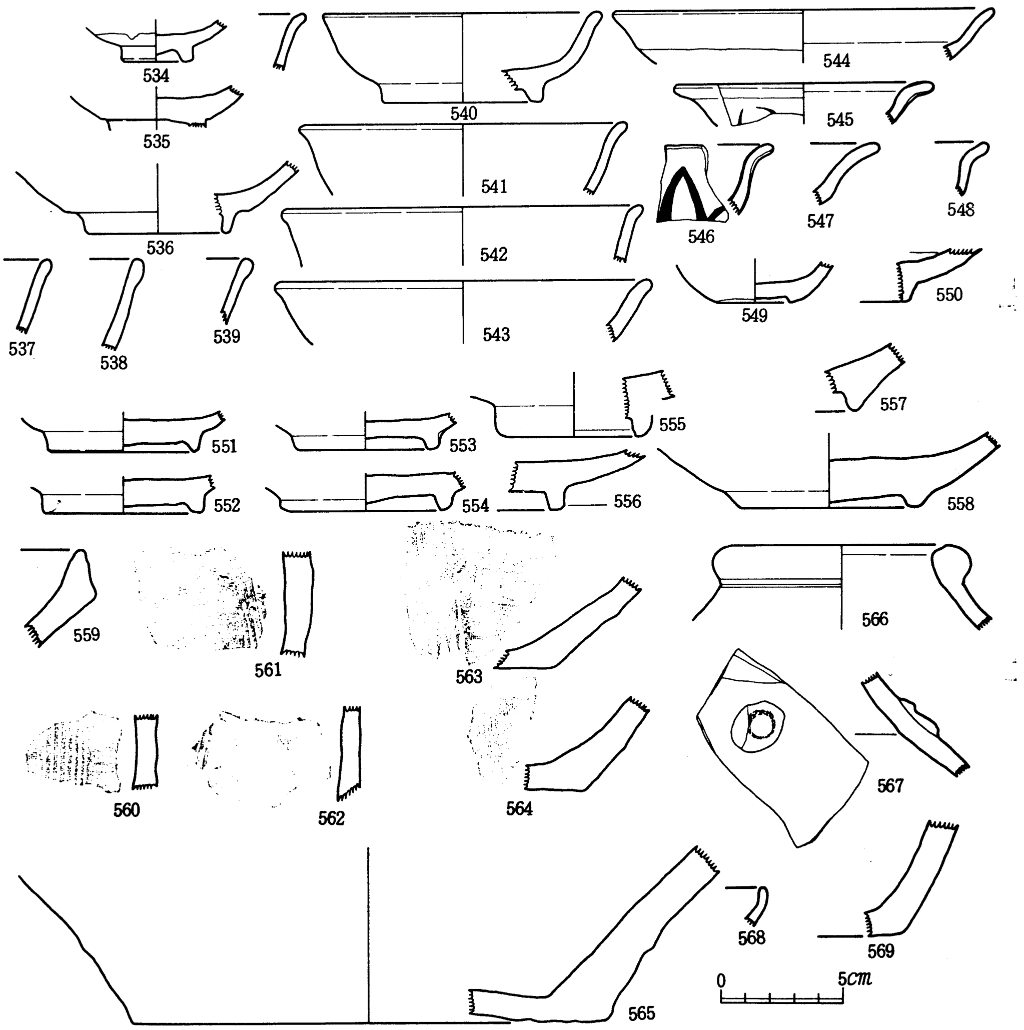
図番	出土区	層	土の色	釉の色	貫入	気泡	備考	図番	出土区	層	土の色	釉の色	貫入	気泡	備考
	F23	Ⅰ	灰白	オリーブ					D30	古道	灰白	緑	○		
	〃	〃	灰	緑	○				F27	〃	〃	明緑	○		
	F25	〃	白灰	オリーブ	○				D30・D31	〃	〃	淡い青緑	○		
	D29	Ⅲa	〃	青みがかった緑	○				F29	〃	白灰	緑	○		
	M6	Ⅰ	〃	〃					〃	〃	〃	明るい緑			
	E25	Ⅳb上	〃	オリーブ	○				D31	〃	灰	淡緑	○		
	F28	Ⅱ下	〃	青みがかった緑	○	○			F29	Ⅱ下	白灰	明るい青緑			
	〃	Ⅱ	〃	オリーブ	○				Ⅰ・Jトレ	Ⅰ	灰	青グレー			
	E29	Ⅲa	灰白	〃		○			F26	〃	灰白	オリーブ	○		
	E26	Ⅰ	灰	緑	○				F28	Ⅱ下	白灰	白くあせた緑			
	E26	〃	〃	明るい緑		○			D31	古道	灰	濃緑	○		
	F25	〃	〃	暗緑	○										

第6表　磁器一覧表

底部Ⅳ類（557・558）　高台から胴部へ明瞭な段をもたずに移るもので，割合に大型である。557は高台内面と底部との境に釉切れがみられる。

d．陶器（559～569）

559～564は備前焼の擂鉢である。口縁部は上方に拡張し，底部は安定した平底である。8条のかき目が下から上へ施されるが，使用が顕著で相当に磨滅している。赤みがかった茶褐色あるいは茶がかった灰褐色を呈し，胎土は小石の多く含まれた砂質土である。565は底部直径19.5cmを測る大型の甕の底である。外面はハケナデのあと，たて方向のヘラナデ，内面は横方向のヘラナデである。赤みがかった茶褐色を呈し，内面には緑色の自然灰釉がかかっている。9㎜大の円礫をはじめ，石英などの小礫を多く含む砂質の胎土である。566は口縁が玉縁状を呈し，胴部へ強く広がる壺で，外面に黄褐色の釉がかかっている。頸部に凹線が一条巡っている。567は肩部にこぶ状突起の貼り付けられた甕で，黒灰色を呈するが，外面には暗緑色の釉がかかっている。内面には稜がみられる。568と569は灰白色土を使った天目である。568は



第56図　磁器・陶器

小型のまりの口縁，569はかめの底部である。

図番	種類	出土区	層	色	備考	図番	種類	出土区	層	色	備考
559	備前摺鉢	D1・2	I	赤茶褐	内側に胡麻	565	甕			赤茶褐	
560	〃	E26	〃	〃		566	壺	E30	I下	灰	
561	〃			〃		567	かめ	F28	II下	茶褐	
562	〃			〃		568	天目まり	F22	I	灰白	
563	〃	F28	II下	灰褐		569	天目かめ	D31	古道	〃	砂質土
564	〃	M6	I	赤茶褐							

第7表　陶器一覧表

e．瓦質土器

こね鉢・つぼ・鉢・摺鉢がある。

①こね鉢（570）

口縁直径28cmを測り，端部へ向かって広がる。内面・外面ともハケナデである。

②つぼ（571・572）

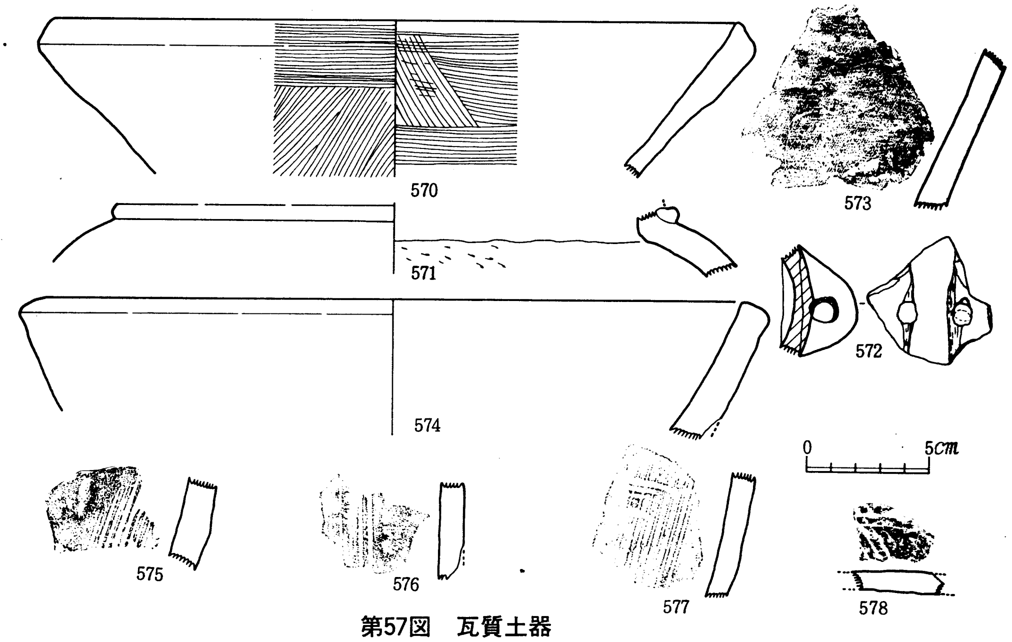
571は頸部にかまぼこ形の貼り付け突帯と，その上部に鋸歯状の突帯がある。外面はていねいな研磨で，内面の頸部以下はヘラ削りである。572は胴部上半にある突起で，孔がある。

③鉢（573）

内面に細いものでかかれた線刻がみられる。意味は不明である。

④摺鉢（574～578）

口縁部は断面矩形を呈する。かき目は7条が下から上へ施される。



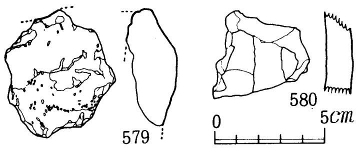
第57図　瓦質土器

f 土製品（579）

F24区で出土したふいご口の破片である。微礫の多い砂質土を使い，外面には溶かしたボロが多量にアメ状に付着している。

g 石製品（580）

滑石製石鍋の小破片で，古道で出土している。



第58図　土製品・石製品

（3）小　括

県内では最近，数多くの中世の遺跡が調査され，出土する遺物もとみに増加している。しかし，量の増加とは裏腹に中世遺物の研究は遅々として進んでいない。その大きな原因のひとつに遺構に伴う遺物が少ないという事実がある。そして中世の遺跡の多くが平安時代頃から始まることによる遺物の混在という事実がある。

こうした事情の中で，木場A遺跡出土の遺物がもつ意味は，これが遺構に伴なうものでないという弱みはあるものの，限定された時期の一括遺物であるという点で重要である。もちろん将来できるであろう細分編年からみれば，あまりに大ざっぱであるが。

土師器の皿・坏の底部切離しにはヘラによるものと，糸によるものとがあり，従来これらは共存することが多い。ここでは全て糸切離し底である。ヘラ切離しから糸切離しへの交替が，いつか，今ははっきりしない。しかし，ここでは完全に糸切離しへ変わっている。

土師器の皿・坏の法量もほぼ一定している。つまり，皿は口縁直径が7.5～8.2cm，高さ1.3～2.2cmで，坏は口縁直径12.8～13cm，高さ2.9～3.2cmである。坏の中には口縁直径15.7cm，高さ3.4cmの大型のものがある。土師器のかめは胴部のあまり張らないものである。また，土師器のなかに，内面にボロの付着したものがある。中世の山城ではよくみられるもので，るつぼの用途をはたしたものである。ここではふいごの羽口も出土している。

編年の進んでいるものに備前焼がある。ここの擂鉢は間壁氏の編年によるとⅣ期，16世紀頃のものである。また，青磁は竜泉窯系のもので，白磁も同様に15～16世紀頃のものとされる。したがって，当遺跡の年代はほぼ16世紀頃と考えてよかろう。

16世紀頃と思われる遺構には古道・溝・土坑などがあり，この周辺に住みついていたことを予想できる。ところで，その性格はどういったものであろうか。当遺跡の西方約600mには中世の山城で，のちには石垣も巡らされた松尾城がある。また，500mほど東には遠目番所のひとつである楠原の岡がある。ここで検出された道路跡はまさにこの両所を結ぶ道であろう。松尾城は11の掘で周囲を区切っているが，東方は外堀・内堀が境界となっている。これからすれば当遺跡は城外になっている。出土する遺物の量も少なく，こうしたことより中世の当遺跡は主たる生活の跡を残していない遺跡といえよう。

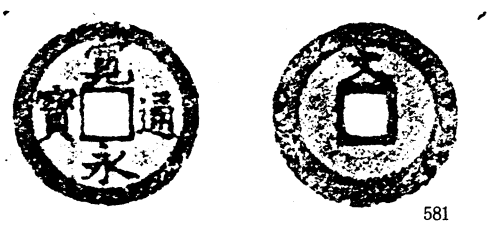
第6節　近　世

（1）遺　物

近世の遺物に古銭と陶磁器がある。

a古　銭（581）

寛永通宝が出土している。裏面に文という字がある。



第59図　古　銭

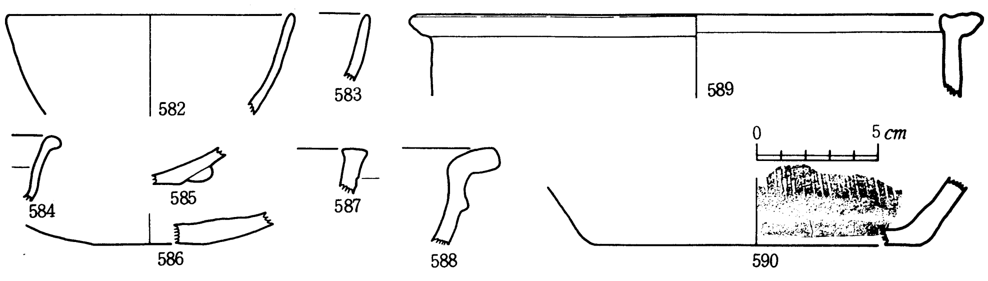
b陶磁器（582～590）

近世の陶磁器はすべてⅠ層から出土している。

582と583は埦である。582は口縁直径11.9cmの埦で，丸みをもって立ちあがる。内面・外面とも鉄釉がかかる。F21区出土。583も同じような器形をしており，口縁部付近に灰白色，その下に黄みをおびた茶褐色の釉がかかっている。貫入がみられる。J２区出土。584は口縁端が逆Ｌ字状を呈する小鉢で，内面の口縁付近から外面にかけて黄みをおびた茶褐色の釉がかかっている。J３区出土。585は内面に貫入の多い淡い黒褐色釉がかかった坏の安定した底部である。外面は露胎で，ススが付いている。また，外面の底部付近には焼成時における土玉が残存しており，重ね焼きの手法がうかがえる。J２区出土。586はちょかの底部で小さい平底である。E29区出土。587は口縁端が内外にやや拡張する鉢で，口縁上部は露胎となっており，ここに目跡がある。口縁下に２条の凹線がみられる。黒っぽい茶色の土に，茶色と黒色のまざった釉がかかっている。E22区出土。588は口縁端が外へ強く折れ曲がるかめで，口縁下に三角突帯がみられる。赤みがかった茶褐色を呈する土に，紫がかった茶褐色の釉がかかる。ボロが多くかかっている。J２区出土。589は口縁直径23.5cmを測るすり鉢で，口縁上端には二条の凹線が巡る。口縁端は内外に肥厚し，内面にはかき目が下から上へ密に施される。茶褐色を呈する土で，外面にはアメ釉がかかっている。F22区出土。590は安定した平底のカメの底部である。底および内面には釉がかからない。外面には紫がかった茶褐色の釉がかかるが，貝の目がみられる。F22区出土。

B小　括

近世の土器は考古学的に細分編年まで至っていないが，当遺跡の土器はほとんどが薩摩焼であり，江戸時代のものと思われる。



第60図　近世の陶磁器

第5章　まとめにかえて

発掘調査の結果，木場Ａ遺跡は下層より旧石器時代，縄文時代早・前期，中世の三文化層からなる複合遺跡であることが判明した。時代ごとに若干まとめておきたい。

旧石器時代

シラス直上のⅥ層下部，Ⅶ層上部から遺構と遺物が検出された。本県では旧石器時代の遺跡は細石器文化が中心でナイフ形石器を伴う遺跡は，上場遺跡，小牧３Ａ遺跡等数える程しか確認されていない。また遺構も上場遺跡の住居跡・集石・土坑以外は知られていなく，当遺跡の集石４基は貴重なものである。ナイフ形石器，スクレイパー，剥片等は層位がはっきりと確認されているだけに貴重な資料となり，また原石の豊富さも，石材共給源等の研究によりはっきりとしてくるのではなかろうか。

Ⅳ層下部において細石刃・調整剥片の出土をみたが，これは山崎Ｂ遺跡の桜島パミス層の下部にあたるものと思われる。Ⅳ層下部の遺物が少なかったことから，木場Ａ遺跡の内には，細石器文化時代の生活痕は少なかったが周辺にこの時代の遺物，遺構が発見されるものと思われる。

縄文時代

遺構として集石が検出された。主にⅣ層にみられる。拳大の礫を集めたもので８基検出した。礫の周辺に炭化物等の直接火をうけた形跡はみられないが，赤化した礫の存在から炉としての性格も考えられ，今後検討されなければならないものである。周辺での類例として山崎Ａ遺跡①，花ノ木遺跡②，山崎Ｂ遺跡③等にもみられ，花ノ木遺跡では平栫式土器，塞ノ神式土器に伴うとされ，当遺跡でも吉田式，前平式，塞ノ神式土器と共伴することから縄文時代早期～前期に属すると考えられる。

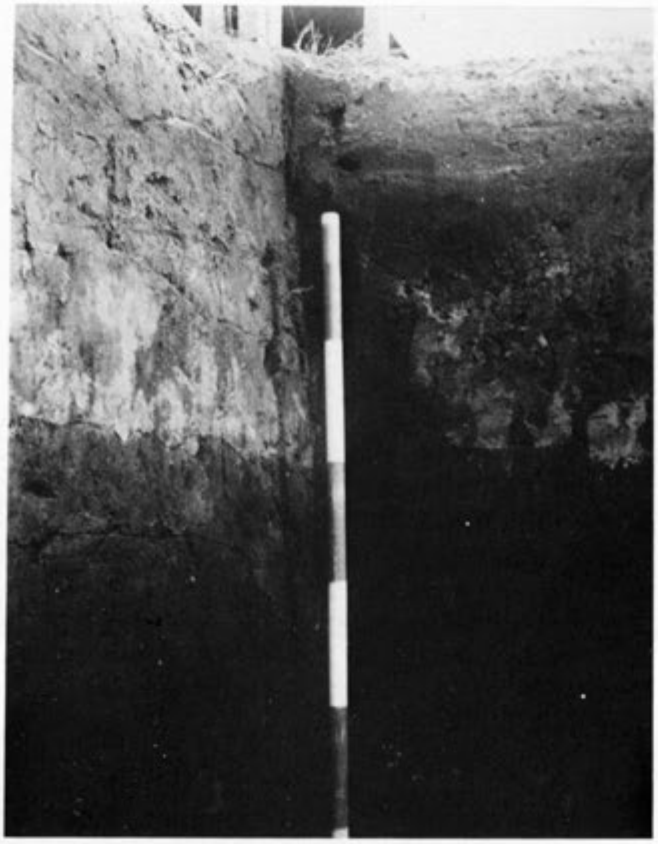
中世以降

中世以降の遺物は，遺構に伴うものでないが，限定された時期の一括遺物であるということが特徴である。土師器の皿，坏の法量はほぼ一定し，底部切離しは糸切り離しである。備前焼青磁，白磁等より当遺跡の年代はほぼ16世紀頃と考えられ，地名の由来ともなった松尾城に関連する遺跡と考えられる。

①鹿児島県教育委員会　「山崎Ａ遺跡」　鹿児島県埋蔵文化財調査報告（17）　1981

②　〃　「花ノ木遺跡」　〃　（１）　1975

③　〃　「山崎Ｂ遺跡」　〃　（18）　1982

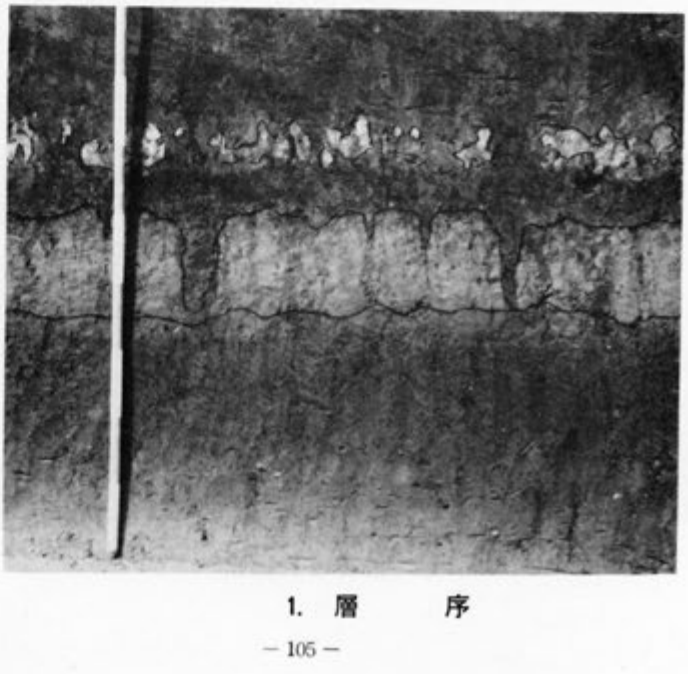


I

Ⅲa

Ⅲb

Ⅳ



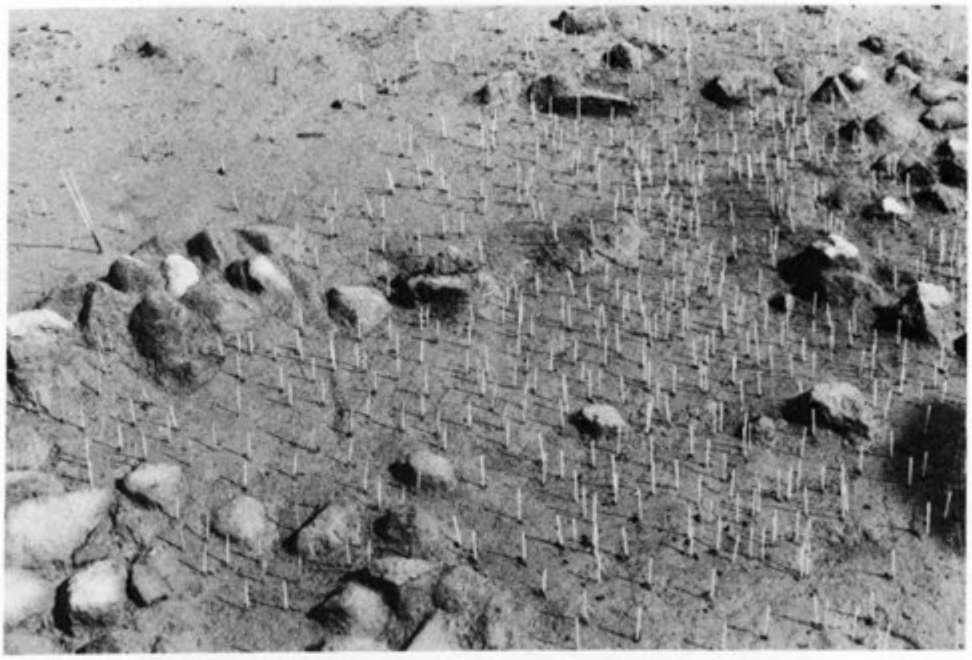
桜島パミス層

Ⅴ

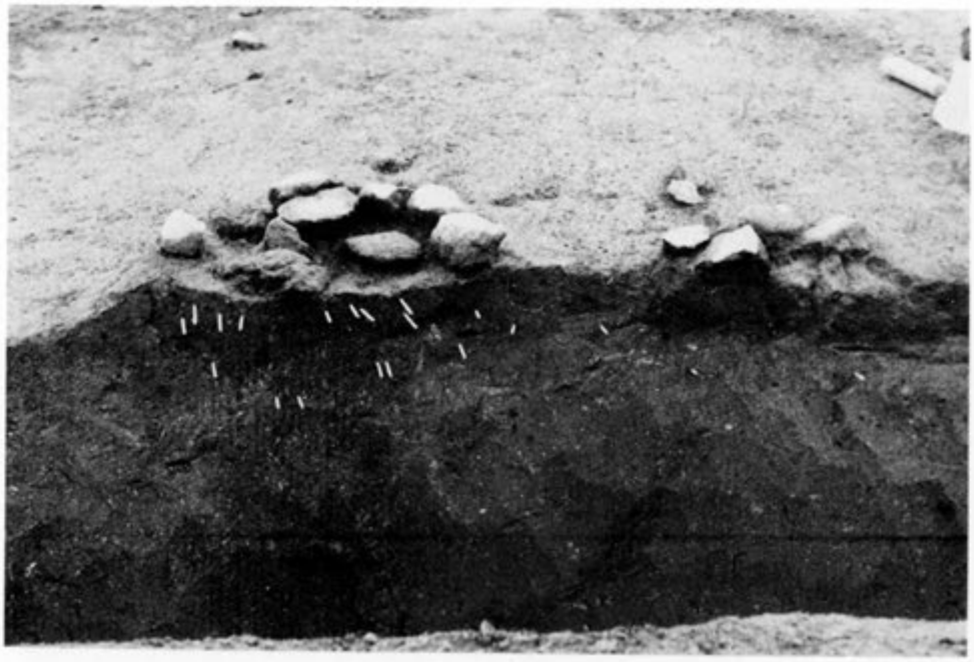
Ⅵ

Ⅶ

1. 層　　序

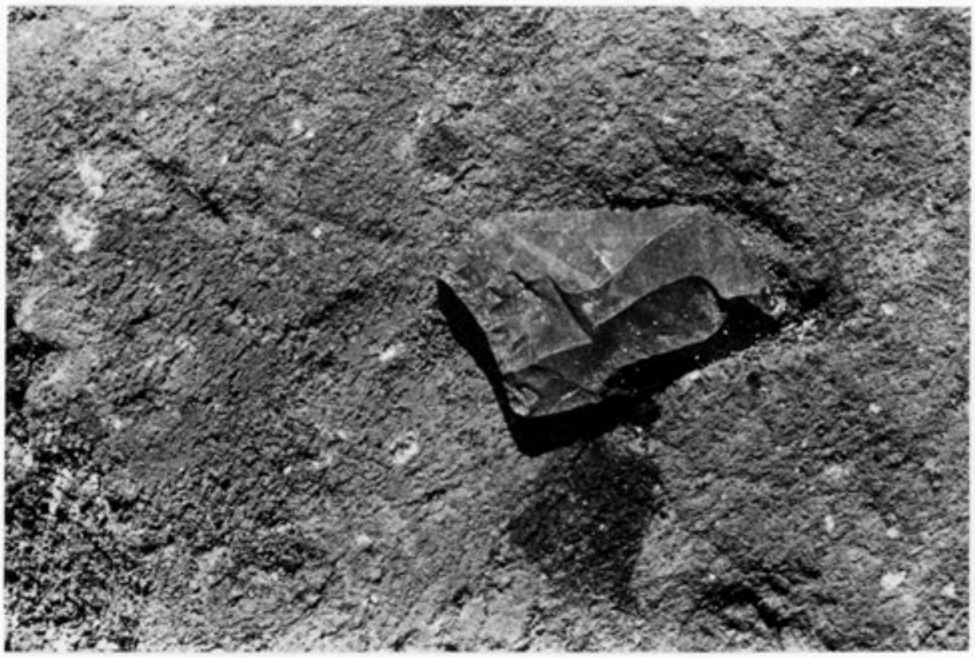


2. 集石と炭化物

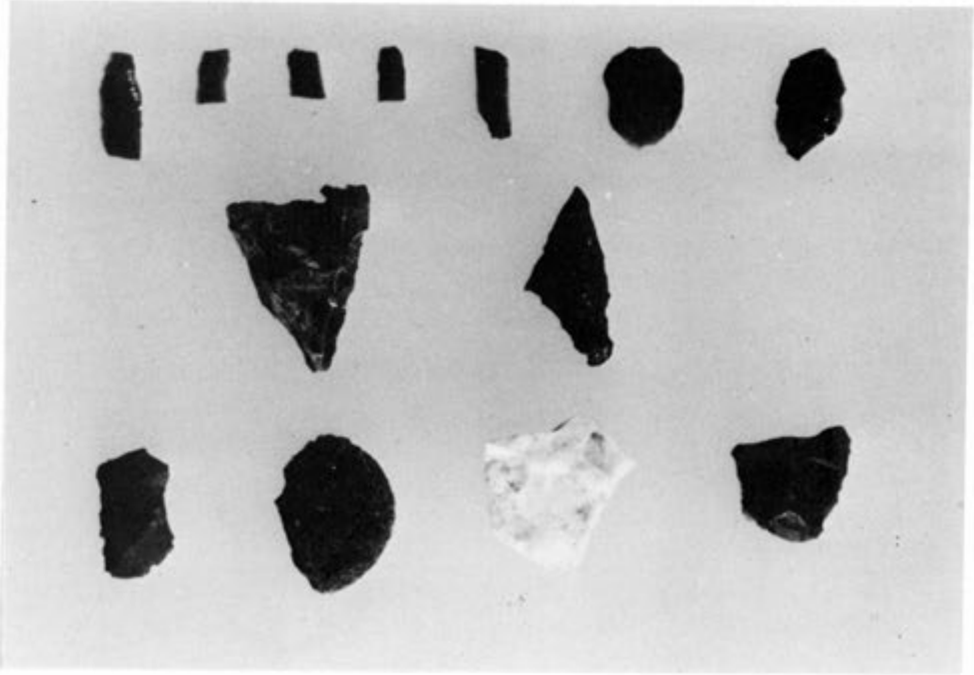


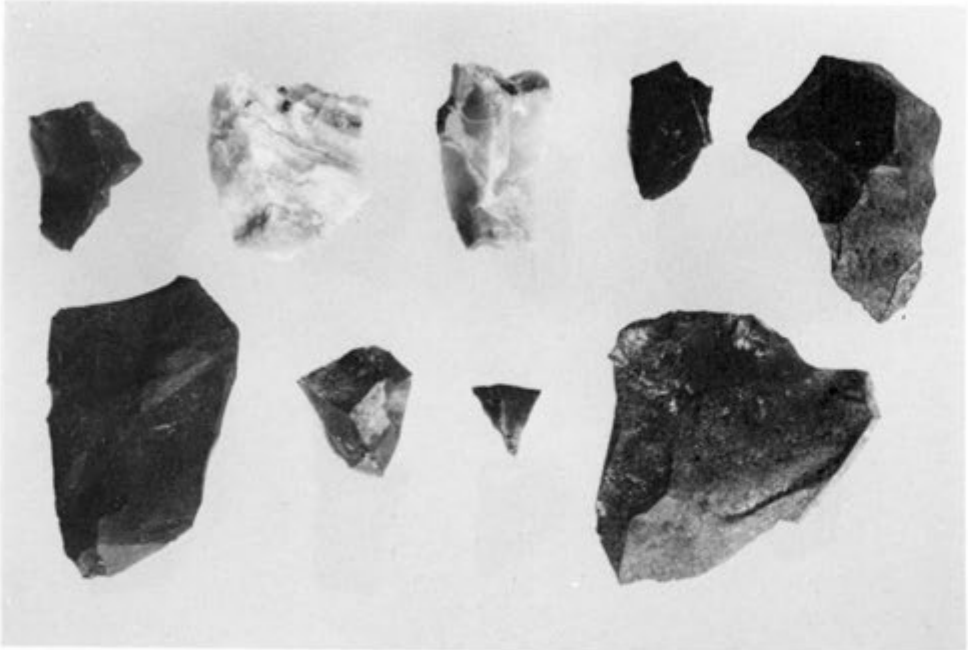
1. 集石と断面

2. ナイフ形石器出土状態（頁岩）

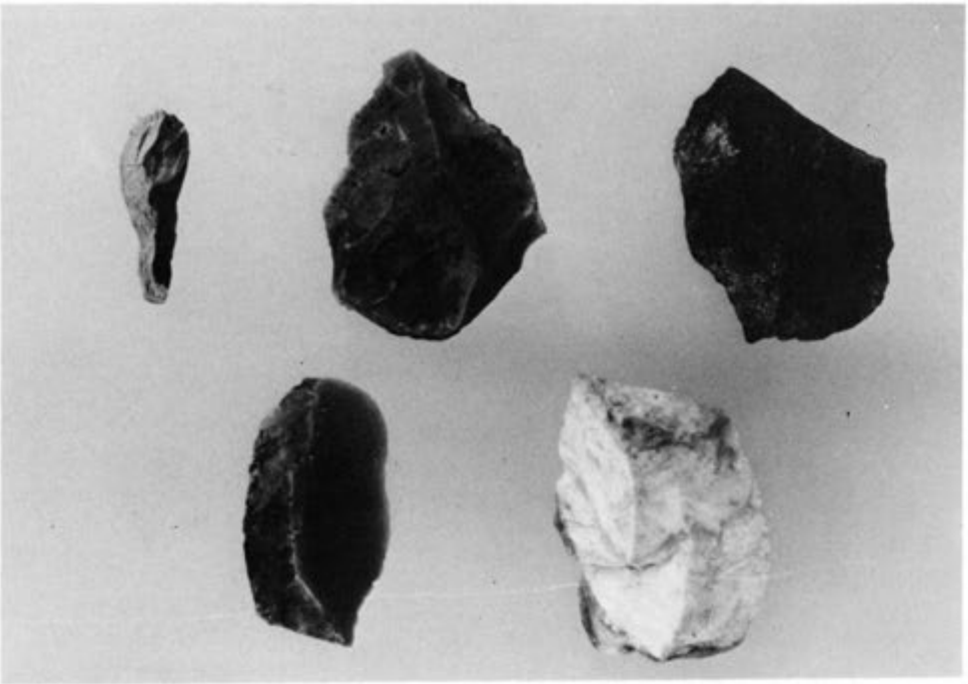


2. 剥片石器出土状態

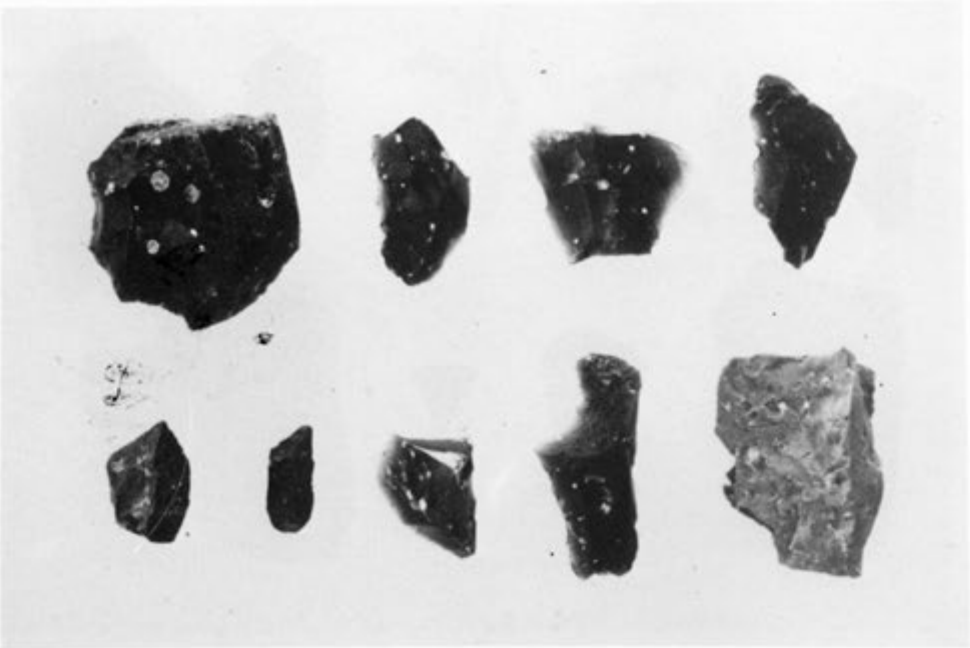




2. 剥 片（1）

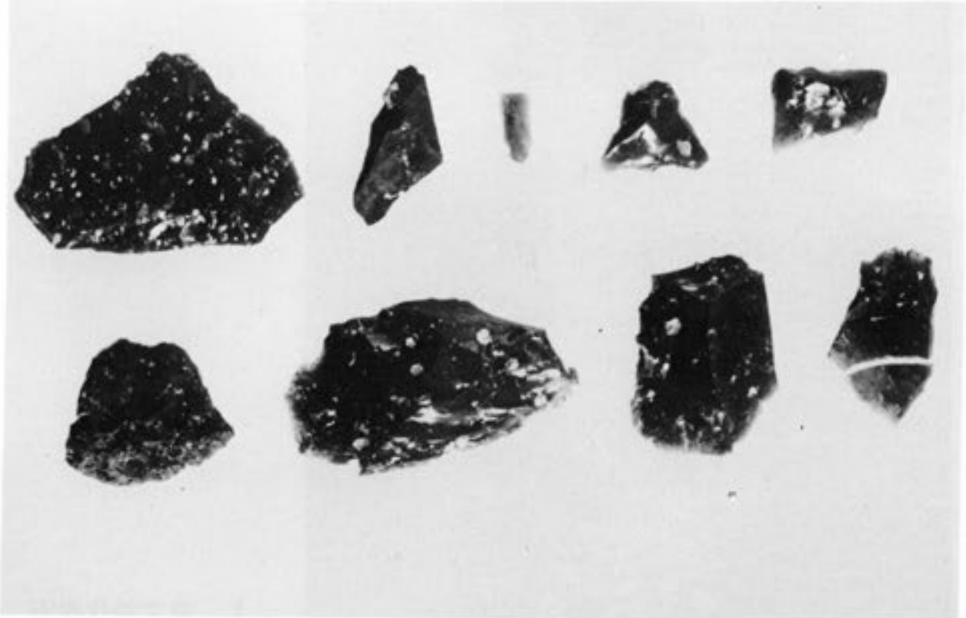


1. 剥　片（２）



2. 剥　片（３）

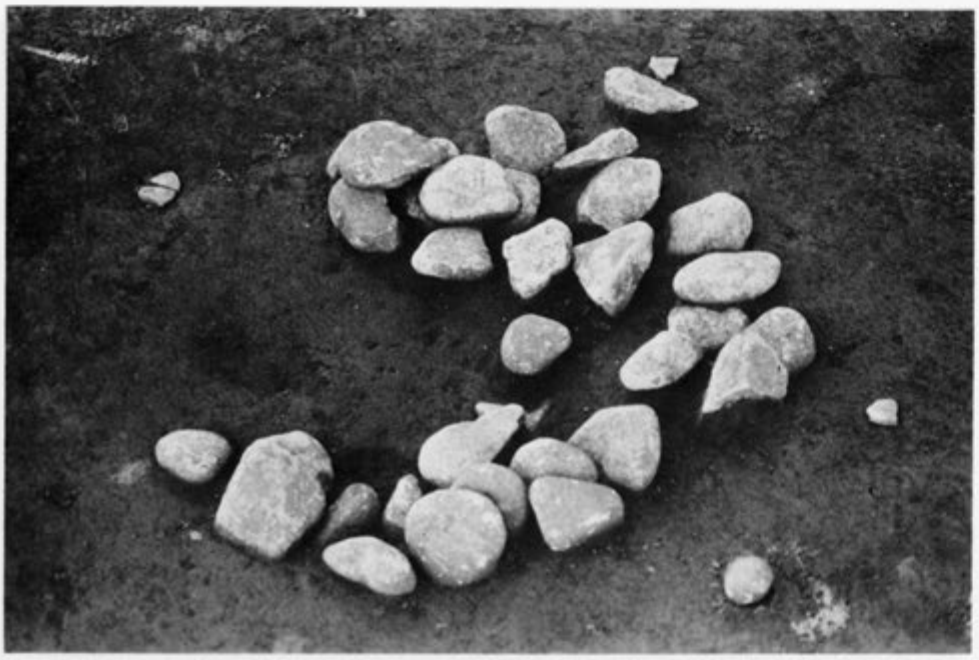
1. 剥　片（４）



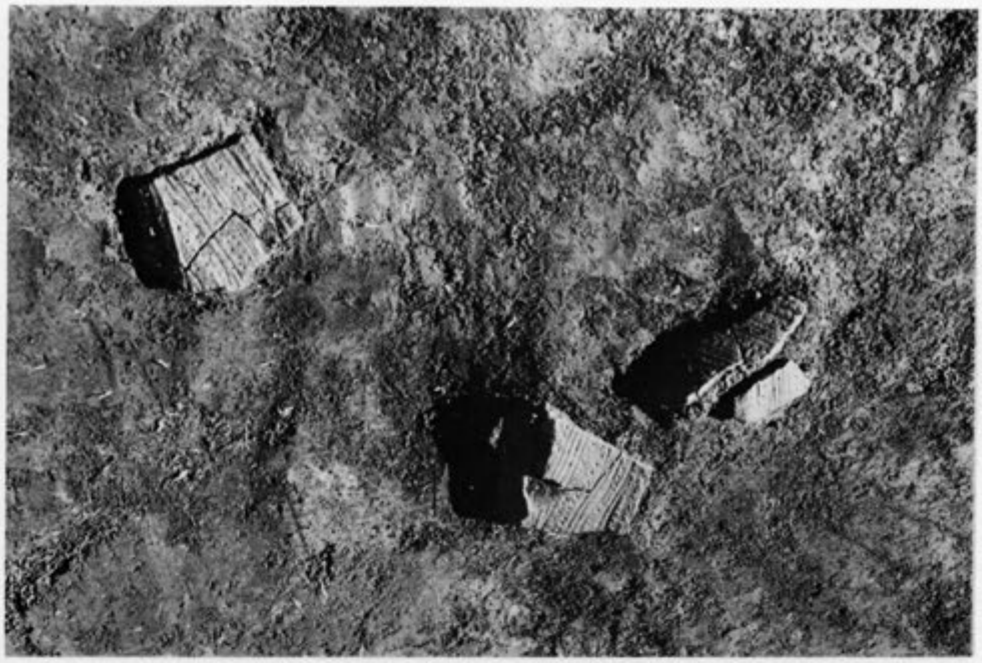
2. 剥　片（５）

1. 発 掘 状 況

2. 縄文時代集石
1. 2. 3



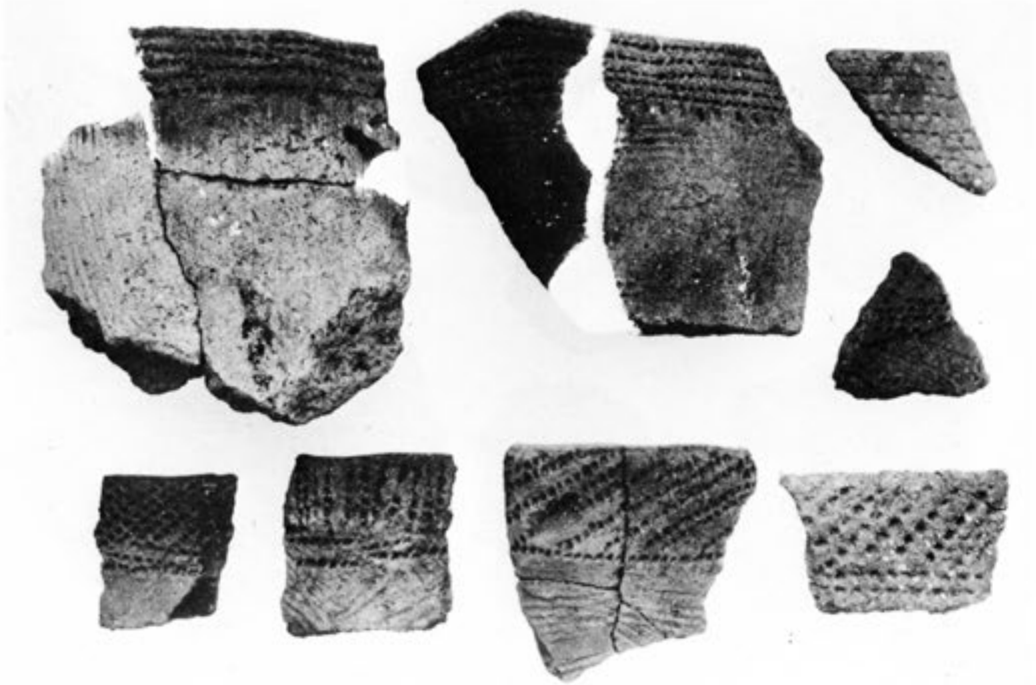
1. 集 石 1. 2



2. 6類土器出土状態

1. 有柄石鏃出土状態

2. 蜂ノ巣石出土状態

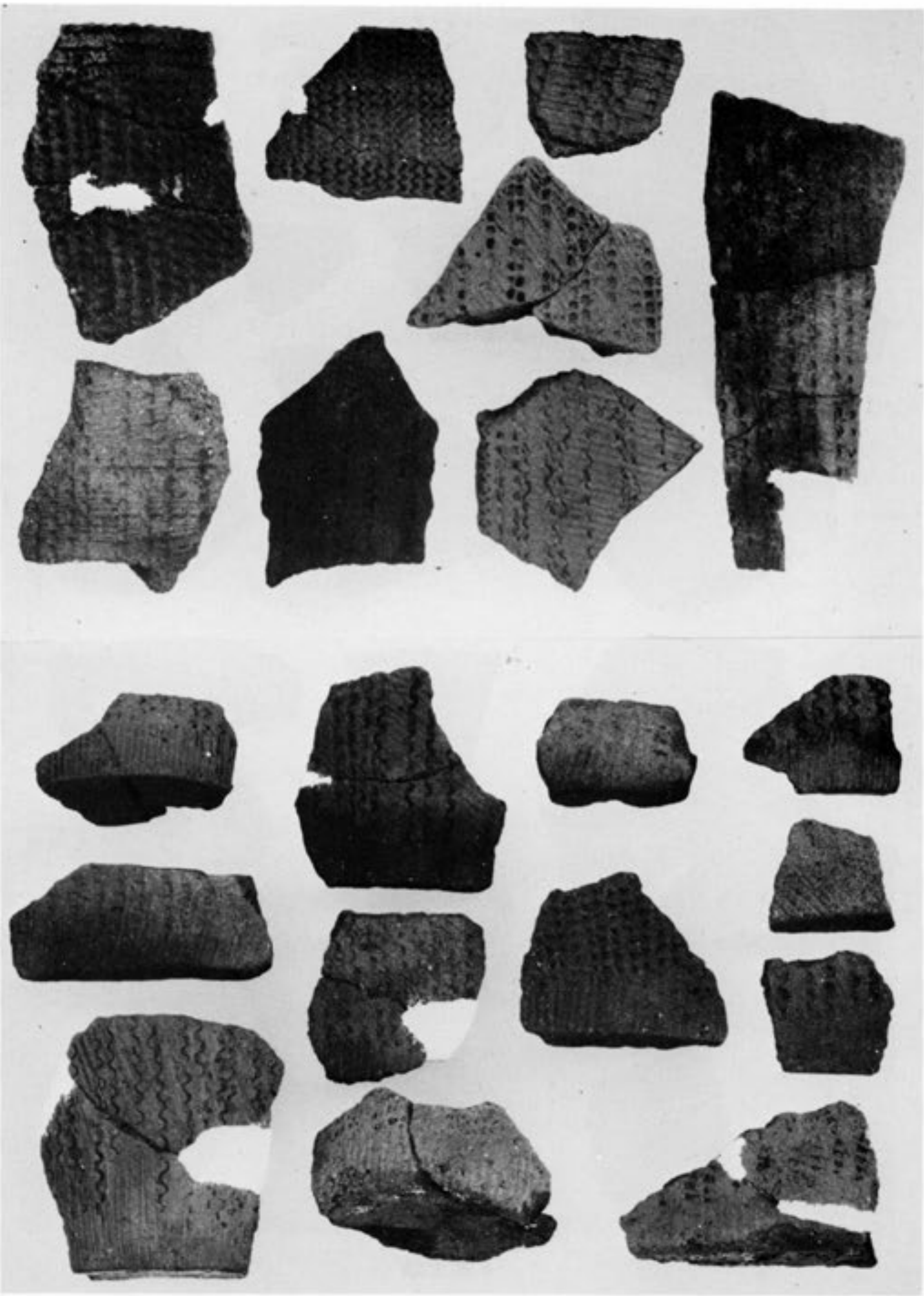


1.　１類土器

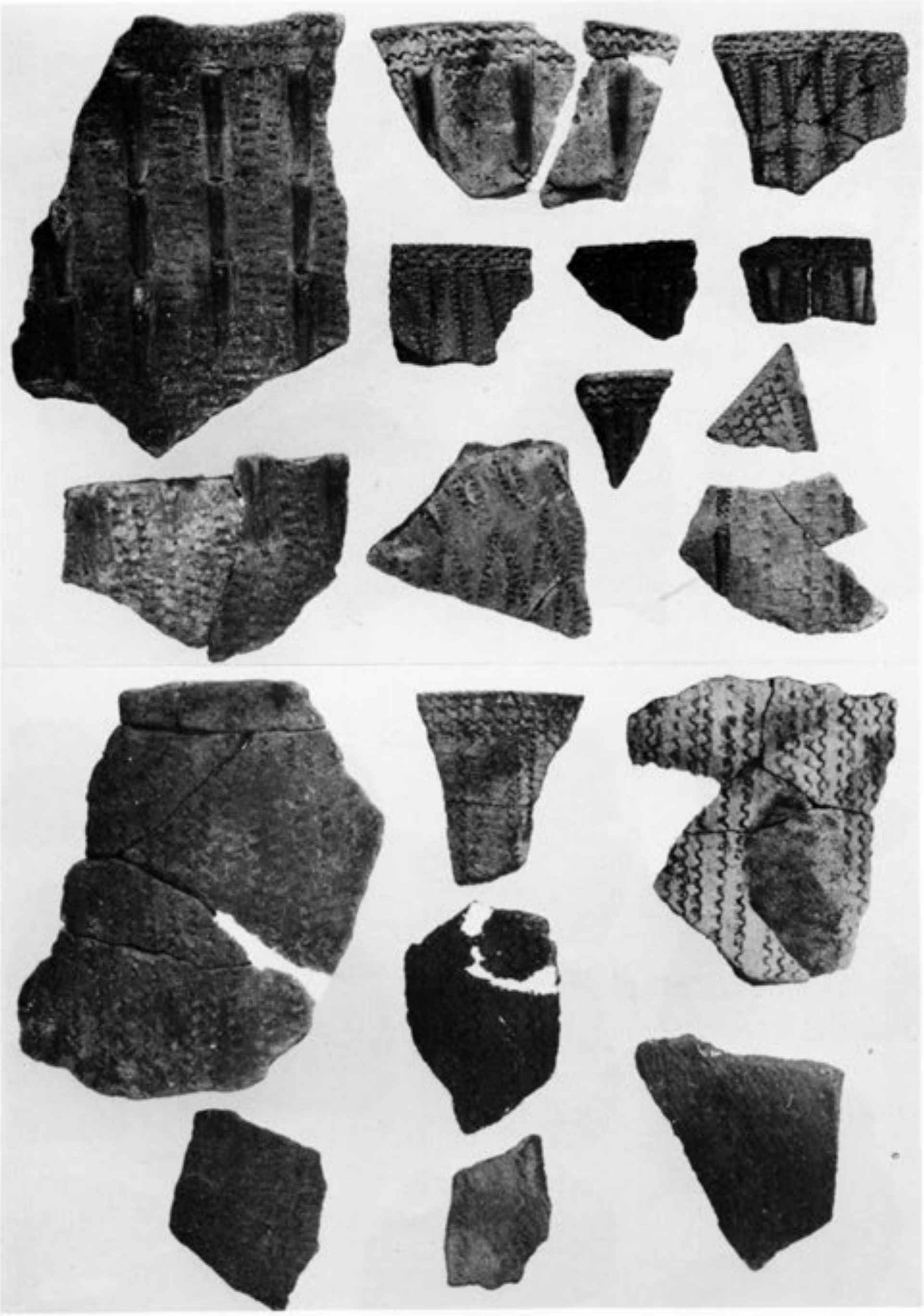
2.　１類土器

1. １類土器

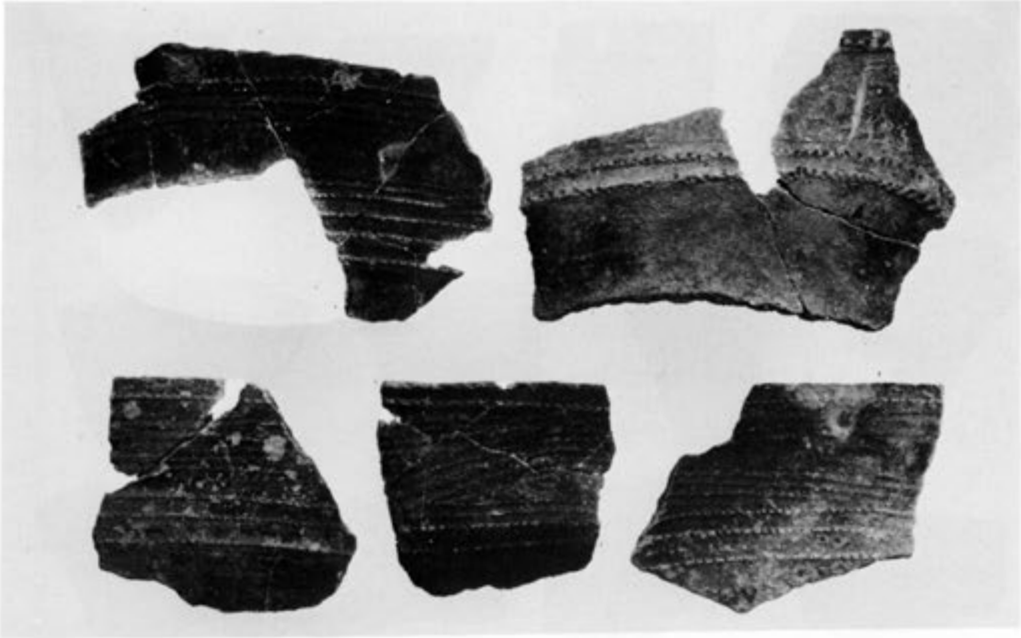
2. ２類土器



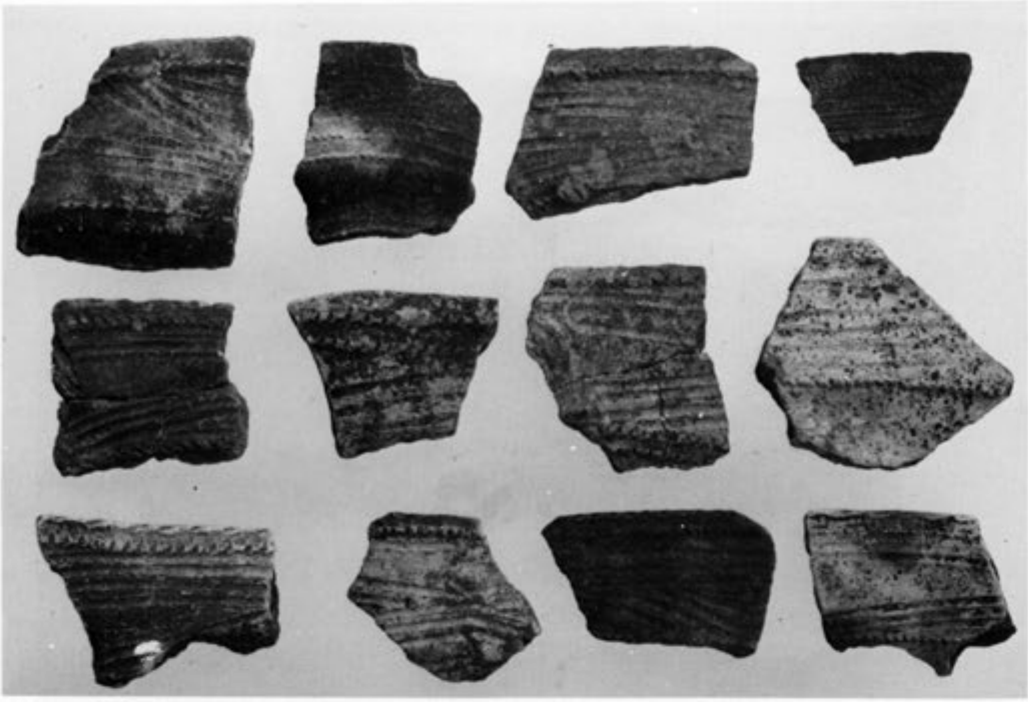
3類土器(上左2)4類土器



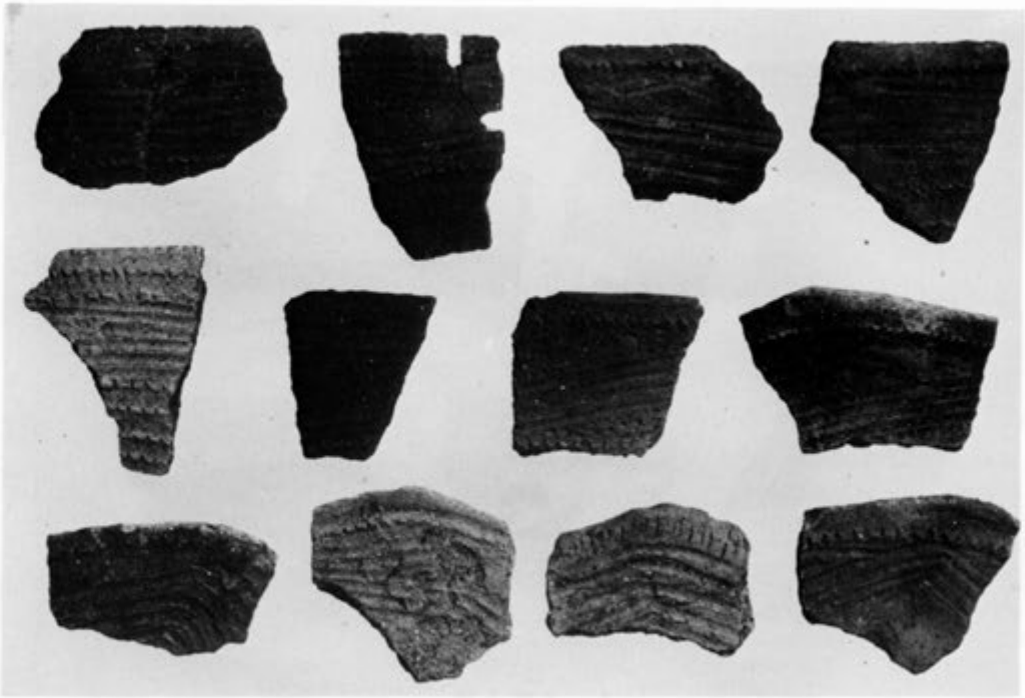
４類土器



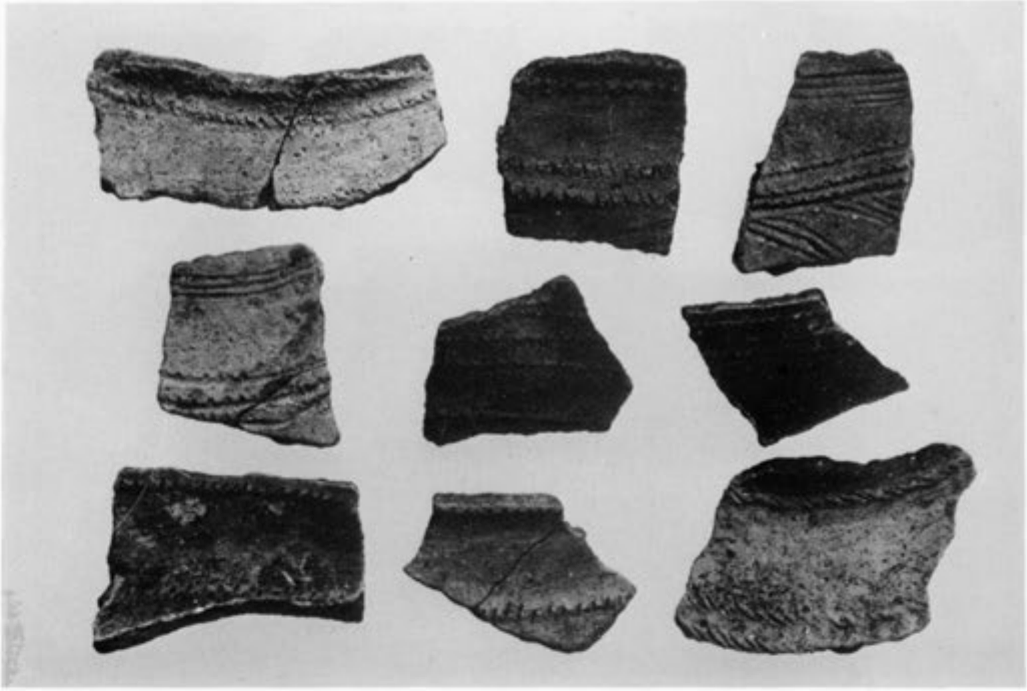
1. 5類土器



2. 5類土器



1. 5類土器



2. 5類土器

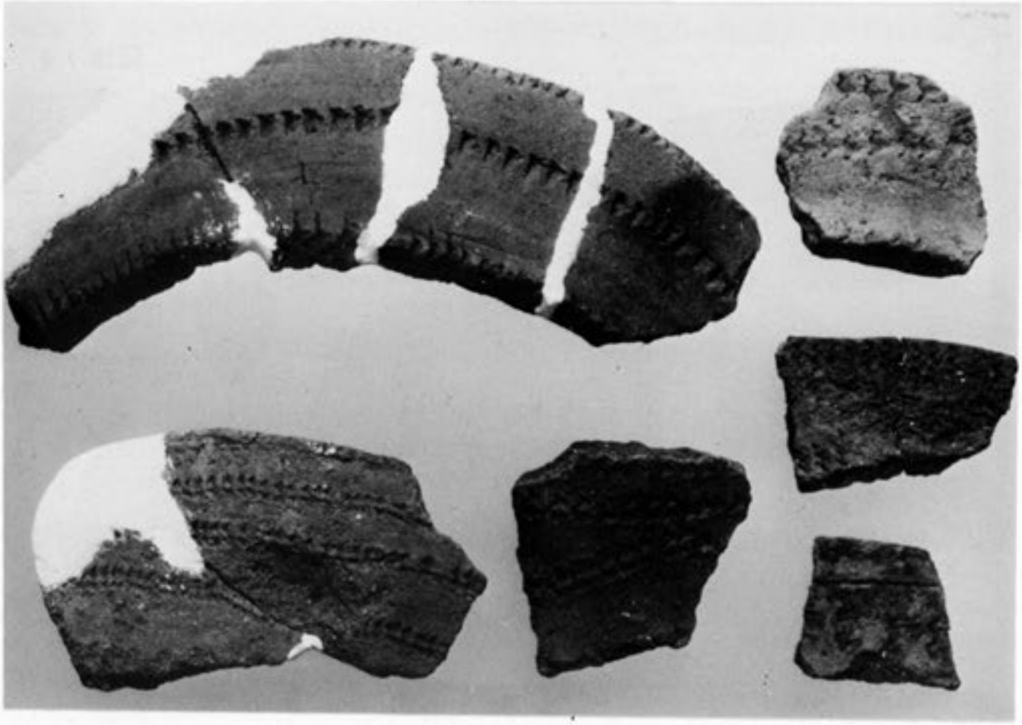
6 類土器

1.　7類土器

2.　7類土器

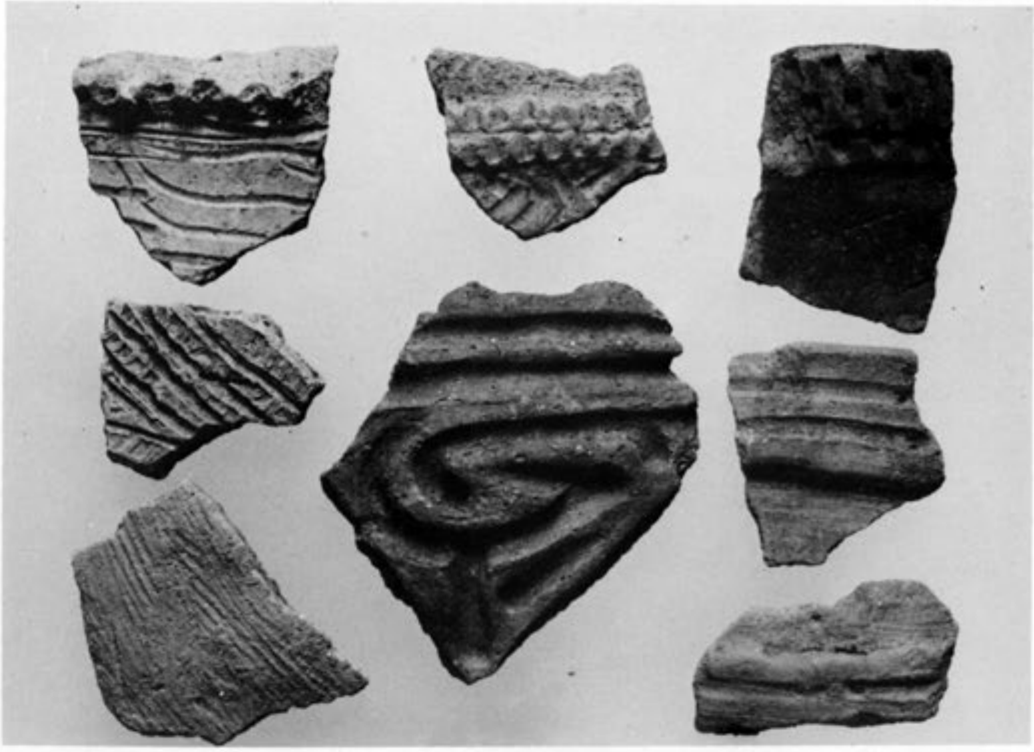
1.　7類土器

8.　8類土器



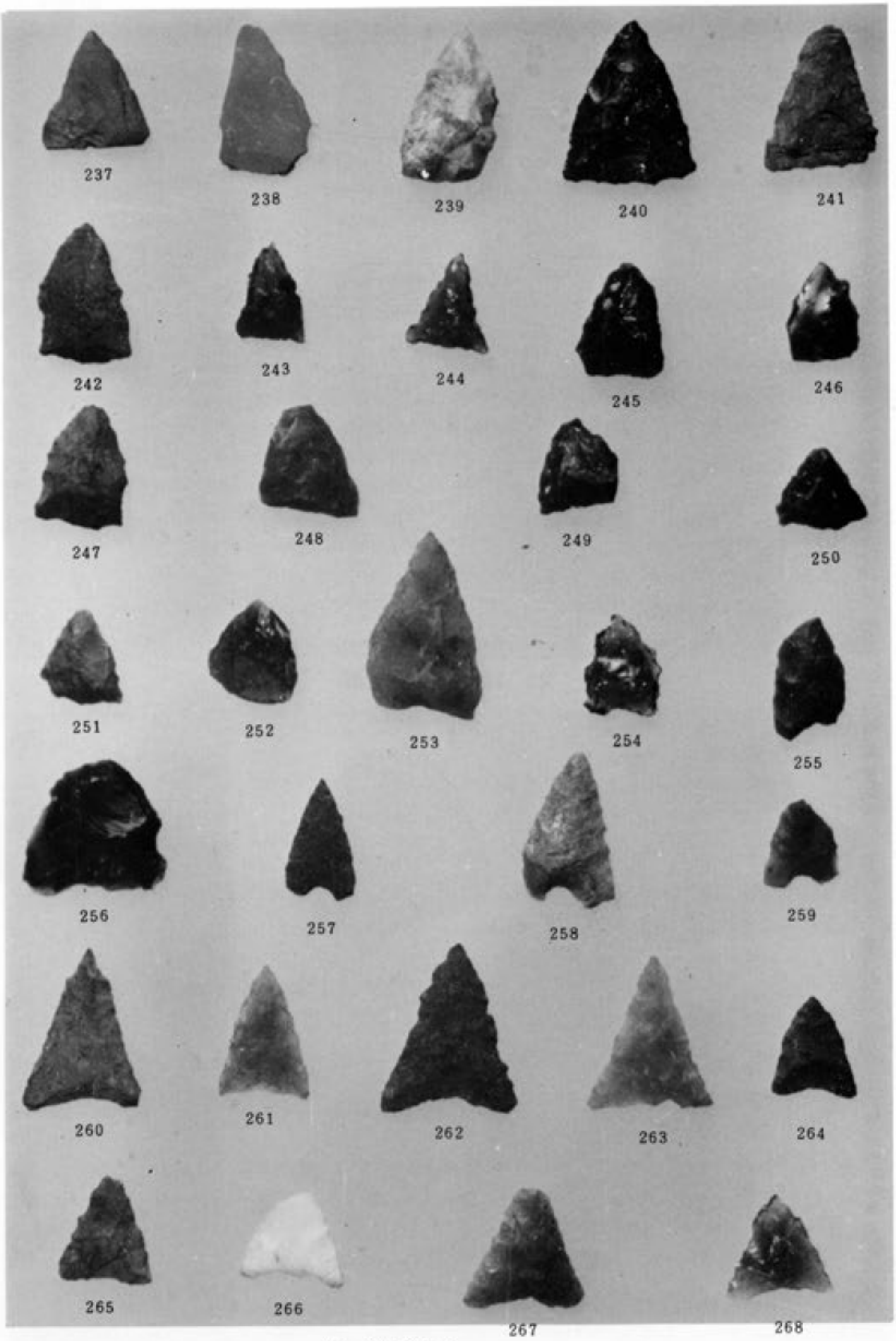
1.　8類土器

2.　8類土器

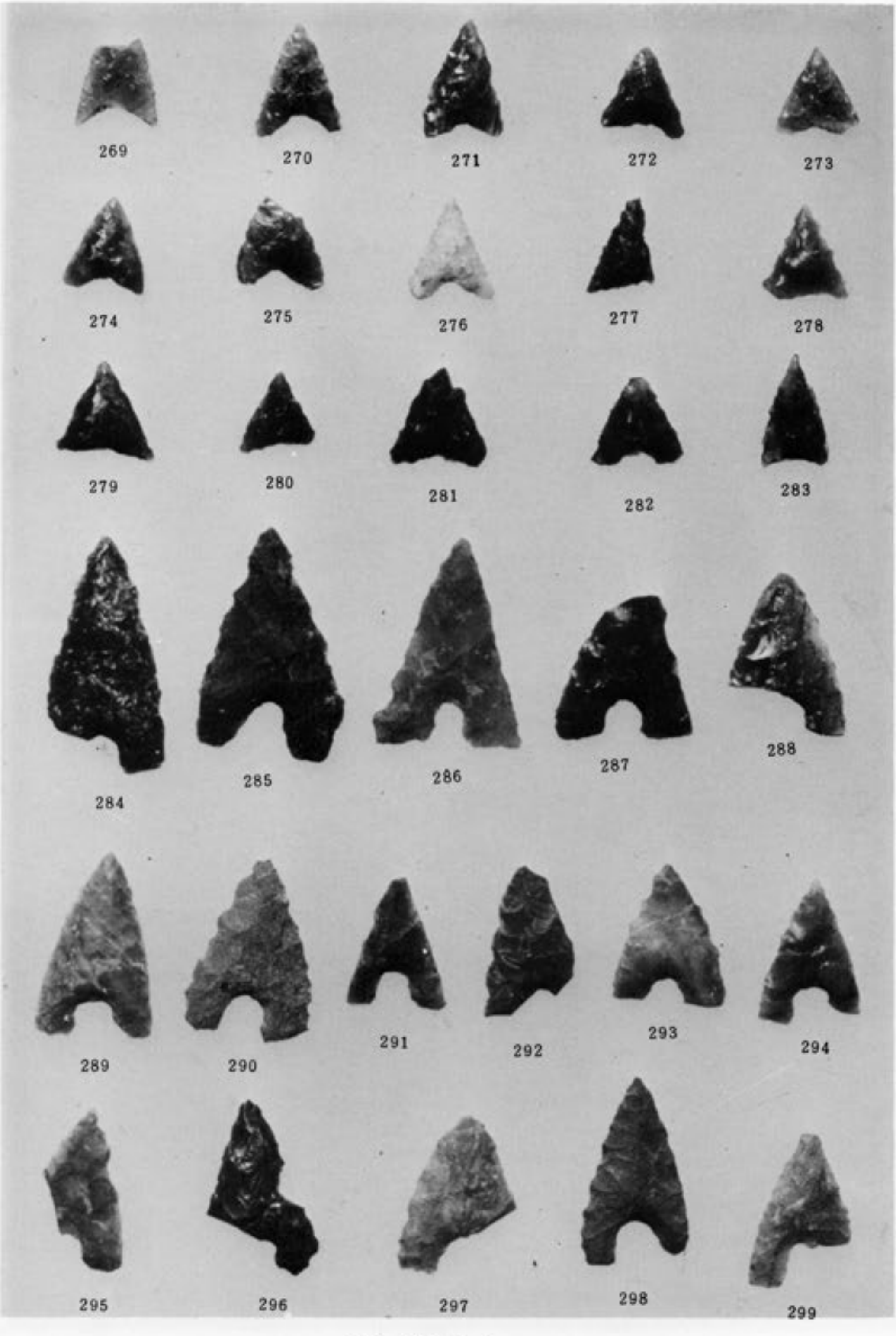


1.　10～13類土器

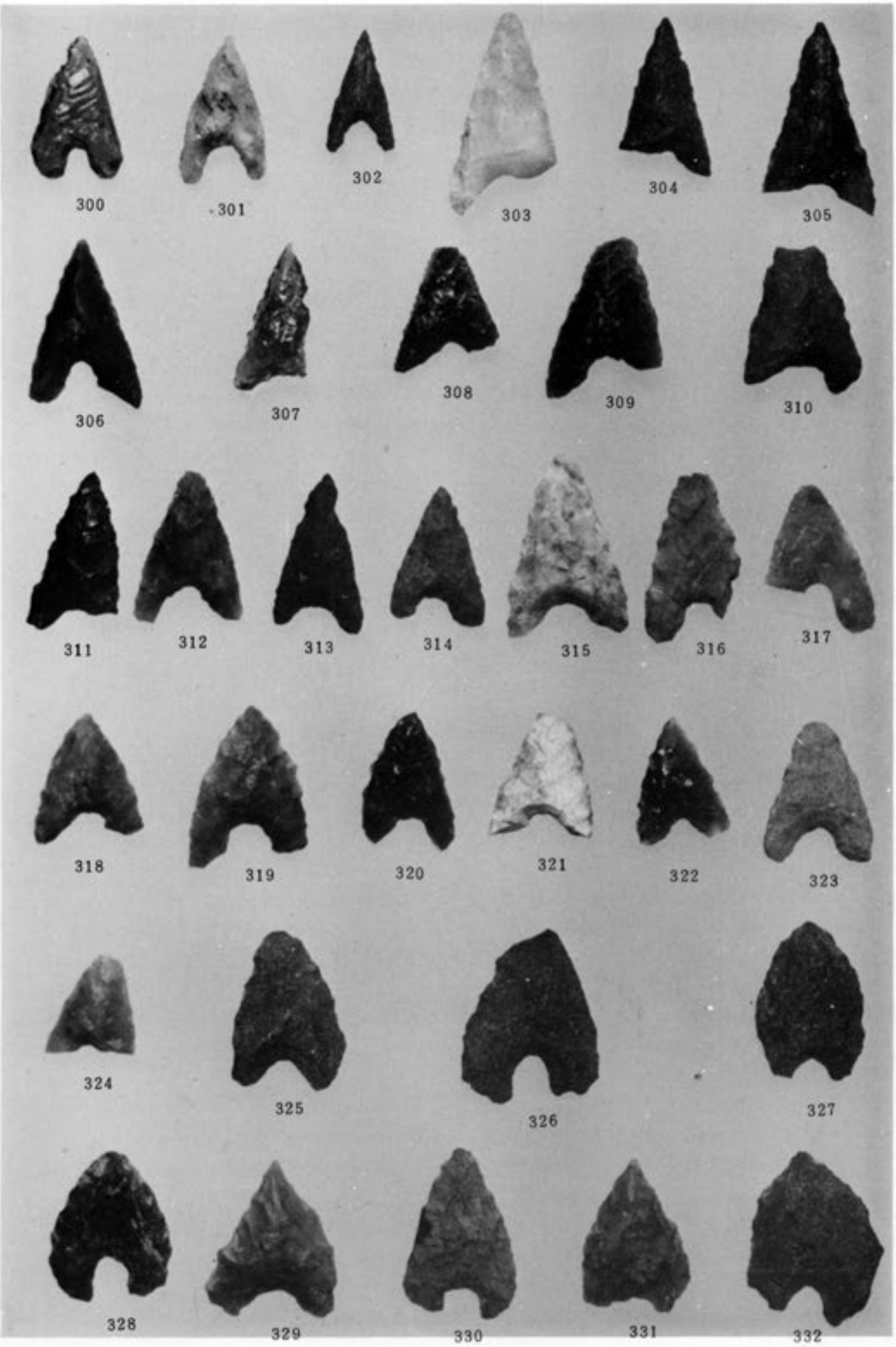
2.　9類土器


237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268

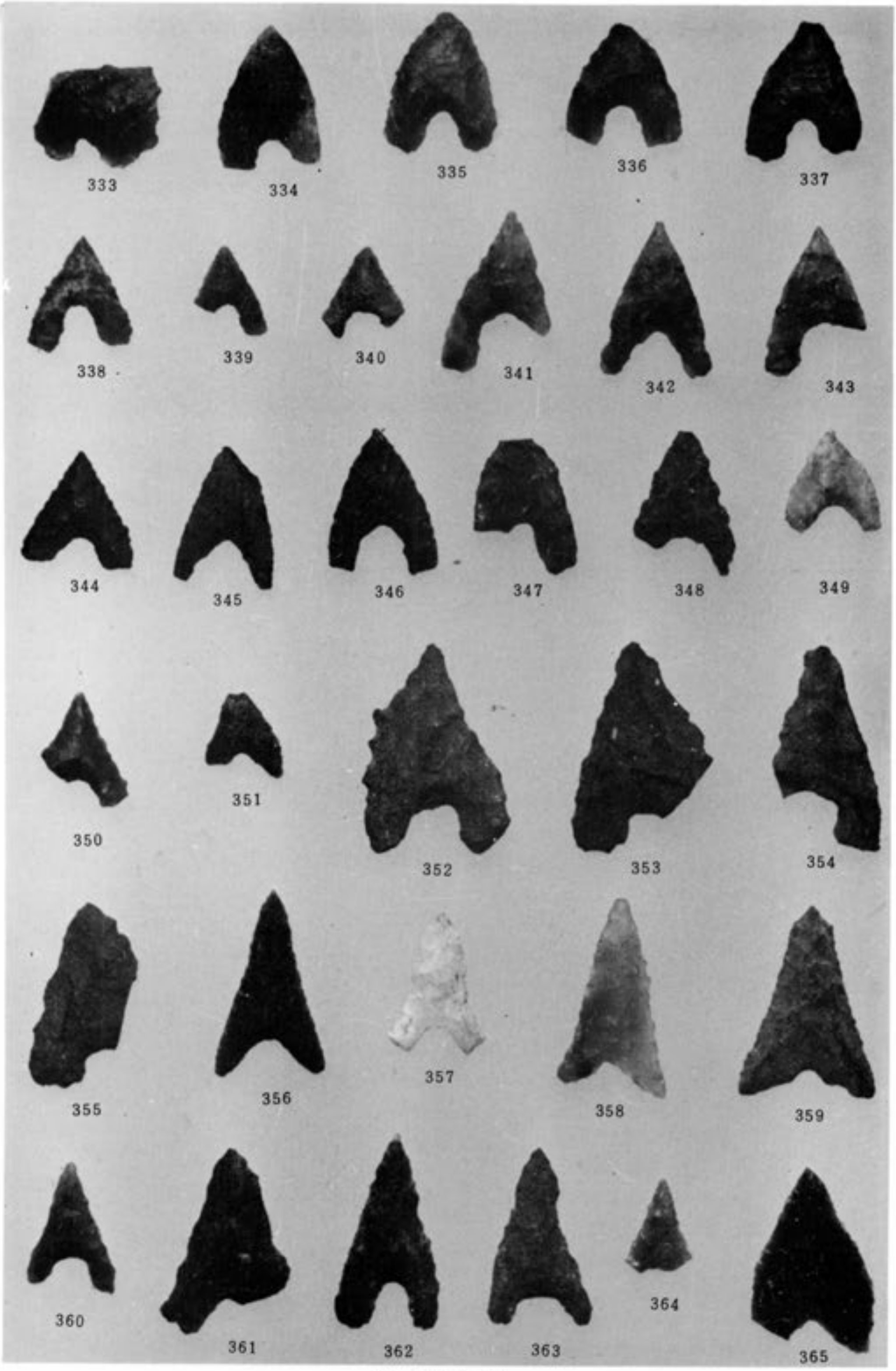
石　鏃（１）


269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299

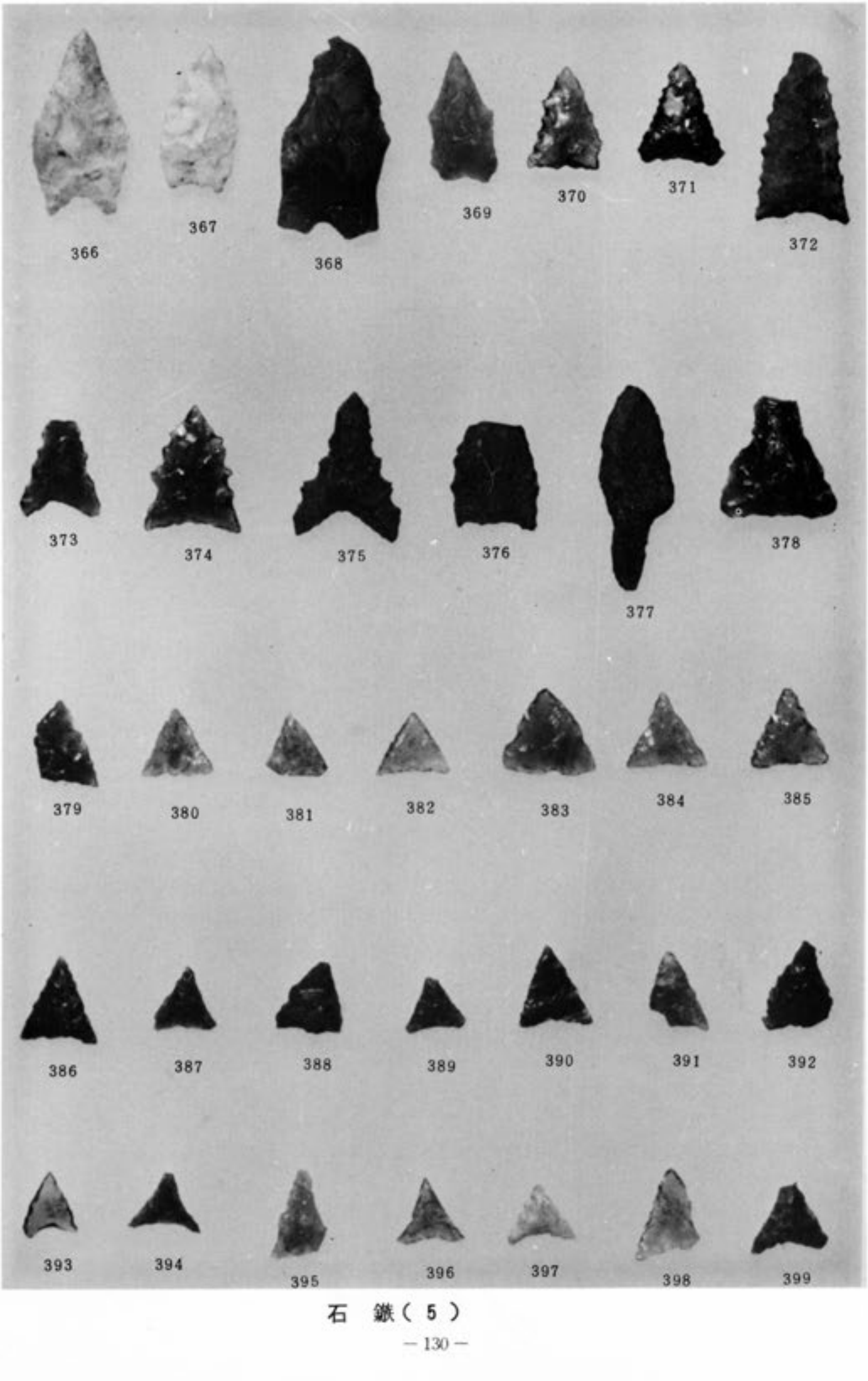
石　鏃（２）


300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332

石　鏃（３）

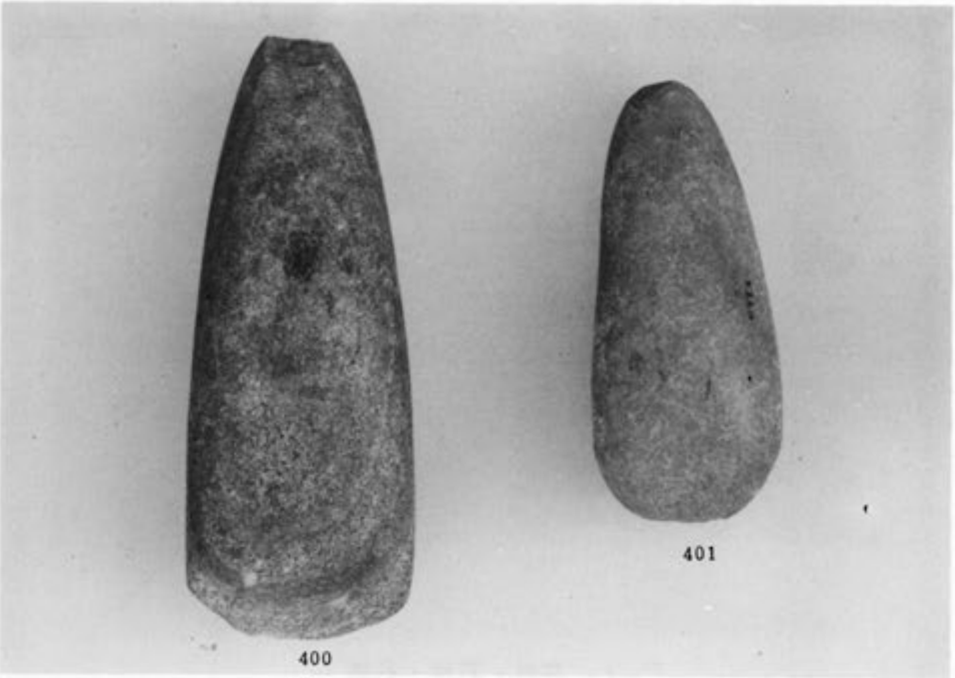

333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365

石　鏃（４）

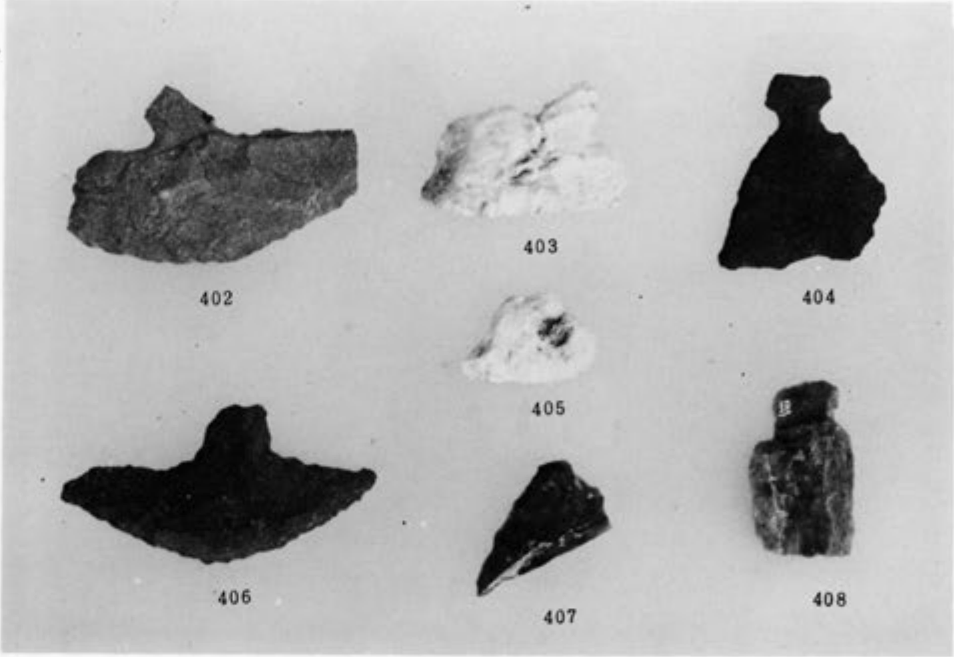

366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399

石　鏃（５）

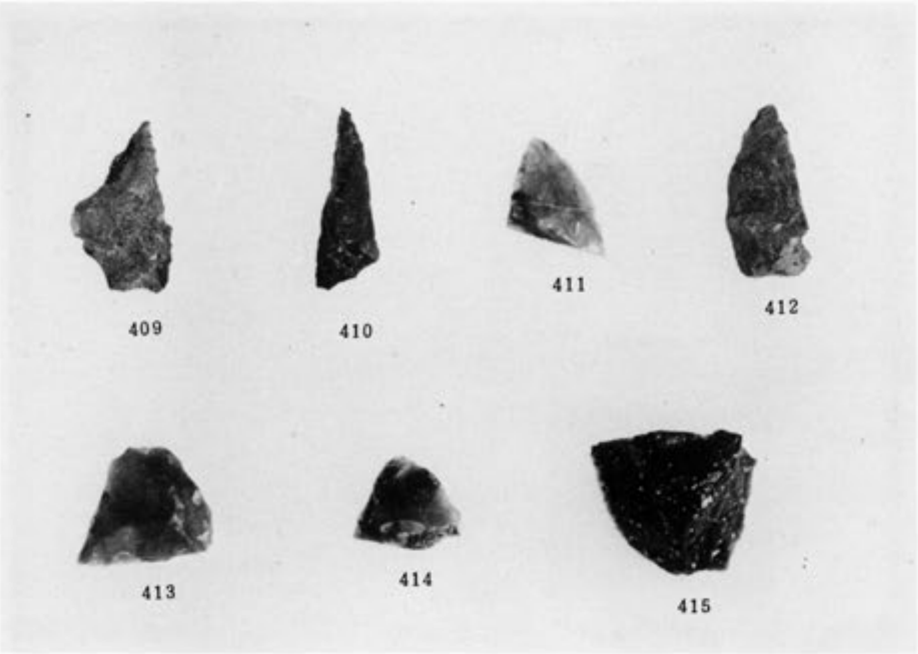
図版２７



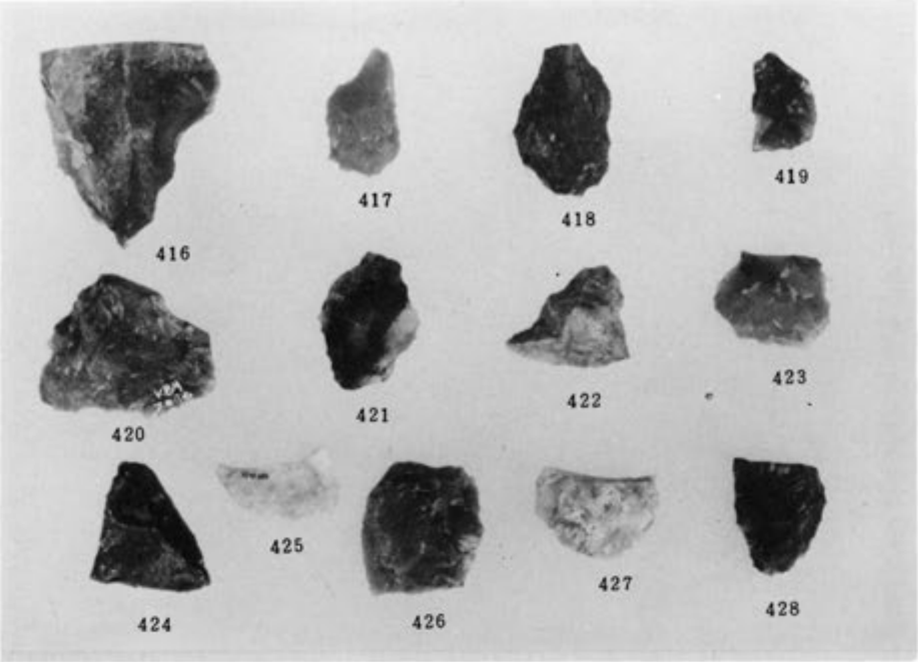
1. 磨製石斧



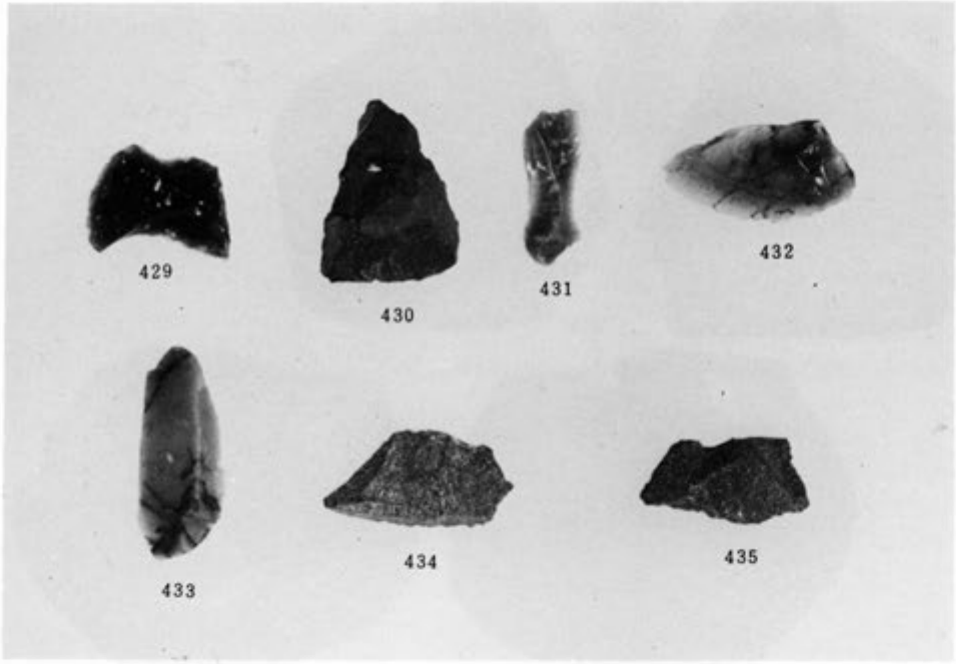
2. 石　匙



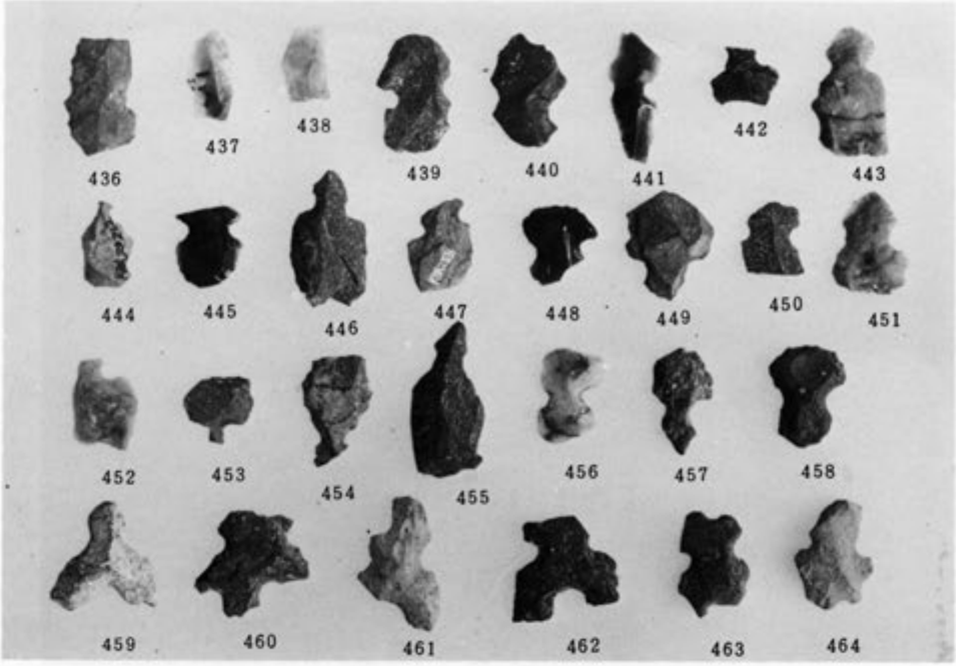
1. 石錘・石槍・石核



2. 加工痕のある剥片

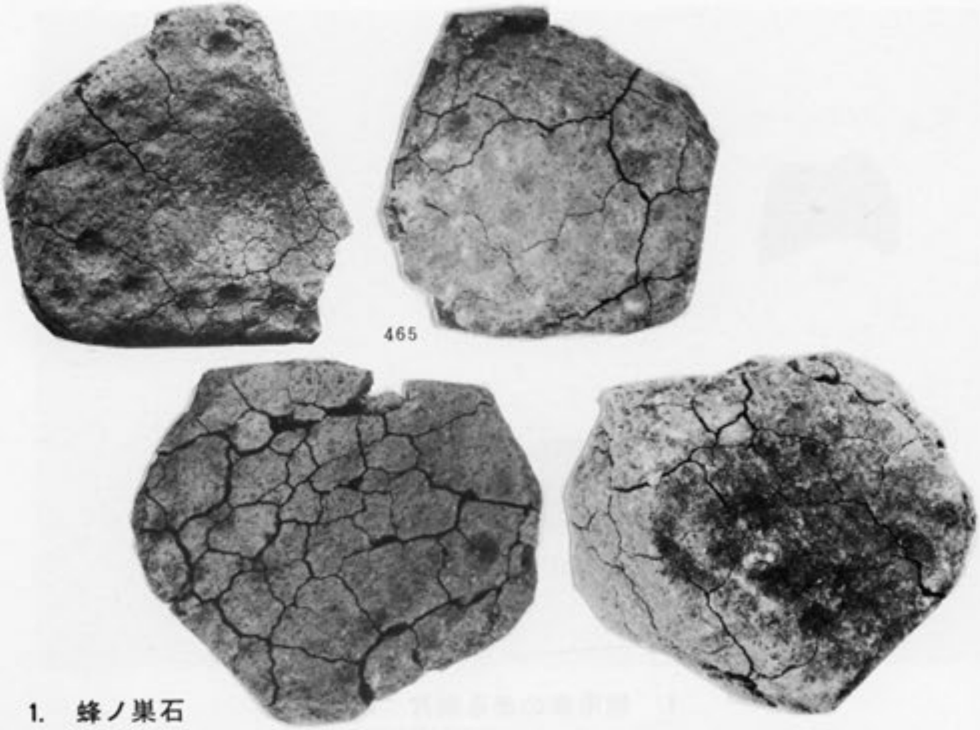


1. 使用痕のある剥片



2. 剥片・つまみ形石器・抉り入れ石器

図版３０



1. 蜂ノ巣石

2. 磨石・凹石

1. 弥生式土器口縁部

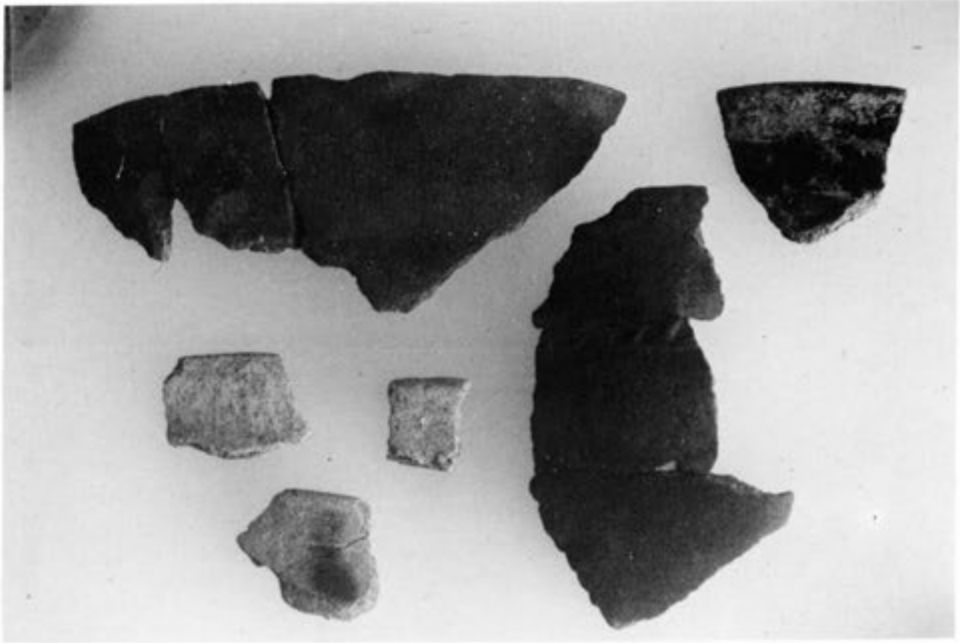
2. 弥生式土器底部

1. 道路跡

2. 土　　壙

1. 溝状遺構

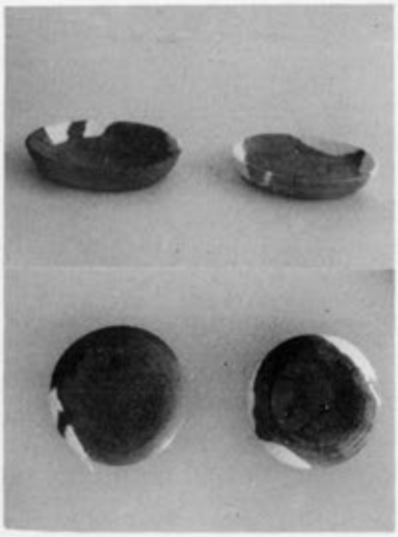
2. 土師器皿出土状態



1. 古墳時代の土器

2. 古墳時代の土器

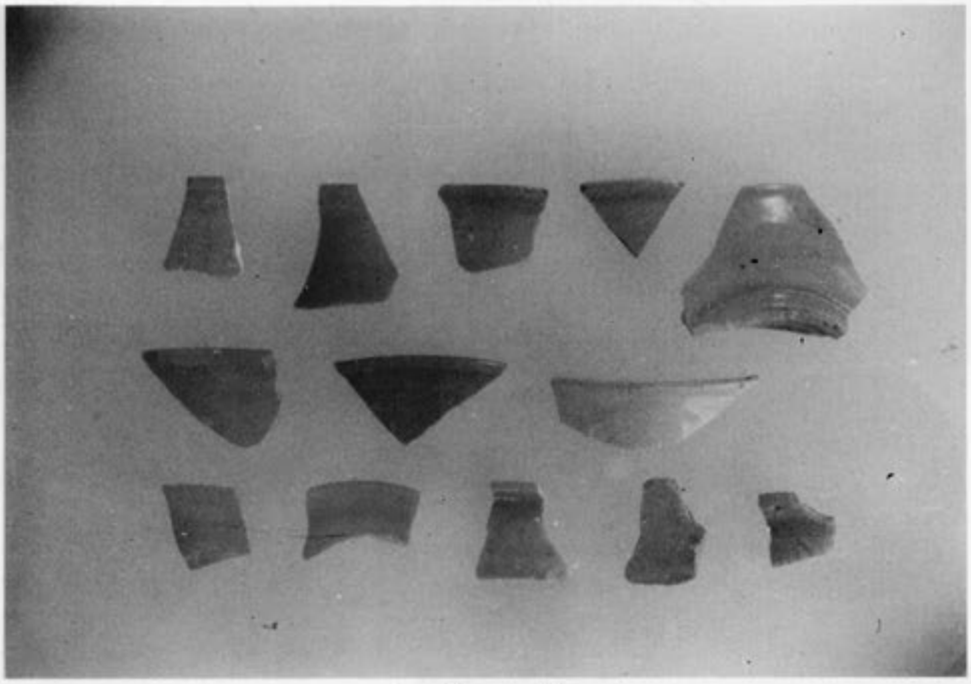
1. 土師器皿



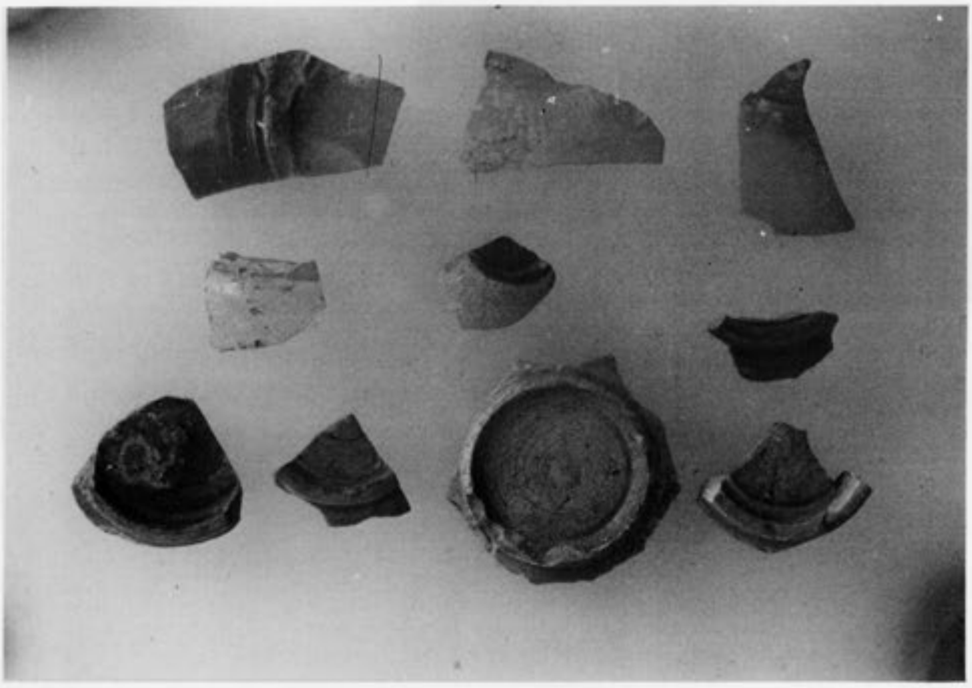
2. 土師器皿

3. 青　　磁

4. 陶　　器



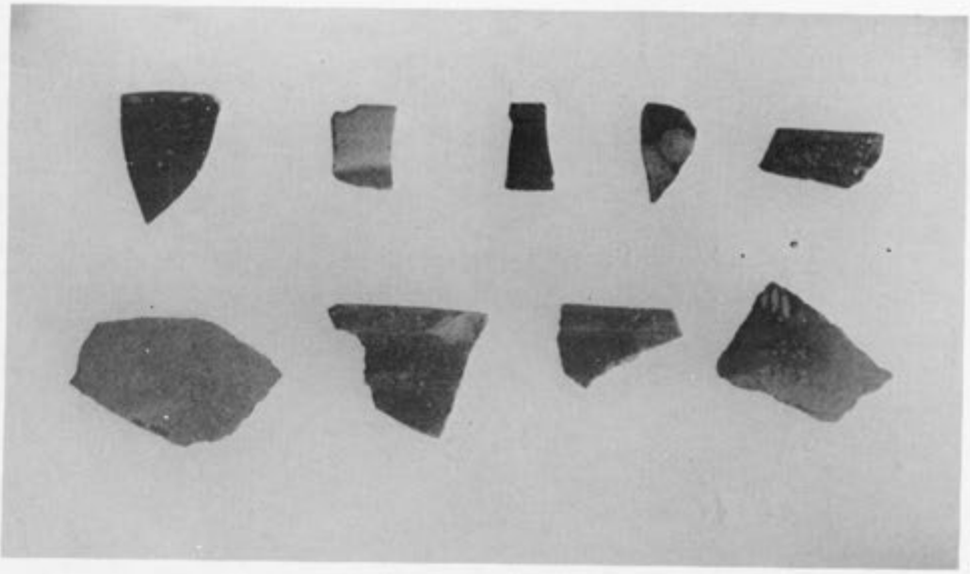
1. 青　　磁



2. 青　　磁

1. 陶　　器

2. 瓦質土器



3. 近世の陶磁器

木場Ａ－２遺跡

例　　　言

1．この報告書は，九州縦貫自動車道（鹿児島線）建設伴って，昭和53年～昭和54年度に発掘した木場A－2遺跡の調査報告書である。

2．発掘調査は，日本道路公団からの受託事業として，鹿児島県教育委員会が実施した。

3．木場A－2遺跡の調査は，牛ノ浜修が担当し，本書の執筆も牛ノ浜が行なった。

4．出土品は，文化課収蔵庫に保管している。整理・復元作業は，収蔵庫の整理作業員が行なった。

5．本書で用いたレベル数値は，すべて海抜高である。

6．遺物番号は，木場A－2遺跡で通し番号を付した。

7．発掘調査にあたり，鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏・故加治木工業教諭池水寛治氏に指導・助言を得た。石器については岡山大学稲田孝司氏の指導を得た。

目　　次

例　言 …… 1
目　次 …… 2
第１章 …… 3
第１節　調査の組織 …… 3
第２節　調査の経過 …… 3
第２章　調査の概要 …… 5
第１節　区割の設定 …… 5
第２節　層　序 …… 5
第３章　遺構・遺物 …… 10
第１節　Ⅳ層出土の遺物 …… 10
第２節　Ⅴ層出土の遺物 …… 12
第３節　Ⅵ層出土の遺物 …… 13
第４節　Ⅶ層出土の遺物 …… 17
第５節　Ⅷ層出土の遺物 …… 26
第４章　まとめにかえて …… 27

挿　図　目　次

第１図　木場Ａ－２遺跡の地形図 …… 7
第２図　第Ⅳ層出土遺物分布図 …… 8
第３図　第Ⅳ層出土遺物分布図 …… 9
第４図　第Ⅳ層出土石器実測図 …… 10
第５図　第Ⅴ層出土遺物分布図 …… 11
第６図　第Ⅴ層出土石器実測図 …… 12
第７図　第Ⅵ層出土遺物分布図 …… 14
第８図　第Ⅵ層出土石器実測図 …… 15
第９図　第Ⅶ層出土遺物分布図 …… 18
第10図　第Ⅶ層出土石器器種別分布図 …… 19
第11～12図　第Ⅶ層出土石器実測図 …… 20
第13図　第Ⅷ層出土遺物分布図 …… 24
第14図　第Ⅷ層出土石器実測図 …… 25

図　版　目　次

図版１　１．遺跡近景（南から）　２．発掘風景 …… 28
図版２　１．Ⅳ層出土の石器　２．Ⅴ層出土の石器 …… 29
図版３　１．Ⅵ層出土の石器　２．Ⅵ層出土の石器 …… 30
図版４　１．Ⅶ層出土の石器　２．Ⅶ層出土の石器 …… 31
図版５　１．Ⅷ層出土の石器　２．Ⅷ層出土の石器 …… 32

表　目　次

表１　Ⅳ層出土石器分類表 …… 10
表２　Ⅴ層出土石器分類表 …… 13
表３　Ⅵ層出土石器分類表 …… 16
表４　Ⅶ層出土石器分類表 …… 22
表５　Ⅷ層出土石器分類表 …… 26

第　1　章

第1節　調査の組織

調査責任者	文化課長	谷崎哲夫
	文化課長	猿渡侯昭
	課長補佐	荒田孝助
	課長補佐	本田武郎
	専門員	本蔵久三
	主任文化財研究員	諏訪昭千代
	主事	牛ノ浜　修
	係長	中条　享
	主幹兼係長	川畑栄造
	主事	伊地知千晴
	主査	安藤幸次
	主事	天辰京子
	主事	山下玲子

第2節　調査の経過（日誌抄）

発掘調査は，昭和53年12月11日から昭和54年４月23日まで行ったが，経過は日誌抄により以下略述する。

昭和53年12月11日(月)～12月15日(金)

木場Ａ－２遺跡発掘調査開始。ＳＴＡ162＋20とＳＴＡ162＋10の境界抗を中心線とし，中間点で東側をＥ区，西側をＷ区と区割りする。桑畑のため桑の根の除去作業より始める。遺跡面積が狭いため最初から全面調査にとりかかる。Ｅ区より層位を確認しながら調査する。遺跡は傾斜地で層位ごとの調査が困難である。

12月18日(月)～12月22日(金)

Ｅ区Ⅳ層掘り下げ。Ｗ区表層除去。Ｗ区は表層のすぐ下にⅣ層が検出される。Ⅳ層，Ⅴ層上面に石鏃出土。Ｗ区Ⅵ層下部に黒曜石製断面三角形尖頭器出土。Ｅ区Ⅳ～Ⅴ層掘り下げ。Ｗ区Ⅴ～Ⅵ層掘り下げ。Ｗ区黒曜石剥片・砕片がⅥ層中に出土し，中世の遺跡である可能性を旧石器時代の遺跡と判断し，調査期間および調査方法を再検討する。

昭和54年１月８日(月)～１月12日(金)

Ｅ区Ⅳ層～Ⅴ層掘り下げ。Ｅ区は傾斜面のためⅤ層が厚い。Ｗ区Ⅵ層掘り下げ。黒曜石剥片出土。

１月16日(火)～１月19日(金)

Ⅴ層～Ⅵ層掘り下げ。霜柱が強く遺物が浮きあがり調査が困難である。

1月22日(月)～1月26日(金)

下部の層位と遺物包含層確認のため東西・南北に2m幅のトレンチを設定し確認をいそぐ。Ⅵ～Ⅶ層にも包含確認。E区Ⅴ層下面から黒曜石製断面三角形尖頭器出土。また，チャート製製切出し状ナイフ形石器出土する。今週いっぱい木場C遺跡終了にともない作業員を増員する。

1月29日(月)～2月2日(金)

トレンチ調査と平行してE区のⅥ層掘り下げ。岡山理科大学三宅寛氏見学。2月1日雪，寒さが厳しくなる。

2月5日(月)～2月9日(金)

Ⅵ層掘り下げ。遺物の分布が北側に集中しはじめる。W区はⅥ層が薄くⅦ層に遺物の出土がみられる。

2月13日(火)～2月16日(金)

南北トレンチでⅦ層より多くの黒曜石製剥片・砕片出土。Ⅵ層の黒曜石と比較してやや気泡の少ないものに石材がかわる。Ⅶ層上面にて断面三角形尖頭器出土。E区Ⅵ層下部掘り下げ。W区Ⅵ層下部～Ⅶ層掘り下げ。加治木工業高校池水寛治氏指導。

2月19日(月)～2月23(金)

E区Ⅵ層下部，W区Ⅵ層下部～Ⅶ層掘り下げ。

2月26日(月)～3月2日(金)

E区Ⅵ層下部，W区Ⅶ層掘り下げ。E区桜島パミスと思われる層位確認。その直下より黒曜石の平扁礫を利用した細石刃核出土。寒い日が続く。2月28日，3月1日雪のため作業中止。

3月5日(月)～3月10日(土)

E区Ⅵ層，W区Ⅶ層掘り下げ。断面図作成（1/20）。今週より木場A遺跡から作業員の加勢をもらう。

3月12日(月)～3月17日(土)

断面用畦はずし，表層より掘り下げ。E区Ⅶ層掘り下げ。

3月19日(月)～3月24日(土)

E区Ⅶ層掘り下げ。W区Ⅶ～Ⅷ層掘り下げ。W区のⅦ層に遺物の集中がみられる。別府大橘昌信氏見学。

3月26日(月)～3月31日(土)

Ⅶ～Ⅷ層掘り下げ。

4月9日(月)～4月13日(金)

Ⅶ～Ⅷ層掘り下げ。遺物の出土状態で集中部と点在個所にわかれはじめる。

4月16日(月)～4月21日(土)

E区集中個所掘り下げ。レンズ状にないりこむ。下層のトレンチ確認。

4月23日(月)

トレンチ掘り下げ。遺物なし。木場A－2遺跡終了。

第２章　調査の概要

第１節　区割の設定

木場Ａ－２遺跡は，東西33m ×南北15m の約３50㎡の範囲で，川内川南側の舌状台地縁辺部にあり，川内川からの比高は約80m である。木場Ａ遺跡の東側７00m であり，南側に遠目ケ丘と呼ばれる楠原の岡が綾織の谷におりる標高２58m の傾斜地に位置している。

当地は畑であったが桑畑のため，その除去作業から始めた。調査実施にあたっては，面積が狭いため，ＳＴＡ 162＋20の境界抗とＳＴＡ 162＋10の境界抗より南へ2.5m 延ばしその点を結ぶ線を中心の東西線とし，中央に南北の畦を残し，東側をＥ区，西側をＷ区と設定し，トレンチでなく，グリッド調査を行った。当初，分布調査に基づき土師器・須恵器の散布地として調査にあたったが，他の遺跡での縄文時代包含層までは，傾斜地のため削平され部分的にしかみられなかった。

中世から古墳時代の遺物として，土師器・須恵器・陶器の破片が出土したが，全て表層からの出土で層位的確認は出来なかった。

縄文時代の遺物としては，Ⅳ層・Ⅴ層から石鏃・剥片（黒曜石・チャート）が出土したが，土器の出土はみられなかった。

旧石器時代の遺物としては，Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ層にかけて細石刃・細石刃核・ナイフ形石器・断面三角形尖頭器・スクレイパー・剥片・砕片等が出土した。遺構は検出できなかったが，遺物は調査地域のほぼ中程の北側に集中してみられた。尚，Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ層と層位は一応区別したが，傾斜地のため若干の問題を残している。

第２節　層　序

木場Ａ－２遺跡は山の傾斜面を削平して畑地にしたため南側では，縄文時代の包含層（Ⅳ層）がなく，遺跡面積が狭いことにより層位の標準層は認められなかったが，復元すると次員のような層位になる。

第Ⅰ層

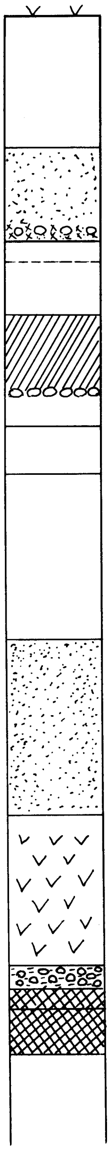
表土であり，現在の耕作土である。

第Ⅱ層

通常黒ニガと呼ばれている層位である。当遺跡では該当する層位はみられなかったが周辺の遺跡との関連で第Ⅱ層を設けた。

第Ⅲ層

黄褐色砂質土層で，下部にパミスがブロック状にみられるが，連続した層にはならない。この層は，アカホヤ層と幸屋火砕流に対比できるもので，その起源は鬼界カルデラに求められ，6050～6400Ｙ.Ｂ.Ｐ.の年代が与えられている。



第Ⅳ層

青灰色火山灰層（Ⅳａ層）と淡青灰色火山灰層（Ⅳｂ層）である。石鏃が検出されている。

第Ⅴ層

黒褐色粘質土層である。遺物は石鏃だけであるが，周辺の遺跡では縄文時代早期の遺物が検出されている。

第Ⅵ層

暗茶褐色粘質火山灰層である。第Ⅴ層と第Ⅵ層の間には，桜島起源とされる黄褐色パミス層がブロック状にみられる。第Ⅵ層からの遺物には，細石器・ナイフ形石器・断面三角形尖頭器を包含する。

第Ⅶ層

暗黄褐色火山灰層である。遺物として，細石刃・断面三角形尖頭器・剥片等が包含されている。細石刃の包含がみられるが，出土層位はⅠ層の直下になり第Ⅶ層の包含であるかどうかむずかしい。

第Ⅷ層

茶褐色火山灰層であり，断面三角形尖頭器・スクレイパー・剥片が上面に包含されていた。

第Ⅸ層

黄シラス層であり入戸シラスに該当する。

第Ⅹ層

礫混りシラス層で大隅降下軽石に該当する。

第Ⅺ層

淡桃色シラス層で入戸火砕流に該当する。

第Ⅻ層

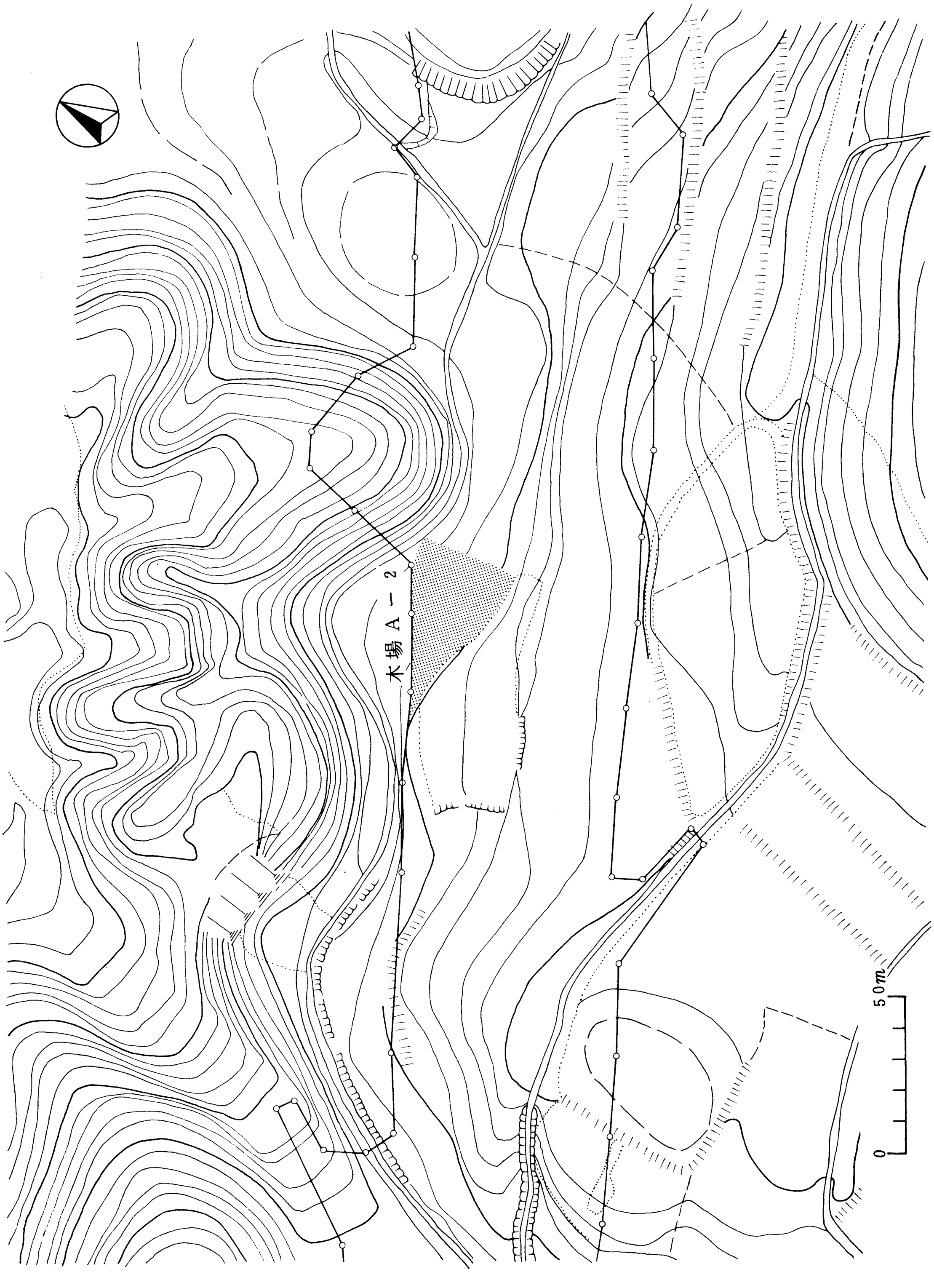
茶褐色粘質である。

第XIII層

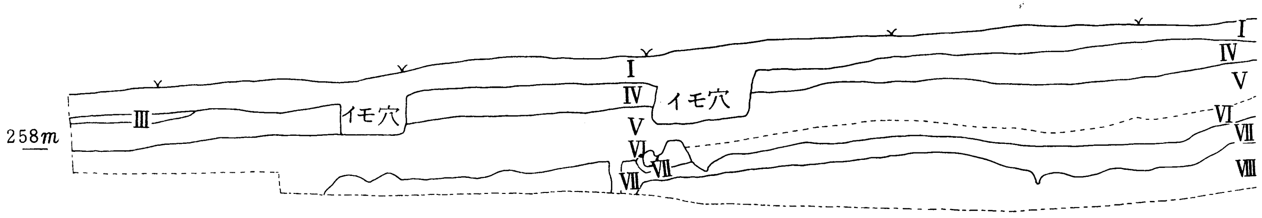
黒色粘質土であり，第Ⅻ～XIII層は粘質湖成層である。

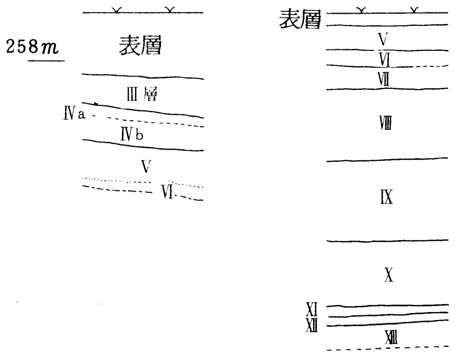
第XIV層

淡赤褐色粘質土層で安山岩腐植土である。

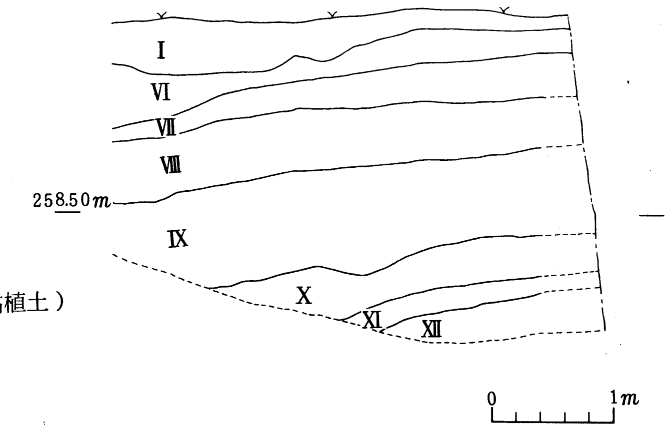


第1図 木場A－2遺跡の地形図

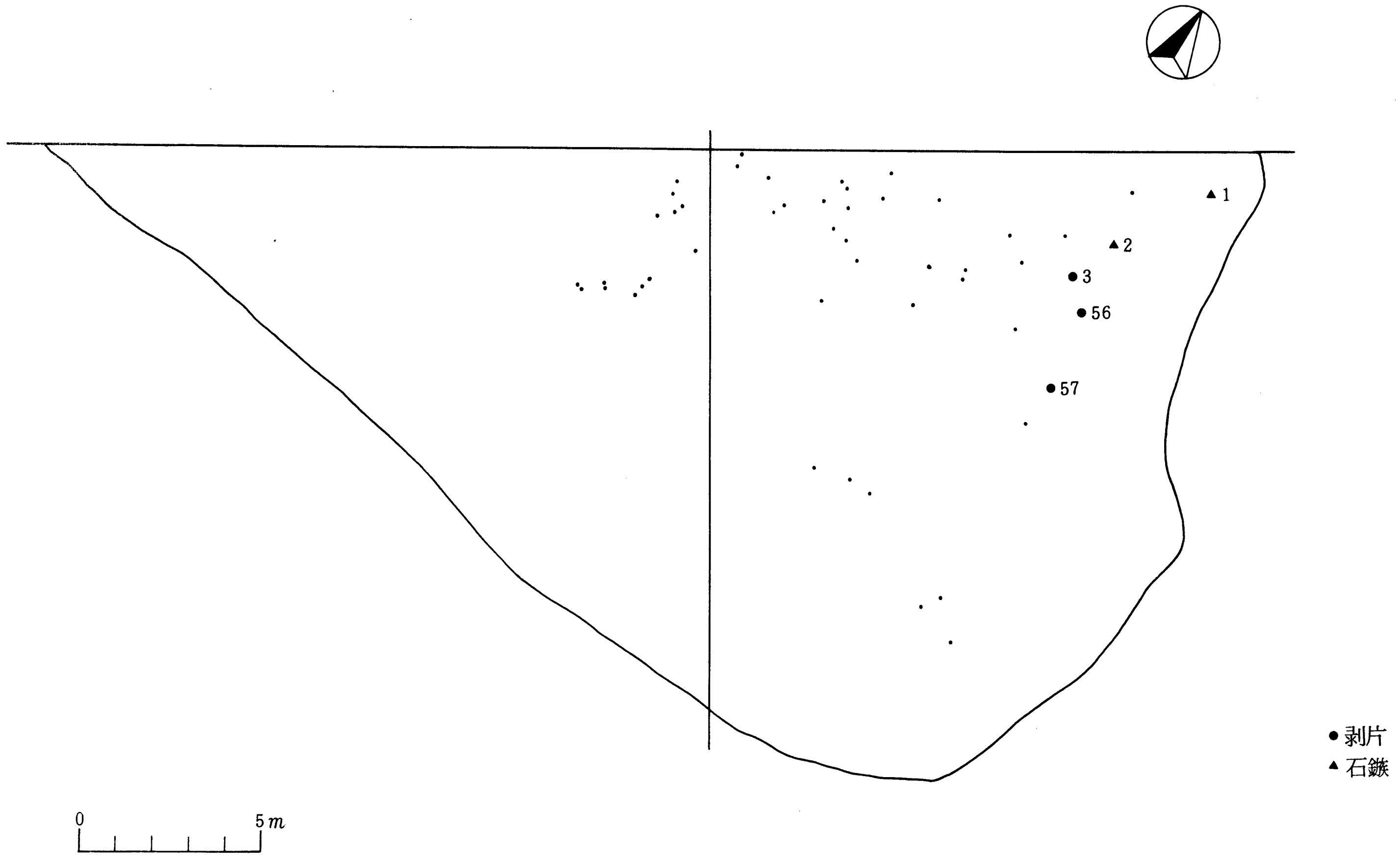




I　表　土
III　黄褐色砂質土層
IVa　青灰色火山灰層
IVb　淡青灰色火山灰色
V　黒褐色粘質土層
VI　暗茶褐色粘質火山灰層
VII　暗黄褐色火山灰層
VIII　茶褐色火山灰層
IX　黄シラス
X　礫混りシラス
XI　淡桃色シラス
XII　茶褐色粘質土
XIII　黒色粘質土
XIV　淡赤褐色粘質土（安山岩腐植土）



第２図　地　層　図

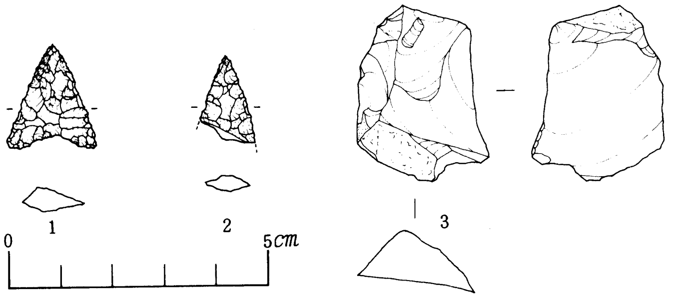


第 3 図　第 Ⅳ 層 出 土 遺 物 分 布 図

第3章　遺構・遺物

調査の概要で述べたように，当初の予定は古墳時代〜中世の土師器・須恵器・陶器の遺構・遺物の調査であったが，傾斜地で削平されていたため，古墳時代の遺物は表層でしか出土しなかった。Ⅳ層・Ⅴ層の遺物として石鏃と黒曜石・チャート製の剥片が出土した。土器の出土した。土器の出土はみられなかったが周辺遺跡との関連で縄文時代に想定される。Ⅵ層からは細石刃・細石刃核・ナイフ形石器・断面三角形尖頭器の出土をみた。Ⅶ層・Ⅷ層にも断面三角形尖頭器・剥片・石核（残核）の出土をみた。これは層序の時間的差を考えるより，傾斜地の遺跡として層序の把握が確実でなかった。これは後の項でくわしく述べるが，断面三角形尖頭器の比較と遺物の集中個所の構成より考えられる。次に各層位別に遺物の紹介をしたい。

第1節　Ⅳ層出土の遺物（第4図　図版2）



第4図　Ⅳ層出土の石器実測図

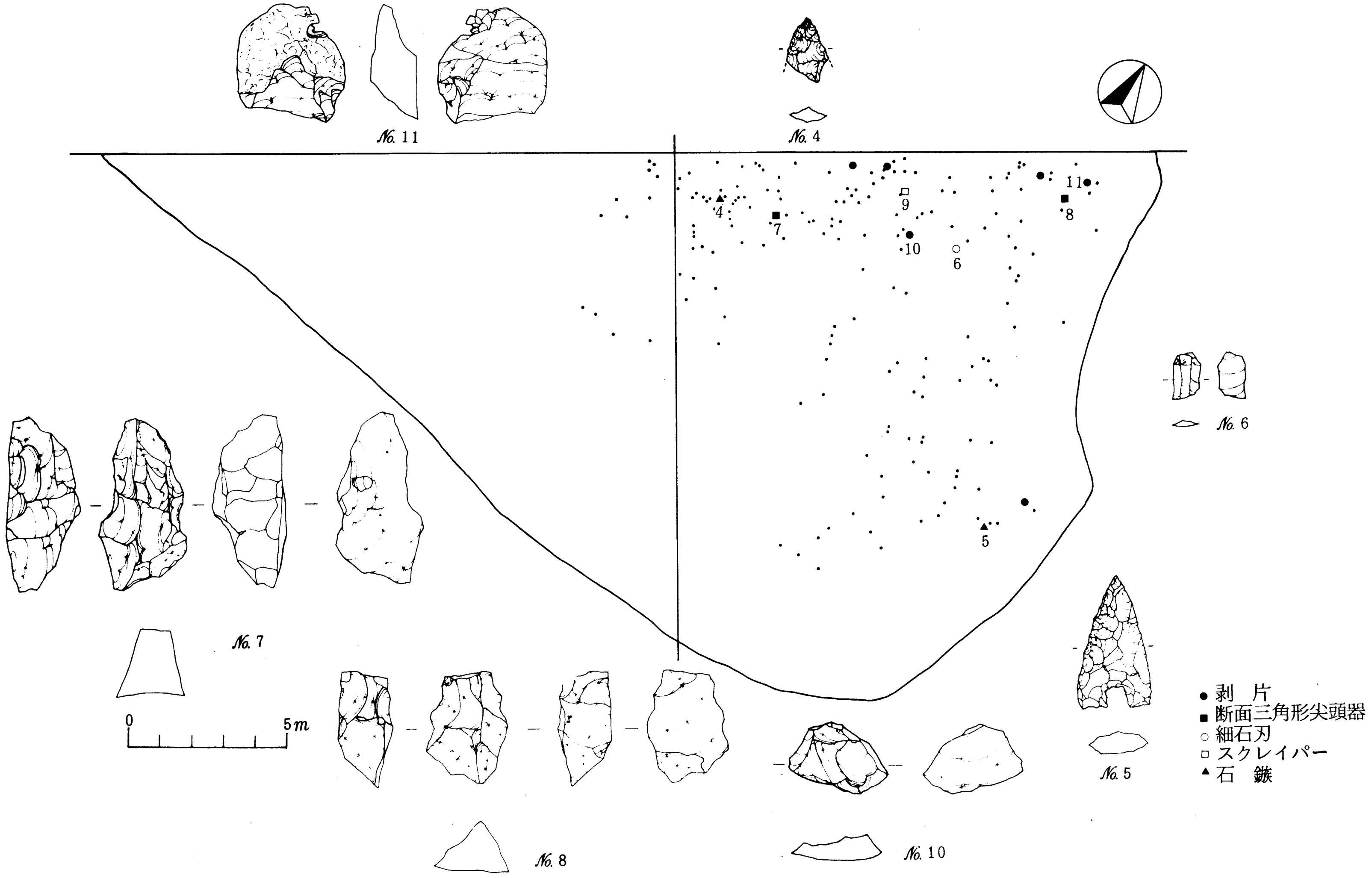
層位の項で述べたように，Ⅲ層黄褐色砂質土層下にⅣ層の青灰色火山灰層が存在する。Ⅲ層の黄褐色層はⅣ層と整合に堆積しており，その層相の異なりでより鮮明にみえる。調査の結果，遺構は検出されず，また層位もE区にみられるだけであった。

石鏃（1・2）

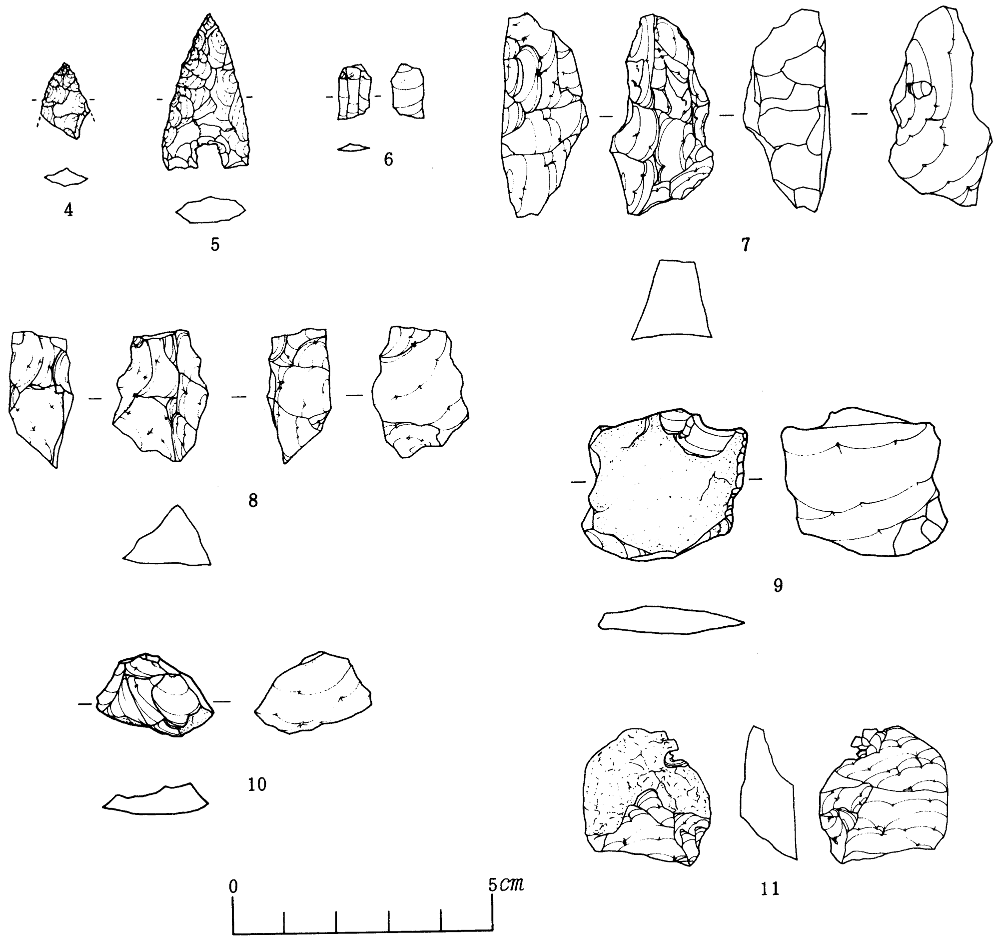
1は，均正のとれた二等辺三角形を呈し，抉りは脚部から広く，浅く形成されている。石材は黒曜石である。2も先端部は1と同様であるが脚部は欠損し不明である。黒曜石である。3はチャート製の剥片で一部に自然面を残し，使用痕の認められるものである。

表1　Ⅳ層出土石器分類一覧表

番号	器　種	区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石　質	備　考	挿図番号
1	石　鏃	E	4	1.75	1.70	0.45	1.0	黒曜石		1
2	石　鏃	E	4	(1.65)	(0.96)	(0.33)	(0.5)	黒曜石		2
3	剥　片	E	4上	3.17	2.45	0.95	8.0	チャート		3
4	剥　片	E	4上	3.97	2.23	0.89	7.8	黒曜石		
5	剥　片	E	4	3.47	2.36	1.08	7.1	黒曜石		



第 5 図　第 V 層出土遺物分布図



第６図　Ｖ層出土の石器実測図

第２節　Ｖ層出土の遺物（第７図　図版２）

Ⅳ層青灰色火山灰層・淡青灰色火山灰層下にＶ層の黒褐色粘質土が存在する。腐植土を主体にした黒色土層である。下部には黄色軽石（パミス）層がブロック状に部分的に存在する。これはこれまで溝辺台地などで確認された桜島降下軽石層と呼ばれる桜島起源の火山灰に比定され，10.630±220年Ｂ．Ｐ．と11.200±200年Ｂ．Ｐ．のＣ[14]年代測定値が得られている。

遺構は検出されず，層位もＥ区にみられるだけである。遺物はＶ層上面に石鏃と剥片であり黒曜石が主体を示めている。Ｖ層下部に旧石器時代の遺物がみられるがこれはパミス層がブロック状に存在するため，Ｖ層とⅥ層の間に出土したものと把握した。ここからは，細石刃，断面三角形尖頭器・スクレイパー・剥片が出土した。

石鏃（４・５）

4は，脚部が欠損しているが，気泡の少ない良質の黒曜石を使用した二等辺三角形鏃である。5は，均正のとれた二等辺三角形で抉りは小さいが深い。石材は玄武岩である。

細石刃（6）

黒曜石製の打瘤を持つ頭部で断面は台形を呈する。

断面三角形尖頭器（7・8）

7は，Bタイプの尖頭器であり，剥離面と二面の調整剥離のあるものである。また先端部が弯曲し，中央部の両側縁に抉りがあり抉り入りの石器の可能性もある。石材は黒曜石で鹿児島市吉野町三船産と思われる。8はやはりBタイプの二面の調整剥離をもっもので先端部が欠損している。やはり三船産の黒曜石を石材としている。

スクレイパー（9）

気泡の少ない黒曜石を素材とした自然面を残した剥片で石縁辺部にリタッチがみられるスクレイパーである。

剥片（10・11）

10は，打瘤をもつ横長の剥片であり打点周辺に調整剥離が加えられているが用途は不明である。薩摩郡樋脇町上牛鼻の黒曜石を石材としている。11は，三船の黒曜石で原石から剥離した自然面を残した剥片に三ケ所打撃を加えたものである。

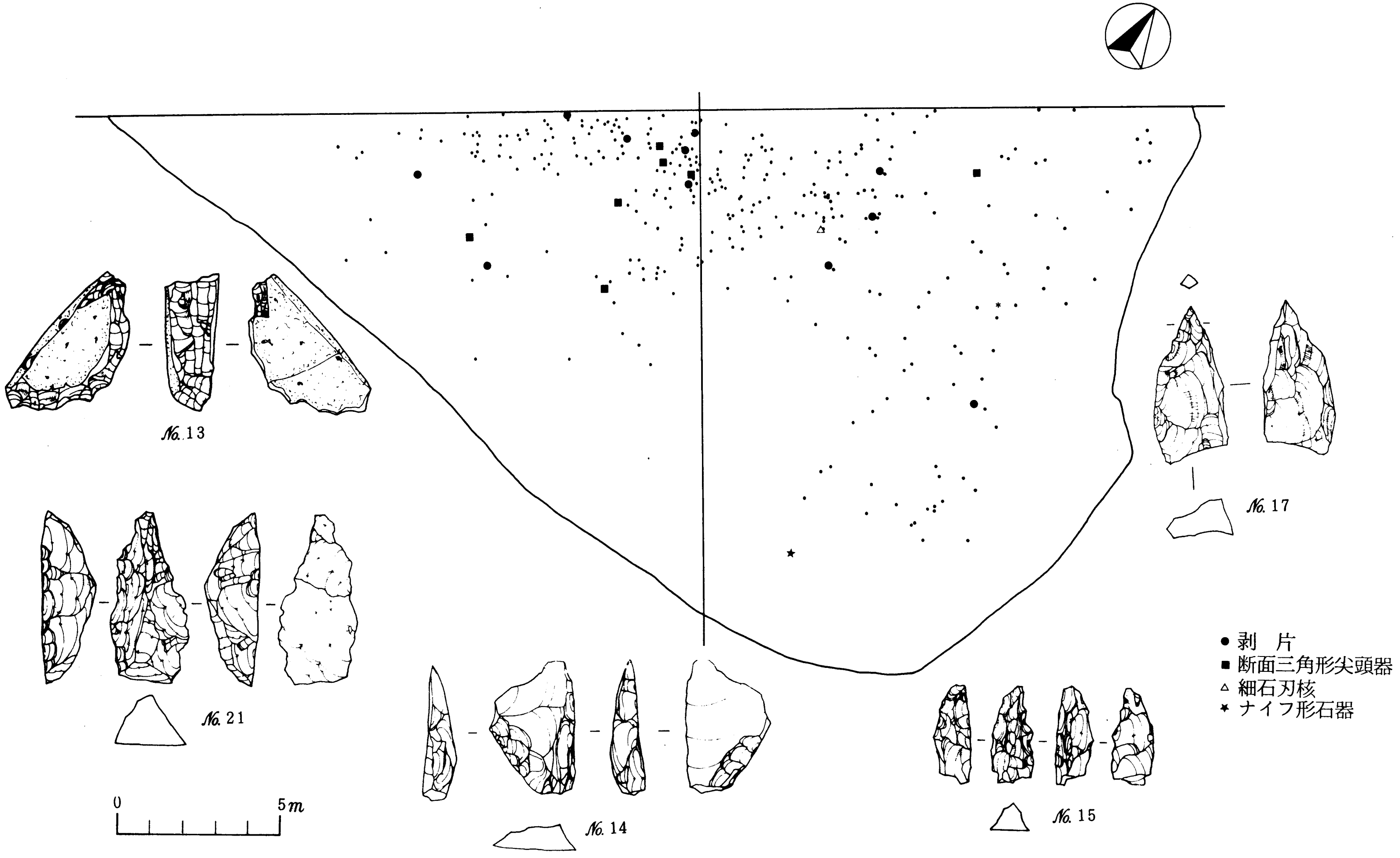
表2　Ⅴ層出土石器分類表

番号	器種	区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質	備考	挿図番号
6	石鏃	E	5	(1.50)	(0.90)	(0.44)	(0.4)	黒曜石	先端部	4
7	石鏃	E	5	3.04	1.66	0.53	2.2	玄武岩		5
8	細石刃	E	5下	0.98	0.58	0.10		黒曜石		6
9	断面三角形尖頭器	E	5下	3.74	1.93	1.45	9.1	黒曜石	B	7
10	断面三角形尖頭器	E	5下	(2.62)	1.69	(1.04)	(4.4)	黒曜石	B	8
11	スクレイパー	E	5下	2.97	2.76	0.52	4.7	黒曜石		9
12	剥片	E	5	1.45	1.31	0.43	0.7	黒曜石		
13	剥片	E	5	2.26	1.98	0.52	2.9	黒曜石		
14	剥片	E	5下	2.02	1.41	0.63	1.4	黒曜石		10
15	剥片	E	5下	2.85	2.01	0.66	4.8	黒曜石		
16	剥片	E	5下	2.44	1.79	0.58	2.9	黒曜石		
17	剥片	E	5下	2.33	2.35	0.97	5.9	黒曜石		11

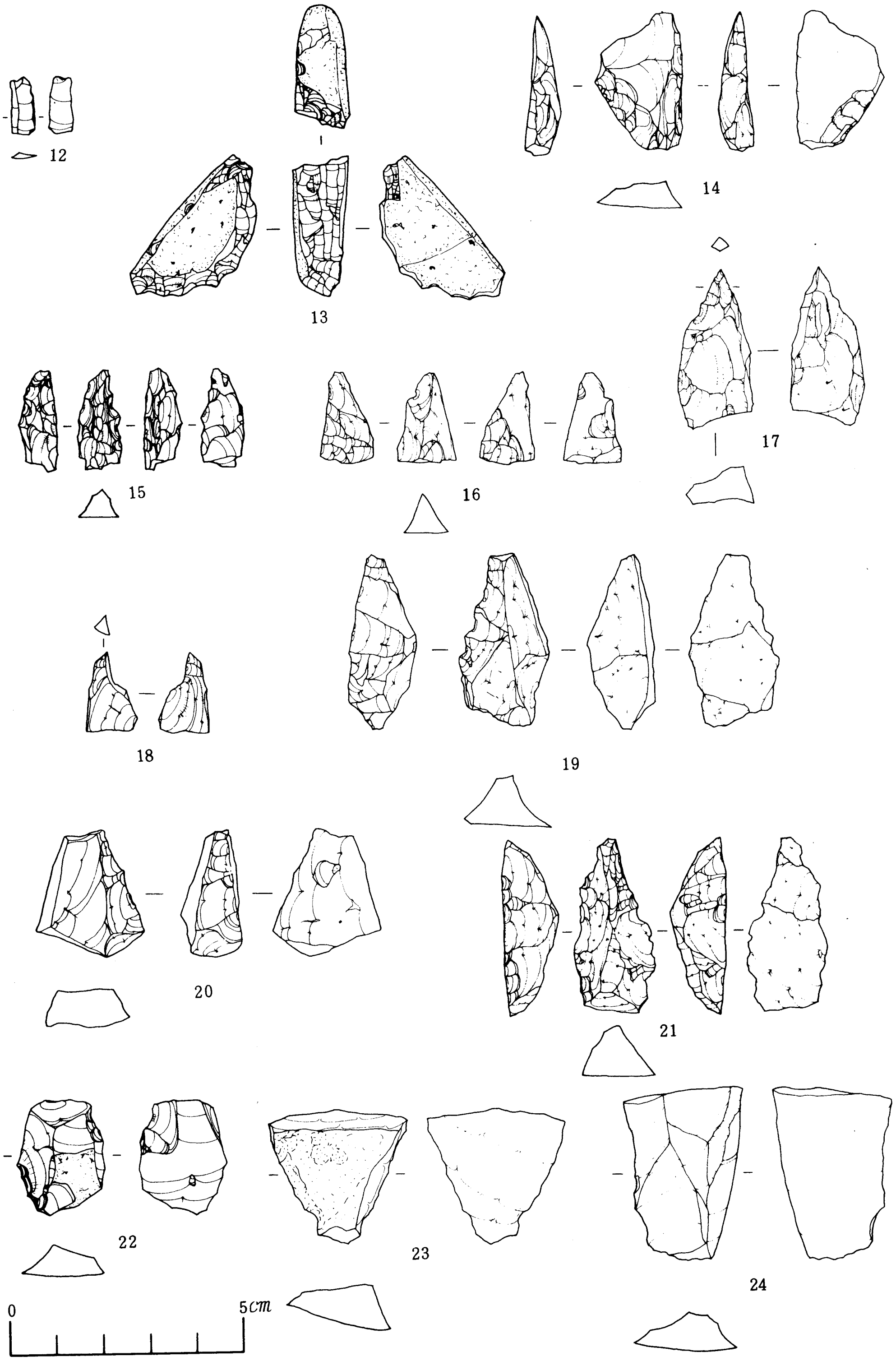
第3節　Ⅵ層出土の遺物（第10図・図版3）

Ⅴ層下部の黄色軽石層下にⅥ層暗茶褐色粘質火山灰層が存在する。2の層位は溝辺台地の石峰遺跡や加栗山遺跡・加治屋園遺跡の細石器文化層と対比される。

遺構は検出されず遺物も遺跡範囲全体に広がった。遺物は，細石刃・細石刃核・ナイフ形石



第７図　第Ⅵ層出土遺物分布図



第８図　　Ⅵ層出土の石器実測図

器・断面三角形尖頭器・剝片・石核（残核）が出土した。

細石刃（12）

黒曜石で断面三角形の頭部であり，刃部の刃こぼれが顕著にみられる。

細石刃核（13）

気泡の少ない良質な扁平な角礫の黒曜石を用い，打面は調整しながら側面は平担面を基調にし，下縁は片面からの調整剝離により整形されている。木場A－2遺跡では唯一のものである。

ナイフ形石器（14）

チャートを石材として用いた切出し形のナイフ形石器である。背部と基部は調整剝離がなされ，刃部には使用痕が認められる。

断面三角形尖頭器（15～21）

15は，Aタイプの三面に加工・調整剝離のあるものであり，先端部及び基部が欠損している。石材は気泡の少ない黒曜石を用いている。16は，やはりAタイプであるが，片面に顕著に調整剝離がみられる。三船の黒曜石で基部が欠損している。17もAタイプであるが，断面は二等辺三角形になり若干他のタイプと異るものである。気泡な少ない黒曜石を用いている。18はBタイプの二面に加工・調整剝離のあるものであるが，欠損部が多く，打面と剝離面を考えると尖頭器の類にはいらないかも知れない。19は，断面三角形であるが，一面しか加工・調整剝離を加えないCタイプであり，先端部が欠損している。三船の黒曜石を用いている。20は，やはりCタイプであるが断面は台形を呈す。やはり三船の黒曜石で先端部・基部を欠いている。21は，均正のとれたBタイプである。先端部は鋭くなく先端から頂部にかけ剝出されている。やはり三船の黒曜石と思われる。

剝片（22～24）

剝片は11点出土した。22は気泡の少ない良質の黒曜石を用いた縦長剝片である。23は頁岩を用いた剝片で縦長の折断剝片であり，表皮が残っている。24は硬質頁岩製の整形された折断剝片であり，縁辺部には使用痕が認められる。

表3　Ⅵ層出土石器分類表

番号	器　　種	区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石　質	備　　考	挿図番号
18	細　石　刃	E	6	1.14	0.44	0.12	0.1	黒　曜　石		12
19	細　石　刃　核	E	6	3.53	1.64	0.97	7.9	黒　曜　石		13
20	ナイフ形石器	E	6	2.86	1.84	0.66	3.2	チャート		14
21	断面三角形尖頭器	W	6	(2.12)	(0.93)	(0.75)	(1.1)	黒　曜　石		15
22	断面三角形尖頭器	W	6	(1.87)	(1.20)	(1.91)	(1.6)	黒　曜　石		16
23	断面三角形尖頭器	W	6	3.05	1.52	0.61	2.9	黒　曜　石		17
24	断面三角形尖頭器	W	6	(1.65)	(1.01)	(0.27)	(0.6)	黒　曜　石		18
25	断面三角形尖頭器	E	6	(3.65)	1.74	1.12	(600)	黒　曜　石		19

番号	器　　種	区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石　質	備　　考	挿図番号
26	断面三角形尖頭器	W	6	(2.52)	(2.02)	(0.79)	(2.9)	黒 曜 石		20
27	断面三角形尖頭器	E	6	3.62	1.64	1.23	5.7	黒 曜 石		21
28	剥　　片	W	6	2.71	1.75	1.41	6.5	黒 曜 石		
29	剥　　片	W	6	2.67	2.00	0.81	3.5	黒 曜 石		
30	剥　　片	W	6	3.05	1.41	0.47	1.7	黒 曜 石		
31	剥　　片	W	6	2.54	0.99	0.69	2.4	黒 曜 石		
32	剥　　片	W	6	2.27	1.67	0.54	1.6	黒 曜 石		
33	剥　　片	W	6	1.81	1.29	0.45	1.0	黒 曜 石		
34	剥　　片	E	6	2.84	2.73	0.81	6.5	頁　岩		23
35	剥　　片	E	6	2.13	1.71	0.62	2.5	黒 曜 石		
36	剥　　片	E	6	3.62	2.44	0.95	8.5	硬質頁岩		24
37	剥　　片	W	6	2.41	2.68	0.85	2.9	黒 曜 石		
38	剥　　片	W	6	2.46	1.76	0.65	2.5	黒 曜 石		22
39	石　核（残核）	E	6	2.75	2.12	1.34	7.7	黒 曜 石		

第４節　Ⅶ層出土の遺物（第11・12図　図版４）

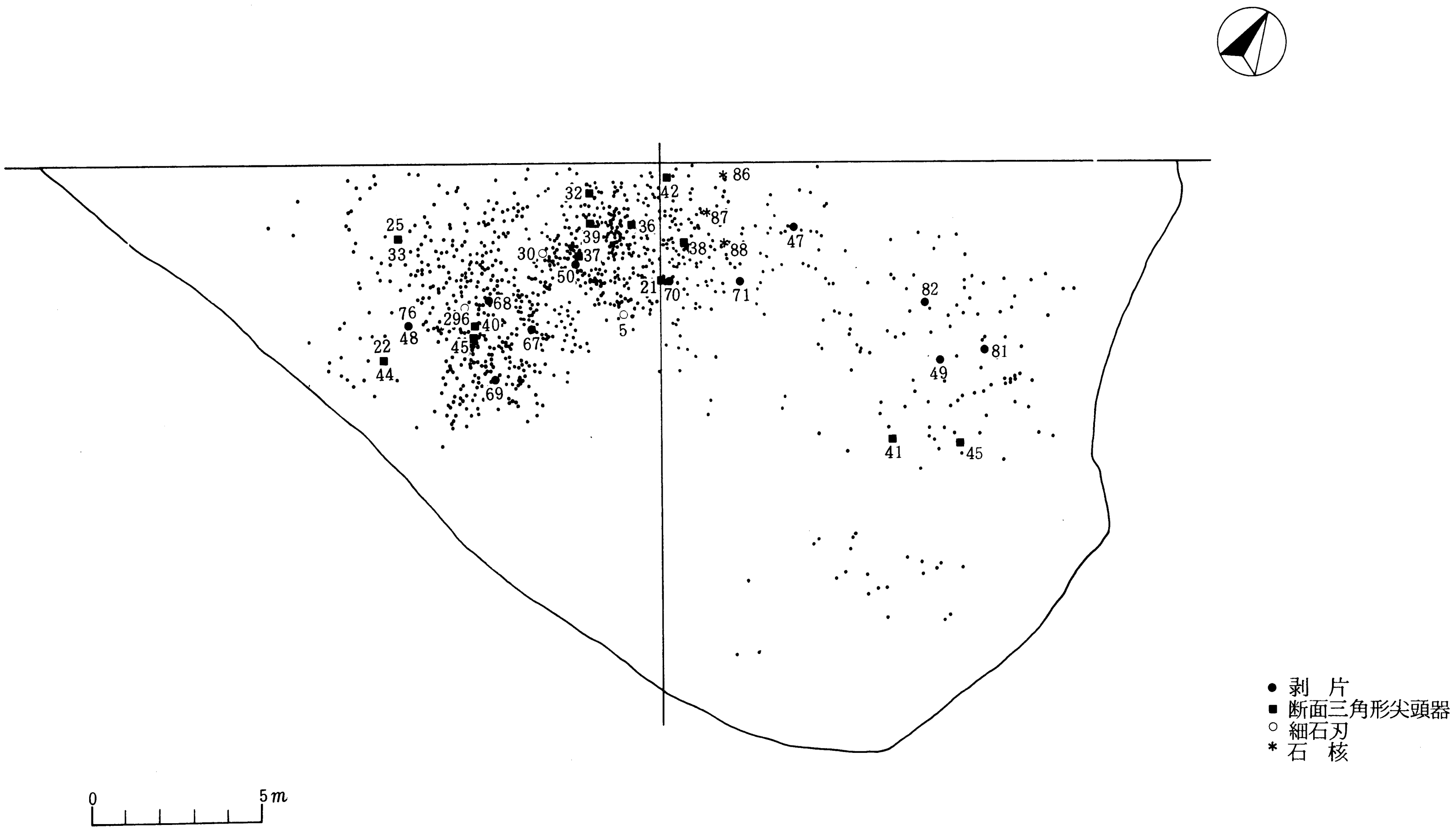
Ⅵ層暗茶褐色粘質火山灰層下にⅦ層暗黄褐色火山灰層が存在する。遺構は検出されず，遺物はW区の北側に集中しはじめた。これは，W区に於いては，表層のすぐ下にⅦ層が存在するところが多く，Ⅵ層までは削平されていた個所が多い。遺物としては，細石刃・断面三角形尖頭器・剥片・石核が出土した。

細石刃（25～30）

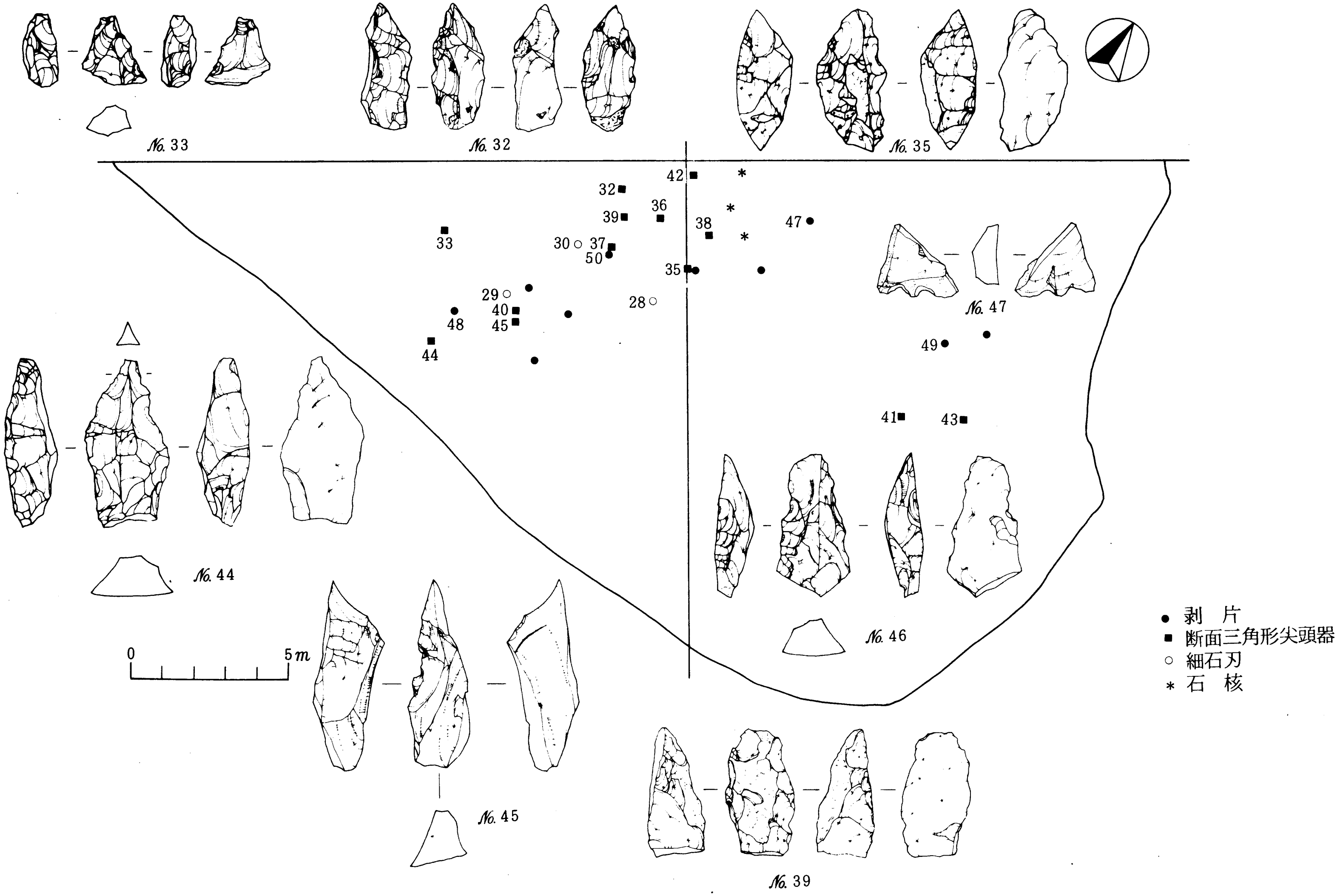
Ⅶ層に於いて細石刃の出土がみられるが，これは表層下でⅥ層までの層位が削平されているため確認がむずかしかった。25は，断面三角形を呈す幅広の打瘤をもつ頭部である。気泡の少ない黒曜石を用いている。26は，完形品で断面三角形を呈し，刃部の刃こぼれがみられる。27は，長さが短かいがやはり完形品で断面三角形を呈する。黒曜石を用い刃部の刃こぼれは顕著にみられない。28は断面台形を呈し打瘤をもった頭部である。刃こぼれはみられない。29は，気泡の少ない良質の黒曜石を用いたやや幅広の尾部である。刃部の刃こぼれは顕著でない。断面は三角形を呈す。30は，断面三角形を呈す尾部である。

断面三角形尖頭器（31～46）

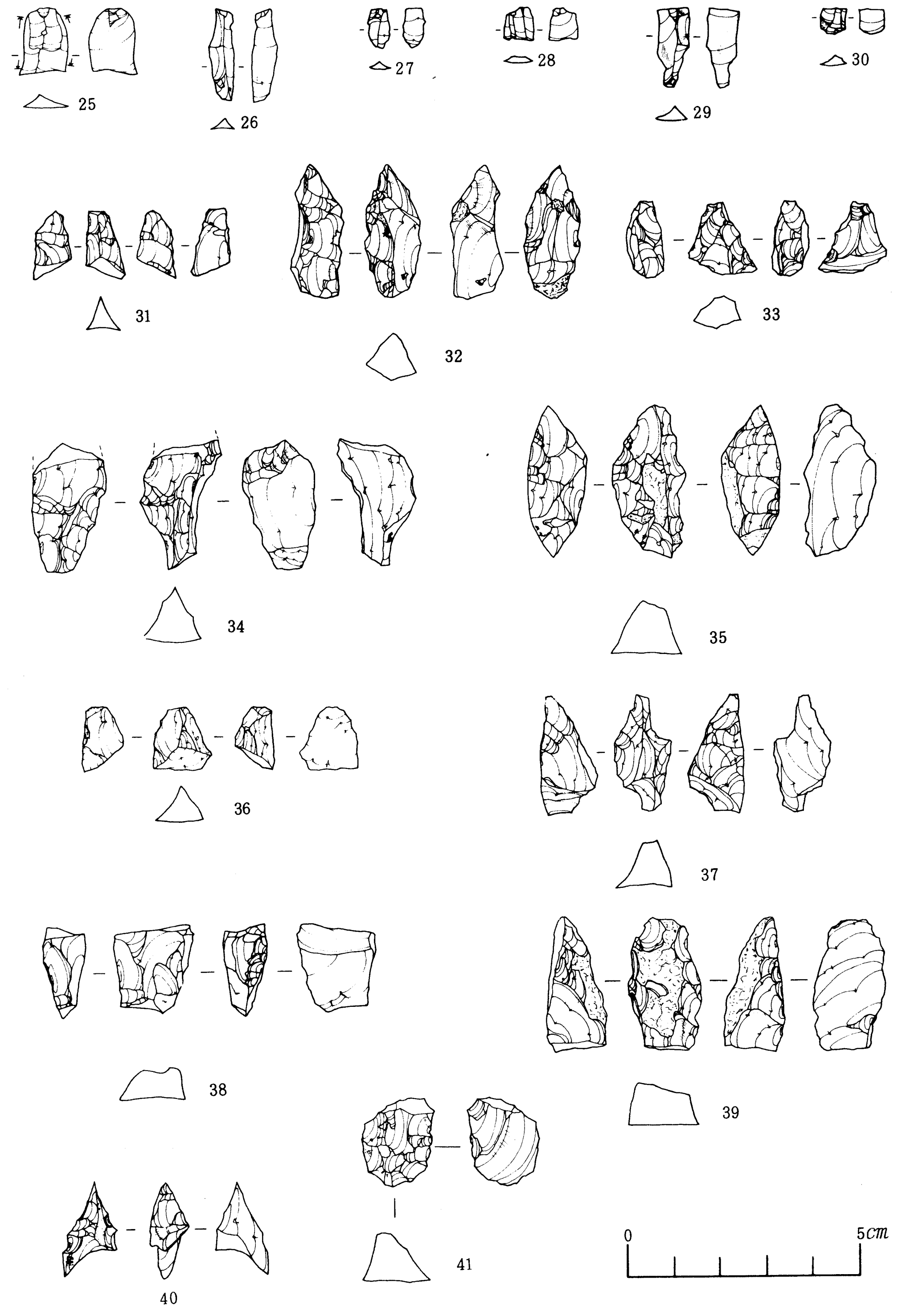
31は，Ａタイプの三面に加工・調整剥離のあるもので基部は欠損している。尖頭器として分類したが先端部が鋭くなく自然面が残っている。気泡の少ない黒曜石を用いている。32もＡタイプで上牛鼻の黒曜石を用いている。先端部は鋭く基部には自然面が残っている。33は，気泡の少ない黒曜石を用い，Ａタイプである。先端部は欠損し，基部も欠損している。34は，Ｂタイプで三船の黒曜石を用いている。剥離面と二面の調整剥離のあるものであり先端部が湾曲し



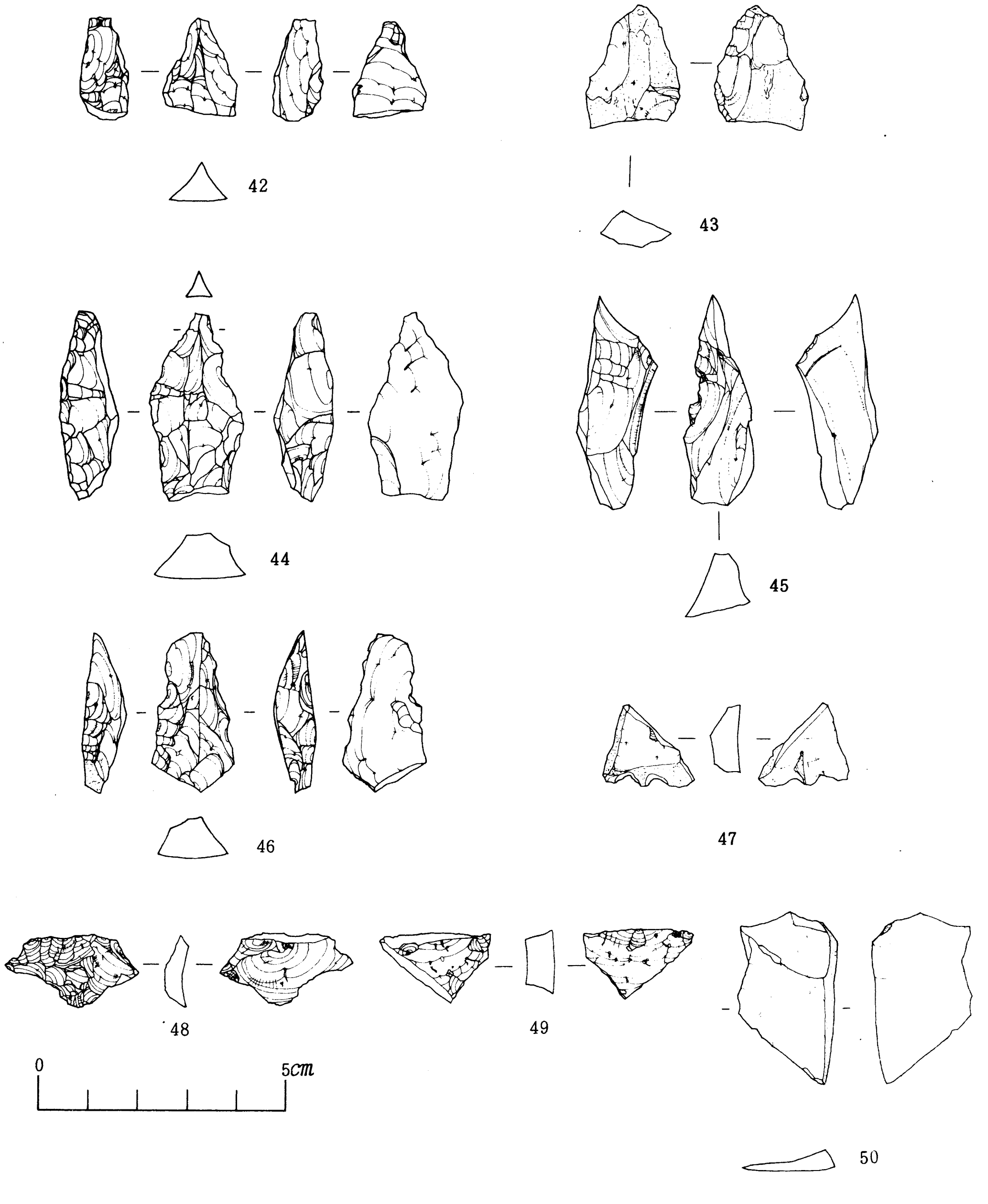
第 9 図　第 Ⅶ 層 出 土 遺 物 分 布 図



第 10 図　Ⅶ 層 出 土 石 器 器 種 別 分 布 図



第11図　Ⅶ層出土の石器実測図（1）



第12図　　Ⅶ層出土の石器実測図（2）

先端部と基部が欠損している。35は，Bタイプで三船の黒曜石を用い頂部には自然面を残している。器形は弯曲し先端部と基部の判断がつきにくい。中央部の片側縁に抉りがあり抉り入りの石器の可能性もある。36は，Bタイプで三船の黒曜石を用い先端部は欠け，基部は欠損している。37もBタイプで先端周辺の側辺部は頂部にむかって調整剝離を加え，右側辺部は不規則な剝離である。先端部は欠け，基部は欠損している。38はBタイプで三船の黒曜石を用い頂部から先端部にかけて自然面が残っている。先端部は丸味をおび縁辺部には調整剝離が顕著にみられる。基部は欠損している。39もBタイプで上牛鼻の黒曜石を用いた断面三角形尖頭器の基部である。側縁部には細かなりタッチが加えられ，基部は一面の剝離のみで調整は施こされていない。40は気泡の少ない黒曜石を用いたBタイプである。先端部から頂部にかけての稜は自然面を残している。先端部は鋭く基部は欠損している。41は，上牛鼻の黒曜石で基部のみである。基部は円味を帯びBタイプである。縁辺部に調整剝離が加えられ均正のとれたものである。42は，三船の黒曜石を用い一面だけ加工・調整剝離のあるもとで先端部は欠け，基部は欠損している。43はやはりAタイプで自然面を多く残し一面だけ調整剝離を加えている。先端部にも自然面が残り鋭くない。基部は欠損している。44は，当遺跡出土の尖頭器の中で最も整形されたもので上牛鼻の黒曜石を用い，先端部がやや弯曲し側辺部は調整剝離が施こされている。先端部は欠け，基部には加工・調整剝離は施こされていない。Bタイプであり，二面に加工がみられ，一面が剝離面である。45はCタイプで一面に加工・調整剝離が施こされている。先端部は鋭いが全体の整形はまだ施こされていない。気泡の少ない黒曜石を用いている。46はE区の攪乱層（層位が不明）出土で上牛鼻の黒曜石を用い，基部に自然面を残したBタイプのものである。先端部は丸味をおび側辺部はよく調整されている。

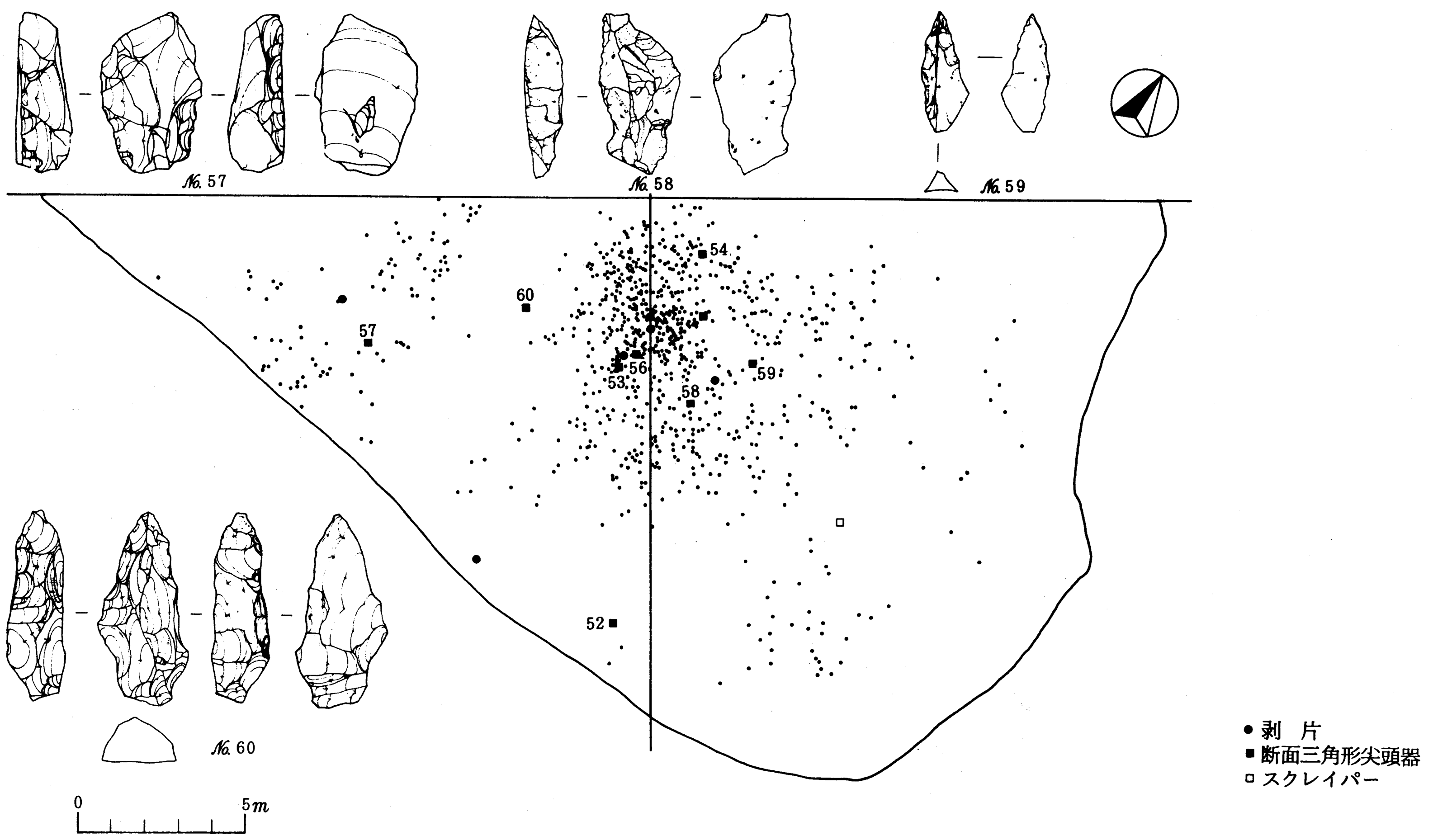
剝片（47～50）

47は気泡の少ない黒曜石を用い一側辺部に抉りが二ケ所はいっている。抉り入りの石器の可能性もある加工のある剝片である。48はやはり気泡の少ない黒曜石を用い加工痕の残る剝片であり，製作中欠落したものと思われる。49は，三船の黒曜石を用いた剝片である。50は，頁岩を用いた剝片であり自然面が残っている。

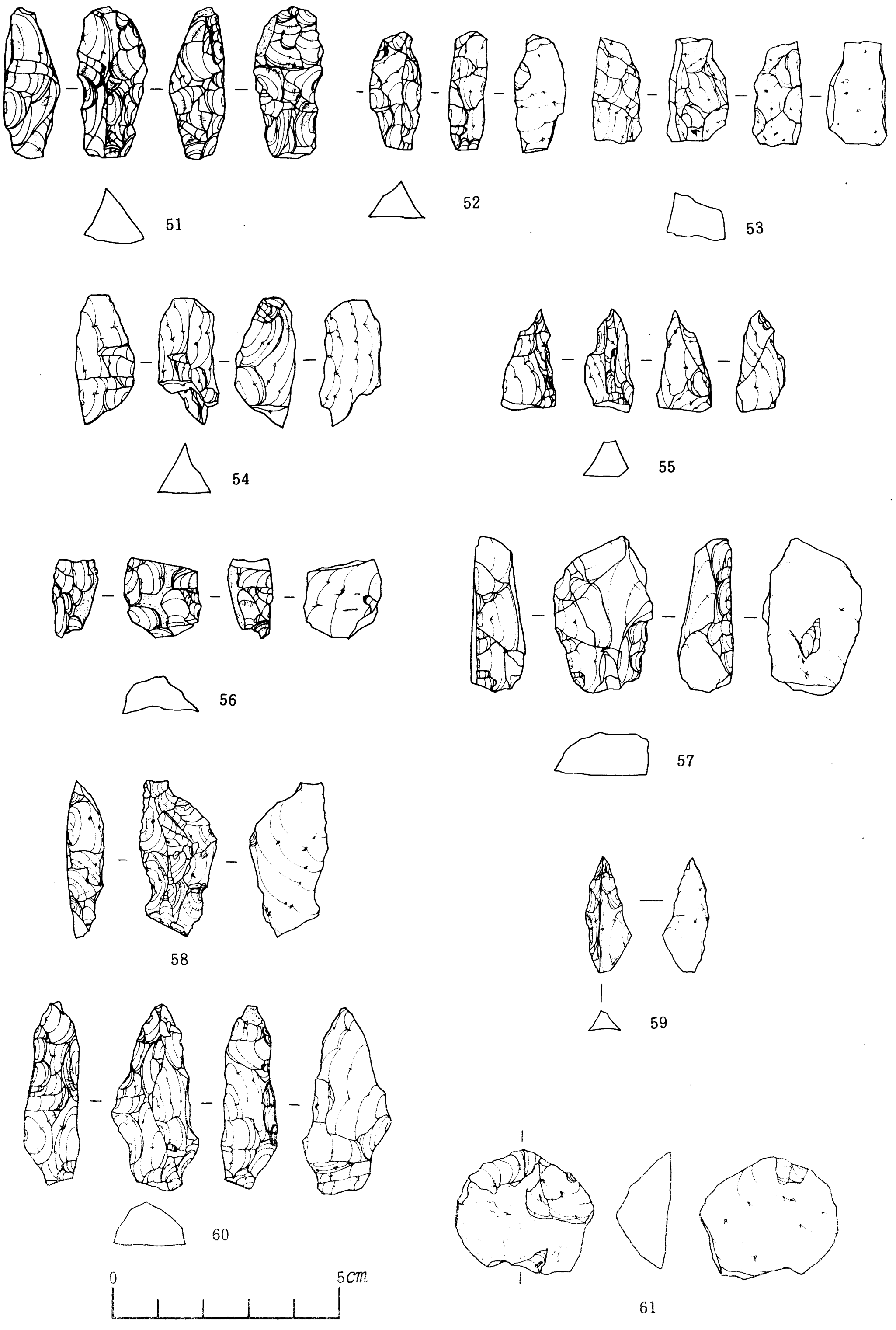
表4　Ⅶ層出土石器分類表

番号	器種	区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質	備考	挿図番号
40	細石刃	W	7	1.33	0.97	0.24	0.3	黒曜石		25
41	細石刃	W	7	1.93	0.54	0.21	0.2	黒曜石		26
42	細石刃	W	7	0.79	0.40	0.01		黒曜石		27
43	細石刃	W	7	0.67	0.60	0.10		黒曜石		28
44	細石刃	W	7	1.68	0.61	0.21	0.2	黒曜石		29
45	細石刃	W	7	0.54	0.49	0.14		黒曜石		30
46	断面三角形尖頭器	W	7	(1.51)	(0.72)	(0.70)	(0.4)	黒曜石		31

番号	器種	区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	長さ g	石質	備考	挿図番号
47	断面三角形尖頭器	W	7	2.87	1.18	1.20	2.7	黒曜石		32
48	断面三角形尖頭器	W	7	(1.58)	(1.17)	(0.66)	(1.1)	黒曜石		33
49	断面三角形尖頭器	W	7	(2.78)	(1.27)	(1.24)	(4.4)	黒曜石		34
50	断面三角形尖頭器	W	7	3.19	1.51	1.09	4.4	黒曜石		35
51	断面三角形尖頭器	W	7	(1.29)	(1.00)	(0.81)	(1.0)	黒曜石		36
52	断面三角形尖頭器	W	7	(2.42)	(1.34)	(1.03)	(2.2)	黒曜石		37
53	断面三角形尖頭器	W	7	(2.74)	(1.50)	(1.13)	(4.7)	黒曜石		39
54	断面三角形尖頭器	W	7	(1.77)	(1.51)	(0.77)	(2.7)	黒曜石		38
55	断面三角形尖頭器	W	7	(1.12)	(1.23)	(0.78)	(0.7)	黒曜石		40
56	断面三角形尖頭器	E	7	1.91	1.43	1.13	3.0	黒曜石		41
57	断面三角形尖頭器	E	7	(1.73)	(1.46)	(0.76)	(2.1)	黒曜石		42
58	断面三角形尖頭器	E	7	2.24	1.90	0.88	3.5	黒曜石		43
59	断面三角形尖頭器	W	7下	3.61	1.75	0.95	5.9	黒曜石		44
60	断面三角形尖頭器	W	7下	4.29	1.55	0.80	5.2	黒曜石		45
92	断面三角形尖頭器	E	攪乱	3.17	1.61	0.81	3.5	黒曜石		46
61	剝片	E	7上	3.26	2.75	0.70	5.4	黒曜石		
62	剝片	E	7	2.12	1.69	0.46	1.5	黒曜石		
63	剝片	E	7	2.54	1.58	0.66	2.2	黒曜石		
64	剝片	E	7	2.86	1.19	0.22	0.8	黒曜石		
65	剝片	E	7	2.61	1.78	0.61	3.0	黒曜石		
66	剝片	E	7	2.01	1.37	0.50	1.2	黒曜石		47
67	剝片	W	7	2.66	1.43	0.41	1.1	黒曜石		48
68	剝片	E	7	2.18	1.40	0.75	1.7	黒曜石		49
69	剝片	E	7	2.44	2.07	0.92	5.0	頁岩		
70	剝片	E	7	2.90	1.74	0.74	3.7	黒曜石		
71	剝片	W	7	3.18	1.88	1.86	3.7	頁岩		50
72	石核	E	7	3.55	2.78	1.86	13.2	黒曜石		
73	石核	E	7	2.13	2.09	1.72	7.2	黒曜石		
74	石核	E	7	3.44	2.63	2.12	15.0	黒曜石		



第 13 図　第 Ⅷ 層 出 土 土 遺 物 分 布 図



第14図　Ⅷ層出土の石器実測図

第５節　Ⅷ層出土の遺物（第14図　図版５）

Ⅶ層暗黄褐色火山灰層下にⅧ層茶褐色火山灰層が存在した。遺構の検出はなく遺物も上面にみられたのみであった。遺物は，断面三角形尖頭器，スクレイパー・剝片が出土した。

断面三角形尖頭器（51～60）

51は，気泡の少ない黒曜石を用いたＡタイプの三面加工・調整剝離を加えたもので先端部は丸味をおび自然面を一部残している。側辺は調整を施こすが基部にはみられない。52は，三船の黒曜石でＢタイプの二面加工であり先端部は欠落している。調整剝離は側辺部には施されているが，基部にはみられない。53は三船の黒曜石を用い，横長の厚い剝片を二面加工し，断面はやや丸味のある小形の尖頭器である。先端部は欠損している。54も三船の黒曜石でＢタイプで先端は欠損している。55はＢタイプで先端部が鋭く基部は欠損している。56は，基部のみであるが自然面を残し基部は丸味をおびている。57は上牛鼻の黒曜石を用い先端部が欠損している。58は気泡の少ない黒曜石で弯曲し先端部は鋭くない。抉りがみられる。59は気泡の少ない黒曜石であるが，薄手の剝片の先端部付近だけ調整剝片を施し先端部を鋭利にしたものである。60は，三船の黒曜石を用い，よく整形されたものであるが先端部に自然面を残している。

剝片（61）

原石から打ち欠いた剝片で縁辺部に加工を施す。三船の黒曜石を用いている。

第５表　Ⅷ層出土石器分類表

番号	器　種	区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質	備考	挿図番号
75	断面三角形尖頭器	E	8	(3.21)	1.49	1.16	(4.5)	黒曜石	A	5 1
76	断面三角形尖頭器	W	8	3.89	1.71	1.11	6.4	黒曜石	A	6 0
77	断面三角形尖頭器	W	8	(2.49)	1.08	0.73	(2.1)	黒曜石	B	5 2
78	断面三角形尖頭器	W	8	(2.14)	(1.16)	(0.85)	(3.4)	黒曜石	B	5 3
79	断面三角形尖頭器	E	8	(2.81)	(1.22)	(1.11)	(3.2)	黒曜石	B	5 4
80	断面三角形尖頭器	E	8	(一部欠) (2.05)	(1.17)	(0.96)	(1.9)	黒曜石	B	5 5
81	断面三角形尖頭器	W	8	(1.55)	(1.48)	(0.81)	(2.7)	黒曜石	B	5 6
82	断面三角形尖頭器	W	8	2.95	2.00	0.89	8.0	黒曜石	B	5 7
83	断面三角形尖頭器	E	8	3.44	1.72	0.77	3.5	黒曜石	B	5 8
84	断面三角形尖頭器	E	8	(2.58)	(0.89)	(0.51)	(0.6)	黒曜石		5 9
85	スクレイパー	E	8	2.25	1.87	0.62	2.7	黒曜石		
86	剝　片	W	8	2.75	2.37	0.94	6.7	黒曜石		6 1
87	剝　片	E	8	2.70	1.53	0.59	2.5	黒曜石		
88	剝　片	W	8	3.16	2.73	0.79	7.7	黒曜石		
89	剝　片	E	8	3.89	1.96	0.66	3.9	黒曜石		
90	剝　片	E	8	2.89	1.46	0.61	2.4	黒曜石		
91	剝　片	E	8	3.76	2.06	1.07	7.9	黒曜石		

第4章　まとめにかえて

発掘調査の結果，木場A－2遺跡は旧石器時代の断面三角形尖頭器を中心とした遺跡であることが判明した。

当遺跡は傾斜地の立地の上に畑の開墾等により上部の層位は削平されていた。Ⅵ．Ⅶ．Ⅷ層に旧石器時代の多くの遺物が出土したが，明確な層位の分離は出来ず，また，遺物にも差異は認められなかった。

断面三角形尖頭器はA．B．C三つのタイプに分類できた。

（Aタイプ）

三面に加工，調整剝離のあるもの

（Bタイプ）

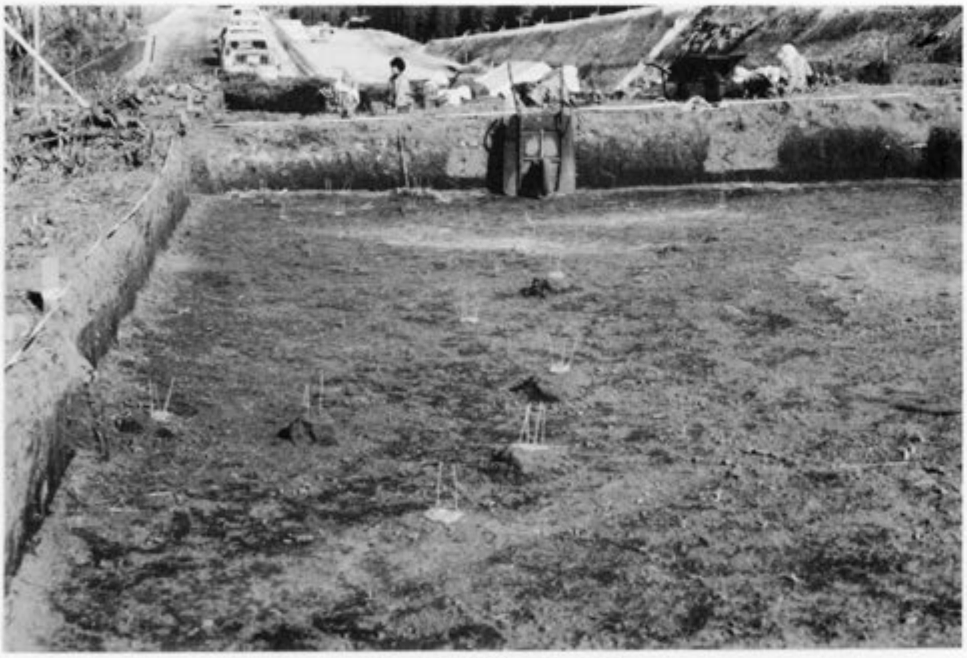
一面が剝離面で二面に調整剝離のあるもの

（Cタイプ）

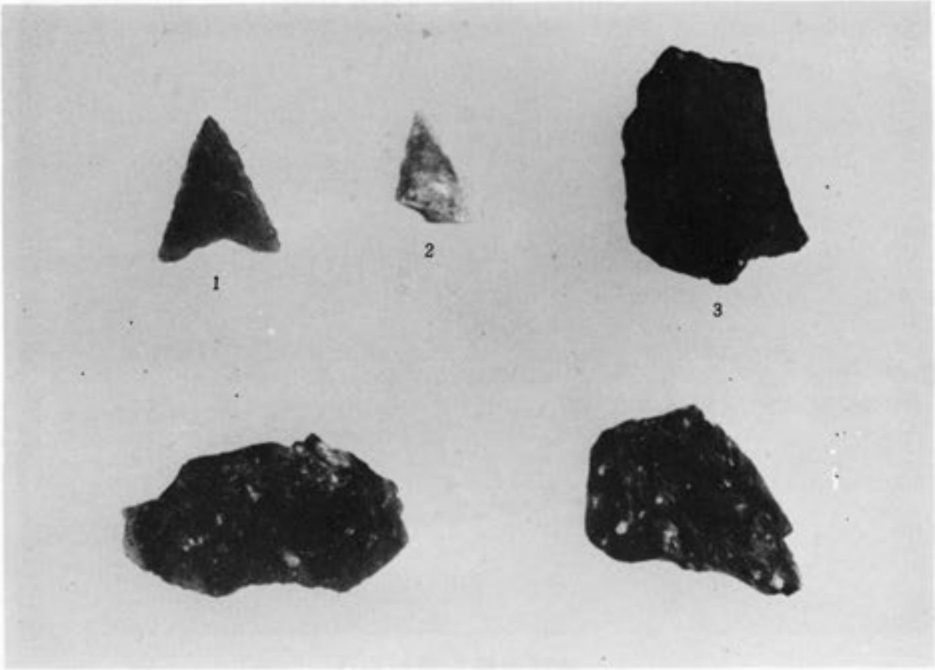
上面の片面に剝離のあるもの。ナイフ形石器，スクレイパーに近いけど先端部が尖がる特徴をもっていることから尖頭器として分類した。

当遺跡は傾斜地に立地するのと，遺跡範囲が狭いこともあって，遺構とか遺物の集中個所が分離することは出来なかったが，これも一つのユニットとしてとらえ，層位の上下関係の把握等に何ら関係するものと思われる。

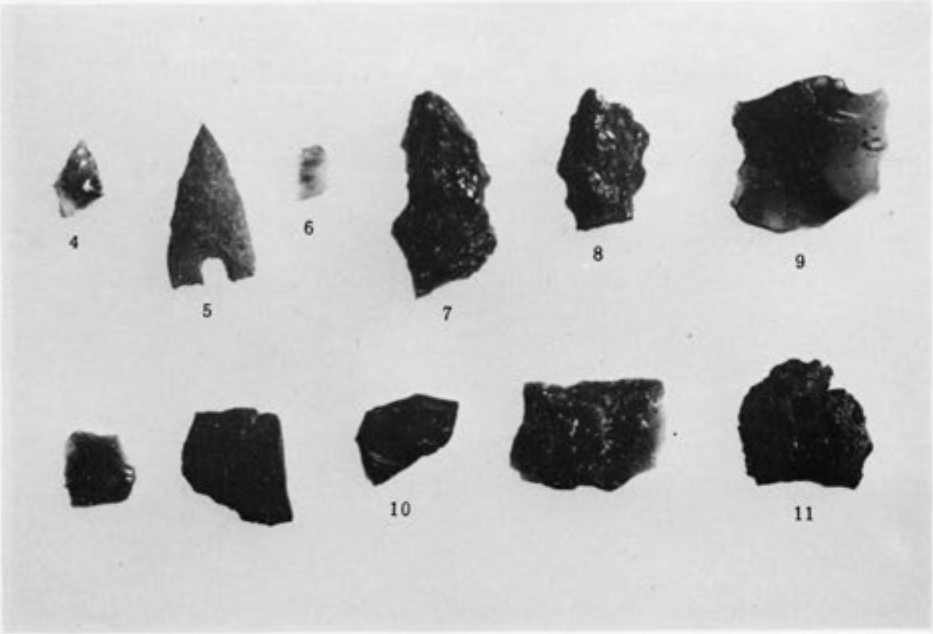
1. 遺跡近景（南から）



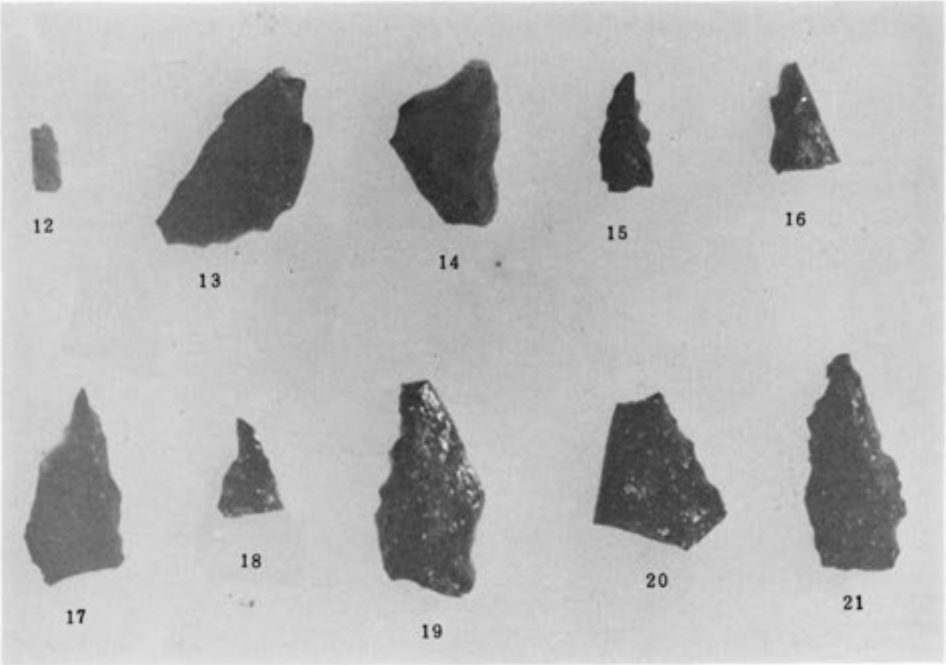
2. 発 掘 風 景



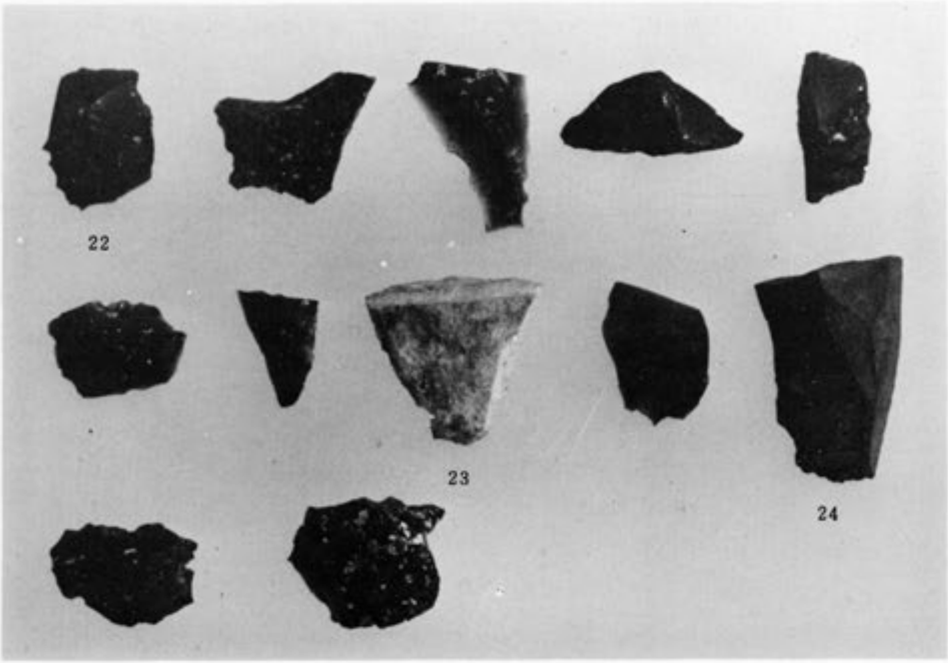
1. Ⅳ層出土の石器



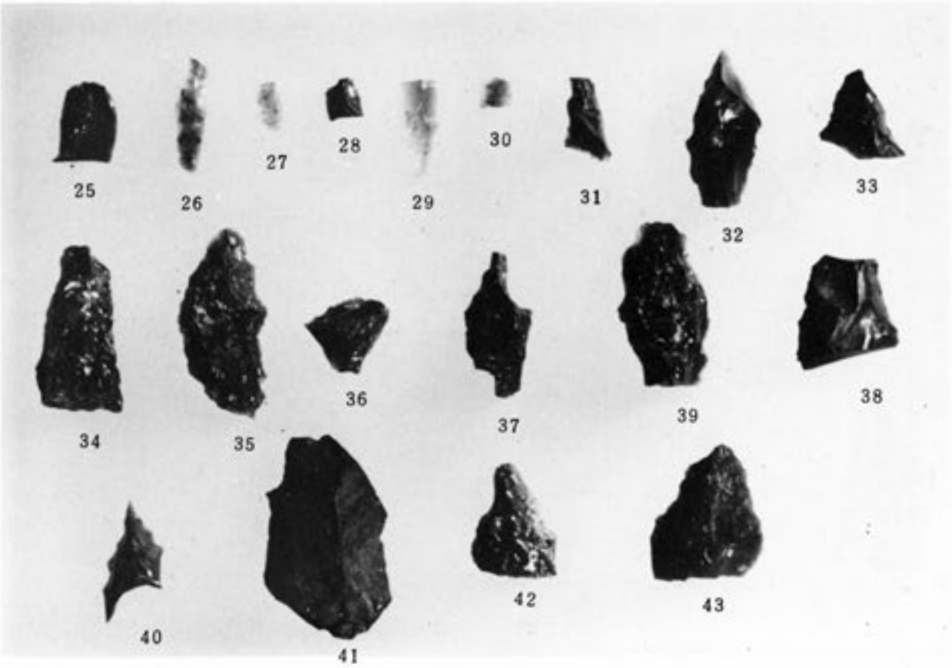
2. Ⅴ層出土の石器



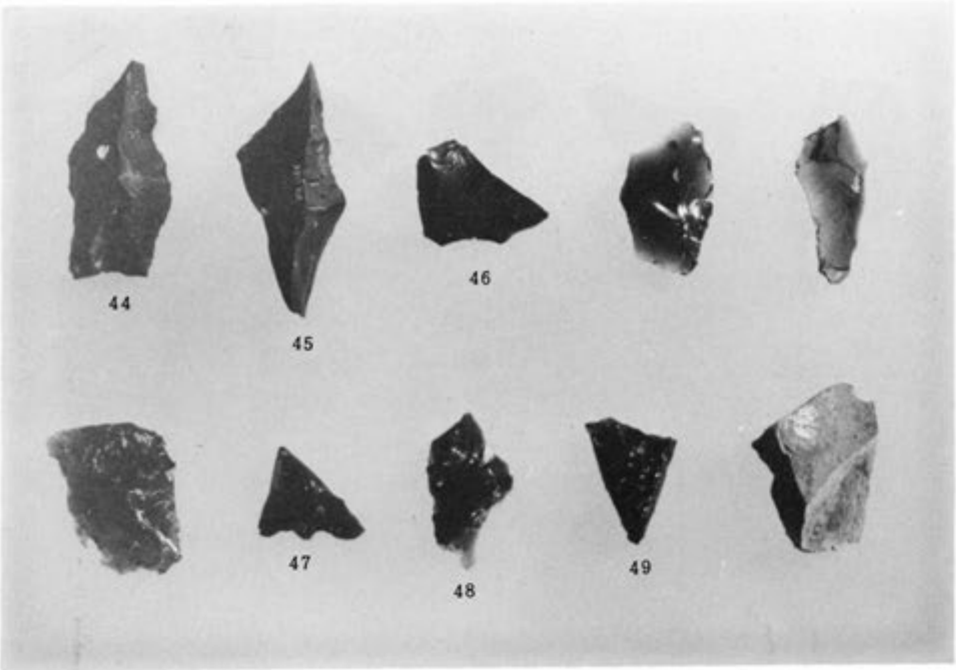
1. Ⅵ層出土の石器



2. Ⅵ層出土の石器

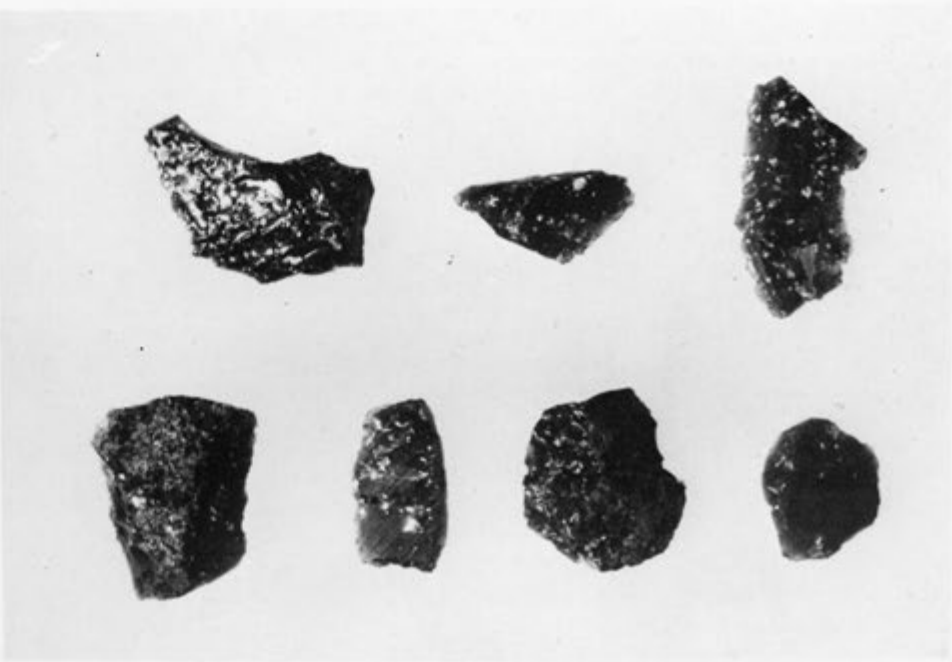


1. Ⅶ層出土の石器



2. Ⅶ層出土の石器

1. Ⅷ層出土の石器



2. Ⅷ層出土の石器

木 場 B 遺 跡

例　　　　言

1．この報告書は，九州縦貫自動車道（鹿児島線）建設に伴って，昭和54年に発掘した木場B遺跡の調査報告書である。

2．発掘調査は，日本道路公団からの受託事業として，鹿児島県教育委員会が実施した。

3．報告書作製に当って，鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏，九州歴史資料館亀井明徳氏の指導を得た。

4．調査に至るまでの経過の説明は木場A遺跡と重複するため省いた。また地形，環境については木場A遺跡のところで合わせて記述した。

5．本書で用いたレベル数値は，すべて海抜高である。

6．整理，復元作業は，収蔵庫の整理作業員が行ない，出土品は文化課収蔵庫に保管している。

7．執筆，編集は出口浩がおこなった。

目　　　　次

例　言

第１章　調査の組織と経過及び概要 …… 3

第１節　調査の組織 …… 3

第２節　調査の経過（日誌抄）…… 3

第３節　調査の概要 …… 5

第２章　層　位 …… 6

第３章　遺構と出土遺物 …… 9

第１節　縄文時代 …… 9

第２節　弥生時代 …… 9

第３節　古墳時代 …… 9

第４節　古代～中世 …… 11

第４章　まとめ …… 13

挿　図　目　次

第１図　木場Ｂ遺跡グリッド図 …… 7

第２図　土層断面図 …… 8

第３図　石　器 …… 9

第４図　土器散布ドット図 …… 10

第５図　溝状遺構平面図 …… 11

第６図　土器(1) …… 12

第７図　土器(2) …… 13

図　版　目　次

図版１　上下　木場Ｂ遺跡，土層断面 …… 15

図版２　土器出土状況　溝状遺構 …… 16

図版３　滑石製加工品　石鏃　石皿　発掘風景 …… 17

図版４　上，縄文土器　中，ヘラ描き文土器　下，底部（左端縄文土器）…… 18

図版５　成川式土器口縁部　土師式土器口縁部 …… 19

図版６　土師，坏の底部　須恵器 …… 20

図版７　青磁・青磁（底部）…… 21

第１章　調査の組織と経過及び概要

第１節　調査の組織

調査責任者	文化課長	山下典夫
	文化課長	猿渡侯昭
	課長補佐	新　時弘
	課長補佐	本田武郎
調査企画	専門員	本蔵久三
	主任文化財研究員	諏訪昭千代
調査担当者	文化財研究員	出口　浩
	主事	新東晃一
	主事	弥栄久志
	文化財調査員	中島哲郎
	文化財調査員	井ノ上秀文
事務担当	管理係長	中条　享
	主幹兼係長	川畑栄造
	主査	安藤幸次
	主事	天辰京子
	主事	山下玲子

第２節　調査の経過（日誌抄）

発掘調査は，昭和54年８月28日から11月27日まで行った。この間の経過を，発掘調査日誌を整理して記載することにする。

８月28日(火)

木場Ｂ遺跡の調査開始。調査上の注意と説明を作業員に行う。草木伐採と焼却。テントとプレハブの設置。

８月31日(金)～９月３日(月)

Ｄ・Ｅ－７～12区Ⅲ層（アカホヤ）の掘り下げ。Ｄ・Ｅ－13区工層の掘り下げ。

９月４日(火)～９月７日(金)

Ｄ・Ｅ－５・６・９・10区Ⅴ層の掘り下げ。

９月８日(土)～９月10日(月)

Ｄ・Ｅ－５・６区Ⅻ層からⅨ層にかけて掘り下げ。

９月11日(火)～９月17日(月)

Ｄ・Ｅ－５・６区掘り下げ。一部は入戸火砕硫まで下げる。

9月18日(火)〜9月21日(金)

D・E－5・6区，Ⅸ層からⅨ層の掘り下げ。D・E－7区，Ⅴ・Ⅵ層の掘り下げ。D・E－8区，Ⅴ層の掘り下げ。

9月22日(土)〜9月26日(水)

D・E－7区　Ⅵ〜Ⅸ層の掘り下げ。D・E－8区　Ⅵ〜Ⅶ層の掘り下げ。D・E－11・12区Ⅱ層の掘り下げ。

9月27日(木)〜9月29日(土)

D－11・12区Ⅲ〜Ⅳ層の掘り下げ。D・E－13区Ⅰ層〜Ⅱ層の掘り下げ。D－7・8区，Ⅸ層の掘り下げ。

10月1日(月)〜10月6日(土)

D－7・8区　Ⅶ〜Ⅸ層にかけ掘り下げ。D－11・12区はⅣ層の掘り下げ。D－14区　Ⅱ層の掘り下げ。D－15区　Ⅲ〜Ⅳ層にかけて掘り下げ。D・E－3・5区　断面実測。

10月8日(月)〜10月11日(木)

C－7・8区　表層掘り下げ。E－15・16区　Ⅳa層の掘り下げ。D－7・8区　Ⅲ層の掘り下げ。E－7・8区　Ⅲ層の掘り下げ。

10月12日(金)〜10月13日(土)

C－7・8区　Ⅰ層〜Ⅱ層の掘り下げ。D－9・10区　Ⅰ層の掘り下げ。E－9・10区　Ⅰ層掘り。

10月15日(月)〜10月16日(火)

D・E－9・10区　Ⅰ層の掘り下げ。D－17区　Ⅰ・Ⅱ層の掘り下げ。D－15・16区　Ⅱ〜Ⅲ層の掘り下げ。D・E－7区　遺物取り上げ。E－14区　Ⅰ層〜Ⅲ層の掘り下げ。E－16区Ⅰ〜Ⅲ層の掘り下げ。

10月17日(水)〜10月19日(金)

D－15〜17区トレンチⅢ層上面まで掘り下げ。Ⅱ層の遺物検出。D－9〜12区トレンチ拡張Ⅱ層遺物検出。C・D・E－7・8区，Ⅱ層出土遺物の平板実測。

10月22日(月)〜10月24日(水)

D・E－7・8区　Ⅰ・Ⅱ層掘り下げ。溝状遺構の検出作業。D－9・10区トレンチ壁面の清掃実測。D－11・12区　Ⅰb・Ⅲa層　遺物出土状況実測。D・E－9区Ⅰb〜Ⅲa層，遺物出土状況実測。

10日25日(木)〜10月26日(金)

D－11・12区　Ⅰ・Ⅱ層掘り下げ。溝状遺構検出作業。C・D・E－8区　E－9区　Ⅱ層検出作業。D・E－7区　Ⅲa層　掘り下げ作業。D・E－8・9区　遺構およびコンタ実測。

10月29日(月)〜10月31日(水)

D・E－8区　南北トレンチⅣ層掘り下げ。D－11・12区　Ⅱ層掘り下げ了。Ⅲa層面遺物散布状況平板実測。D・E－9区　東西トレンチ　Ⅲa・Ⅲb層掘り下げ。

11月１日(木)～11月２日(金)

Ｄ－10区　Ⅲ層掘り下げ。Ｃ－９・10区Ⅰ層剝ぎ。Ｄ・Ｅ－９区トレンチ調査後・縄文後晩期の遺物が散在するため拡張する。

11月５日(月)～11月７日(水)

Ｃ－９・10区　Ⅰ～Ⅱ層掘り下げ終了。Ｄ・Ｅ－11区トレンチ　Ⅲ～Ⅳ層掘り下げ。Ｄ・Ｅ－12区トレンチⅢ層掘り下げ。Ｄ・Ｅ－13区トレンチⅠ層掘り下げ。

11月８日(木)～11月９日(金)

Ｄ・Ｅ－12～14区Ⅰ層剝ぎ続行。Ｄ－９・10区トレンチ深掘り。

11月12日(月)～11月14日(水)

Ｄ－９・10区トレンチ深掘り終了。Ｄ－13～14区トレンチ深掘り開始。Ｄ・Ｅ－13区トレンチ深掘り続行。Ｄ・Ｅ－14区トレンチ深掘り。Ｄ・Ｅ－15・16区　Ⅱ・Ⅲａ層の遺物散布状況実測。

11月15日(木)～11月17日(土)

Ｄ－14区，Ｃ－15～17区　Ⅱ下～Ⅲａ層の遺物検出。Ｄ－17区　Ⅲａ層の遺物散布状況実測。

11月19日(月)～11月21日(水)

Ｃ－13・14区　トレンチ壁面の清掃。Ｃ－15区　トレンチⅢ下～Ⅳ層掘り下げ。Ｄ－15～17区トレンチ掘り下げ。

11月22日(木)～11月23日(金)

Ｄ－18・19　トレンチⅢ下～Ⅳ層深掘り。Ｃ－15区トレンチ深掘り。Ｄ－15～17区トレンチ深掘り。

11月26日(月)

Ｄ－18・19区トレンチ深掘り。Ｃ－15区トレンチ断面実測。Ｄ－15～17区トレンチ断面実測。

11月27日(火)

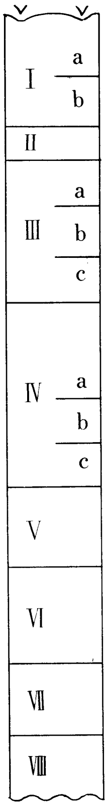
Ｄ－18・19区トレンチ断面実測。木場Ｂ遺跡の調査終了。

第３節　調査の概要

木場Ｂ遺跡は，標高252mのほぼ水平な台地上にある。土地は桑畑等に利用され，地面は良く整えられている。調査は，ＳＴＡ169と170を結ぶ直線と基準にして10m間隔のグリッドを設定した。南西から東北にかけて１・２・３…20，北西から南東へＡ・Ｂ・Ｃ…Ｆと呼称した。調査区域は長さ200m幅約40mを測る。長年の耕作のため表層中には土師器などの細片が含まれており，ほとんど攪乱されている。

調査は，ほぼ道路中央線に沿って，すなわちグリッドＤ線に２m巾のトレンチを１本，また北西－東南方向は20m間隔に２m幅のトレンチとＤ・Ｅ区に設定した。Ｃ－３～６区には，Ｃ線に沿って２m幅のトレンチを増設した。この結果１～６区には遺跡の存在が認められなかったため放棄した。７～17区にかけては，遺物の出土や，溝状遺構の検出がみられたので，全面調査をすることとなった。

第2章 層　　位

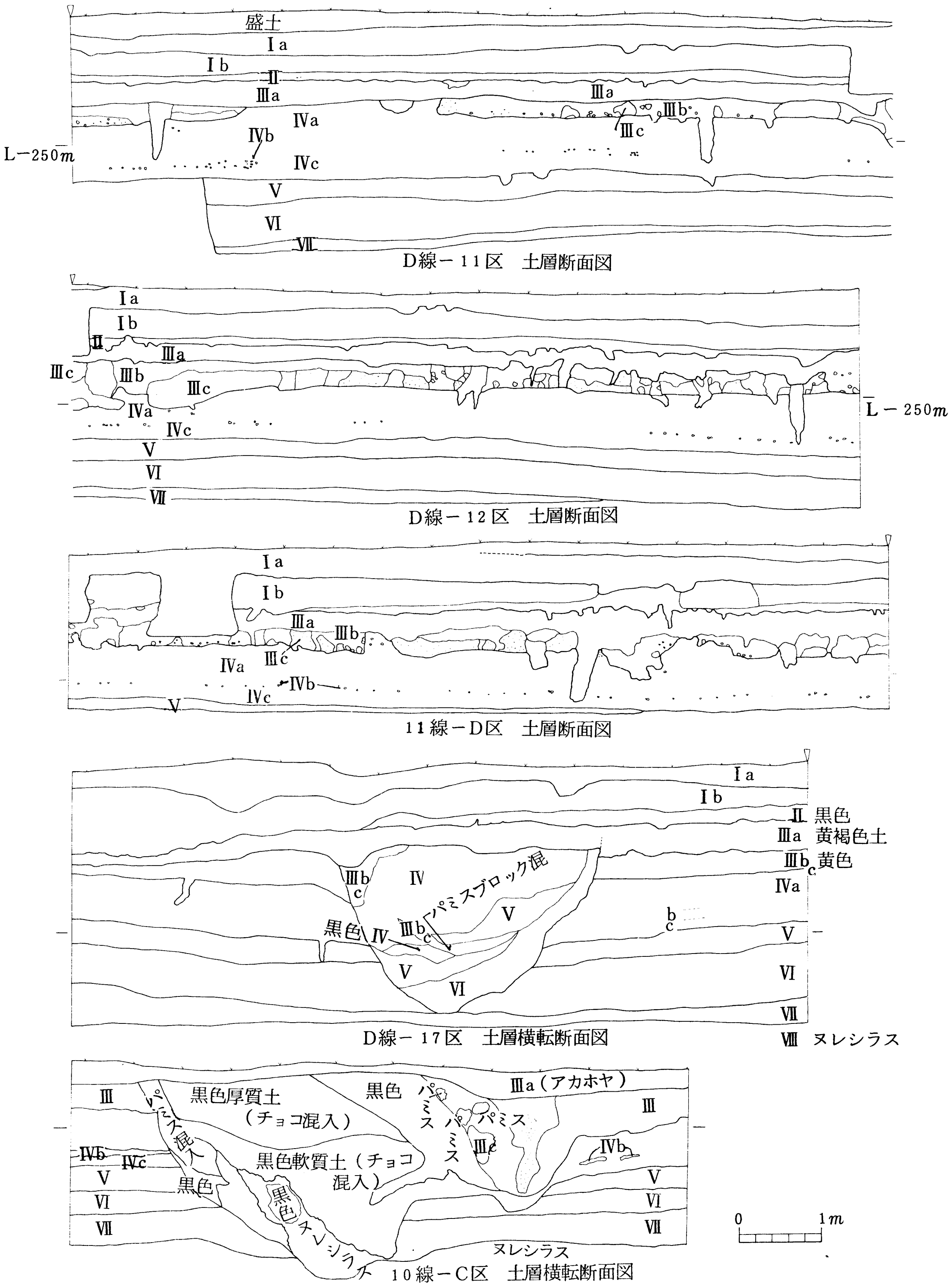


層は全体に略水平に堆積し同じ層序を示しているので，D線－11区の断面を中心に説明したい。Ⅰ層は表層で耕作土である。30～50cmの深さを示し，現在の耕作（Ⅰa）と古い耕作（Ⅰb）に分けることができる。Ⅰa層は褐色を呈し，白色のパミスの粒子を含んでいる。Ⅰb層はやや黒っぽい色調で礫石を含んでいない。Ⅱ層は約10cm前後の厚さで薄くみられる。耕作による削平を受け，残存部分は少ない。軟質黒色土で土師器を包含している。Ⅲ層は赤褐色で軟質のⅢa層と，黄褐色で硬質のⅢb層，そして軽石（パミス）のⅢC層に細分される。Ⅲa層は20～30cmの厚さで拡がり，上部はⅡ層からの染み込みがみられ，成川式土器を出土する。Ⅲb層とⅢc層は，上下に層をなしている部分もあるが，Ⅲb層内下部にブロック状に入り込んでいる。Ⅲa層中に縄文時代後晩期の土器が少量出土した。Ⅳ層は60～90cmの黒色粘質土である。下部附近に小指先大の桜島パミスと想定される軽石がパラパラと拡がっており，この層をⅣb層とし，上下をⅣa層，Ⅳc層とした。Ⅳc層は10～20cmの厚さである。Ⅴ層は褐色粘質層，Ⅵ層は黒褐色粘質層，Ⅶ層は黄褐色シラス層と続いている。本遺跡では，Ⅳ層以下に遺物は発見されなかった。

D－17区，C－10区に土層の横転現象がみられた。D－17区のは，Ⅲb～Ⅵ層までが影響を受け，Ⅵ層が斜めに迫り上ってⅢb層まで達している。C－10区のは，横転の範囲が直径5m以上にも広がり，その影響はⅢb層からシラス層まで及んでいる。両方共にⅢaが上部に堆積しており，Ⅲa層堆積以前の変動を示している。断面はいずれも半円形をなし，水平層が斜めに移動している。

第１図　木場Ｂ遺跡　地形お

よびグリッド図



盛土
Ⅰa
Ⅰb
Ⅱ
Ⅲa
Ⅲb
Ⅲc
Ⅳa
Ⅳb
Ⅳc
L－250m
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
D線－11区　土層断面図
D線－12区　土層断面図
11線－D区　土層断面図
Ⅱ 黒色
Ⅲa 黄褐色土
Ⅲb 黄色
パミスブロック混
黒色
D線－17区　土層横転断面図
Ⅷ ヌレシラス
黒色厚質土（チョコ混入）
黒色軟質土（チョコ混入）
Ⅲa（アカホヤ）
パミス混入
パミス
ヌレシラス
0　1m
10線－C区　土層横転断面図

第2図　土　層　断　面　図

第3章　遺構と出土遺物

第1節　縄　文　時　代

①　遺　構

縄文土器の出土は少量みられたが，遺構は検出されなかった。

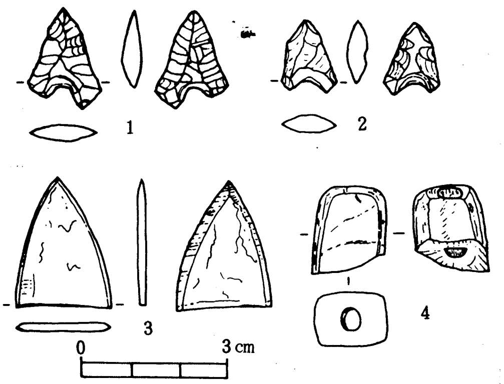
②　遺　物

ア．土　器（第6図　1～5）

縄文土器は，少量の散布がみられた。ほとんどⅢa層の出土である。1は三角形断面の口縁部をなし，口唇部と下端を貝殻縁状のもので斜目に刻目をつけ，間に凹線を配するものである。2は沈線間に刺突文を施す。胎土は粗である。3は外面にX状の箆描き文を有す。内面は荒い貝殻条痕による調整を施す。4は肩部が「＞」形に張り，口縁部にかけて大きく外反する黒色研磨の精製土器である。5は安定した平底で胎土は粗である。

イ．石　器（第3図　1・2）

石鏃2点を含めて石片や剥片など10点を発見した。1は長径21mm，短径14mm，厚さ3.5mm重さ0.68g を測る。凹基式で尖端は鋭く，側縁は内側に浅く折れる。押圧剥離はていねいである。石材はチャートである。E－13区Ⅲa層出土。2は長径15mm，短径11mm，厚さ3.6mm，重さ0.6g と測る。抉りが浅く，押圧剥離は荒い。石材は玉髄である。D－8区　Ⅱ層出土。



第3図　石　器

第2節　弥　生　時　代

①　遺　構

弥生時代の遺構は，発見されなかった。

②　遺　物（第3図　3）

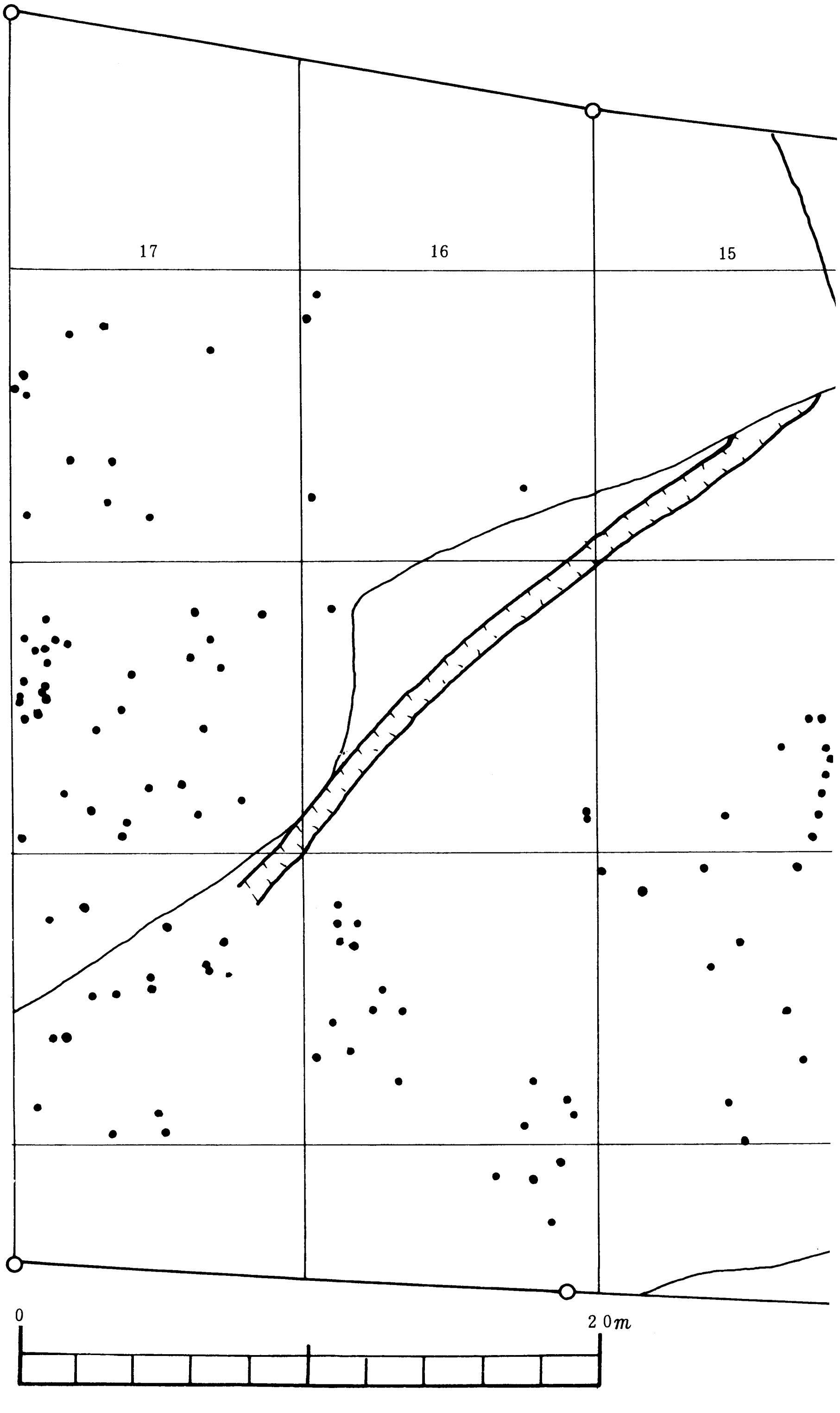
弥生時代の土器は発見されなかった。石器としては，磨製石鏃がみられる。長径26mm・短径20mm，厚さ2mm，重さ1.5g，薄手，頁岩製。

第3節　古　墳　時　代

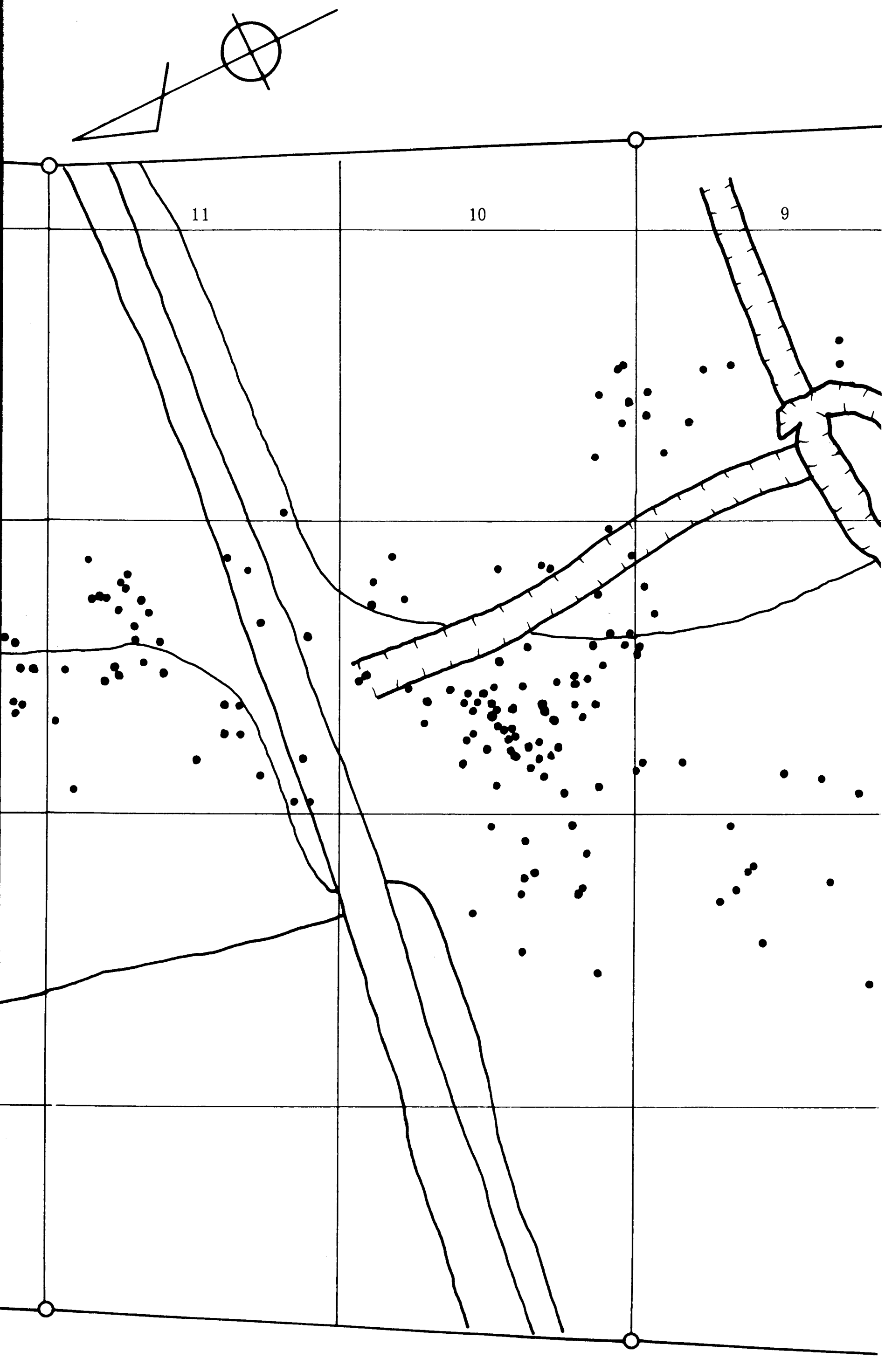
①　遺　構

古墳時代の遺構と判断しうるものは発見されなかった。

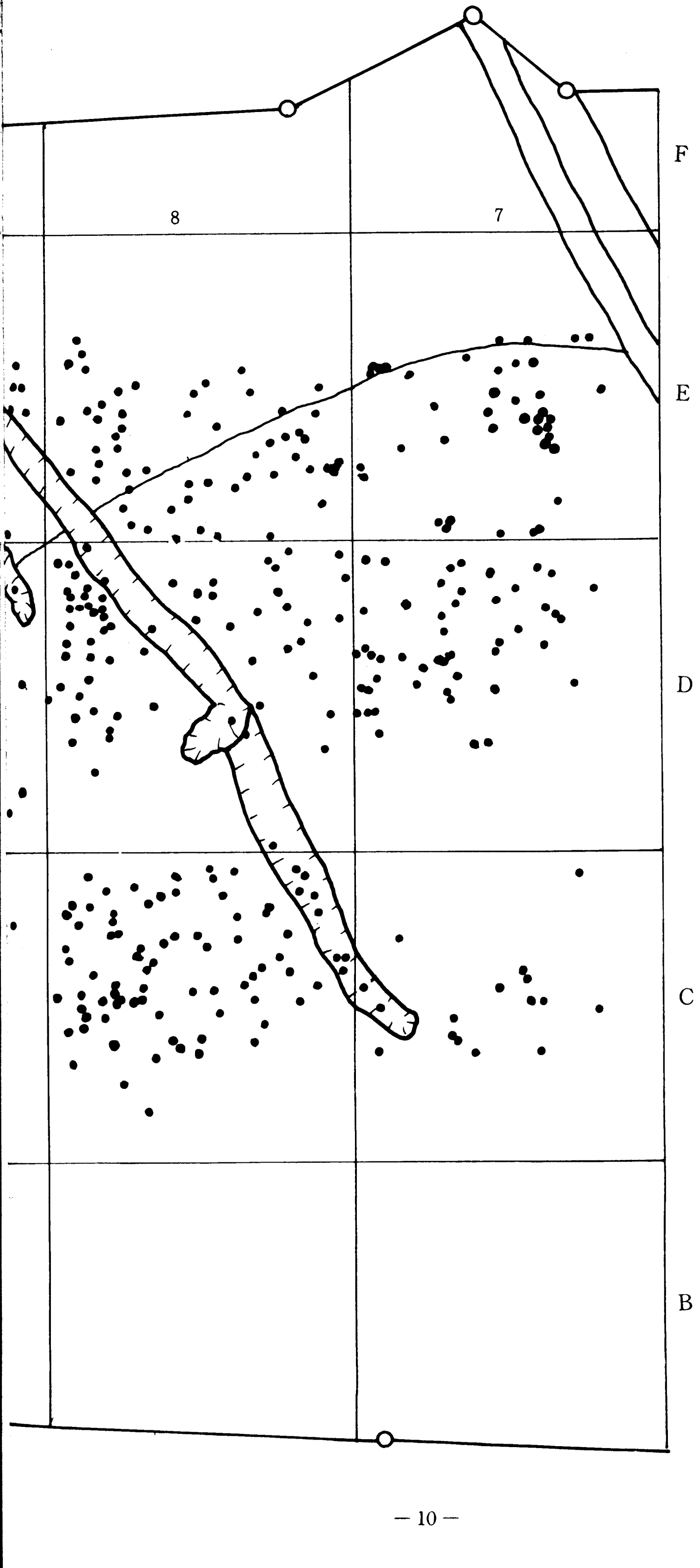
②　遺　物


17
16
15
0
20m

第 4 図　土 器 散 布 ドッ



ト 図


8
7
F
E
D
C
B

ア. 土　器

Ⅱ層からⅢａ層上部にかけて，成川式土器の破片が多く出土した。C～E－７・８区から17区にかけて散布している。特にD－７・８区に濃密である。全体的に規則性はみられない。

土器は小片が多く，図化できるものは少ない。甕形土器は，頸部で内弯し，口縁部へやわらかく外反するもので，頸部に刻目凸帯を附すもの（６・７・24）刻目のない三角凸帯を附すもの（８　・９）などがある。底部は平底（10・11）や，浅い上げ底を有するもの（27）などがみられる。壺形土器の底部であろう。また器面に箆描き沈線を有するもの（12・13）などがみられた。

第4節　古　代～中　世

①　遺　構

Ⅲａ層直上面で明確に輪郭が検出できる。溝状の遺構である。C－７区から東方へ伸び。E－９区で東方から伸びてきた溝と交わる。さらに北方向へ伸びる溝とほぼ直角に交叉している。北端は消滅して不明である。またE－15区からC－17区に略南北方向に走る溝もみられるが，北端は消滅して不明である。

これらの溝は，幅約１m内外，深さ30～40cm，断面鍋底状を呈しており，埋土はⅡ層である。成川式土器の破片や陶磁器を少量包含していた。D－13区には，底面凹凸がはげしく平面形のほそ長い落ち込みがみられ，東側の土師器集中部分は，赤褐色に土が変色して，焼土となっていた。甕形土器の破片が多い。

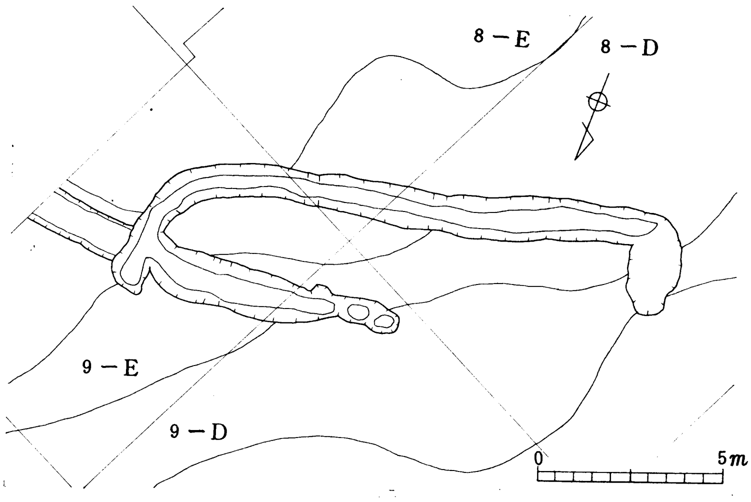
②　遺　物（第６図・第７図）

須恵器，22は外面茶褐色を呈し，格子目状の叩き目を施す。23も同様であるが，外面光沢のある赤茶褐色の釉を施す。他に内外とも刷毛目調整をなした破片もみられた。

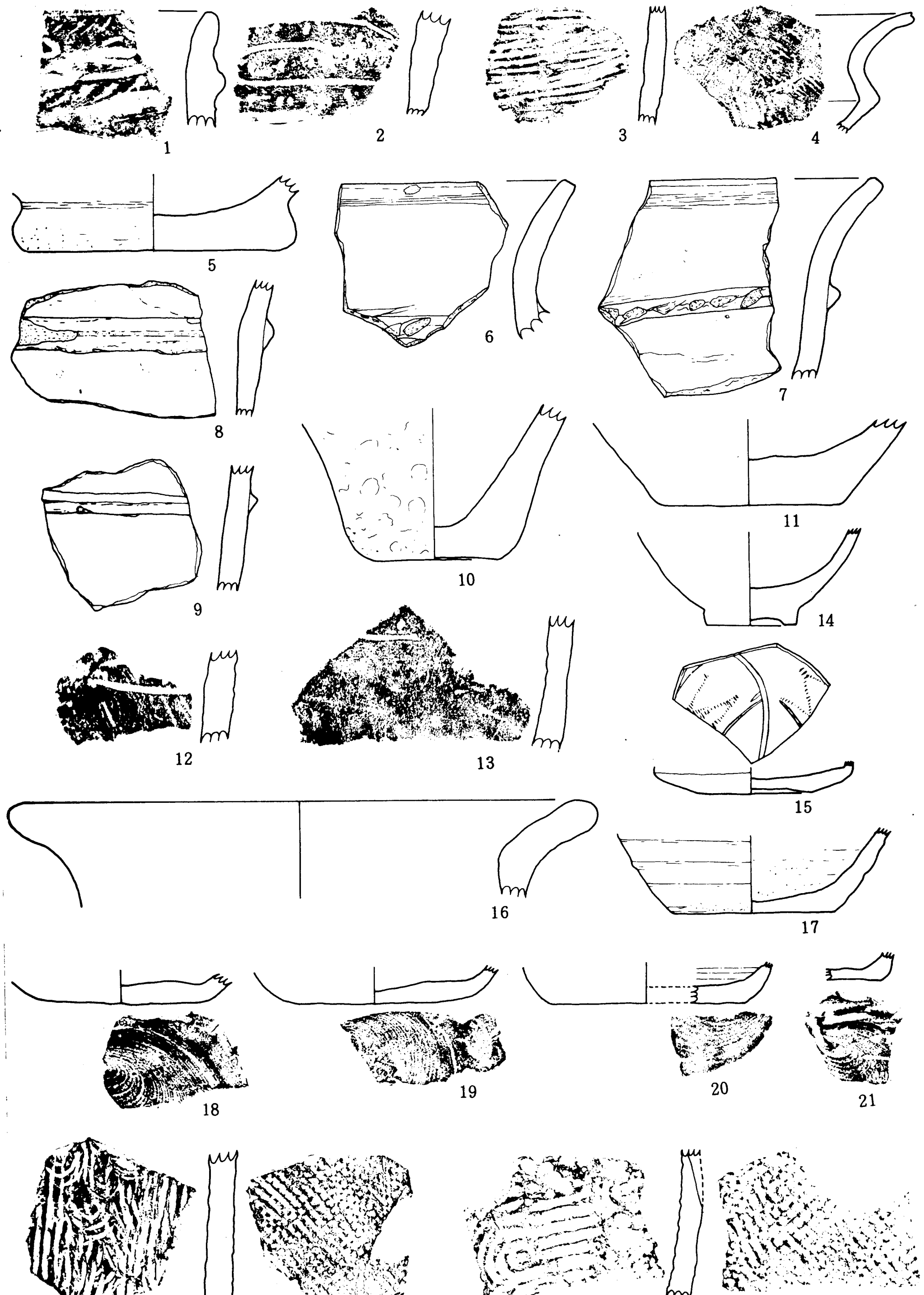
土師器・甕形土器は，厚手をなし，口縁部で小さく外反する。口唇部も丸く仕上げる。内面胴部は，縦方向の荒い箆削り調整を行なう。（16・25・26）

坏，17は，外面の調整が断面波状を呈する。底はヘラ切り仕上げ。18～21は底部から胴部への立ち上がりが弱い。糸切り仕上げで，内面中央部に凹部がみられる。

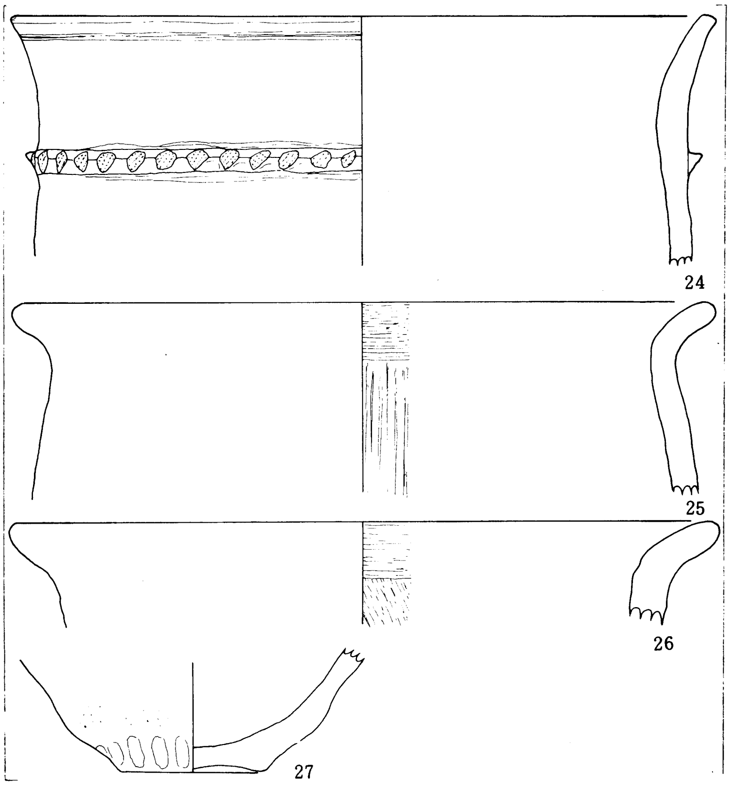
青磁，14は高台付の埦で畳付け部分はシャ



第５図　溝状遺構平面図



第6図　土　器（1）



第7図　土　器（2）

ープにカットされている。畳付部および外底は露胎である。15は皿で内面に猫描文がみられる。浅い上げ底をなし，その部分は釉が施されていない。14は竜泉窯で13C～14C，15は同安窯で13C，他の縞のついた蓮弁文は13C～14C後半，白磁の壺の破片は12C～13Cと思われる。（亀井明徳氏より教示を受けた。）

その他に備前焼きの破片が1片出土した。

滑石製加工品（才3図4）

断面は角のとれた長方形を呈し，内部に直径5mmの孔を穿っている。一端は欠損している。

第4章　ま　と　め

当遺跡は，古墳時代の成川式土器を主として出土する遺跡である。南九州においては，この時期の遺跡は各地にみられ，大量に土器を出土することで知られている。辻堂原遺跡，鹿大釘田遺跡，花牟礼遺跡等である。栗野地方においても多くの遺跡が知られているが，縄文式土器を出土する遺跡が多く，この時期のものは少ないように思われる。

土器は小片が多く，散乱した状態で出土しておりまとまったものは少ない。頸部がややくびれて口縁部へやわらかく外反する土器は，くびれ部に布目圧痕の刻目を有し（6・7・24），また三角状の凸帯を廻らしている。これらに伴う底部は中空の上げ底が普通であるが，本遺跡では出土していない。むしろ10・11・27の平底がみられ注目される。

土師器もかなり出土した。層位的にはⅡ層からⅢa層上面に当り，古墳時代の成川式土器と

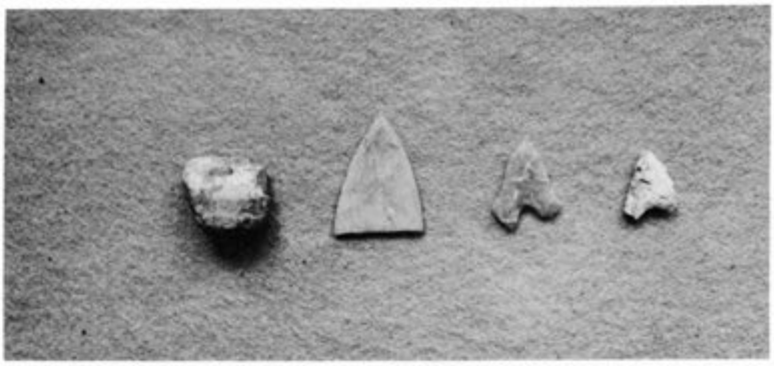
混交している。坏は糸切り底を主としたもので（18～21）時期推定に重要である。甕は16・25 26の厚手のもので，内面の頸部から下を荒い箆削り調整を行っている。これらと関係の深いとみられるものが14・15の青磁である。他にも蓮弁文様の椀や白磁の破片がみられた。いずれも13C前後のものである。遺跡地は松尾城の後背地に当たり，遺跡地末端部の谷は「空堀」といわれる伝承もあるので，これらとの関連も注目される。その他，須恵器や備前焼の破片もみられたが少量であった。

縄文土器も数点出土した。1は市来式　4は黒川式土器である。2は不明。これらに伴うと思われる黒曜石やチャートを利用した石鏃や石片・剝片もみられた。縄文後期から晩期にかけてのもので，この近辺に遺跡の存在が予想される。なお早・前期の土器は全く発見されなかった。近接した木場A遺跡の出土状況と比較して興味深いものがある。

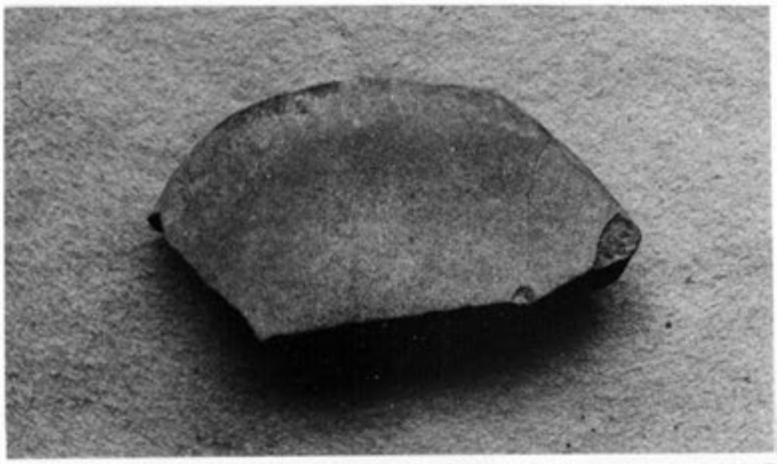
上・下木場B遺跡土層断面

土器出土状況

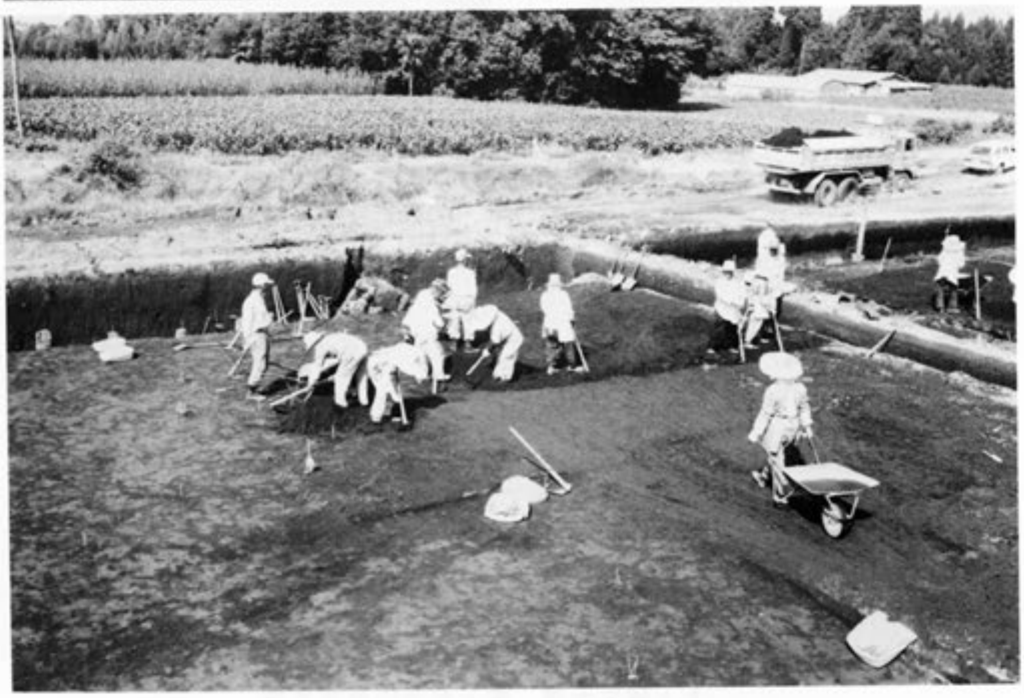
溝状遺構



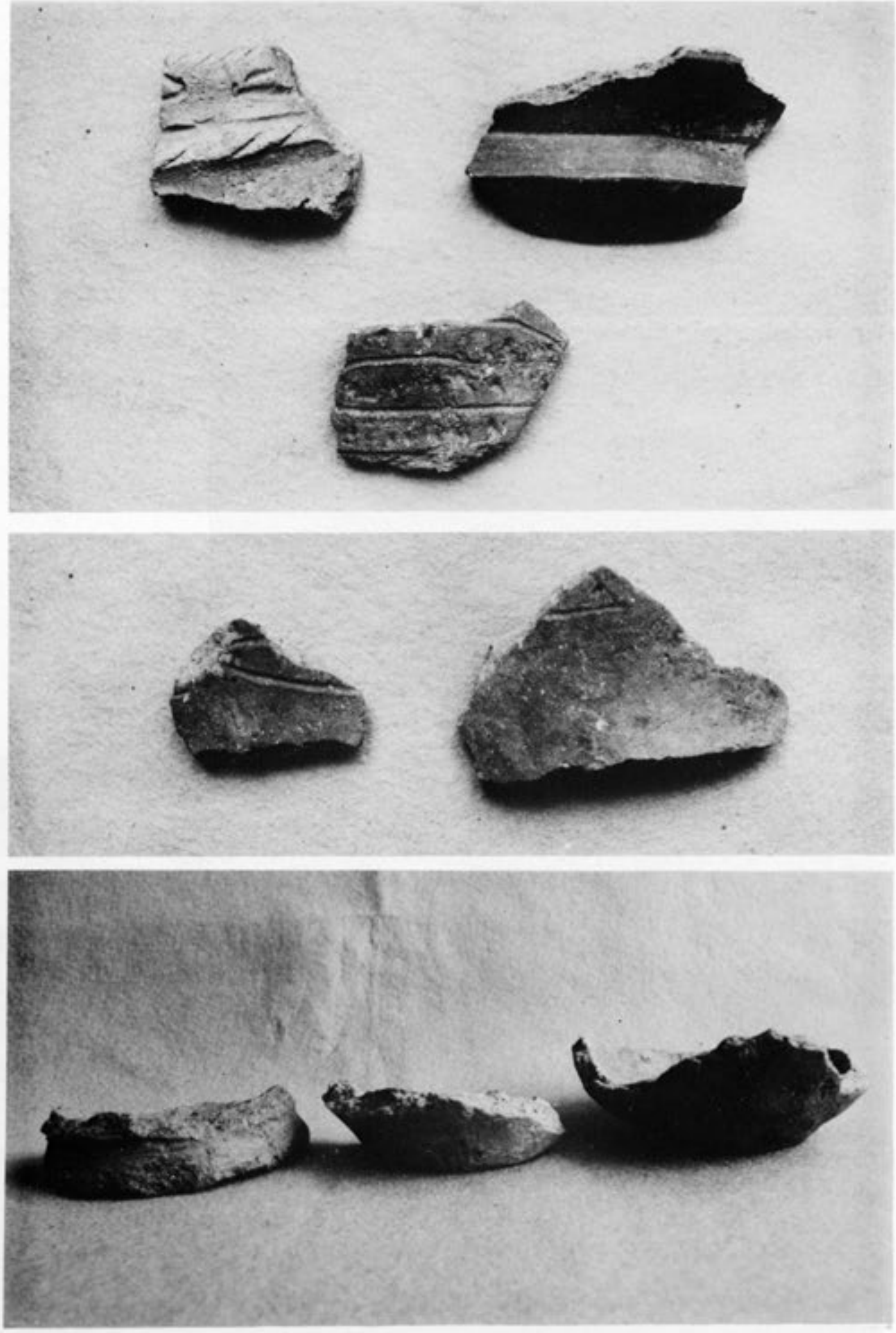
滑石製加工品
石　鏃



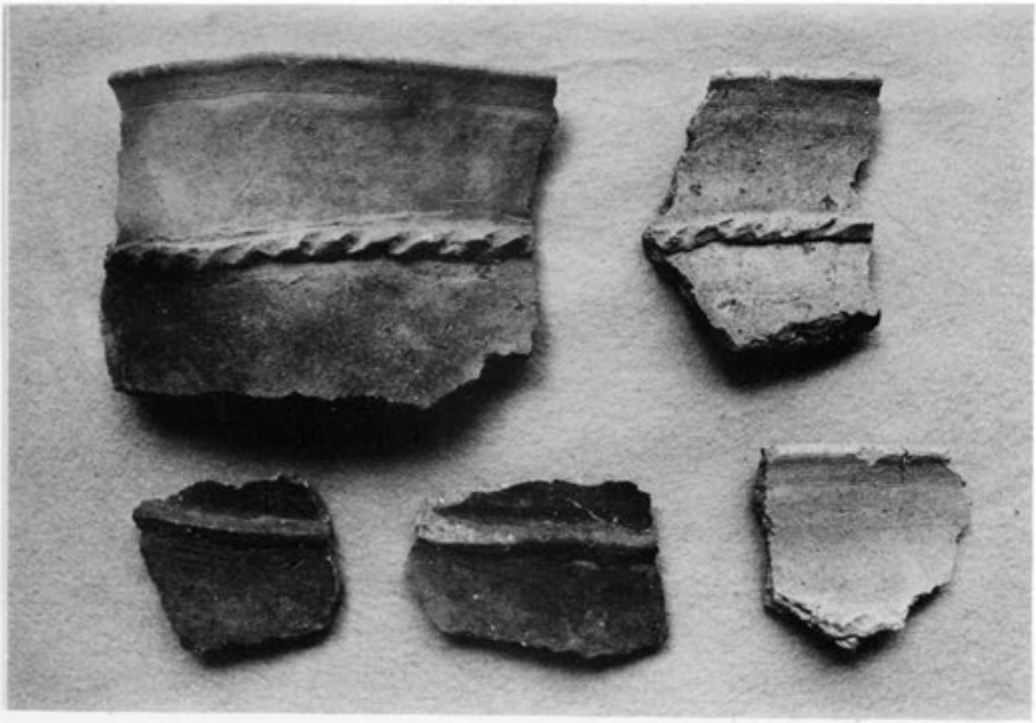
石　皿



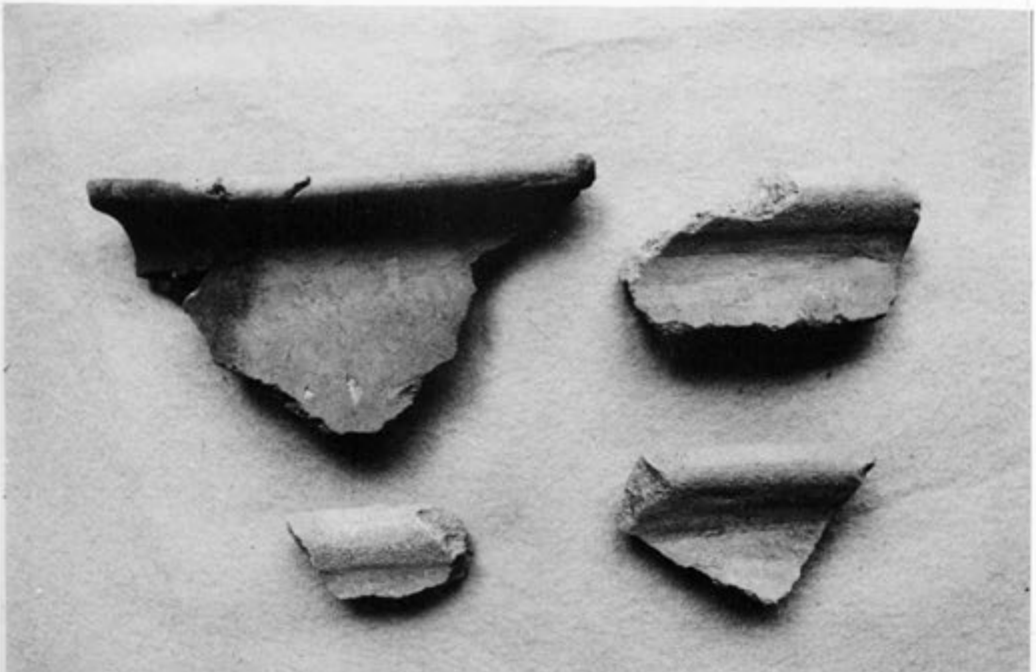
発掘風景



上・縄文土器　中・ヘラ描き文土器
下・底部（左端　縄文土器）

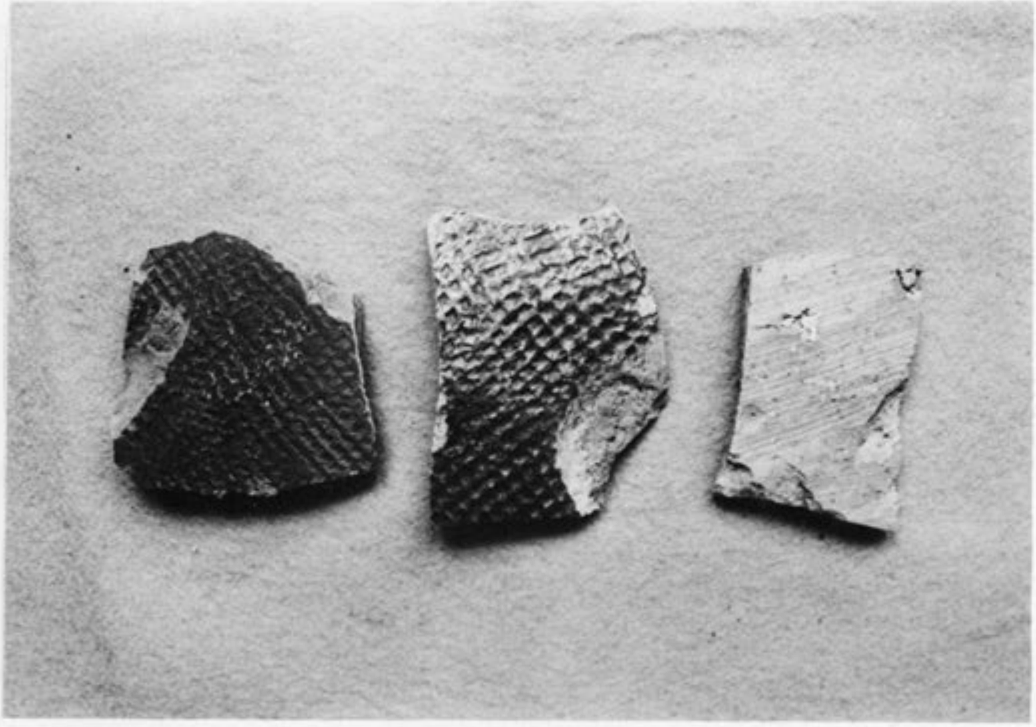


成川式土器口縁部

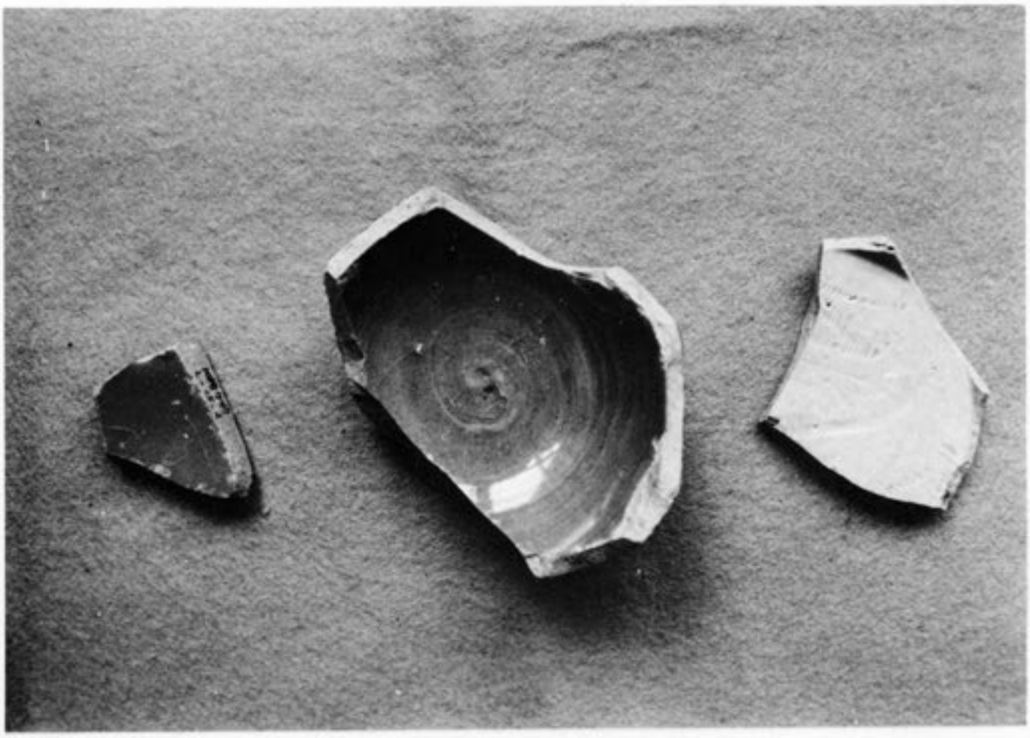


土師式土器口縁部

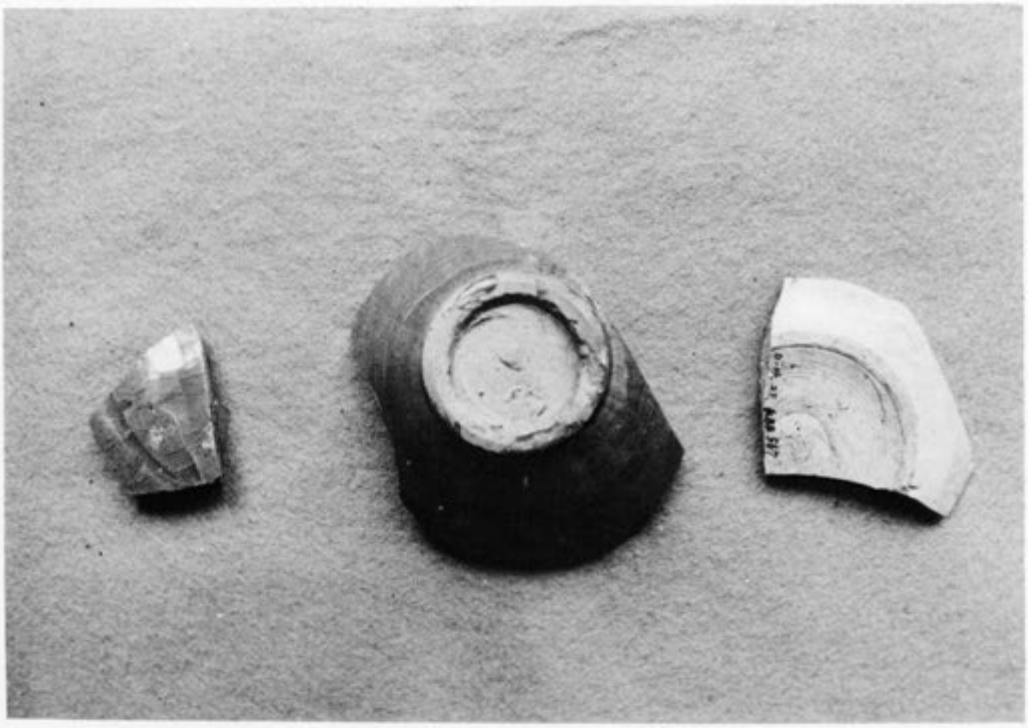
土師坏の底部



須 恵 器



青　磁



青磁（底部）

堀ノ内遺跡

例　　　　言

1．この報告書は，九州縦貫自動車道建設に伴って，昭和54年度に発掘調査を実施した調査報告書である。

2 発掘調査は，日本道路公団からの受託事業として，鹿児島県教育委員会が実施した。

3．本書の遺物の実測，写真及び執筆，編集は立神次郎・青崎和憲が分担して行なった。

4．調査の組織は，調査の組織及び調査の経過の中で記した。

5．本書に用いたレベル数値は，海抜絶対高である。

6．出土品は，文化課収蔵庫に保管してある。

目　　　次

Ⅰ　調査に至るまでの経過 …… 3
Ⅱ　調査の組織及び調査の経過 …… 3
Ⅲ　遺跡の位置及び環境 …… 6
Ⅳ　調査の概要 …… 11
①土層 …… 11
②遺物 …… 16
Ⅴ　むすび …… 20

挿　図　目　次

第1図　グリット配置図 …… 5
第2図　位置及び周辺遺跡 …… 7
第3図　周辺地形図 …… 10
第4図　土層略図 …… 12
第5図　土層断面図 …… 13
第6図　土層断面図 …… 14
第7図　Ｂ－４区，Ｂ－５区遺物出土状況 …… 15
第8図　縄文式土器実測図 …… 16
第9図　成川式土器実測図 …… 16
第10図　甕形土器実測図 …… 17
第11図　甕形土器実測図 …… 18
第12図　土師器，内黒土師器，須恵器実測図 …… 19

表　目　次

表　1　堀ノ内遺跡周辺の遺跡一覧表 …… 8

図　版　目　次

図版1　調査風景　層位 …… 21
図版2　Ａ－４区土器出土状況・Ａ－４区土師器出土状況 …… 22
図版3　縄文式土器・成川式土器・甕形土器 …… 23
図版4　甕形土器・土師器・内黒土師器 …… 24
図版5　甕形土器・須恵器 …… 25

Ⅰ．調査に至るまでの経過

日本道路公団は「日本道路公団の建設事業等施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書」に基づき，九州縦貫自動車道鹿児島線（吉松一加治木線）の埋蔵文化財について，昭和47年２月23日に協議を求めた。これに対し，鹿児島県教育委員会は，昭和47年８月２日～10日，同月18日～26日までの２回にわたり，延長38km，幅２kmにわたって埋蔵文化財分布調査（溝辺一加治木間は予定路線内）を実施し。その結果に基づいて，埋蔵文化財の保護のうえからも十分配慮されることを要望したが，溝辺一加治木間については昭和47年５月27日に路線を発表した後だったので事前に調査して記録保存することとした。溝辺～吉松間は県文化財専門委員（当時），河口貞徳氏，同故池水寛治氏の指導を得て第二次の埋蔵文化財の分布調査を実施し，発掘調査前の遺跡の取り扱いについて慎重を期するとともに，昭和49年１月～２月，河口貞徳氏に指導を依頼して再確認のための埋蔵文化財分布調査を実施した。これらの結果に基づいて遺跡の保存区分を決定し，日本道路公団と協議の結果，保存する遺跡（吉松町堂迫地下式横穴）１か所，記録保存する遺跡10か所が決定し，本遺跡である堀ノ内遺跡も含まれた。

本遺跡は分布調査の結果，台地上の北側斜面に面する畑地の約4,800㎡の範囲内に遺物が散布していたが，そのうち約4,300㎡は九州縦貫自動車道本線外で，取り付け道路部分に約500㎡が記録保存の対象となった。

調査期間は，昭和54年９月10日～27日までの実働13日間を要した。

Ⅱ．調査の組織及び調査の経過

①　調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会	
調査責任者	文化課長	山下典夫
	文化課長	猿渡俣昭
調査企画	専門員	本蔵久三
調査担当者	主事	立神次郎
	主事	青崎和憲
	主事	牛ノ浜修
事務担当	管理係長	中條享
主幹兼	管理係長	川畑栄造
	主査	安藤幸次
	主事	天辰京子
		山下玲子

② 調査の経過

分布調査の結果，堀ノ内遺跡は，吉松町の中心部を蛇行しながら流れる川内川へ合流する樋寄川と大谷川とに取り囲まれた北側斜面の台地上で，標高約320mの畑地に位置しており，採集遺物は，縄文式土器片，成川式土器片，黒曜石剝片などが見られる。

発掘調査は，分布調査の結果，遺物の散布の認められた畑地の約4,800㎡が遺跡地であるが，本遺跡は九州縦貫自動車道の建設に伴う附帯工事（既成の農道拡張区部分の約500㎡）が対象となり，調査期間は昭和54年9月10日～9月27日までの実働13日間を要した。その間の調査経過については，下記のとおりである。

調査日誌抄

発掘調査期間　昭和54年9月10日～9月27日

9月10日　堀ノ内遺跡発掘開始
堀ノ内遺跡の発掘調査の打合せ。発掘予定地として残してあった地点は路線外にあたり，道路を境に東側の一段高い畑地の縁辺部である。分布調査で遺跡として範囲設定した一筆の畑地の縁辺部約500㎡が対象区である。
作業員に発掘調査の説明と調査上の注意を行ない作業に入る。草木の伐採及び発掘器材運搬テント張りの作業を行う。

9月11日　調査区トレンチ設定。畑地縁辺部の調査区（約500㎡）の細長い地区である。
北側の側溝より2mひかえて基本杭を設定。地層は2区～6区にかけて傾斜する。Ⅱ層の黒褐色層とⅢ層の赤ホヤ層の接点から，土師器，須恵器片（小片）が出土する。一部溝によって切られている部分もある。

9月12日　B－2，3区掘り下げ。Ⅱ層は耕作の為削平。B－4，5区掘り下げ。Ⅱ層は約10cm堆積。B－6区掘り下げ，Ⅱ層無し。Ⅷ層まで掘り下げる。一部Ⅴ層が残る。
B－7区，A－1区設定。掘り下げ，Ⅱ層無し，Ⅵ層まで約60cm掘り下げる。

9月13日　A－1区Ⅷ層まで掘り下げ終了。B－2，4，5区盛土排除。

9月14日　B－2区Ⅲ層以下掘り下げ。局部断層有り。B－4～7区小型ブルドーザーによる盛土及び，竹，立木の根の除去。B－4，5区Ⅱ層に土器集中し，その拡長部の掘り下げ。B－5区西北壁～B－4区東にかけ旧耕作土の落ち込みが検出さる。

9月17日　B－2区Ⅴ，Ⅶ層掘り下げ，Ⅵ層無し，B－4，5区一部耕作土掘り下げ。遺物検出作業。

9月18日　B－4，5区Ⅱ層，清掃写真，平板実測，B－6区Ⅷ層まで掘り下げ終了。
B－6区Ⅷ層まで掘り下げ終了。B－2区Ⅷ層まで掘り下げ終了。

9月19日　B－4，5区Ⅲ層面の1/500，10cm毎のコンタ線測量。地形実測－1/500。B－7区北面縦割りトレンチ設定，掘り下げ作業。B－3区Ⅲ層以下掘り下げ開始。

9月20日　B－3，7区Ⅲ層以下掘り下げ。B－7区拡張及び北面掘り下げ。C－7区北面

耕作土以下掘り下げ。Ⅱ層は削平されている。

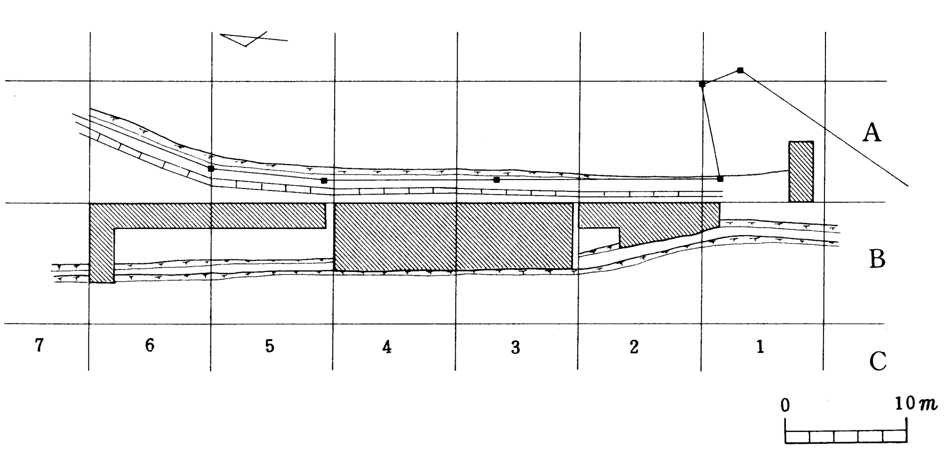
9月21日　B－4，5区Ⅱ層下部，土器出土状況実測1/20。遺物取り上げ。B－2，3区Ⅴ層以下掘り下げ。C－7区掘り下げ。

9月25日　B－2，3区Ⅲ層以下掘り下げ。B－4，5区Ⅱb層の土器出土。B－6，7区Ⅲ層以下掘り下げ。C－Ⅶ区掘り下げ。

9月26日　B－2，3区Ⅶ層まで掘り下げ終了。B－4，5区Ⅱb層の土器出土状況実測（1/20）。一部旧畑地の為・削平されている西側をのぞき土師器の出土を小片であるが多数見られた。B－6区Ⅶ層まで掘り下げ。B－7区東北壁深掘り。

9月27日　A－1区東壁土層実測。B－2～7区北壁土層実測。B－4区東壁土層実測。B－7区西壁層実測。

作業器材後かたづけ。関係事務所へ発掘作業終了のあいさつ。



第1図　堀ノ内遺跡グリット配置図

Ⅲ. 遺跡の位置及び環境

堀ノ内遺跡は，姶良郡吉松町大字川添字堀ノ内に位置している。吉松町は鹿児島県の北端部にあり，北部及び東部は宮崎県えびの市との県境をなし，南部から南西部にかけては栗野町，西部は伊佐郡菱刈町と相接している。

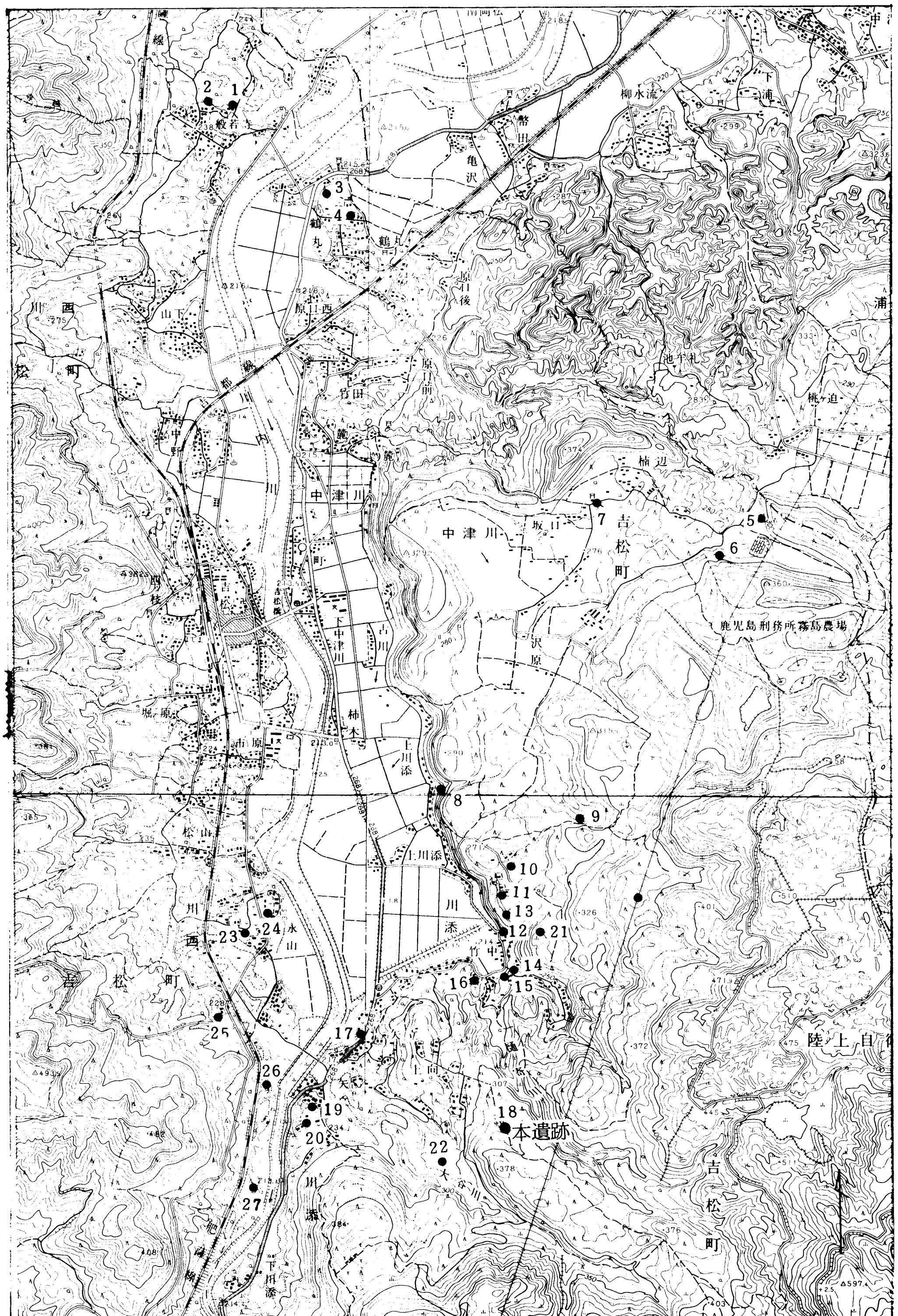
本遺跡の位置する姶良郡北部地方を大きく見ると，西北部には九州山脈の連山をひかえ，南東部には霧島連峰の山岳が千数百mの標高を呈し，その間を熊本県の白髪山に源を発する川内川が南流して細長い加久藤盆地を形成し，米穀倉地帯となっている。

吉松町は，加久藤盆地の南端郡にあたり，川内川沿岸の水田地帯は，砂礫層の土壌で，台地及び丘陵性台地は，黒色火山灰土の土壌で覆われ下層にはシラス層が堆積している。この加久藤盆地内には，加久藤層群の分布が見られ，その分布は，川内川の右岸及び長江川以東の地域では，ほぼ水平に近く，長江川左岸より京町南部から吉松にいたる地域では著しい褶曲と破砕が認められ，破砕帯であることを示している。霧島火山群の主脈は北西一南東方向に走り，ひとつの圧砕帯と考えられるが，加久藤盆地破砕帯はこの延長部に位置し，地質構造上不安定なこの地域は地震帯となっている。この地域に大災をもたらした「えびの地震」は昭和43年２月に起り，この加久藤盆地が震源地となっていることは記憶に生々しい。

川内川流域は，河岸段丘が発達し，特に右岸はその傾向が見られ，集落の多くが立地している。左岸は標高300mの高地段丘崖を東限とし，標高200mの低平[註①]な沖積平野を形成し，穀倉地帯となり，その周辺部に集落が形成されている。本遺跡もこの左岸に位置している。

本遺跡は，吉松町の中心地より南東約3.3kmで，大谷川と樋寄川とに取り囲まれた丘陵性の北側斜面に位置する畑地に所在している。周辺地域は階段状と化した畑地のほとんどは植林がなされ，一部は，この地方の特産である栗の栽培が行われている。

本遺跡の周辺には，多くの遺跡が周知されている（第２図，表Ⅰ）が，これらの遺跡は本遺跡と同様に，九州縦貫自動車道建設工事に伴い，分布調査の結果発見された遺跡もあり，また周知の遺跡については，所在地の確認も実施されている。その中で，堂迫古墳周辺には，堂迫遺跡・堂迫遺跡Ａ地点からＦ地点までの７遺跡，三堂遺跡Ａ～Ｃ地点の３遺跡があり，その他については，第２図と表１に示したとおりである[註②]。そのうち永山遺跡（11・12）は，昭和48年１月20日，宅地造成中に発見され，同年８月に鹿児島県考古学研究所・吉松町教育委員会により[註③]発掘調査が実施されている。その結果，地下式石積石室の数は17基，うち13基について石室まで調査が行われている。出土遺物としては壺形土器・高杯・銅鏡・鉄鏃・鏃柄・ガラス製小玉などが出土した[註④]。



第２図　堀ノ内遺跡の位置及び周辺遺跡

表１　堀ノ内遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	編年	遺物	備考
1	中原	吉松町般若寺 中原	台地	後期	石斧・弥生式土器	
2	中原	〃 〃 〃	畑地		土師器・小片散布	
3	鶴丸古墳	〃 鶴丸 鶴丸寺	台地		須恵器・土師器・鉄刀・人骨・地下式土坑・箱式棺	
4	鶴丸	〃 〃 〃	〃		須恵器・土師器	
5	竹島A	〃 中津川 竹島	〃	後期	弥生式土器片・土師式土器片	
6	竹島B	〃 〃 〃	〃	前期	縄文式土器（轟式）	
7	秋葉神社	〃 〃 楠辺				
8	川添の供養塔	〃 川添 池田			馬迫己利宅	
9	堂迫A	〃 〃 堂迫			弥生式土器片・土師器片・須恵器片	
	堂迫B	〃 〃 〃			土師式土器片	
	堂迫古墳	〃 〃 〃	台地		鉄剣・人骨・鉄刀・鉄鏃 地下式土坑	広範囲にわたり地下式古墳の存在可能大
	堂迫C	〃 〃 〃			弥生式土器片・土師式土器片・黒曜石剝片	
	堂迫D	〃 〃 〃			弥生式土器片	
	堂迫E	〃 〃 〃			土師式土器片・土製品	
	堂迫F	〃 〃 〃			弥生式土器片・土師式土器片	
10	三堂A	〃 〃 三堂			弥生式土器片・土師式土器片	
	三堂B	〃 〃 〃			須恵器片・石斧	
	三堂C	〃 〃 〃			弥生式土器片・土師式土器	
11	竹中	〃 〃 竹中	斜面地		弥生式土器・羊磨製石斧	
12	竹中	〃 〃 〃	〃		土師器	
13	御堀内	〃 御堀内			弥生式土器片・土師式土器片	
14	竹中の供養塔	〃 川添 竹中			享保三戎年	
15	愛甲家歴代の墓	〃 〃 堀ノ内				
16	熊野神社遺跡	〃 〃 川添		晩期	縄文（晩期）土器片・土師式土器片	
17	庚申供養塔	〃 〃 〃				
18	堀ノ内A	〃 〃 堀ノ内			縄文式土器片・弥生式土器片 土師式土器片・黒曜石剝片	
	堀ノ内B	〃 〃 〃				
	堀ノ内C	〃 〃 〃			縄文式土器片・土師式土器片・黒曜石剝片	
	堀ノ内D	〃 〃 〃			弥生式土器片	
	堀ノ内E	〃 〃 〃				
	堀ノ内F	〃 〃 〃			縄文式土器片・弥生式土器片・須恵器片	
19	重永A	〃 〃 重永			成川式土器片・土師器片	

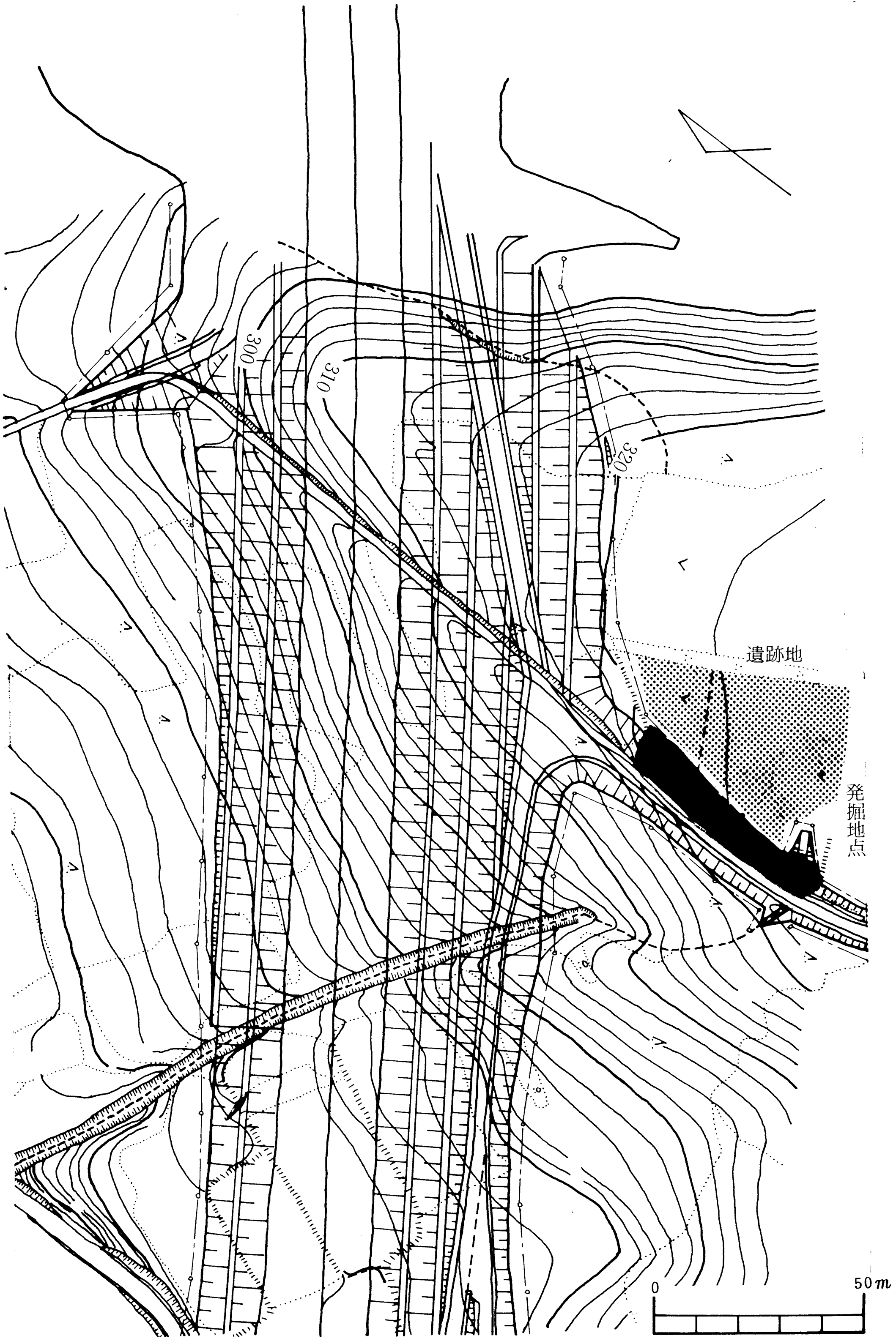
番号	遺 跡 名	所 在 地	地 形	編 年	遺 物	備 考
20	重 永 B	吉松町般若寺 重 永			弥生式土器片・土師式土器片	
21	三 体 堂	〃 〃 三体堂			五輪塔	
22	永 野	〃 永 野 〃			縄文式土器片・弥生式土器片・土師式土器片・須恵器片・石鏃	
23	永山古墳群A	〃 川 西 永 山			地下式板石積石室古墳	
24	永山古墳群B	〃 〃 〃				(S.47.1.29現在)34確認
25	前 田 A	〃 永 山 前 田		晩 期	縄文(晩期)土器片・石鏃・黒曜石剝片	
26	前 田 B	〃 〃 〃			縄文式土器片・弥生式土器片・土師器片	
27	豆 付	〃 川 西 豆〃付	河岸段丘		縄文式土器	

註① 吉松町郷土誌編纂委員会 「吉松町郷土誌」 1970.5

註② 鹿児島県教育委員会 「埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書」 九州高速道路鹿児島線(加治木～吉松間) 1973

註③ 註2に同じ

註④ 吉松町教育委員会 「永山遺跡」1973.12



第３図　堀ノ内遺跡周辺地形図

Ⅳ．調査の概要

堀ノ内遺跡は，堀ノ内遺跡Ｂ地点で，その面積は約4,800㎡あり，そのうち今回の発掘調査面積は，九州縦貫自動車道の建設に伴う附帯工事（既成の農道を拡張区）部分で，旧農道より比高約1.8mの面に延びた畑地の縁辺部約500㎡である。

本遺跡は，畑地の縁辺部が調査区で，細長い地形を呈し，北側に設営されている側溝より２ｍひかえ基本杭を基準に，４ｍ×10ｍのグリッドを設定し，北から南へＡ，Ｂ区，東から西へⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ……区とし，Ａ－１区，Ｂ－Ⅰ区，Ｂ－２区，Ｂ－３区と呼ぶことにした。

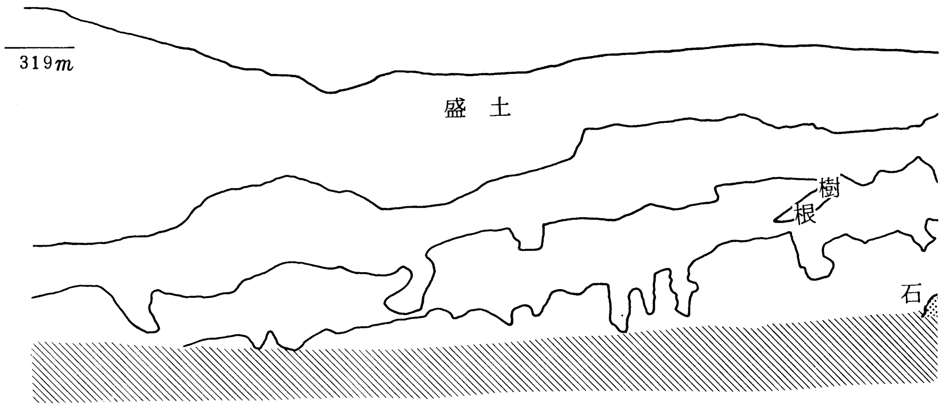
発掘作業は，当初，幅２ｍのトレンチによる確認調査から始め，その結果に基づき発掘調査をすることとし，Ａ－１区，Ｂ－２区，Ｂ－３区，Ｂ－４区，Ｂ－５区，Ｂ－６区，Ｂ－７区の掘り下げ作業を実施した。その結果，Ａ－１区，Ｂ－２区，Ｂ－７区は耕作などで攪乱されⅡ層の遺物包含層も消失していた。Ｂ－４区，Ｂ－５区のⅡ層は約10cmの堆積が認められた。Ｂ－４区，Ｂ－５区のⅡ層とⅢ層の接点より奈良期の土器の小片が多数出土したのでこの面が生活面と思われる。全体の地形からみると東側から西側へ傾斜し，Ⅱ層の残存しているＢ－４区，Ｂ－５区は，わずかに凹地になっており，そこに遺物が集中したものと考えられる。地区よりはⅡ層遺物包含層削平が確認されたりしているため，遺物の出土は認められなかった。また，Ｂ－７区表土層からは縄文時代前期の押型文土器の破片１点が出土したのみである。Ｂ－４，Ｂ－５区は，土器が集中したため，拡張作業を実施し，掘り下げた結果，Ⅱ層より土師器の小破片が多数出土した。その中にＢ－５区で成川式土器１点が出土している。Ｂ－４区，Ｂ－５区は遺物検出作業を継続しながら，他区については，さらに下層の掘り下げ作業を実施したが，遺物，遺構ともに発見されなかった。Ｂ－７区は表層から，縄文時代前期の押型文土器の破片１点が出土したためその周辺部を拡張して縄文時代前期の遺物包含層の確認調査を実施したが，遺物，遺構とも確認できなかった。Ｂ－４区，Ｂ－５は土器取り上げ作業後下層の調査を実施した。

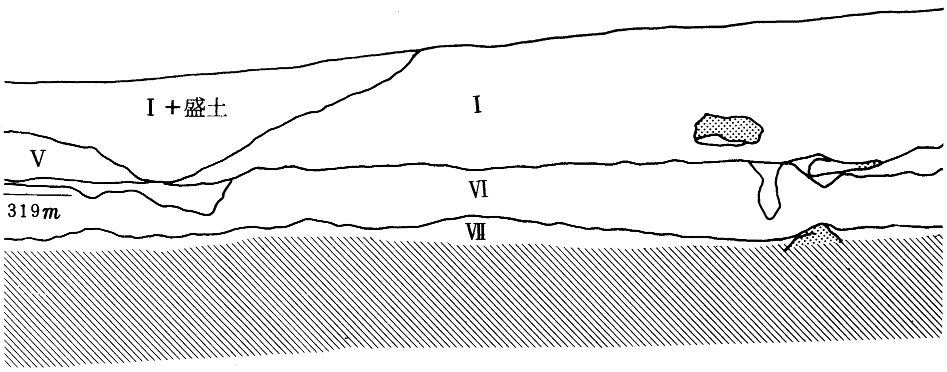
本遺跡の出土遺物は，Ｂ－４区のⅢ層より縄文式土器の小破片，Ｂ－４区，Ⅱ層より成川式土器も見られ，Ｂ－４区，Ｂ－５区のⅡ層より土師器の坏，甕，内黒土師器，須恵器などが出土した。Ｂ－７区の表層より縄文時代前期の押型文土器の小破片も出土した。

①　土　層

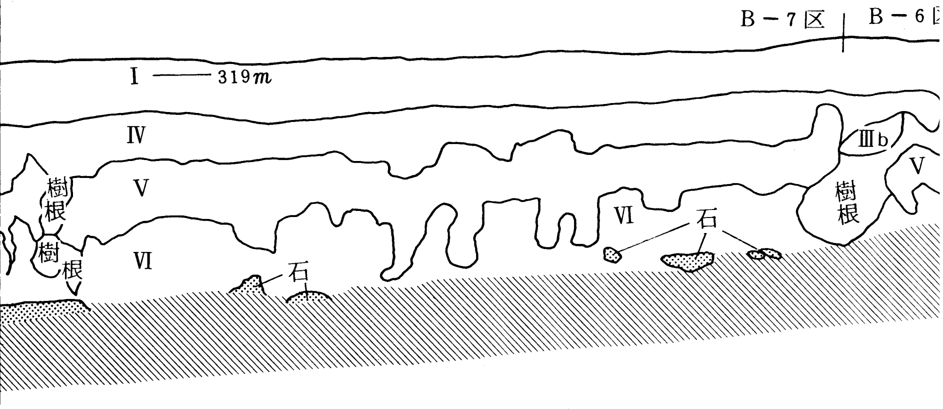
本遺跡は，畑地の縁辺部に当り，また南側より北側へ傾斜が見られ，Ｂ－８区以降になると現状でも判明されるほどの開墾による削平が行なわれている。

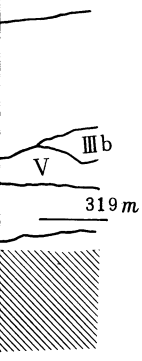
遺跡の標準的な層位は次のとおりである。Ⅰ層は耕作土，Ⅱ層は黒褐色火山灰土層で土師器の遺物包含層で，随所に削平が認められる。Ⅲａ層は黄褐色土層（赤ホヤ層），Ⅲｂ層はパミス層で，不規則のブロック状を呈するⅣ層は，灰青色粘質土層である。Ⅴ層は暗褐色粘質土層で，


319m
盛 土
樹
根
石

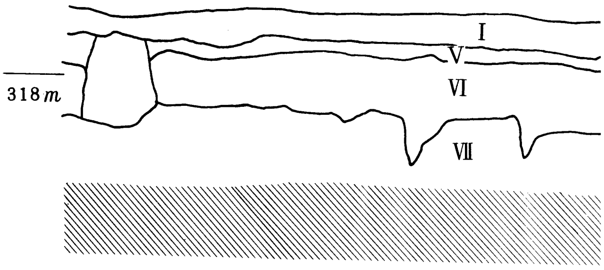

I＋盛土
I
V
VI
319m
VII

B－6，B－7区東側土





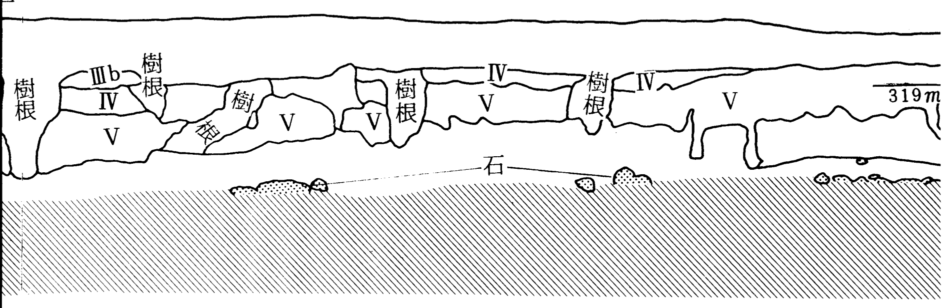
A－1区北側土層断面図



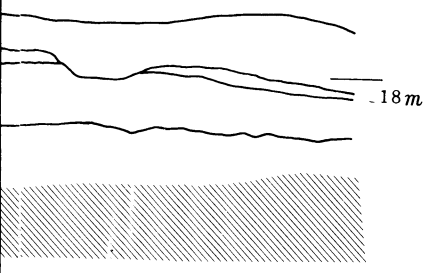
第4図　堀ノ内

層断面図

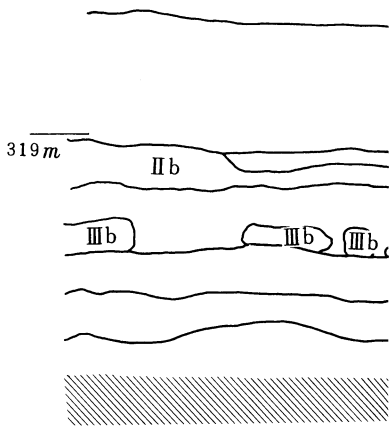
区



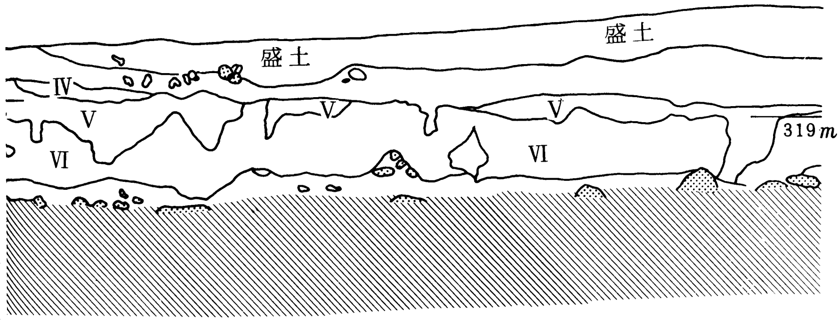
図



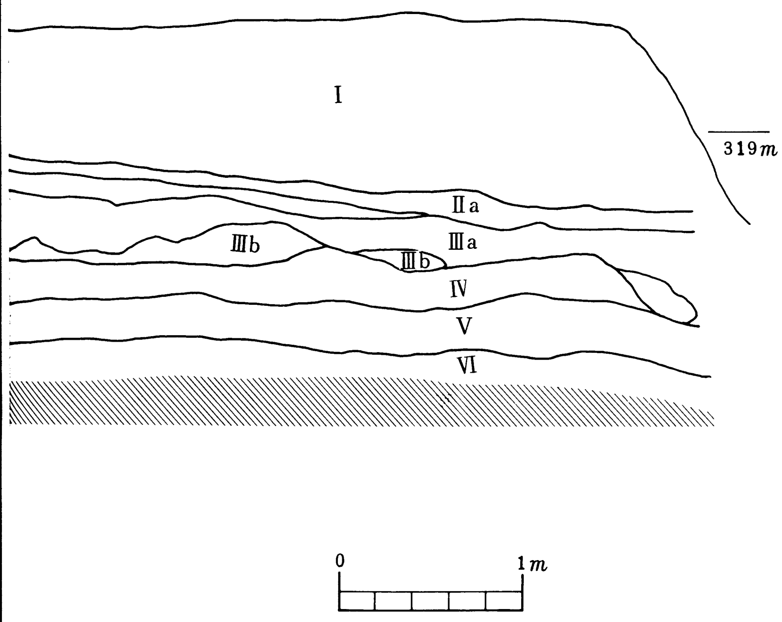
B－4区

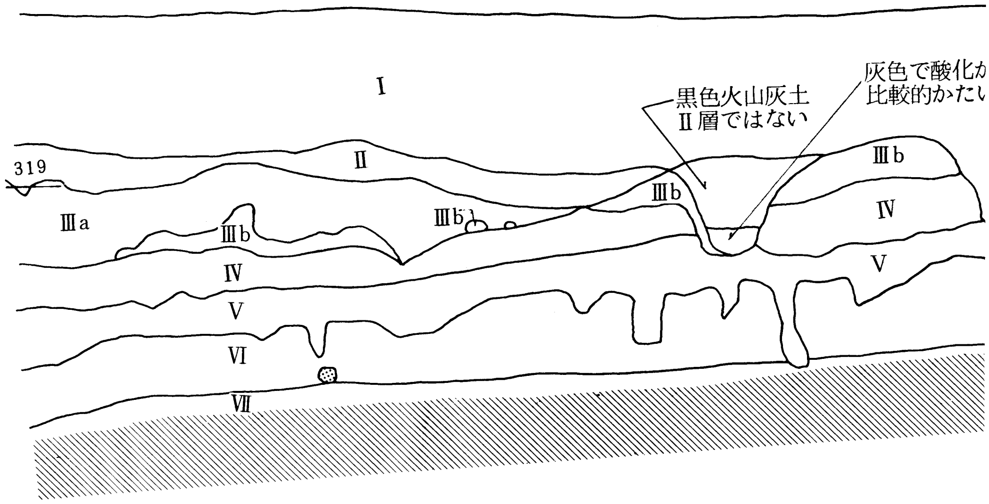


遺跡土層断面図

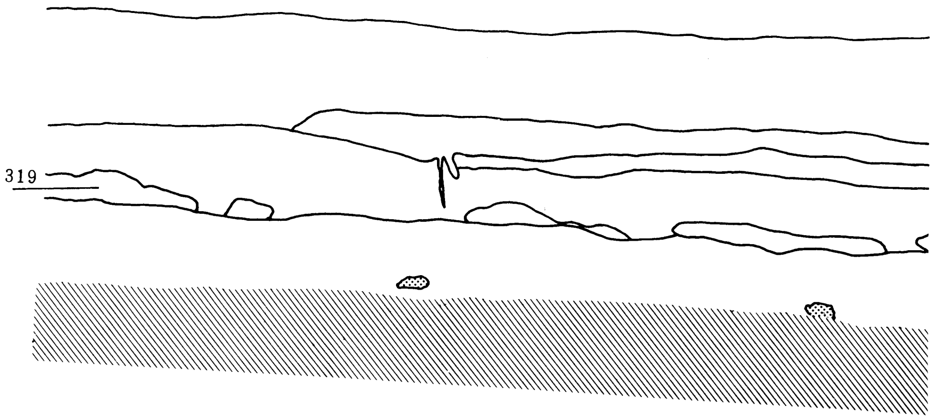


東側土層断面図



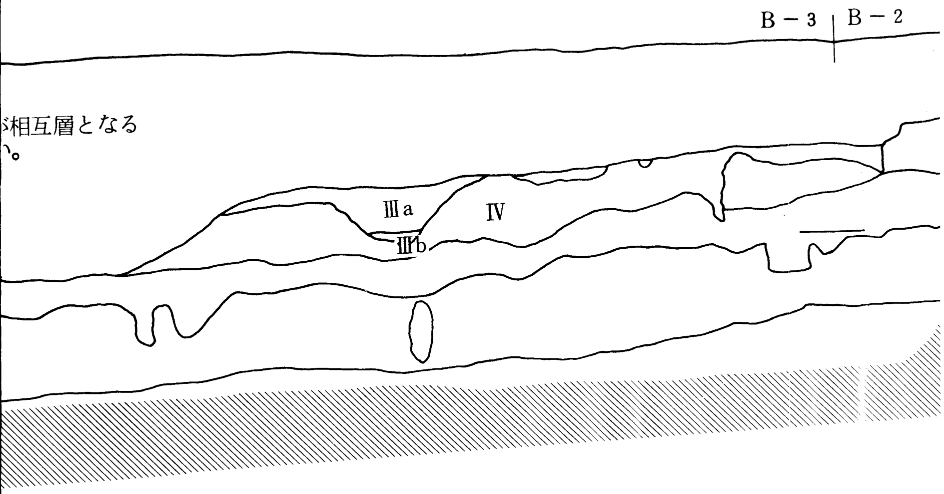


Ⅰ
黒色火山灰土
Ⅱ層ではない
灰色で酸化
比較的かた
319
Ⅱ
Ⅲb
Ⅲa
Ⅲb
Ⅲb
Ⅲb
Ⅳ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ

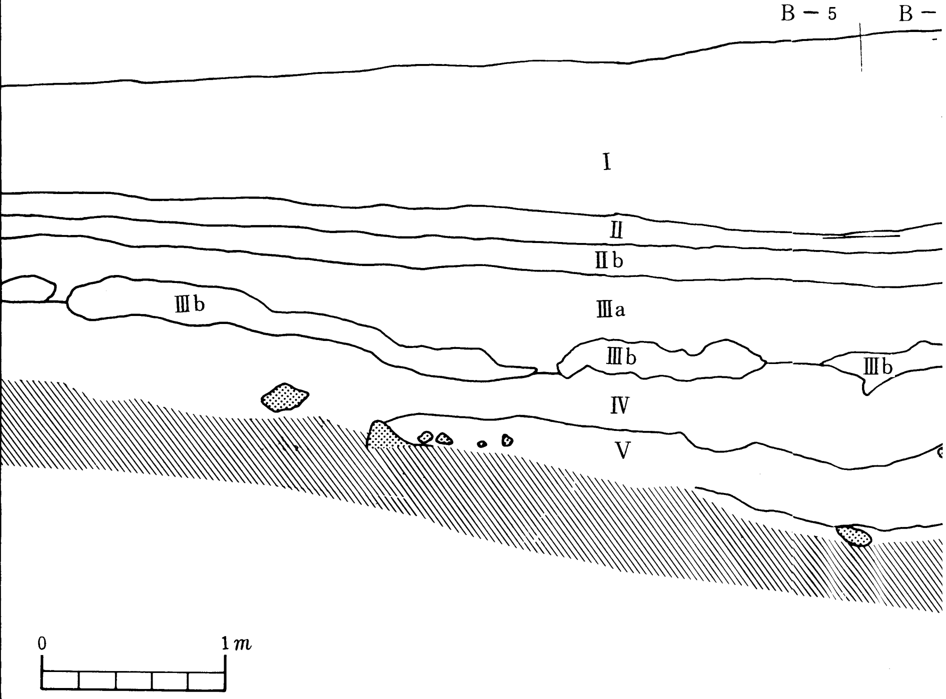


319

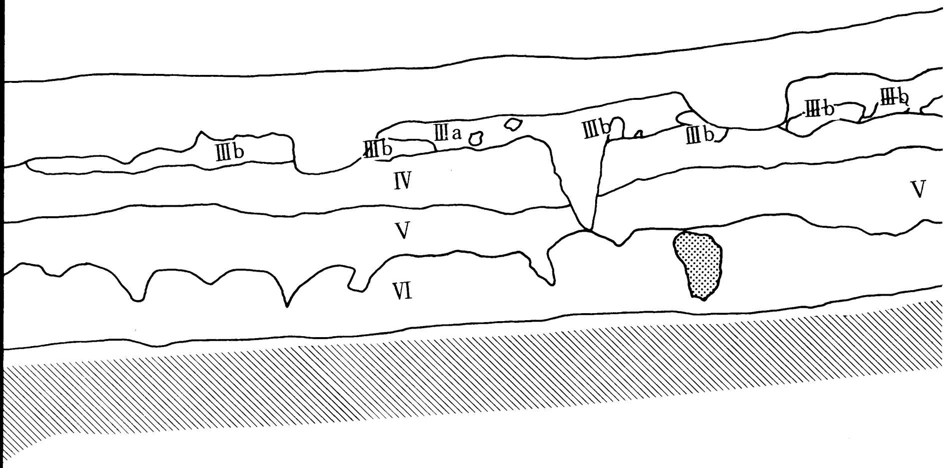
B－2，B－3区　北側土層断面図



B－4，B－5区　北側土

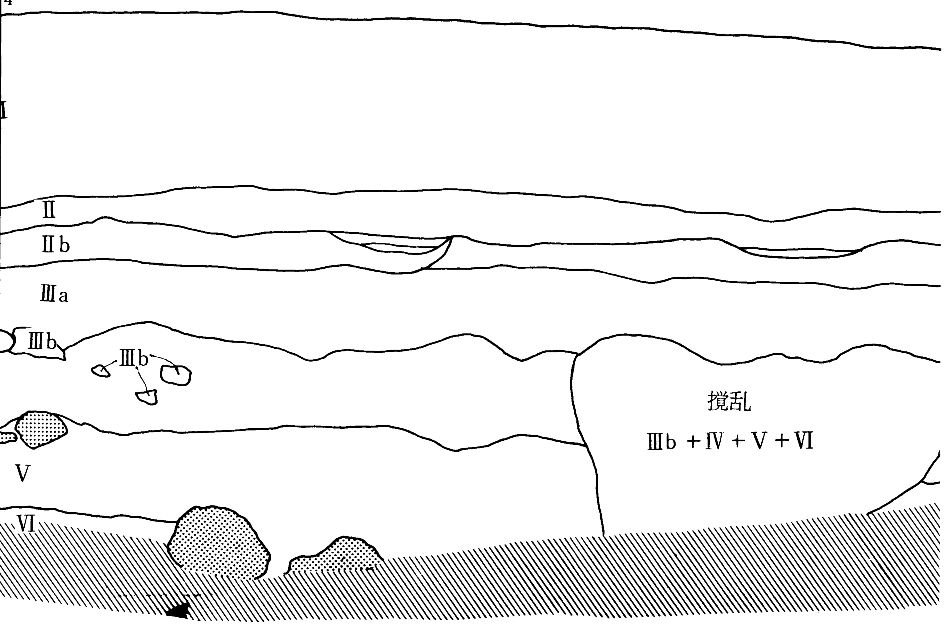


第5図

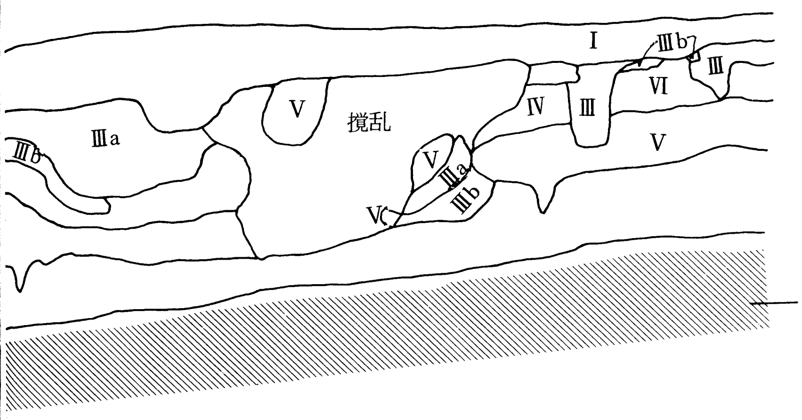


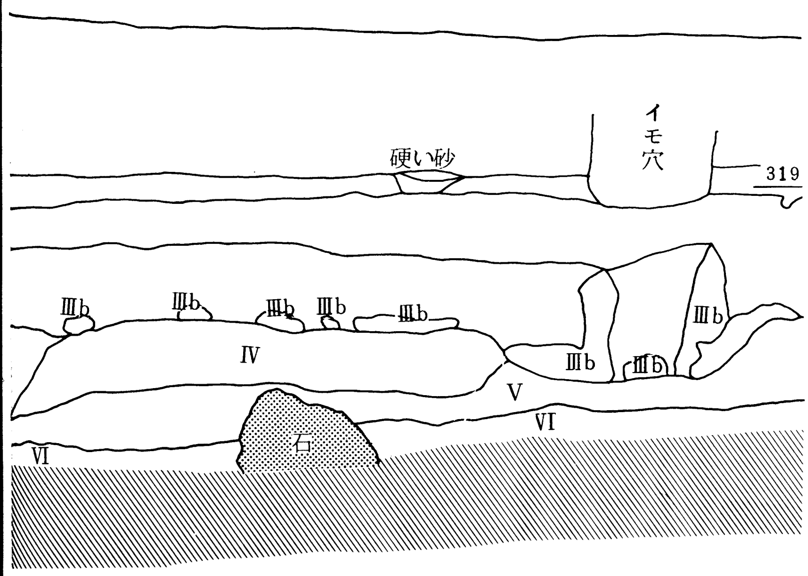
土層断面図

4



堀ノ内遺跡土層断面図

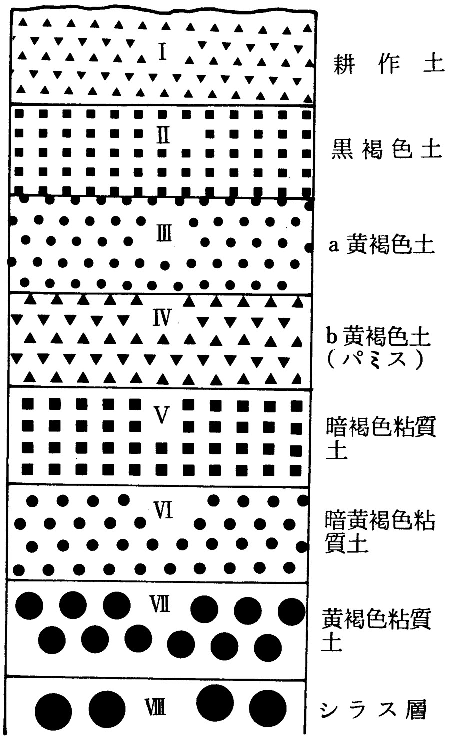

Ⅰ
Ⅲb
Ⅲ
Ⅵ
Ⅳ
Ⅲ
Ⅴ
撹乱
Ⅲa
Ⅲb
Ⅴ
Ⅲa
Ⅲb
Ⅴ


イモ穴
硬い砂
319
Ⅲb
Ⅲb
Ⅲb
Ⅲb
Ⅲb
Ⅳ
Ⅲb
Ⅲb
Ⅲb
Ⅴ
Ⅵ
石
Ⅵ

縄文時代前期遺物包含層に相当する。Ⅵ層は暗黄褐色粘質土層，Ⅶ層は黄褐色粘質土層で，粘度が高く安山岩の岩が随所に見られ一見，岩石層となる個所も認められる。Ⅷ層はシラス層となる。

本遺跡の全体的な層位の流れはA－1区からB－6・7区にかけて層は傾斜をなし，B－4・5区で中窪みになるような層位を呈している。

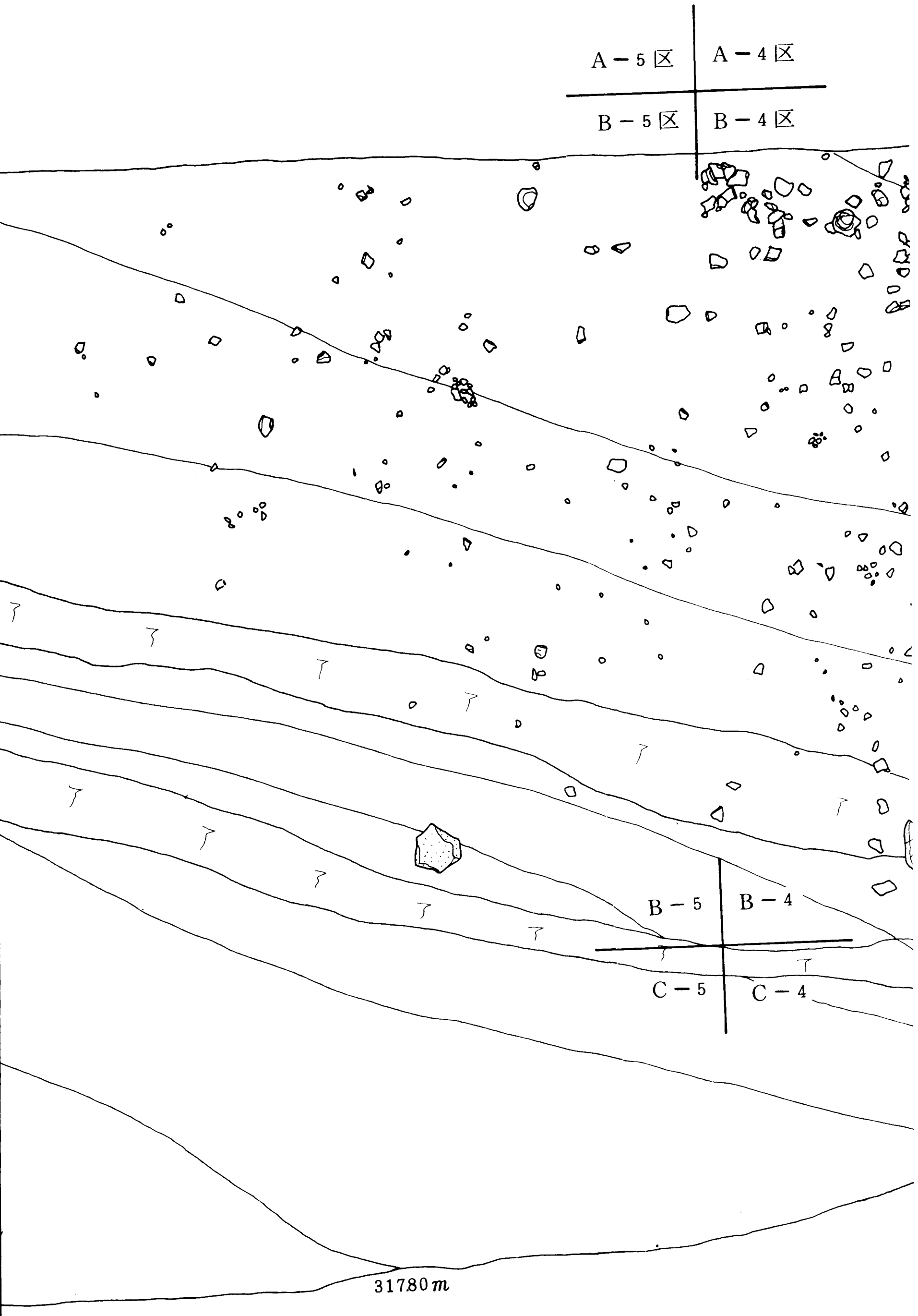
B－2区はⅡ層は削平され，Ⅲ層は部分的に残存し，Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層の攪乱している個所もみられる。B－3区はⅣ層まで削平が行なわれている個所も見られるが一部Ⅱ層の残存しているところも認められる。B－4・5区はⅡ層遺物包含層は残存し，本遺跡の中心で奈良時代の遺物包含層で，B－4区の一部分にⅢb層からⅥ層に及ぶ攪乱がみられる。B－6区はⅤ層もしくはⅥ層まで削平が見られ，随所に樹根による攪乱が多い。B－7区はⅣ層上位まで削平が見られ，Ⅴ層上面やⅥ層上面は層の乱れが随所に認められる。B－8区はⅥ層上位まで削平が認められる。A－1区においては遺跡の南端部に当り，Ⅴ層がわずかに認められるのみで大幅な削平が行われている。



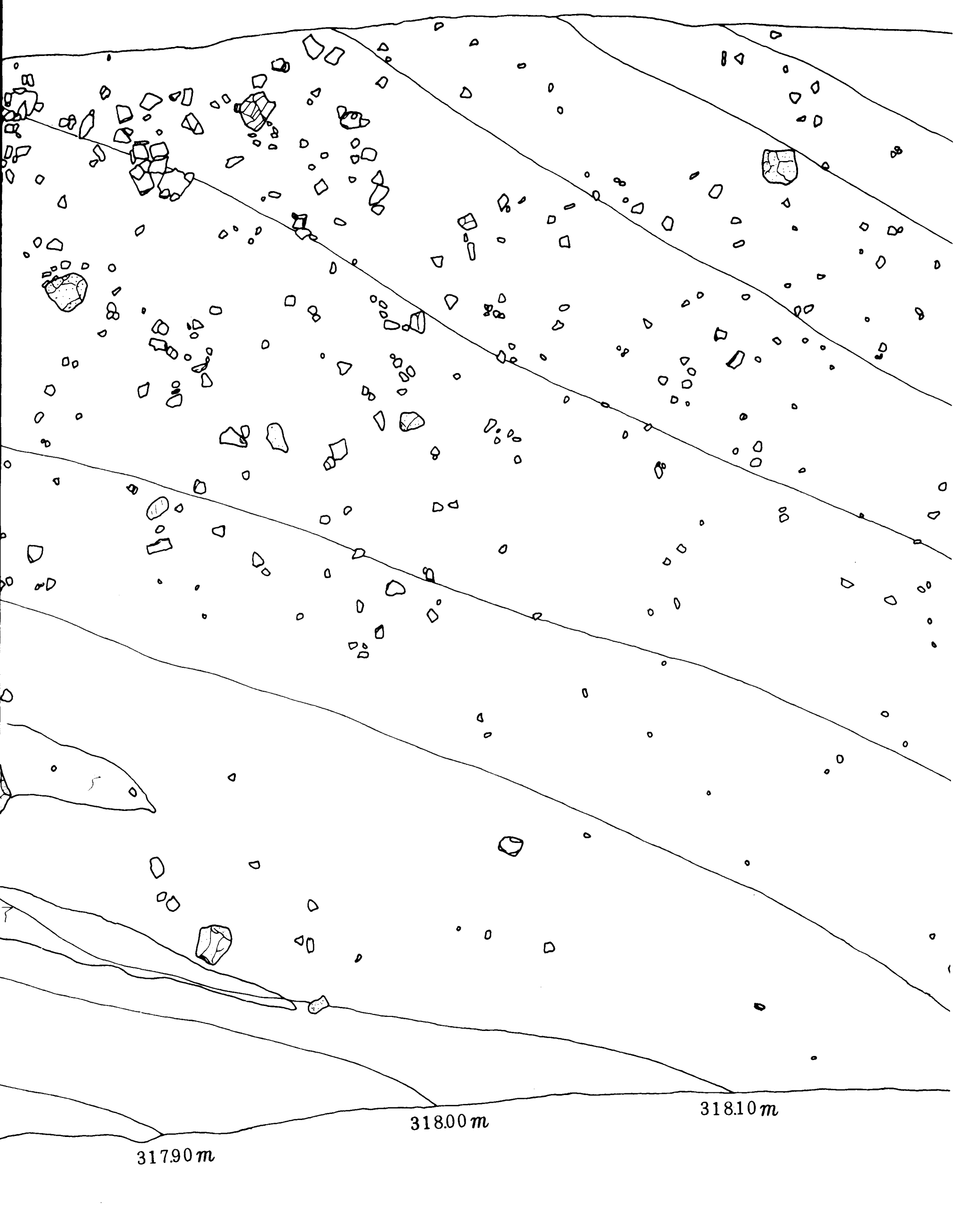
第6図　堀ノ内遺跡土層略図

以上，本遺跡の層位は，台地縁辺部に位置している関係か，傾斜地のうえ後世の開墾により大きく削平を受けている部分が多く，不安定な堆積状況を示し，南側から北部へ傾斜が見られ，B－4・5区で中窪みになるような層位を呈している。

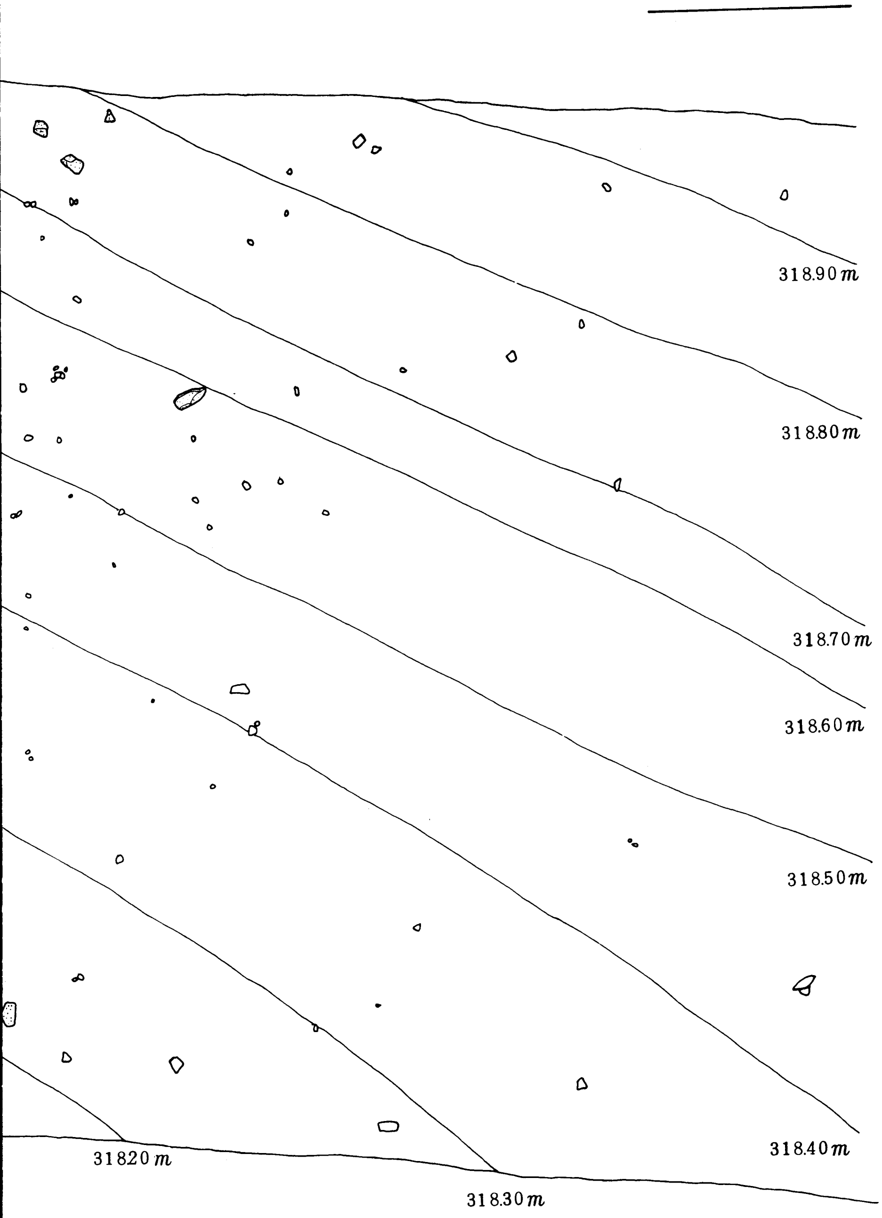
0
1 m



第7図　堀ノ内遺跡・B－4区



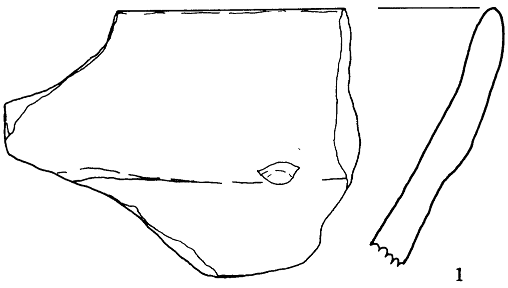
・B－5区遺物出土状況


318.90m
318.80m
318.70m
318.60m
318.50m
318.40m
31820m
318.30m

② 遺　物

土器

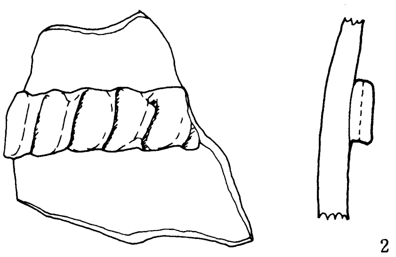
土器には，縄文式土器１片，成川式土器，土師器，須恵器などがⅡ～Ⅲ層にかけて出土した まとまった形の土器は無く，台地の縁辺部で緩傾斜地ということもあり，ほとんど破片である。



第８図　堀ノ内遺跡縄文式土器実測図　S＝⅓

1．縄文式土器（第８図）

１は粗製の鉢形土器の口縁部と思われる。口縁部は，かまぼこ状に丸味を帯び若干内弯する。内側は箆研磨を施す。胎土に石英粒や小礫を含む。色調は赤褐色焼成は良好。Ⅲ層出土であるが時期は不明。



第９図堀ノ内遺跡成川式土器実測図　S＝⅓

2．古墳時代

成川式土器（第９図）

２は頸部がしまる甕形土器片と思われる頸部にキザミ凸帯を貼り巡らす。

全体的に磨耗が激しい。胎土に雲母や石英を含む。色調は黄褐色，焼成は良好。

3．奈良・平安時代

甕（第10，11図）

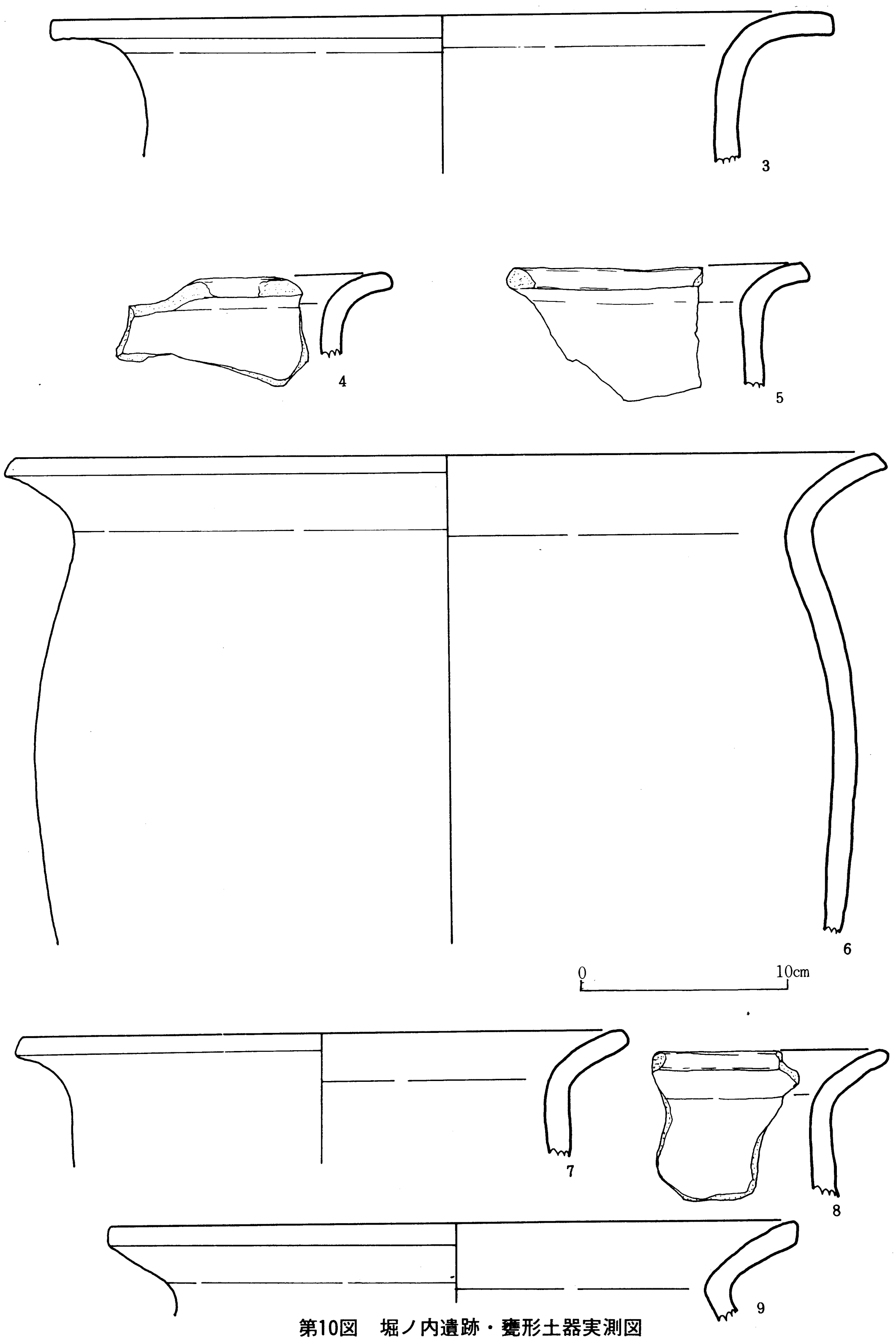
甕の口縁部片である。わずかに胴部は丸く，頸部で若干しまり，中縁部は「く」の字に折れる器形である。ほとんどのものが器面に著しい磨耗を受け，ザラザラする。胎土には，小礫，石英を多量に含み，軟質で弱々しい。色調は，赤褐色を呈す。焼成は不良である。

６は，復元径28cm。胴部は丸味を呈し，頸部が若干しまり，｢く」の字に折れ，外反する口縁部となる。口唇部は平担を呈す。器面は磨耗が激しく，器面にハケ目調整の痕跡が薄く残る胎土に小礫，石英粒含む。色調は赤褐色。焼成は軟弱である。

14は，甕形土器の胴部破片である。頸部に浅い凹線文を施す。器面にハケ目調整痕が，かすかに残る。胎土に小礫含む。色調は赤褐色を呈す。焼成は良好である。

坏（第12図）

坏は，箆おこしの底部で，体部から口縁へ外開きで，わずかに外反する15と直行する16がある。16は灰色を呈し，器壁は薄く，しっかりしている。他の土器は，磨耗が激しく軟質である20は，平底の底部である。



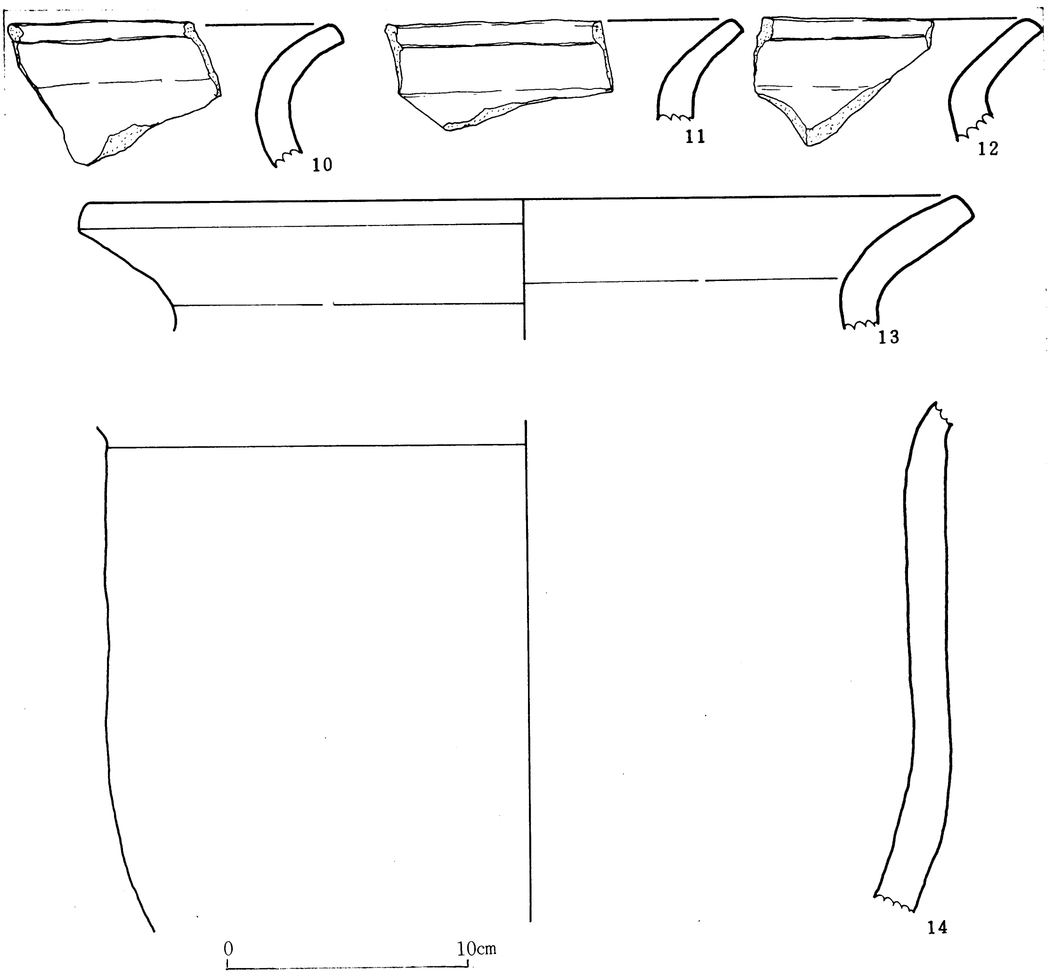
第10図　堀ノ内遺跡・甕形土器実測図

内黒土師器（第12図）

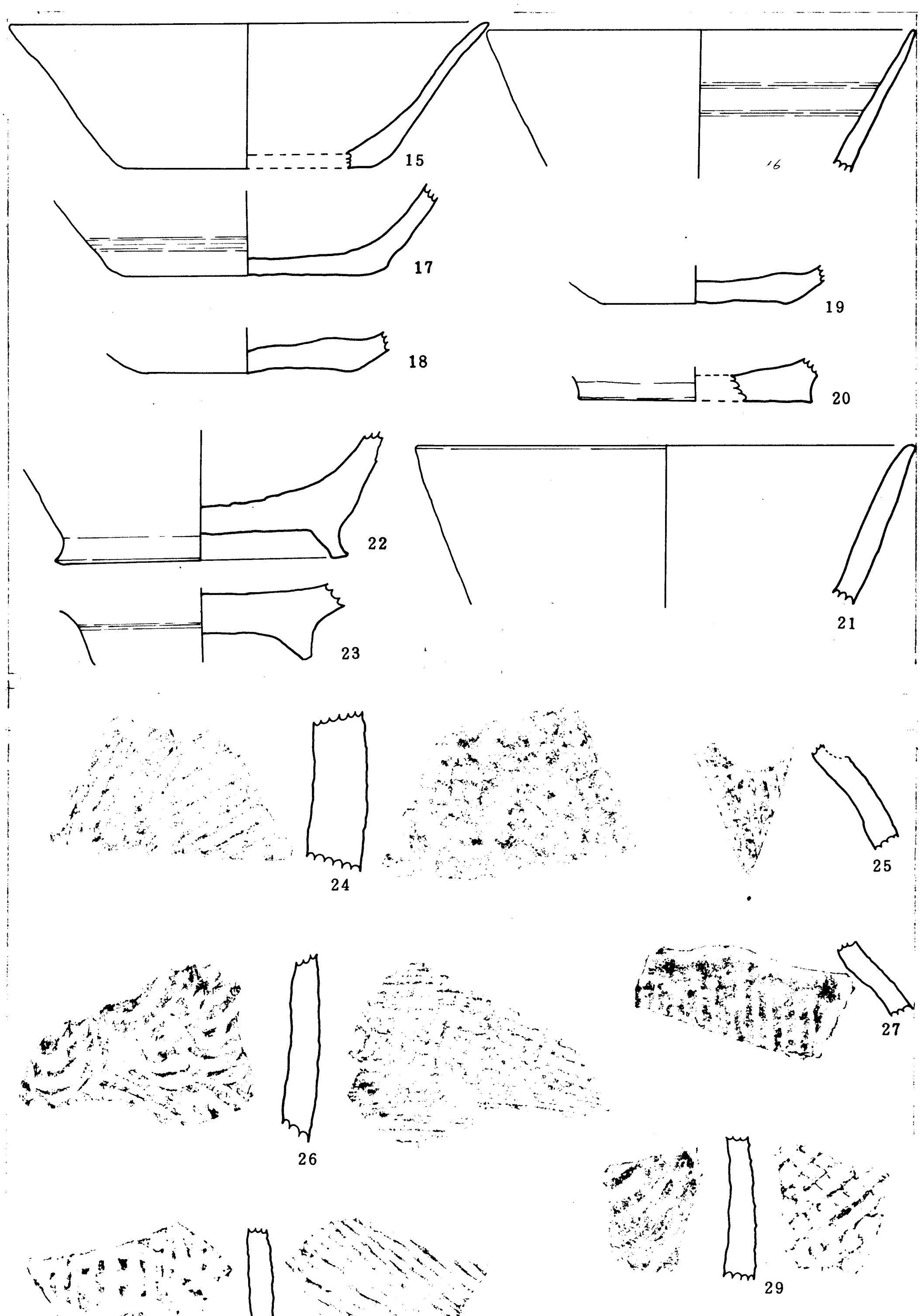
坏（21～23）　高台付の坏である。21は外開きで畳付は平坦に仕上げる高台となる。腰部から口縁へ直線的に移行する。器面内は剥落を受けている。22は，研磨された内黒土師片である口縁部は直行する。21～23とも磨耗が著しく剥落を受けている。

須恵質土器（第12図　24～29）

器形などは破片の為，定かではない，内外面に，格子の叩きや同心円のくずれの叩きを施している。須恵質土器で，全体が灰色を呈している。24は器面に，うっすらと褐色の自然釉を認める。



第11図　堀ノ内遺跡　甕形土器実測図



第12図　堀ノ内遺跡土師器・内黒土師器・須恵器実測図

Ⅴ. む す び

本遺跡は，標高約320mの台地上の北側斜面に面する畑地の縁辺に位置し，九州縦貫自動車道建設に伴う附帯工事部分で，畑地の周縁部を通る既成農道の拡張部約500㎡が対象で発掘調査を実施した。その結果，全体的な層位の流れは，A－1区からB－6，7区にかけて傾斜をなし，B－4，5区で中窪みになり，遺物包蔵層であるⅡ層黒褐色火山灰土層はA－1区・B－2区・B－6区・B－7区では，耕作や開墾などにより削平されている。遺物包含層の残存が認められたB－4区・B－5区においては，土師器を中心に坏や甕形土器，内黒土師器の坏などの小破片が多量に出土した。

以上，本遺跡は台地縁辺部の畑地約500㎡の調査を消化したが，うち半分は攪乱などを受けており，残存部では奈良時代の遺物が主体で，遺構その他のものは検出されなかった。この遺跡の主体部は調査対象外へ延びることは確実であり，その意味では遺跡の保存はなされる結果となった。

図版1

調査風景

層位

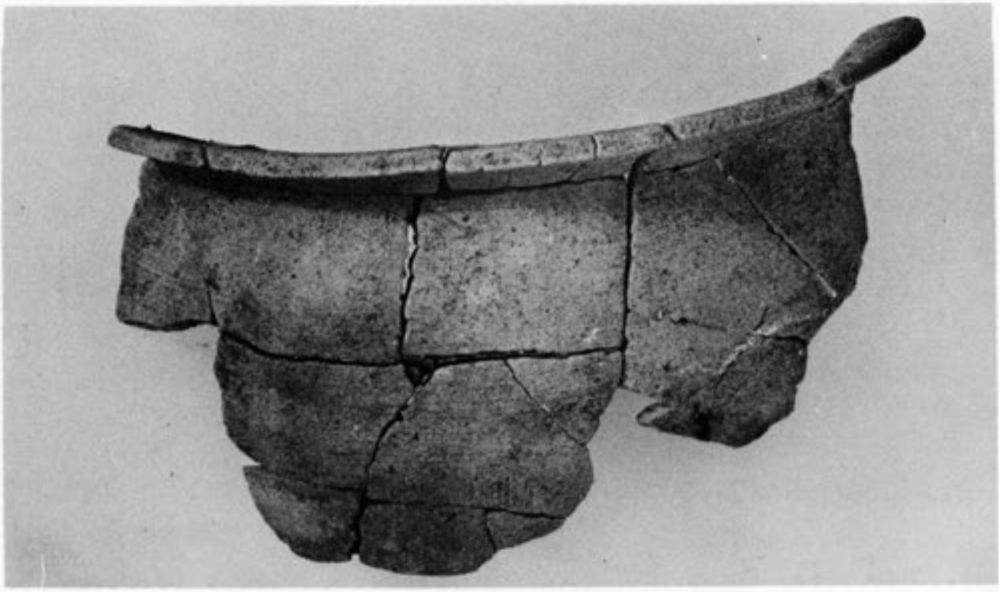
A－4区　土器出土状況

A－4区　土師器出土状況

図版3

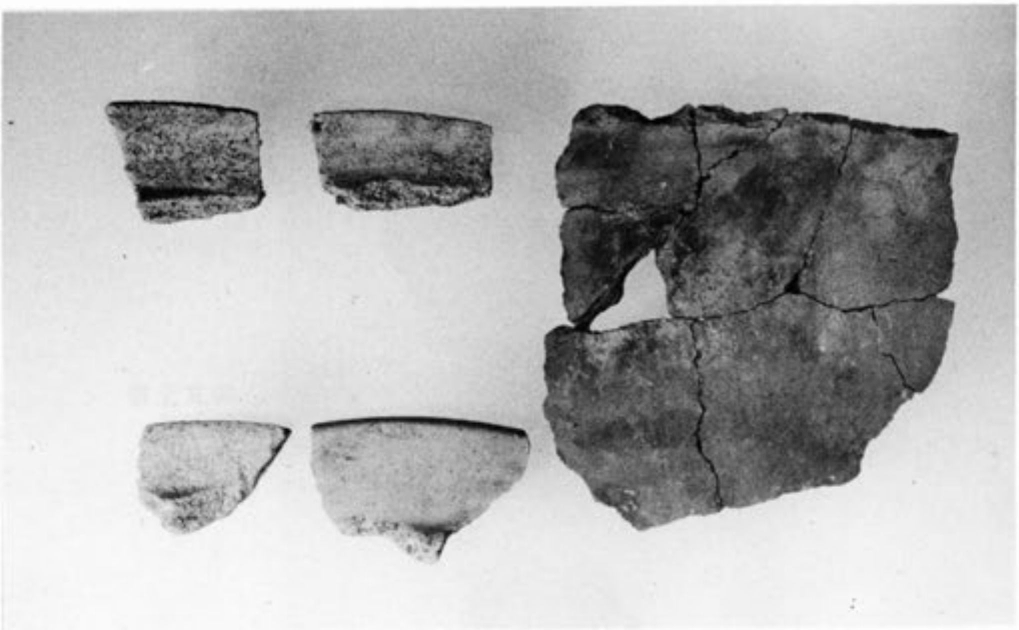
縄文土器

成川式土器

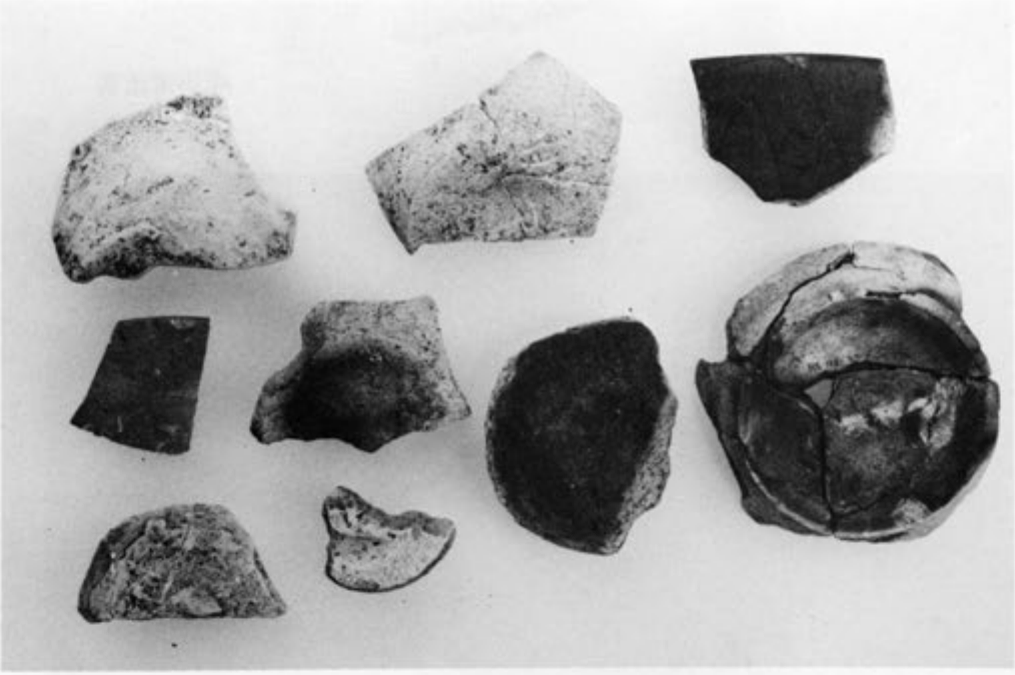


甕形土器

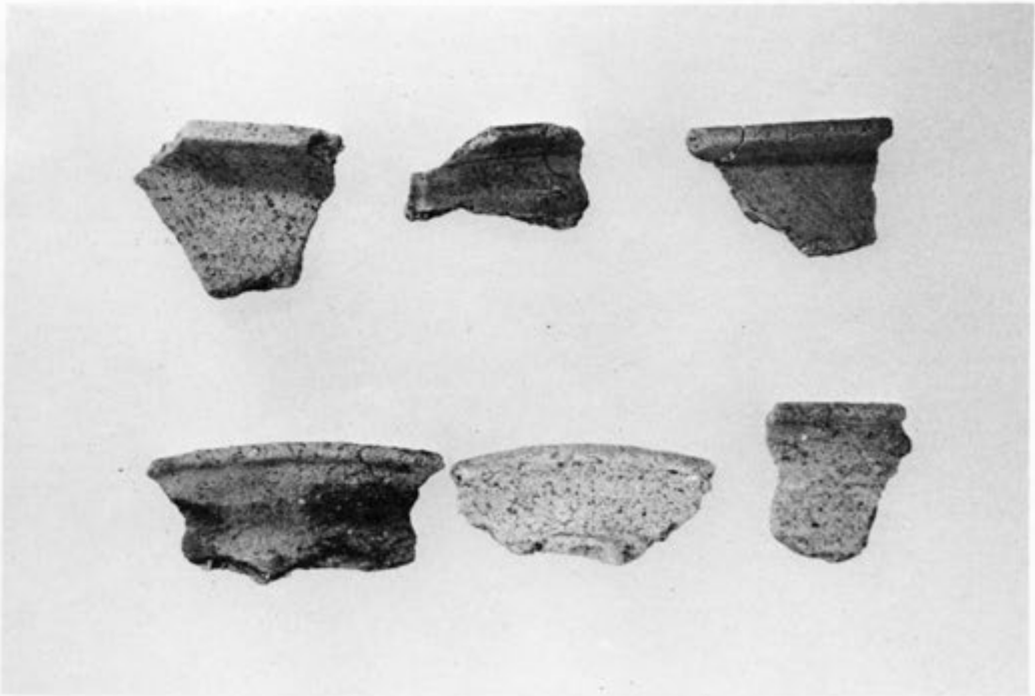
図版4



甕形土器



土師器　　内黒土師器



甕形土器

須 恵 器